

昭和六十三年三月

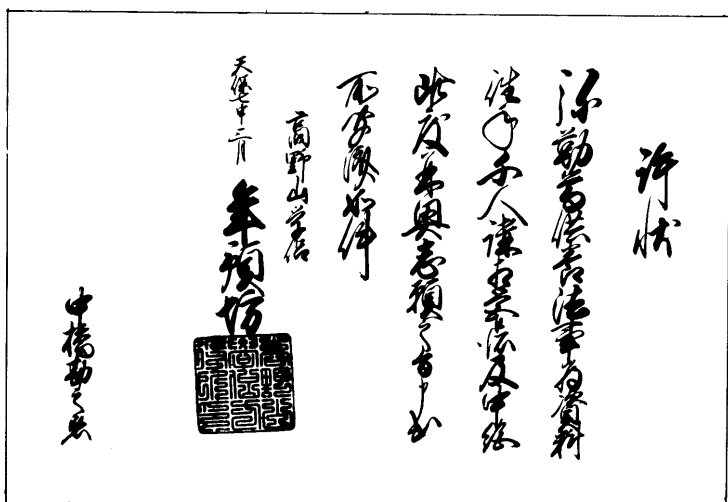
史料館所藏史料目錄 第四十六集

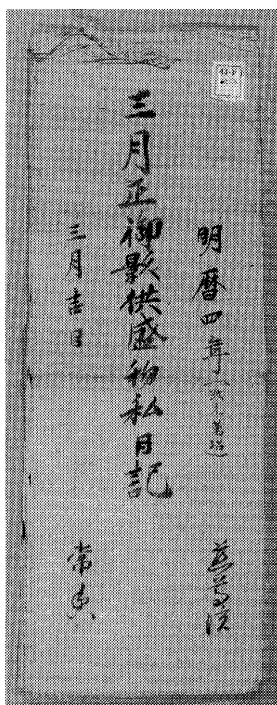
紀伊国伊都郡慈尊院中橋家文書目錄

史料館

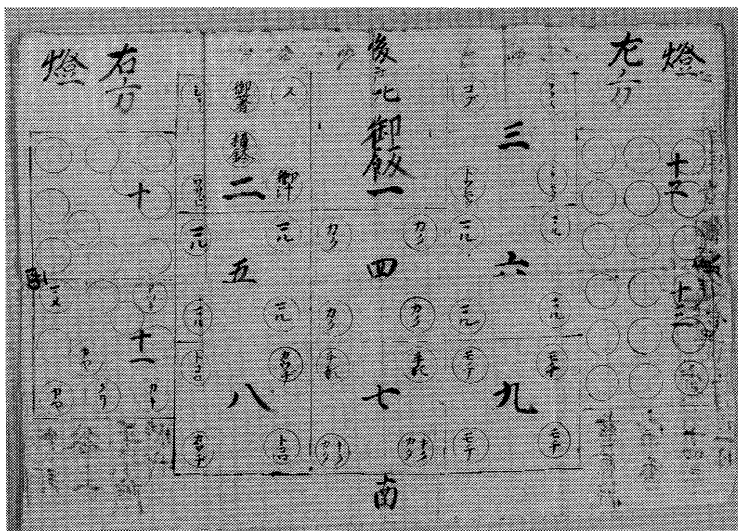
史料館所藏史料目錄 第四十六集

紀伊国伊都郡慈尊院中橋家文書目錄

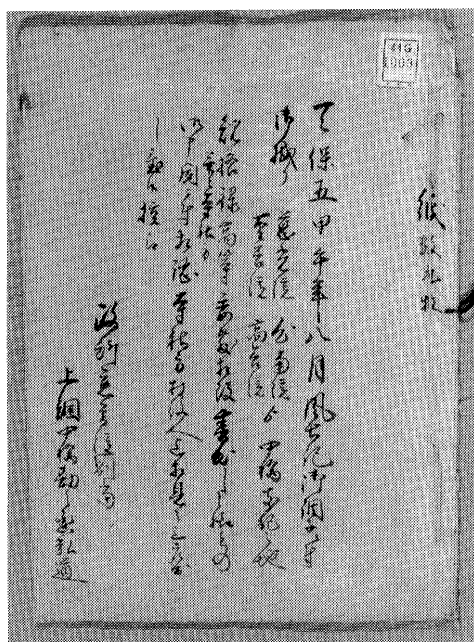




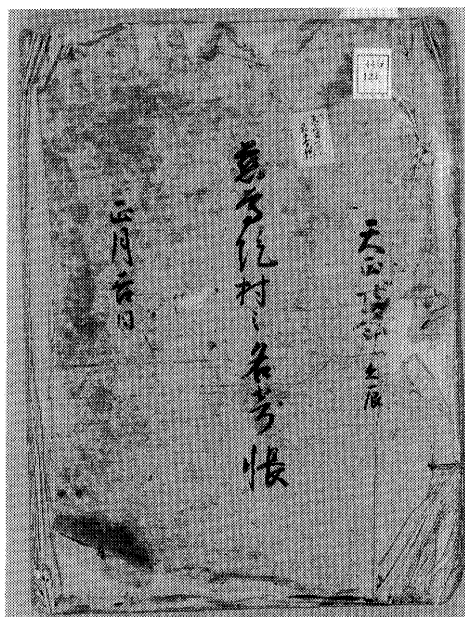
三月正御影供盛物私日記
明暦 4 年〔448〕



三月御影堂御精進供図 寛永14年〔447〕



天保 5 年風土記御調ニ付書上〔1003〕



慈尊院村之名寄帳 天正20年〔123〕

凡 例

- 一 本目録は『史料館所蔵史料目録』第四十六集として、紀伊国伊都郡慈尊院村慈尊院中橋家文書を収めた。
- 一 史料の配列は、中橋家文書の性格・存在形態を勘案し、慈尊院別当職という職掌にもとずいて作成された(一)慈尊院関係、その別当職とは切り離せないものの一応、(二)中橋家に拘わるもの、また近世初頭には慈尊院村の村役人を勤めた形跡はあるものの、江戸期には村役人より上位に位置し、庄屋の欠員時に一時的に庄屋帳面預りを勤めた関係からか、断片的な(三)慈尊院村関係の三ブロックに分つて大項目とし、さらに各ブロックを内容に応じて中・小項目を立てて編成した。各項目の見出しは大項目は一〇ポイント・ゴチック活字、中項目は九ポイント・ゴチック活字、小項目は九ポイント活字で示した。また必要に応じて〇印で細項目を示した。但し〇印で区別したものの中には、当該項目とは若干異質ではあるが、他にも適当な項目が立てられなかったため、妥協の措置を示すものも含まれる。
- 一 史料目録の記載欄は原則として(一)表題 (二)作成者 (三)宛書 (四)作成年月日 (五)形態 (六)数量 (七)整理番号の順であるが、作成者が表題から知り得るものは省略した。
- 一 表題(史料名称)は原則として原表題を採ったが、適宜改変したものもある。また表題のないものには整理者が命名して掲げたが、訴願書や証文類には仮表題を示す(一)は省略し、原表題と識別し難い仮表題にのみ(一)を付した。内容摘記が必要な場合は「」内に八ポイント活字を以って注記した。
- 一 一括してある文書はその体裁を保存し、整理番号には枝番号を付して整理した。
- 一 作成者または差出人および宛名のうち、複数のものの一部などは適宜省略し、その人数のみを記したものもある。
- 一 作成年次は年月日・干支を採った。また年紀を欠くが、年次が確定できたものには(一)を付して区別した。
- 一 利用上の便宜を考慮して、他項目にも関連する史料は*印を付して重出したが、煩瑣に亘る場合は項目の下部「」内に↓印をもって関連

項目を示した。

一 史料の形態は、簿冊類は、半（半紙判）、美（美濃判）、横長半（半紙横長判）、横長美（美濃横長判）、横半半（半紙横長半截判）、横美半（美濃横長半截判）などの略称によって原書の大さの大概を示すに止めた。また、それらに該当しない変型サイズのものや、絵図などは縦・横の寸法をセンチメートルで示した。数量の上部に付した仮は仮綴本を示す。

一 一紙書付類は通を以って数量を示し、紙形の大小寸法は省略した。また複数の史料が一紙に写し込まれている場合は一紙何通と表示した。

目次

| | |
|------------------|----|
| 口 絵 | |
| 凡 例 | |
| 紀伊国伊都郡慈尊院中橋家文書目録 | 一 |
| 目次 | 三 |
| 目録 | 五 |
| 解題 | 八三 |

伊紀
都伊
郡国
慈尊
院中
橋家
文書
目錄

紀伊国伊都郡慈尊院中橋家文書目録 目次

慈尊院

| | |
|------------------|----|
| 由緒 | 五 |
| 院譜 縁起 末寺 | 五 |
| 寺社方知行 | 六 |
| 仏事 | 六 |
| 上尊供養 開帳料 千年忌法要 | 六 |
| 仏法 | 六 |
| 什物 | 九 |
| 什物改 修補 | 九 |
| 勸化・寄進 | 一〇 |
| 什物修補 堂塔 石燈籠・手水鉢・ | 一〇 |
| 常香盤 接待所 石階 結縁千人講 | 一〇 |
| 祠堂銀 | 一三 |
| 燈油料 石階修補料 | 一三 |
| 作事・普請 | 一三 |
| 修理方大工所 御修理願、入用共 | 一三 |
| 垣内 | 一六 |
| 書上絵図 多宝塔 下乗石・制札 | 一六 |
| 敷地 | 一七 |
| 阿闍梨 | 一七 |
| 知行米・掃除料 散錢 巡礼案内料 | 一七 |
| 年世記 要用留 入退院 田畑敷地 | 一七 |

勸化

| | |
|-------------------|----|
| 護摩堂 | 一九 |
| 願書 年礼 仏事 住持入退院 | 一九 |
| 職分出入 下行米・庄米等請取 | 一九 |
| 頼母子講 弥勒講 | 一九 |
| 七社明神 | 二二 |
| 祭礼 神能棧敷 遷宮 神職 神子 | 二二 |
| 御普請願・届 境内 | 二二 |
| 勝利寺 | 二三 |
| 高野山 | 二四 |
| 旧記写 学侶行人訴訟 山法・幕法 | 二四 |
| 惣山奉行 寺領強訴記録 法会 | 二四 |
| 中橋家 | 二五 |
| 系図・家譜 | 二五 |
| 系譜 菊一文字太刀 先祖軍功記 | 二五 |
| 大塔建立 | 二六 |
| 日記・覚書 | 二六 |
| 日記記 申伝書 道中記 | 二六 |
| 家職・身分 | 二九 |
| 御影供盛物 年礼 御兒勤 地士身分 | 二九 |
| 戸籍 | 三〇 |

宗旨別上ヶ 篤助復籍 送籍 奉公人

| | |
|--------------------|---|
| 宅地 | 三 |
| 持地 | 三 |
| 所持地改 年貢算用 下作 田畑敷証文 | 三 |
| 頼母子講 | 三 |
| 弥勒講 守安弁天講 寿栄講 その他 | 三 |
| 取替金 | 三 |
| 拝借金 | 三 |
| 高野山 紀州家 | 三 |
| 借財 | 三 |
| 負債調 借入証文 | 三 |
| 闕所一件 | 三 |
| 帰復御免 | 三 |
| 家産整理 | 三 |
| 家賤処分 中橋家救済 | 三 |
| 親類・縁家 | 三 |
| 東寺執行家 近藤家(粉河) | 三 |
| 新田家(和州御山村) 田村家 | 三 |
| 吉凶 | 三 |
| 婚礼 棟上ヶ祝儀 葬儀・法要 | 三 |
| 家計 | 三 |
| 芸能 | 三 |

武術 謡曲

卜占

宅相 運氣考 その他

蔵書・写本

蔵書目錄 和漢書 曆 午王宝印紙

詠草・漢詩 絵図

書状

高野山御用

御巡見使案内 国絵図 風土記

名所図絵 觸下寺院巡察 御内使御迎

御通行 町石再興 御石塔運送

青巖寺・勸学院釣鐘 西塔再建 金堂

江戸在番屋敷 大塔再建 名迫一件

御救合米御手当取扱 他領出入掛合

差紙 被下目錄 その他

天野社惣神主家

由緒 惣神主家後見 丹生講

商業

油絞 酒造 高野紙 紀州木綿

御蔵塩 石灰 その他

山林仕出

鉄座一件

松井家相統 類願人出入 出願筋留書

鉄筋調書 鉄座出願 大坂表下組内約

出願筋往復書状 弘道在府中他借金

菊作太刀質入一件 滞府中聞書その他

諸請負

古貸附取立請負 諸家仕法目論見書写
国益献策

慈尊院村

地頭所

申渡書 北室院

法制

法度 村法

帳面預り

書上

貢租

年貢 夫役

土地

検地・名寄・荒帳 新開・起返 藪山

用水

普請 山崎村境目出入

川除普請

座講・村祈禱

座講 村祈禱 飯炊明神

村民

磯貝氏一件 出入 跡目相統 送籍

渡船場

無錢渡 横渡シ場出入 船人

船修復・新造

付録

紀伊国那賀郡粉河村伊藤家文書目錄

紀伊国伊都郡慈尊院中橋家文書目録 (文書記号 44C)

慈尊院

由緒

院譜

慈氏寺由来・弥勒拜殿靈宝之覚・勝利寺観音之
子細 寛文一三年二月

一通 四三

* 当国風土記全編^二付高野山從御改書上ケ〔慈尊
院諸伽藍之記〕 慈尊院政所別当上綱中橋元昭撰
正智院・一乘院宛 文化七年五月

半 一冊 一八四

* 紀国風土記撰上〔慈尊院譜〕 高野山学侶方ヨリ
紀州国君へ書上 天保七―同九年

美 一冊 一〇五八

慈尊院譜〔紀伊統風土記撰〕 中橋弘道 天保八年
四月写

美 一冊 一二九

慈尊院譜〔紀伊統風土記撰書上草稿〕

半 一冊 一〇八六

野峯風土記 慈尊院

美 一冊 一二八

慈氏壇之事

一通 四六

慈尊院両壇堂社建立年月并諸寄附物年月取出シ
記 (天文九―寛政一三年)

半 一冊 一二四

慈尊院古略記〔高野春秋卷一、修禪院懷英記〕
文政二―丑林鐘、円鏡書写

半 一冊 四五

高野山通念集拔萃〔慈尊院の項〕
(山史略記抄)

半 一冊 一〇八七

中將姫山居之詞

一通 四七

縁起

53 × 67 一枚 四九

慈尊院弥勒菩薩略縁起 刷物 寛保三癸亥仲春

一部 一〇一

弘法大師高野開山并慈尊院由来縁起

半 一冊 四三一

弘法大師高野開山略縁起 天保三辰一―月一―七日
天徳院覚本書写 中橋勘之丞宛

半 一冊 四三二

弘法大師高野開山縁起

半 一冊 四三三

高野山政所慈尊院譜 板彫草稿 高野山政所慈尊
院別当中橋上綱弘道 天保七年

半 一冊 一〇八五

高野山麓政所慈尊院略譜 刷物 天保七年 半 一冊 五二・三

弘法大師高野開山縁起并慈尊院縁起 半 一冊 一二七

弘法大師御袋略縁起 二通 二〇七

* (慈尊院縁起宝物案内手鑑) 阿遮梨手扣 横半半 一冊 六三

* 慈尊院縁起旅人へおしへ 美半 一冊 一一〇

○

弘法大師御母君え之御文 (承応四年写) 美 一冊 二六

末 寺

万年山慈尊院慈氏寺末寺帳 政所別当中橋氏 享 半 一冊 一〇八

寺社方知行

上綱知行覚 英元 (延享四—宝暦八年) 半 一冊 一〇九四

寺社方知行割覚 (宝暦元—同七年) 横美半 一冊 一一〇

慈尊院上り高及護摩堂他下行米高書付 宝暦三年他 半 一通 九八三

知行方 算用帳 慈尊院政所上綱中橋嘉兵衛元昭 横半半 一冊 三五四

天明五—寛政四年

知行方 算用帳 慈尊院上綱中橋元昭 寛政五—享和元年 横半半 一冊 三五四・一

知行方 算用帳 中橋上綱元昭 享和二—文化六年 横半半 一冊 三五四・三

知行方 算用帳 中橋上綱元昭 文化六—同八年 横半半 一冊 三五四・四

(風土記御調ニ付中橋支配之地規格祿高等相改書出シ控) 政所慈尊院別当中綱中橋勘之丞弘道 天保五年八月 美大 一冊 一〇三

○

江戸御屋敷御普請ニ付慈尊院寺社料十分一御取立之儀御赦免願書扣 慈尊院寺社方当中橋勘之丞 年預代宛 延享三年九月五日 二通 三三・一

江戸御屋敷御普請ニ付慈尊院寺社領十分一御取之儀御赦免願書扣 慈尊院重助・伝六・狭間弥五郎・吹本宮内・坂上佐内・中橋勘之丞・護摩堂・阿闍梨・勝利寺 年預代宛 一通 三三・二

仏 事

上尊供養

高野山金剛峯寺政所慈尊院弘法大師御袋御廟上尊之書付供養之記録 自永正一四年至正徳四年 一通 四九

(永正拾貳歳々宝暦七年迄御廟上尊供養之記録) 半 一冊 一〇七

諷誦文(慈尊院弥勒堂上尊供養) 紙背、桜池院応円秘仏拝見記 慶安三年十一月五日 一通 四八

慈尊院曼荼羅供職衆請定写并書留 慶安三年十一月 一通 四三

(元和七年・慶安三年弥勒堂・大日堂上尊一件覚書) 淨香 慶安三年十一月一日 一通 四三

| | | | |
|--|----------|--|--------|
| 慈尊院弥勒御廟上葺供養之一卷 慶安三年十一月二七日 | 一通 四六四 | 弥勒堂迦利帝母社上葺私記 中橋勘之丞英元 安永六年正月 | 一冊 一〇四 |
| 慈尊院弥勒御廟上葺供養記 会行事摩左院・惣預金光院・行事代秀典房・年預代性春房 元禄七年一月 | 一冊 一〇四 | 慈尊院大曼茶羅供職衆請定 護摩堂眞啓 安永六年七月一三日 | 一冊 四六六 |
| 慈尊院万タラ供執行之節承仕御免之願書下書扣 護摩堂・阿闍梨 年預代宛 正徳四年二月二五日 | 一通 二〇八 | 慈尊院大曼茶羅供職衆請定 年預阿遮梨伝慶 安永六年九月 | 一通 四七二 |
| 慈尊院弥勒御廟上葺供養曼供記 平等院年預之時 正徳四年二月二九日 | 一冊 一〇三 | 慈尊院大曼茶羅供役者請定 年預阿遮梨伝慶 安永六年九月 | 一通 四七二 |
| 供養手扣へ(弥勒御廟上葺供養私記) 中橋元琢 元文二年三月一四日 | 一冊 一〇四九 | 弥勒御廟上葺御供養御法事相濟ニ付御札口上書扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 安永六年九月 | 一通 四六七 |
| 慈尊院曼茶羅供之儀昔時之五十供ニ被遊被下度旨願書 中橋嘉兵衛 年預代宛 元文二年八月二五日 | 一通 四九一・二 | 慈尊院弥勒堂上葺供養記録 故実者中 安永六年一〇月 | 一冊 一〇七 |
| 元文二年九月一八日慈尊院弥勒御廟上葺供養記 故実者惣預觀智院・会行事觀空坊・行事代英俊房・年預代一運房 | 一冊 一〇五 | 寛政九丁巳弥勒堂迦利帝母上葺供養記 上綱元昭 寛政八年五月一〇月 | 一冊 一〇〇 |
| 慈尊院弥勒堂上葺供養記録 故実者会行事正覚院智成房・惣預利益院本了房・行豆代深照房・年預代勢觀院義三房 宝曆七年五月 | 一冊 一〇六 | 弥勒尊御廟上葺日次覚 寛政九年閏七月 | 一冊 一〇六 |
| 慈尊院御廟上葺供養願文 増福院阿闍梨立幢 宝曆七年三月 | 一通 四六五 | 寛政九巳ノ七月十日弥勒尊御廟所上葺御法事等記録 護摩堂眞啓代 | 一冊 一〇八 |
| 弥勒堂迦利帝母社上葺私記 上綱中橋英元 宝曆七年五月 | 一冊 一〇三 | 寛政九丁巳弥勒堂上葺供養私記 付、天正元辛酉年ノ天保八丁酉年棟札留記 上綱元昭 | 一冊 一〇七 |
| 柴請取覚 宝曆七年四月一七日 | 一冊 九四一 | 慈尊院大曼茶羅供職衆請定写 年預坊 寛政九年八月 | 一通 四七一 |
| 御供養之御法事相濟ニ付御札口上覚扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝曆七年五月五日 | 一通 一三七 | 慈尊院大曼茶羅供職衆請定写 年預阿闍梨眞海 寛政九年九月 | 一通 四七三 |

| | | | |
|--------------------------|---------------------------|----|-----|
| 慈尊院大曼荼羅供役者請定写 | 寛政九年九月 | 一通 | 四七三 |
| 慈氏廟開扉願文 | 南院三十二世唯仁 寛政九年九月 | 一通 | 四三三 |
| 諷誦文 | 護持学侶 寛政九年九月一三日 | 一通 | 四九 |
| 弥勒堂上棟供養故実者中逗留中諸色献立 | 中橋嘉兵衛元昭 寛政九年 | 一冊 | 二〇九 |
| 弥勒尊御廟上棟供養御法事相濟三付御礼口上書扣 | 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 寛政九年九月二五日 | 二通 | 四〇 |
| 慈尊院弥勒堂上葺供養記録 | 故実者中 寛政九年九月 | 一冊 | 二〇八 |
| 文化拾四丑年慈尊院御廟并迦利帝母社上葺供養諸記録 | 中橋上綱元昭・同弘道 文化一三年八月一同一四年九月 | 一冊 | 二〇〇 |
| 慈尊院大曼荼羅供職衆請定 | 年預阿闍梨快伝 文化一四年九月 | 一通 | 四七四 |
| 慈尊院大曼荼羅供役者請定 | 年預阿闍梨快伝 文化一四年九月 | 一通 | 四七四 |
| 慈尊院大曼荼羅供職衆・十弟子請定写 | 年預坊 文化一四年九月 | 一通 | 四七三 |
| 慈尊院御廟開扉立願文 | 阿闍梨隆恭 文化一四年九月 | 一通 | 四五四 |
| 諷誦文 | 護持学侶 文化一四年九月一四日 | 一通 | 四六〇 |
| 御廟上葺日次扣・御廟上葺訶利帝母社上葺工数私扣 | 阿闍梨觀晃 文化一四年六月一九月 | 二冊 | 二〇二 |
| 慈尊院上棟供養故実者中逗留中諸色献立 | 中橋氏 文化一四年九月 | 一冊 | 二〇三 |
| 文化十四年丁丑九月慈尊院弥勒堂上葺供養記録 | 中橋勘之丞所持之分 故実者中 文化一四年一二月 | 一冊 | 二〇九 |
| 慈氏尊廟迦利帝母社上葺供養中記録 | 中橋上綱 弘道 天保八年正月一〇月 | 一冊 | 二〇三 |
| 弥勒尊御廟上葺並訶利帝母神社扣帳 | 阿遮梨唯観 天保八年四月 | 一冊 | 二〇四 |
| 慈氏廟開門願文 | 前権僧阿闍梨隆鳳 天保八年六月二四日 | 一通 | 四五五 |
| 慈尊院大曼荼羅供職衆請定 | 年預阿闍梨同阿 天保八年八月 | 一通 | 四五一 |
| 慈尊院大曼荼羅供役者請定 | 年預阿闍梨同阿 天保八年八月 | 一通 | 四五一 |
| 慈尊院弥勒堂上葺供養記録 | 中橋勘之丞所持之分 故実者中 天保八年九月 | 一冊 | 二〇〇 |
| 御廟上葺之節古実者衆御下向滞留中献立 | 中橋氏台所 天保八年西秋 | 一冊 | 二〇五 |
| 慈尊院御廟開扉立願文 | 阿闍梨実道 安政四年六月二三日 | 一通 | 四五六 |
| 慈尊院大曼荼羅供職衆請定 | 年預阿闍梨性空 安政四年八月 | 一通 | 四六一 |
| 慈尊院大曼荼羅供役者請定 | 年預阿闍梨性空 安政四年八月 | 一通 | 四六一 |
| 慈尊院大曼荼羅供職衆・十弟子請定写 | 年預坊 安政四年八月 | 一通 | 四六三 |
| 慈尊院御廟開扉祈願文 | 時執行代前左学頭隆快 安政四年九月五日 | 一通 | 九七八 |

| | | | |
|--|---------|---|---------|
| 祈願文 寺務銳信 安政四年九月五日 | 一通 四五七 | 千年忌法要 | |
| 諷誦文 護持學侶 安政四年九月五日 | 一通 四六一 | 慈尊院別当上綱中橋勘之丞願書扣(御母公一千 年忌引上御法要之件) 年預代宛 天保三年二月・ 同年三月 | 二通 二三三 |
| 慈氏尊廟迦梨帝母社上葺御供養中記錄 中橋上 綱元貞 安政四年 | 一冊 四六八 | 彌勒尊千年御忌諸事扣 阿闍梨盛觀 天保四年九 月 | 一冊 一〇二六 |
| 慈尊院彌勒堂上葺供養記錄 故実者中 安政四 年九月五日 | 一冊 一〇二一 | ○ | |
| 年預代通達(上葺供養ニ付故実者下向之旨) 中 橋嘉兵衛宛 八月二五日付 | 一通 四七〇 | 般若理趣中曲三昧請定写(慈尊院彌勒尊前常燈供 養) 行事 天明五年三月二四日 | 一通 四七七 |
| 教巖口上(御上葺筋莊巖料受取書印形御札之儀依頼) 中橋嘉兵衛宛 九月二九日付 | 一通 四七一 | ○ | |
| (九月二日昼六日昼迄献立) | | 諷誦文 義英 宝曆六丙子晚春 | 一通 一三〇八 |
| (年預表を御下シ被下置品・慈尊院ニ而調候品々 改書) | 一冊 一四五六 | 仏 法 | |
| (曼奈羅供御修法僧交名) | 六通 四七六 | 仏説咒齒經 | 一通 四九一 |
| 開帳料 | | (阿弥陀如来他諸仏呪) | 一冊 二五九 |
| 慈尊院常香勘之丞御訴訟下書(弥勒堂上葺御法 事之節仕来之開帳料前代を引付之通被仰付度旨) | 一通 四八九 | 藥師仏呪・摩利支天呪 | 一通 二六〇 |
| 年預代宛 元禄七年十一月二五日 | | 什 物 | |
| 慈尊院常香勘之丞願書扣(弥勒堂上葺御法事之節 之開帳料旧例之通被仰付度旨) 年預代宛 元禄七 年十一月二五日 | 二通 二〇三 | 什 物 改 | |
| 慈尊院上綱勘之丞願書扣(弥勒堂上葺御法事之節 之開帳料旧例之通被仰付度旨) 年預代宛 正徳四 年二月二五日 | 二通 二〇六 | 御廟拜堂大日塔迦梨帝母四国堂等之什物員数書 阿遮梨弟子觀弘円心・後見預り人護摩堂榮本苗道 中橋勘之丞宛 天保一三年八月 | 一冊 六〇五 |

修 補

| | | | | |
|--|-------------|---|------------|----------|
| 政所阿弥陀如来再興記錄 正月 | 中橋英元 宝曆一四年 | 半 | 一冊 | 五〇六 |
| (阿弥陀如来并脇仏之御寸法書) (宝曆一四年力) | | | 一通 | 四九四 |
| 慈尊院拜堂本尊修補之記 寛政八年九月 | 別当上綱中橋嘉兵衛元昭 | 半 | 一冊 | 五四九 |
| (拜堂尊影修補之間掛替之弥勒尊御影拝借三付差入書) 慈尊院阿闍梨・中橋嘉兵衛 北室院侍者中宛 寛政八年一〇月 | | | 一通 | 五五三 |
| 拜殿御本尊修補一件願・届書類扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 寛政八年一〇月一同一一月 | | | 四通 | 五五三 |
| 弥勒尊・大師尊影修補見積書并代金請取書付、表具師伊兵衛宛大坂屋伝右衛門檢木箱代覚 京表具師高木伊兵衛 阿闍梨・中橋嘉兵衛宛 寛政八年一二月一同一二月 | | | 五通 | 五五四 |
| 御眞筆大師尊影・御母公尊影絵絹修補仕様見積書 (文化元年力) | | 半 | 仮一冊 | 五五一 |
| 慈尊院什物九品曼荼羅修補願書扣 付、右修補勸化并諸調物入費算用・受取書類 文化五年六年一同一二月 | | | 仮一冊 一九通 | 五六 五六 |
| 九品浄土曼荼羅修復筋書物并拜殿本尊修復并願書等扣 中橋嘉兵衛元昭 文化五年閏六月一二日 | | 半 | 一冊 | 五五〇 |
| 成福院古代(曼荼羅修補ヲ備前表具師へ依頼之件) 中橋嘉兵衛宛 九月六日(文化五年) | | | 一通 | 五五九 |
| 曼荼羅并拜殿本尊二幅修復勸金諸入用算用帳 青巖寺・年預坊二ヶ所之上帳扣 文化五年一二月五 | | 半 | 一冊 | 五四 |

弘法大師白描下画

41×29

一枚 四九三

勸化・寄進 (一) 銅堂金

什物修補

| | | | |
|--|-----|----|------|
| 〔万季山慈氏寺大般若經再建勸化帳〕 慈尊院政所 安永八年正月一天明四年正月 | 半 | 一冊 | 一〇六二 |
| 十六善神表具勸進帳 世話人太右衛門・定八 寛政五年一〇月 | 半 | 一冊 | 一〇六三 |
| 寛政三癸卯年御眞筆弥勒菩薩尊像修復之時之裏書写〔本願大施主并奉加人数〕 寛政八年一〇月一五日写 | | 一通 | 五二 |
| 慈尊院什物修補勸化帳 願主慈尊院政所別当中橋嘉兵衛 文化五年閏六月 | 半 | 三冊 | 五三 |
| 弥勒尊勸化帳 世話人小田村直右衛門・与兵衛・小田村粉屋喜兵衛 慈尊院村弥勒尊勸化方世話方衆中宛 安政四年九月 | 横長半 | 一冊 | 五八 |
| 弥勒尊拜殿莊嚴用勸誘御姓名録 弘法大師御由緒政所別当中橋元貞・御母公廟所常随阿遮梨周禪八月 | 美 | 一冊 | 五二〇 |
| 堂 塔 | | | |
| (四国八拾八箇所尊像造立勸進状) 刷物 願主智貞尼・板紙施主大坂寺嶋牛窓屋久太郎 元文六年正月 | 半 | 一冊 | 一〇六八 |
| 北室院銀子請取書〔知貞尼拝借銀之内返上分〕 中橋勘之丞宛 延享二年一二月二六日 | | 一通 | 三七 |

| | | | | | |
|--|---------------|---|----------|------|-----|
| 大師堂筋請弘指引寛 和三年 | 中橋勘之丞 宝曆三年 | 明 | 横長美 | 一冊 | 五三〇 |
| 慈尊院七社明神御供所大黒堂再建勸進帳 院村御供所守護福本重助 文政元年六月 | 慈尊院 | 美 | 一冊 | 五二五 | |
| 御本地堂再建二附勸化帳 保一四年 | 本願人阿迦梨隱居 天 | 半 | 一冊 | 一〇六五 | |
| 慈尊院壇内懸り之事略書 | | 半 | 一冊 | 五二八 | |
| 慈尊院再建二付内存手扣へ書（御国内惣民家々三 カ年勸進の目論見） | | 半 | 一冊 | 五九九 | |
| 勸財講仕法帳 | | 半 | 一冊 | 五二九 | |
| 石燈籠・手水鉢・常香盤 | | | | | |
| 弥勒堂壇内大師堂建立棟上ヶ届書・石燈籠建立 之儀御聞濟願書扣 慈尊院中橋勘之丞 年預代宛 明和三年二月 | | | 一紙 二通 | 五三二 | |
| 弥勒堂惣門前二石燈籠建立之願主有之三付御聞 濟願書扣 慈尊院中橋勘之丞 年預代宛 明和三年二月二五日 | | | 一通 | 五三三 | |
| （慈尊院弥勒尊宝前常燈二基 献燈ニ付感報狀） 北宝院法印榮錢 檀越妙円善尼・遠州屋源八宛 天明五年三月 | | | 一通 | 四九九 | |
| 河内国錦部郡多粉賀村部屋六二郎石燈籠建立志願 三付御届書扣 中橋嘉兵衛 年預代宛 天明七年一〇月二五日 | | | 一通 | 五三四 | |
| 護摩堂住持弥勒尊廟前江石燈籠建立志願ニ付御届 書扣 中橋嘉兵衛 年預代宛 天明八年一〇月一二日 | | | 一通 | 五三五 | |
| 紀三井寺村鳴屋弥市郎弥勒尊廟前石燈籠建立志願 三付御届書扣 案紙共 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 寛政二年一〇月 | | | 二通 | 五二六 | |
| 当山補陀洛院様弥勒尊廟前石燈籠建立御頼ニ付 御届書扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 寛政五年十二月 | | | 一通 | 五三七 | |
| 紀三井寺村似水房円教廟前江常明燈・常香盤・蓮花手水鉢并於推出村常施待茶所寄附建立志願 三付御届書扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 寛政一二年正月二二日 | | | 一通 | 五二八 | |
| 弘法大師御母君御廟弥勒菩薩御広前寄進人性名帳 願主紀三井山下岩崎久左衛門・隠居似水房・宮本八右衛門 寛政一二年一享和元年 | | 美 | 一冊 | 一〇〇一 | |
| 弥勒尊御前常明燈・常香盤・蓮花手水鉢・常施待所勸化帳 似水房円教 | | 半 | 一冊 | 五二九 | |
| 国領妙寺村下村孫次郎四国堂前石燈籠建立志願 三付御届書扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 文化七年正月二五日 | | | 一通 | 五四一 | |
| 七社明神神前并石階ニ常夜燈籠拾基追々建立之儀御窺書扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 文化七年正月二五日 | | | 一通 | 五四〇 | |
| 接待所 | | | | | |
| 慈尊院境内江接待茶所建立志願ニ付窺口上 降村観堂 丑九月（天明元年カ） | | | 一通 | 五三三 | |
| 中飯降村観道慈尊院境内江永代常撰待所建立志願 三付御聞濟願書扣 慈尊院村中橋勘之丞 年預代宛 天明元年一〇月二二日 | | | 一通 | 五四四 | |
| 推出村施待茶所建立之儀願下ヶ願書（願主似水房病氣二付） 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 寛政二二年六月五日 | | | 一通 | 五三九 | |

慈氏壇東ノ入口ニ撰待所建立ニ付施主發願人ト為
取替一札 慈尊院別當政所中橋嘉平治・角屋長五郎
嘉永二年閏四月六日

二通 五三

慈氏境内撰待所建ニ付近辺茶屋中并村方無故障趣
一札 宿屋中惣代長五郎・茂重郎 村惣代眞重郎・
困重郎・庄屋伊助・宮内 中橋勘之丞宛 戌一〇月

一通 五三

石 階

慈尊院七社明神宝前石階施主名簿 世話人中嶋
安左衛門・大越鴨四郎・中橋嘉兵衛・松山八右衛門
預元中橋勘之丞・願主丁之町六部甚六・石工粉川
五兵衛 宝曆三年六月

美 一冊 二二〇

石銘艸書(七社明神宝前石階施主連名) 上之庄大
野村世話人中嶋安左衛門・下之庄西飯降村世話人大
越鴨四郎・丹生郷世話人松山八右衛門・中橋嘉兵衛
・預り元中橋勘之丞・丁ノ町村願主六部甚六・粉河
石工五兵衛 宝曆三年六月

半 一冊 六二

(川南商人山越米舟廻し之儀紀州表江願出度旨
窺口上扣)(七社明神石階筋勘定不済ニ付) 慈尊
院石階預り元中橋勘之丞 年預代宛 宝曆五年正月
二五日

二通 六〇八

(慈尊院七社大神石階成就金差支ニ付紀州様江舟
廻米出願之儀御免願書扣) 慈尊院石階預り元中
橋勘之丞 年預代宛 宝曆五年正月二五日

一通 三三五

慈尊院石階修補募縁記 發起慈尊院阿遮梨盛觀・
中橋勘之丞弘道 天保六年八月一同一月

美 一冊 一〇三

七社明神石階再建之記 世話人中橋勘之丞・阿遮
梨盛觀・石工棟梁尾張林吉 天保六年八月

橫長半 一冊 六〇七

結縁千人講

結縁千人講再興願書 中橋氏 年預代宛 天保七
年正月

二通 五二一

高野山学侶年預坊許狀(弥勒尊供養法事為資料千
人講再興之儀) 中橋勘之丞宛 天保七年三月

一通 五三二

高野山麓政所慈尊院 別當中橋上綱弘道
大師御母公伽藍由來略譜 刷物 天保七年

半 一冊 五三三

高野山学侶方年預坊許狀(慈尊院大師御母公為御
供養契縁講再興之儀) 別當中橋上綱宛 天保七丙
申春

一通 五三

人馬帳(千人講勧誘道中ニ係ル) 高野山学侶役所
諸国宿々問屋中・同村々役人衆中・御関所役人中
宛 天保七年

橫長半 一冊 二五

高野麓慈尊院結縁講再興簿 高野麓下慈尊院政所
大師御母公御由緒別當中橋上綱阿刀弘道・同御廟前常
隨阿遮梨現住 (刷物草稿カ)

半 二冊 二〇七

一切経結縁簿 高野山本道慈尊院政所 弘代二年
春改訂補筆

美 一冊 五三

一切経結縁簿 (刷物) 高祖大師御母公慈尊院
政所御由緒別當三十一世中橋上綱阿刀元扶・御母公
廟前常隨阿遮梨現住 弘代二年

半 一冊 一〇六

一切経勧誘筋一件書類(三月一四日付宮木伝蔵書
状・寺々之廻状手続・布施料之規矩)

橫長半 一冊 五四

千人講再開願書扣 慈尊院政所別當上綱中橋勘之
丞・閑居嘉平治權髮改名中橋尚甫 年預代宛 文久
二年三月

二通 五六

弥勒壇内千人講ニ付春秋冬三季花闌興行之儀願
書下書 付 宝曆年中知貞尼免起之四国堂建立
等之事 中橋勘之丞 年預代宛 文久二一同三年

五通 五七

結縁講勧誘文 慈尊院弘法大師御母公政所御由緒
別當上綱中橋元貞・同所御母公御廟前常隨阿遮梨

半 一冊 一〇三

結縁講勸誘簿 草稿 慈尊院弘法大師御母公政所御由緒別当上綱中橋元貞・御母公御廟前常隨阿遮梨 半 二冊 五五
結縁講勸誘簿 草稿 半 一冊 一〇四

*弘法大師家系脉譜 刷物 慈尊院政所附 46×33 一枚 九一
結縁講仕法書 案紙 半 一冊 一〇八

結縁講性名簿 慈尊院弘法大師御母公政所御由緒別当中橋元貞・御母公御廟前常隨阿遮梨・同所世話元田村又左衛門・田村丹宮・坂上左京・狹間佐右衛門他八名 (黒塗箱入) 板表紙 折本 一帖 一二四

元貞書狀 (野山表) 尊大人 (弘道カ) 宛 六月 二九日付 一通 一三六

年賦寄進金契証書 (慈氏尊御廟え永世為供養料) 大坂西横堀奈良屋町田村屋尾崎完助・同苗喜一郎 慈氏尊政所御別当上綱中橋勘之丞・同閑居阿刀尚保宛 文久二年四月 一通 五〇四

祠堂銀

燈油料

慈尊院金燈籠永祠堂料銀手形預り奥印証文 北室院知事奥印 慈覺妙巴尼・遠州屋源八他四名宛 安永九年三月 一通 四七

(慈尊院金燈籠常燈油料寄附金指引書) 北室院役僧 慈覺妙巴尼宛 安永九年四月 一通 四九六

永祠堂銀手形写奥印証文 (慈尊院弥勒尊廟前常燈燈油料) 普門院知事奥印 中橋勘之丞宛 寛政二年七月五日 一通 五〇〇

永祠堂銀手形写奥印証文 (慈尊院弥勒尊廟前常燈燈油料) 補陀洛院性海奥印 慈尊院村中橋勘之丞宛 寛政五年十二月二三日 一通 五〇一

永祠堂銀預り証文写 (支分年中五歩定、慈尊院石燈籠燈油料) 年預坊・成福院・正智院 慈尊院村中橋勘之丞・阿閑梨宛 文政二年二月二三日 一通 五〇二

年預代御差圖書 (慈尊院村氏子中明神社常夜燈燈油料寄進願二付) 北室院宛 中九月 一通 五〇五

石階修補料

永祠堂銀預り手形 (慈尊院表門前石段修補料) 行人方一膳坊・学侶方年預坊 慈尊院村中橋勘之丞・施主中飯降村木下伊右衛門宛 天保六年十二月一八日 一通 五〇三

作事・普請

修理方大工所

慈尊院修理方庄中両方大工所永代壳渡証文写 壳主名倉村清右衛門・口入伏原村又兵衛 伏原村大工喜兵衛宛 延宝九年三月七日 一通 六〇二

大工喜兵衛指入一札 (慈尊院修理方庄中大工所棟梁請書) 伏原村藤兵衛宛 延宝九年三月九日 一通 六〇一

定一札 (慈尊院修理方庄中両方大工所勤方二付為取替証文写) 伏原村喜兵衛・御所村兵衛 貞享四年五月七日 一通 六〇三

御修理願 付、入用共

慈尊院弥勒廟破損書上扣 慈尊院淨香 年預代宛 寛文四年三月五日 一通 五〇四

| | | | |
|--|---------|---|--------|
| 慈尊院弥勒廟破損書上扣 慈尊院淨香 年預代宛 寛文五年十一月七日 | 一通 五五 | 弥勒堂拝殿之前机御仕直願書 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 享保六年正月五日 | 一通 五七四 |
| 慈尊院弥勒拝殿破損書上扣 阿闍梨 年預代宛 寛文六年正月六日 | 二通 五六 | 御廟・拝殿其他御普請箇所附願書扣 慈尊院村中橋嘉兵衛 年預代宛 享保九年十一月五日 | 一通 五七三 |
| 御訴訟〔弥勒御廟大破二付皆造宮願扣〕 慈尊院淨香 年預代宛 延宝二年正月 | 一通 五八三 | 慈尊院弥勒堂御上葺当年二付拝殿屋根其他御修理願書 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 享保一十九年正月五日 | 二通 五七五 |
| 弥勒拝殿破損二付御修理願書扣 慈尊院淨香勘之丞 年預代宛 元禄三年七月一二日 | 一通 五八七 | 弥勒堂御上葺当年二付当秋被仰付度願書 慈尊院上綱中橋加兵衛 年預代宛 享保一十九年六月二五日 | 一通 五八六 |
| 弥勒堂・築地之屋根御修理願書 淨香勘之丞 年預代宛 元禄七年正月二二日 | 一通 三八一 | 弥勒堂御上葺当年二付当冬被仰付度願書扣 慈尊院上綱中橋加兵衛 年預代宛 享保一十九年十一月一二日 | 二通 五七七 |
| 元禄七年戊正月廿五日年預表宛諸願書扣 | 繼一通 三八二 | 弥勒堂御上葺延引二付当冬之内二被仰付度願書扣 中橋加兵衛 年預代宛 享保一十九年十一月一三日 | 一通 三三〇 |
| 弥勒堂并築地之屋根修修理願書扣 慈尊院淨香勘之丞 年預代宛 元禄七年正月二二日 | 一通 五八 | 弥勒堂御上葺之儀去年御延し二付当年被仰付度旨願書扣 慈尊院上綱中橋加兵衛 年預代宛 享保二〇年正月五日 | 一通 五八 |
| 慈尊院弥勒築地并御制札修覆願書 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝永二年九月一四日 | 一通 五九 | 中橋加兵衛口上書扣〔弥勒堂定式御葺替金二付御修理方御借金筋〕 年預代宛 享保二〇年三月五日 | 二通 五八 |
| 年預表被仰渡口上之写〔慈尊院諸伽藍普請筋二付〕 戊正月二二日〔宝永三〕 | 一通 五九 | 弥勒壇繕被仰付二付諸色入用覚帳 慈尊院上綱中橋加兵衛 享保二〇年三月一〇日 | 一冊 五九 |
| 慈尊院弥勒築地并御制札修覆再願書扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝永四年四月 | 一通 五七〇 | 弥勒堂御上葺之儀去年々々延引二付再願書扣 慈尊院上綱中橋加兵衛 年預代宛 元文元年七月二五日 | 二通 五九 |
| 慈尊院弥勒築地并御制札修復再願書扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝永五年正月 | 一通 五七一 | 弥勒堂御上葺之儀四年延引二付再願書扣 慈尊院上綱中橋加兵衛 年預代宛 元文二年正月二五日 | 二通 五八〇 |
| 弥勒御廟拝殿其他諸所大破二付修繕願書扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝永七年正月一一日 | 一通 五七三 | 弥勒明神境目之大松倒候二付繕普請願書扣 慈尊院上綱中橋加兵衛 年預代宛 元文五年閏七月五日 | 一通 五八三 |
| 弥勒堂屋称・拝殿之畳・築地之屋根御修理被仰付度願書 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 正徳三年一〇月二二日 | 一通 二〇五 | | |

| | |
|--|--------|
| 弥勒明神際目之大松倒塔破損 ^二 付御普請願書扣 慈尊院中橋加兵衛 年預代宛 元文五年閏七月一 二日 | 二通 二〇七 |
| 弥勒堂拜殿・迦梨帝母鳥居等破損箇所附願書扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 延享二年六月 二五日 | 一通 二〇九 |
| 弥勒堂拜殿縁他破損所繕願書扣 慈尊院中橋勘 之丞 年預代宛 延享三年九月五日 | 一通 二二三 |
| 慈尊院下乘石之簀并制札場土居破損願書扣 慈 尊院中橋勘之丞 年預代宛 延享三年九月五日 | 一通 二二三 |
| 慈尊院下乘石之簀并制札場石かけ繕願書扣 慈 尊院中橋勘之丞 年預代宛 寛延三年二月二五日 | 一通 二三四 |
| 慈尊院弥勒堂御上葺願書 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝曆六年七月二五日 | 一通 五六四 |
| 弥勒堂後之松風損 ^二 付伐採願書 中橋勘之丞 年 預代宛 宝曆六年九月一八日 | 一通 五六五 |
| 慈尊院弥勒堂并迦梨帝母御上葺其他所々破損箇 所御修理願書扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代 宛 宝曆七年正月五日 | 一通 二二六 |
| 慈尊院弥勒堂檀内破損箇所附願書扣 慈尊院中 橋勘之丞 年預代宛 宝曆一〇年正月 | 二通 二三八 |
| 慈尊院弥勒堂拜殿之宇不朽損 ^二 付御普請願書扣 慈尊院中橋勘之丞 年預代宛 宝曆一〇年七月 | 一通 二二九 |
| 弥勒堂拜殿宇不其他御普請箇所附願書扣 慈尊 院中橋勘之丞 年預代宛 宝曆一二年二月二二日 | 一通 二三〇 |
| 慈尊院弥勒堂玉垣其他御普請願書扣 慈尊院村 中橋勘之丞 年預代宛 宝曆一三年二月 | 一通 五八六 |

| | |
|---|--------|
| 大風 ^三 而築地破損・諸木枝折之儀御届書扣 中橋 勘之丞 年預代宛 明和元年八月三日 | 一通 五八七 |
| 弥勒御廟宇不并御廟扉宇不破損願書扣 慈尊院 上綱中橋勘之丞 年預代宛 明和八年八月二二日 | 一通 二二三 |
| 来酉年弥勒御廟御葺替年 ^二 付皆松皮葺之儀願書 扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 安永五年八 月一二日 | 一通 五八八 |
| 弥勒堂御上葺年 ^二 付皆松皮 ^二 而御葺替願書扣 慈 尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 安永六年正月五日 | 一通 二二三 |
| 弥勒堂上葺年 ^二 付皆松皮葺并迦梨帝母社上葺・築 地御普請願書 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 安永六年正月五日 | 一通 五八九 |
| 慈尊院弥勒堂惣門前下乘札場宇不破損 ^二 付御繕 願書扣 慈尊院村中橋勘之丞 年預代宛 安永八年 正月二四日 | 一通 二三四 |
| 慈尊院古垣内下乘石并町平都婆牌銘石之簀・築 地屋根瓦修理願書扣 中橋嘉兵衛 年預代宛 天 明八年一〇月一二日 | 二通 二二六 |
| 弥勒堂垣内築地瓦繕普請願書 慈尊院上綱中橋嘉 兵衛 年預代宛 寛政八年三月 | 一通 二二七 |
| 弥勒尊御廟上葺年 ^二 付迦梨帝母御廟同事御葺替 并御廟前石檀御積直し願書扣 慈尊院上綱中橋嘉 兵衛 年預代宛 寛政八年五月二二日・同九年 | 二通 二二八 |
| 慈尊院垣内築地屋根繕普請延引 ^二 付願書扣 慈尊 院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 寛政一一年二月一二 日・同一二二年三月五日 | 二通 二二九 |
| 慈尊院垣内築地繕御普請願書扣 慈尊院上綱中 橋嘉兵衛 年預代宛 寛政一二年四月五日 | 一通 五九〇 |

| | |
|---|--------|
| 慈尊院築地御普請諸調物人足并大工方瓦葺雜記 中橋嘉兵衛元昭扣 文化三年九月 橫長半 | 一冊 五五五 |
| 慈尊院築地御普請諸雜記 別当上綱中橋嘉兵衛 文化三年 橫長半 | 一冊 五五六 |
| 築地御普請人用算用帳 文化三年一〇月 半 | 一冊 五五七 |
| 慈尊院塔之屋根御葺替願書扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 文化五年九月五日 一通 五六一 | |
| 慈尊院拝殿屋根繕御普請願書扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 文化六年九月五日 一通 五九二 | |
| (築地表門屋根瓦取替材料見積書) 慈尊院村役人・受取人多石衛門・大工安次郎 橫長美大 一冊 二四八 | |
| 慈尊院兩檀御修理所御普請願筋記錄取出シ (文化六年カ) 半 | 一冊 一二五 |
| 弥勒堂御上葺年四年延引ニ付願書扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 九月二五日 一通 二三三 | |
| 慈尊院火難備ニ付願口上書扣 中橋嘉兵衛 年預代宛 未二月二五日 二通 六〇〇 | |
| 弥勒御廟後方東西江為不淨除乱杭願書 慈尊院中橋勘之丞 年預代宛 辰正月 一通 二三四 | |
| (弥勒堂其他繕普請入用見積書) 中橋加兵衛金剛頂院宛 一通 五九八 | |
| 年預代達書(しゃだん之杉風折之始末ニ付) 慈尊院庄屋宛 八月二五日付 一通 三五五 | |
| 本堂御拝積り帳 粉河天福前住大工棟梁岡田平次郎 長田觀音寺納所宛 弘化四年二月 半 一冊 五九〇 | |

| | | |
|---|---------|--------|
| 本堂横之絵面 | 55 × 40 | 一鋪 五六一 |
| 本堂二十分一絵面 | 55 × 40 | 一鋪 五六二 |
| 垣内 | | |
| 書上絵図 | | |
| 慈尊院境内書上絵図扣 慈尊院別当中橋嘉兵衛寛政二年二月 48 × 66 一鋪 四四五 | | |
| 慈尊院上綱中橋嘉兵衛御窺口上之覚扣(御公儀弘閣社頭之絵図并境内坪数御改之節) 年預代宛子九月一五日(寛政四年) 一通 四四〇 | | |
| 多宝塔 | | |
| 慈尊院垣内多宝塔譲り狀 讓主坂上左内・請人勝利寺 中橋嘉兵衛宛 文化二年二月二八日 一通 六〇四 | | |
| 下乘石・制札 | | |
| 貞享三丙寅年正月十二日制札之写 年預坊上ル扣 宝永七年正月写 一通 二七二 | | |
| * 慈尊院弥勒築地并御制札修覆願書 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝永二年九月一四日 一通 五九六 | | |
| * 慈尊院弥勒築地并御制札修覆再願書扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝永四年四月 一通 五七〇 | | |
| * 慈尊院弥勒築地并御制札修復再願書扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 年預代宛 宝永五年正月 一通 五七一 | | |
| * 慈尊院下乘石之簀并御制札場土居破損願書扣 慈尊院中橋勘之丞 年預代宛 延享三年九月五日 一通 二三三 | | |

| | | | | | | | |
|---------|-----|----|-----|---|------------------|--|---------|
| 中橋家文書目錄 | 慈尊院 | 垣内 | 阿闍梨 | *慈尊院下乘石之篋并御制札場石かけ繕願書扣 慈尊院中橋勘之丞 年預代宛 寛延三年三月二五日 | 一通 三三四 | 御高物当寺江納分并掃除料請取帳 阿闍梨 天保六年一〇月 | 一冊 六四四 |
| | | | | *慈尊院弥勒堂惣門前下乘札場宇不破損二付御繕願書 慈尊院村中橋勘之丞 年預代宛 安永八年正月二四日 | 一通 三三四 | 御高物当寺江納分并掃除料請取帳 阿闍梨 天保七年一〇月 | 一冊 六四五 |
| | | | | *慈尊院古垣内下乘石并町卒都婆脾銘石之篋・築地屋根瓦修理願書扣 中橋嘉兵衛 年預代宛 天明八年一〇月一二日 | 二通 三三六 | 御高物当寺江納分并掃除料請取帳 阿闍梨 天保八年一〇月 | 一冊 六四七 |
| | | | | 弥勒堂大門之下乘并東西之門下乘添札共四枚請取覚 案紙 慈尊院中橋勘之丞 年預代宛 | 一通 三三五 | 御高物当寺江納分并掃除料請取帳 阿闍梨 天保九年一二月 | 一冊 六四八 |
| | | | | 慈地 | | 御高物当寺江納分并掃除料請取帳 阿闍梨 天保一〇年一二月 | 一冊 六四九 |
| | | | | 正智院様御支配慈地御寄附願濟一札扣 慈尊院別当上綱中橋嘉兵衛・阿闍梨 正智院納所宛 文化元年一〇月 | 二通 四二一 | 天保十一子ノ歳・同十二丑年当時御高物納分並掃除料扣帳 阿遮梨 天保一二年一二月 | 一冊 六五〇 |
| | | | | 惣慈地預り主慈尊院村常右衛門一札〔正智院慈地之内今般弥勒尊へ御寄附二付〕 正智院納所宛 文化元年一〇月 | 一通 四二二 | 散 錢 | |
| | | | | 慈地寄附所絵扣 | 43 × 30 一枚 四三 | 弥勒堂・拝殿・加利帝母さんせん請取通 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 文化八年 | 一冊 二二一 |
| | | | | 正智院様御支配慈御年貢之覚 | 半 一冊 三五 | 弥勒堂・拝殿・加利帝母散錢請取通 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 文化一〇年 | 一冊 二二三 |
| | | | | 阿闍梨 | | 拝殿・大日堂・御廟・加利帝母散錢受取通 政所別当中橋氏 文化一五年 | 一冊 二二三 |
| 中橋家文書目錄 | 慈尊院 | 垣内 | 阿闍梨 | 知行米・掃除料 | | 迦梨帝母・拝殿・御廟・大日塔散錢通 政所別当中橋氏 文政二年 | 一冊 二二四 |
| | | | | 御高物当寺江納分并掃除料請取帳 阿闍梨 天保四年一〇月 | 半 一冊 二〇九 | 御廟・拝殿・大日塔・加利帝母散錢通 別当中橋氏 文政七年 | 一冊 二二五 |
| | | | | 御高物当寺江納分并掃除料請取帳 阿闍梨 天保五年一〇月 | 半 一冊 二〇〇 | 巡礼案内料 | |
| | | | | | | 諸国巡礼案内料請取書（翌年分） 九度山村庄屋兵藏 慈尊院村阿闍梨宛 天保一〇年一二月 | 一通 一三〇四 |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |
| | | | | | | | |

*在江戸弘道書狀扣(九度山百目案内料之件) 元貞宛 五月一六日(安政四年)

諸国順礼案内料請取書 九度山村庄屋 阿闍梨宛 明治元年二月

年 世 記

寛政一二年の文化九年迄年世記 円鏡

文化十年の文政十一年迄年世記 円鏡

文政十二丑年ヨリ天保三千辰年迄年世録 円鏡

要 用 留

寛政十二年心得書(七社明神・遷宮記・宮山之事・神主事・祭礼之事・盛物記・庄米之事・寺社料事) 阿遮梨写書

当寺要用雜記 阿闍梨 文化元—天保三年

諸方懸合日記 阿遮梨觀証 (文化四—文政八年)

*御廟上葺日次扣 御廟上葺訶利帝母社上葺工数私扣 阿遮梨觀見 文化一四年六月—九月

*七社大神上下遷宮并供養法事之支 慈尊院阿遮梨現住觀見 文政四年九月

*弥勒尊千年御忌諸事扣 阿遮梨盛觀 天保四年九月

*弥勒尊御廟上葺並訶利帝母神社扣帳 阿遮梨唯觀 天保八年四月

(慈尊院縁起・宝物案内手鑑) 阿遮梨手扣

慈尊院縁起旅人へおしへ

入 退 院

阿遮梨規定書一札扣 阿遮梨隱居觀見密乘・同当住唯觀円盛、中橋勘之丞弘道奥印 天保八年六月

阿遮梨唯觀退隱願口演 中橋勘之丞宛 陽月(天保一二年カ)

阿遮梨円清房唯觀差上一札(別隱居退寺之節) 中橋勘之丞宛 天保一三年八月二日

阿遮梨寺附金子証文六口当分預り念書扣 中橋勘之丞 唯觀取立弟子円心房宛 天保一三年八月一八日

天保十三寅年八月十一日阿遮梨方有リ金しらへ書出し

*御廟拜堂大日堂迦梨帝母四国堂等之什物員数書 阿遮梨弟子觀弘円心・後見預り人護摩堂榮本苗道 中橋勘之丞宛 天保一三年八月

唯觀円盛阿遮梨再住之節詫一札 下書(弘道草稿) 中橋勘之丞宛 (天保一四年二月)

北室院本長返書狀(阿遮梨方片附一条) 中橋嘉平次宛 一三日付(嘉永二年閏四月)

阿波国妙法寺弟子隆道宜明房法縁ニ付師跡請合一札 花野村常榮寺 中橋勘之丞宛 嘉永三年六月

円清ニ付諸道具扣 辰二月改(安政三年カ)

*阿遮梨御請証冊案(中橋氏故復之節) 本人阿遮梨、証人作藏・親類惣代・勝利寺加判 政所別当中橋上綱元貞宛 安政三年

規定書(護摩堂他行ニ付留主中可致世話箇條) 阿遮梨 中橋上綱宛 文久二年正月

横長半 飯一冊 六五三

半 一冊 六〇五

二通 二五八

一通 六〇〇

一通 二四八

一通 六五六

半 一冊 六五八

半 一冊 六五九

中橋方阿遮梨方勘定

田畑敷地

横美半 一冊 六六一

* 字風呂奥敷地譲り証文(札銀式両式朱請取) 譲
り主中橋勘之丞・年寄藤右衛門・庄屋又重郎加判
阿遮梨宛 文政七年二月

一通 六三七

定重郎田地譲り証文 受人喜八郎・親類惣代与市
郎・年寄忠兵衛・庄屋彦兵衛加判 已二月北室院代
官裏印 阿遮梨宛 天保三年二月

一通 二七六一

定重郎田畑譲り証文 受人喜八郎・親類惣代与市
郎・年寄兵五郎・庄屋宮内加判、金剛頂院代官裏印
阿遮梨宛 天保三年二月

一通 二七六二

勸化

(永代長日行法・御供勸進帳) 慈尊院願主親証
寛政九年正月

半 一冊 一〇七六

金毘羅権現・愛宕権現勸化帳 願主親澄・世話人
太右衛門他七名 文化三年三月

半 一冊 一〇七

寺往来一札雛形(濃州加納宿欣浄寺往来一札写)
阿遮梨本内写 弘化五年三月

半 一冊 四〇八

○ 大野村茂助・又兵衛託一札(慈尊院養育犬打殺池
え蹴込之件) 親類・五人組加判、庄屋奥印 中橋
勘之丞・阿遮梨宛 文政十一年三月

一通 六六五

護摩堂

願書

慈尊院弥勒之護摩所支具料御加増願書 慈尊院
村護摩堂 年預代宛 寛文九年五月二二日

一通 六九

(慈尊院護摩堂の御多分江諸口上書扣) (宝永
三―宝曆九年)

美 一冊 六五

* 慈尊院方タラ供執行之節承仕御免之願書下書
護摩堂・阿遮梨 年預代宛 正徳四年二月二五日

一通 二〇八

年礼

高野山御年預衆評江年礼願事濟并三ヶ年順勤留
記、次二御年玉扣 護摩堂現住沙門眞啓 (寛政
二―同五年)

美 一冊 六七

仏事

* 弥勒尊御廟所屋祢替御法事等記録 護摩堂眞啓
安政六年七月一三日

半 一冊 四六

* 寛政九已七月十日弥勒尊御廟所上葺法事等記録
護摩堂眞啓代

半 一冊 一〇八

(奉納経請書) 護摩所役僧 行者きく丈他宛 文
化四年三月二三日

一通 一五八

(永代日御供勸進帳) 紀州高野山麓慈尊院願主
大鏡 寛政九年

半 一冊 一〇四

住持入退院

護摩堂住持之覚 下書 (宝暦頃)

半 二冊 六六

| | | | | | | |
|---|------|------|------|--|----|--------|
| 護摩堂諸道具覺 西山与三左衛門・下村六郎兵衛 元禄四年三月 | 橫長美大 | 一冊 | 六〇〇 | 年預代差紙(護摩堂筋出訴一件) 中橋嘉兵衛宛 辰五月二五日・同六月九日(文化五年) | 二通 | 六三三 |
| 護摩堂殘置道具之覺 善照 宝永八年五月朔日 | 橫長半 | 一冊 | 六三二 | 去月廿九日依御尋書上覺并護摩堂筋書抜き扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 文化五年六月 | 半 | 三冊 六三三 |
| 護摩堂諸道具并書物覺扣 北室院下預り中橋勘之 丞・同下年寄孫右衛門・長三郎 宝曆四年正月 | 橫長美大 | 一冊 | 六三三 | 護摩堂一見筋 阿遮梨觀澄 北室院役者中宛 (文化四年二月・同六年十一月) | 半 | 一冊 六三四 |
| 護摩堂諸道具并書物覺帳 北室院下預り中橋勘之 丞・同下年寄孫右衛門・長三郎 宝曆四年正月 | 橫長美大 | 一冊 | 六三四 | 中橋嘉兵衛訴願書(護摩堂え掛ル先規違約之二カ 条) 年預代宛 文化六年七月 | 一通 | 六三五 |
| 護摩堂留主居御請一札案紙 北室院役僧宛 宝曆 四年正月二一日 | | 一通 | 六三三 | 當寺諸用扣記 護摩堂 | 半 | 一冊 六三三 |
| 北室院江護摩堂留主居繼目之一札并代々留主居 之留書 付、文化六巳九月廿五日留主居眞啓死去後 弟子慈啓留主居願之筋扣へ (宝曆四―文化九年) | 半 | 一冊 | 六三六 | 下行米・庄米等請取 | | |
| 入院振舞献立 慈啓 (文化六年カ) | 半 | 一冊 | 一〇六 | 御高物・下行米・庄米護摩堂江納り分請取覚帳 慈尊院護摩堂預り阿遮梨 天保二年一〇月 | 半 | 一冊 六三九 |
| 護摩堂諸道具目録覚(北室院へ書上扣) 阿闍梨 盛觀預り印形・中橋勘之丞奥印 天保二年三月二四 日改 | 橫長美 | 一冊 | 六三八 | 御高物・下行米・莊米護摩堂江納り分請取覚帳 慈尊院護摩堂預り阿遮梨 天保三年一二月 | 半 | 一冊 六四〇 |
| (慈尊院護摩堂後住之儀願口上覚扣) 慈尊院阿 遮梨隱居密乘 北室院役僧宛 天保九年四月 | | 一通 | 一五四六 | 御高物・下行米・莊米護摩堂江納り分請取帳 慈尊院護摩堂預り阿遮梨 天保四年一〇月 | 半 | 一冊 六四一 |
| 職分出入 | | | | 御高物・下行米・庄米護摩堂江納り分請取帳 慈尊院護摩堂預り阿遮梨 天保五年一〇月 | 半 | 一冊 六四二 |
| 中橋嘉兵衛詰問状(護摩堂近年新規之条々) 護 摩堂宛 一〇月(文化三年) | | 一通 | 六三〇 | 御高物・下行米・庄米護摩堂江納り分請取帳 慈尊院護摩堂預り阿遮梨 天保六年一〇月 | 半 | 一冊 六四三 |
| 中橋嘉兵衛訴願書扣(弥勒尊別当と護摩堂職分出 入) 北室院・年預代宛 文化四年二月五日・同五 年二月 | | 三通一紙 | 六三一 | 御高物・下行米・庄米護摩堂江納り分請取帳 慈尊院護摩堂預り阿遮梨 天保七年一〇月 | 半 | 一冊 六四六 |
| 中橋嘉兵衛訴願書扣(弥勒尊別当と護摩堂職分出 入) 年預代宛 文化五年四月二五日 | | 一通 | 六三二 | 護摩堂苗道本銀返り証文(入鄉村寿栄講積銀預り 二付) 受人指物屋藤次郎・質物引請人中橋勘之丞 *・同葉屋茂助加判 岡永治・玉置七右衛門宛 天保 一五年十一月一一日 | 一通 | 八三 |

*護摩堂苗道様寿永講頼母子掛銀滞り書出し

弥勒講

弥勒講中人数扣帳（灌頂布之庄古記書写） 護摩堂 天明二年カ

半 一冊 五〇七

（弥勒講祠堂銀之頼母子勸進帳） 慈尊院村弥勒尊別当中橋嘉兵衛・出席世話人九度山村海堀義兵衛他六カ村一〇名（嵯峨谷・上中・竹の尾・大畑村弥勒講家筋宛） 寛政四年正月

半 一冊 五〇六

灌頂布之庄弥勒講頼母子取立物名前帳 慈尊院村弥勒尊別当中橋嘉兵衛 寛政四年正月

半 一冊 一〇九

（弥勒講頼母子惣名前帳） 弥勒尊別当中橋嘉兵衛 寛政四年正月

半 一冊 一〇〇

（弥勒講再宮定書） 護摩堂当住 文化九年二月五日

半 一冊 一〇〇

弥勒講献立 沙門寛啓 文化一二年二月五日

半 一冊 二〇二

慈尊院護摩所迴文（定例弥勒講案内） 中飯降村木下伊右衛門他講中宛

一通 二〇二

官省付莊内弥勒講中姓名簿（箱入折本）

33 X 15 一帖 七三

弥勒講再采勸進趣意書下書（護摩堂）

一通 五〇八

慈尊院弥勒講之興行之願狀

半 一冊 五二六

弥勒講狀本役出入覚書

一通 七〇八

七社明神（↓勸化・寄進 祠堂金）

祭 礼

官省符祭礼之記 付、慈尊院寺社料配分記・庄々出米配分記

半 一冊 一〇三九

神通寺祭礼 弥勒檀入用覚 宝永二年九月一二日

横長半 四冊 四七九

元文四年未九月七社明神御祭礼常式并諸々庄割越米何角扣覚帳（阿闍梨盛觀灌頂付氏人庄中重助帳写置）

横長半 一冊 六〇六

寛保元年辛酉ヨリ天明八戊申マテ曆数四拾八歳之間御幣本当人出米之記録 慈尊院上綱中橋氏書物

横長美大 一冊 一四二

明神御幣順番并盛物当番扣記（寛保三一文政元年）

美 一冊 九九九

七社明神御幣順番盛物当番記 中橋嘉兵衛元昭 寛政七年一月二二日

半 一冊 一〇二八

御幣本献立記 文政元年九月二六日

半 一冊 一〇二五

中橋勘之丞書狀扣（祭礼之御慈尊院村・大野村御幣渡り順番之儀）（大野村）池田兵次郎宛 九月一八日（天保一四年）

一通 一五〇

御酒樽・桶注文（慈尊院明神入用筋） 中橋加兵衛 九度山桶屋中宛 六月二八日付

一通 六〇〇

（庭幡五流仕立入用割帳） 断簡

横長半 二丁 九三三

神能棧敷

中橋勘之丞訴願書（能棧敷二付庄中と上綱家出入） 年預代宛 宝永元年一〇月（首欠）

一通 四六六

暖取極箇条書〔上綱と庄中氏子出入〕 享保四年

半 一冊 四六七

〔神能舞台棧敷之図〕

55×30 一鋪 二三七

〔神能筋諸雜用覚帳〕 慈尊院村肝煎平兵衛・善介 丑一〇月一二日

横長美 一冊 九四九

遷宮

下せん宮^ニ付執行代御下り之時庵室^ニ而人用覚勝利方^ノ入用也 貞享四年二月三日

横長美 一冊 四六三

明神上遷宮法事時三沙汰衆拙宅御越諸色入用帳

横長美大 一冊 二四七

慈尊院中橋嘉兵衛 享保五年一二月

天明元年辛丑ノ九月十九日当社七明神上棟并御法事用意扣記

半 一冊 六七

七社明神遷宮記 宮山之事・神主之事・祭祀之事・盛物記・庄米之事・寺社料之事 中橋上綱元昭 寛政一二年

半 一冊 一〇一九

七社明神遷宮諸記録 慈氏別当上綱中橋元昭 享和元年二月一〇月

半 一冊 一〇三〇

〔明神様遷宮之節故実者滞在中献立〕 享和元年九月

半 一冊 一〇三一

文政四辛巳年丹生七社明神宮葺替江上下遷宮之事 附リ大黒堂石階等繕之始末并天明年中預坊留記之写 上綱中橋勘之丞 文政三年九月一四年九月

半 一冊 一〇三四

七社大神上下遷宮并供養法事之旨 慈尊院阿遮梨現住觀晃 文政四年九月

半 一冊 一〇三三

天保十二辛丑九月七社明神上下遷宮並供養法事之記 阿遮梨現住唯觀 天保二二年五月一同年九月

半 一冊 一〇三六

丹生七社大神社上葺上下遷宮諸事簿 中橋弘道 天保二二年正月一九月

半 一冊 一〇三五

文久元辛酉年九月二日ヨリ同八日朝迄七社明神上棟^ニ付献立 中橋氏料理方

半 一冊 一〇三七

〔九月朔日ハ八日朝迄献立扣〕

半 一冊 一〇三二

神職

慈尊院村坂上左内銀子借用証文 受人清兵衛・証人中橋加兵衛加判 高野山^ニ而藏本了知房宛 文化七年一二月

一通 二九〇

*慈尊院垣内多宝塔讓り状〔札銀請取手形〕讓主坂上左内・請人勝利寺 中橋嘉兵衛宛 文化一三年一二月二八日

一通 六〇四

寄附金請取書 神主吹本宮内 中橋氏宛 天保三年一二月二九日

一通 一三〇三

〔坂上左内跡式神職相統^ニ付同人借財弁金之為四之祝子・明神講金讓受・受人宛差入一札〕坂上数馬・同苗左内・藤次郎 中橋勘之丞・吹本宮内宛 天保六年六月

一通 二三九

坂上数馬家出^ニ付四之祝子講銀掛戻之儀請証文 再相統人坂上左内・親類受人藤次郎・同平兵衛 中橋勘之丞・吹本宮内宛 天保七年六月八日

一通 二四〇

坂上左内病氣困窮^ニ付吹本宮内神職代勤約定書 添書一札 吹本宮内 中橋勘之丞宛 天保九年三月

一通 二四一

七社大明神惣山林松たけ勤番請書 勤番神主吹本宮内・坂上左内・村役人伊助・五兵衛 中橋勘之丞宛 天保一三年八月

一通 二四三

| | | | |
|--|--|--|--|
| <p>慈尊院村神主吹本宮内・孫宮石願書〔宮石幼若二付神役向合職坂上左内へ助加相頼相統之儀〕・同村神主坂上左内奥書印形 金剛頂院納所宛 弘化二年二月</p> <p>宮内御託差上一札〔宮山倒木御札之節不礼有之二付〕 中橋勘之丞加判 御地頭宛 弘化三年三月二三日</p> <p>金剛頂院役人書狀〔二之宮神主吹本宮石幼若二付七社明神社役勤向心添之儀依頼〕 慈尊院村中橋嘉平治宛 八月晦日付</p> <p>御寄志御姓名記帳〔神職上京繼目二付〕 慈尊院村神主吹本宮内嗣子同苗宮内・世話方角屋作造・坂上左京連印・中橋勘之丞奥印 役人衆中宛 安政三年一〇月</p> <p>中古綱大夫書狀〔吹本宮内儀二付内窺之件〕 於野山中橋氏宛 一一月一八日付</p> | <p>神 子</p> <p>七社明神神子和泉株讓り渡度願二付窺口上覚扣 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 年預代宛 文化九年一二月</p> <p>七社明神神子職馬場村天神之神子江預ケ之儀届書 名倉村神子和泉・同夫当吉 中橋嘉兵衛宛 文化九年一二月</p> <p>御普請願・届</p> <p>(神通寺七社明神大破二付御修理被仰付度願書扣) 慈尊院村中・庄屋権之丞・権右衛門 年預代宛 宝永七年正月二五日</p> <p>七社明神社内枯松伐損二付破損所御届書扣 下書共 中橋嘉兵衛 御修理奉行親王院・西門院宛 西一〇月一七日(文化一〇年)</p> | <p>一通 六二二</p> <p>一通 六三</p> <p>一通 六三一</p> <p>二冊 六四</p> <p>一通 六五</p> <p>二通 六〇九一</p> <p>一通 六〇九二</p> <p>一通 二〇四</p> <p>二通 五九五</p> | <p>七社明神社前之枯松伐損二付破損所書附普請願書扣 中橋嘉兵衛 年預代宛 文化一〇年一〇月二一日</p> <p>慈尊院七社明神社前破損所繕普請願書扣 下書共 中橋嘉兵衛 御修理方奉行宛 文化一〇年一〇月二一日</p> <p>境 内</p> <p>七社明神境内絵図 24 × 33</p> <p>七社明神枯松伐取入用積り同書扣 中橋嘉兵衛 御修理役所宛 八月九日(文化一〇年)</p> <p>七社明神玉垣之内枯松伐取願書扣 宮山預り宮内 金剛頂院・北室院役人中宛 西七月(文化一〇年力)</p> <p>寛政十二年心得書〔七社明神・遷宮記・宮山之事・神主事・祭礼之事・盛物記・庄米之事・寺社料事〕 半</p> <p>勝利寺</p> <p>* 慈氏寺由來・弥勒拜殿靈宝之覚・勝利寺観音之子細 寛文二三年二月 一通 四三</p> <p>* 勝利寺代々住持之覚 慈尊院村勘左衛門・茂左衛門 北室院内良昌坊宛 天和元年二月二日 一通 三八六</p> <p>* 下せん宮二付執行代御下り之時庵室二而入用覚 勝利方之入用也 貞享四年二月三日 横長美 一冊 四八三</p> <p>日次拔書(勝利寺開帳・辻芝居・興行一件) (延享三―寛政四年) 一綴 二〇五</p> |
|--|--|--|--|

慈尊院村博奕吟味之節勝利寺不調印ニ付窺口上書扣 慈尊院村庄屋団七・同帳面預リ中橋勘之丞年預代宛 宝曆四年正月二五日

一通 三九

(勝利寺宗判直印願一件扣) 天明四年八月

半 飯一冊 一〇九五

勝利寺諦成房一件 中橋弘道扣 天保六年

半 一冊 二〇七

中橋氏御請差上証文下書(勝利寺質入田地請戻被仰付ニ付) 年預代宛 天保六年閏七月

一通 二〇六

* 中橋弥太郎山林譲り証文 親類惣代田村又左衛門・請人角屋利平・世話人中橋伊兵衛加判 勝利寺宛 明治三年一二月

一通 二六〇

高野山

旧記写

高野山金剛峯寺衆徒等解文写 副進一七通一紙写込(嘉曆元年一〇月)

一卷 二三

常照(祈親)上人伝 天明四年甲辰七月当院現住前寺務檢校竜剛誌之・天保十己亥年七月同現住前左学頭專雄、中橋氏依望写之

一通 二九

天正年中高野治乱記 堯辨照純房写 宝曆四年一月書写

一冊 二二三

* (寛永年中高野山大塔御建立記録写) 中橋嘉兵衛元昭 文政二年五月

半 一冊 一〇三八

学侶行人訴訟

非事吏之事 三十六院惣代 寺社奉行所宛 (寛文四年二月二九日) 明和元年九月一七日写

半 一冊 一三四

学侶行人来由拔萃 附リ非事吏之事

美半 一冊 二三

(行人方近年訴訟書付写) (寛文一二年二月一・元禄五年八月)

美 一冊 二七

(行人方訴訟之始終御尋ニ付学侶方口上之覚写) 無量寿院有算 (貞享三年一二月二八日)

美 一冊 二六

山法・幕法

(山内掟書写) 学侶年預坊 貞享三年三月一二日

一通 二六

(切支丹宗門制禁之定書) 高野山学侶年預坊 天和二年五月

二通 二七

禁制写 高野山学侶年預坊 宝永七年四月

二通 二八

○

御朱印写并御墨印写 (寛文三年二月八日裁許状写・寛文四年五月一二日下知状写・寛文六年一一月三日御朱印写)

半 一冊 一〇七三

御公儀御定目御扣 上 評定所

美 一冊 一〇五〇

当御代御裁許写

半 一冊 一〇七四

(寺社奉行被仰渡之御書付之趣順達之写) 学侶年預坊 学侶領内寺院中宛 文政一三年三月

半 一冊 二九

惣山奉行

諸事控日記(惣山奉行替目之節) 大竜 文化五年一一月一文化六年七月

半 一冊 二三

寺領強訴記録

(高野山寺領百姓騒動実録) 上・中・下 (安永五一同七年)

半 三冊 二八

高野山寺領強訴一件扣 西九月（安永六年） 美 一冊 一〇五九

○ 高野山寺領杉原村磯兵衛吟味書（博徒ニ金子被謀取候一件） 一一月三〇日 一通 一三

法 会

弘法大師千五十年忌大法会修行唱明紙 和歌山片岡町高野山出張所 明治一七年三月 四枚 四九五
南無大師遍照金剛百十三文字 飯一通 四九二

中 橋 家

系図・家譜

系 譜

阿刀姓正裔中橋家世系脉譜并執行家世系略譜 附 弘法大師家系脉譜・高野山学侶方・行人方所領配分内訳 弘道謹誌（弘化二年正月） ゼロックス二部 一五四〇

阿刀姓正裔中橋家世系脉譜并執行家世系略図 附 文久頃之弘道書留 弘化二年正月八日 ゼロックス二部 一五四一

（中橋家由緒略書） 元昭 大坂住常三郎事改名篤助宛 文政元戊寅冬 ゼロックス一部 一五四二

中橋氏由緒書留控（三十代弘道代マデ） ゼロックス二部 一五三九

弘法大師家系脉譜 慈尊院政所附 46×33 一枚 九八一

菊一文字太刀

（菊一文字太刀由緒之事） 下書（元昭） 一通 八五三

元祖阿刀元忠より十四代弘元ニ至リ菊作御太刀拜戴迄由来略譜并奉願附紙 高野山最初慈尊院政所大師母公御由緒別当三十一世中橋上綱阿刀元扶 美半 一冊 八五二

元祖より始メ菊作太刀拜戴迄之事 高野山最初慈尊院政所大師母公御由緒別当三十一世中橋上綱阿刀元扶 半 一冊 六六八

（菊一文字太刀寸法） 先祖軍功記 一通 八五三

先祖軍功記

（中橋勘之丞弘高軍功記） 加兵衛（二五代長成記） 正保三年正月 一通 六六六

中橋勘之丞弘高軍功記并菊文字太刀拝領由来記（浄香勘之丞カ） 一通 六六七

大塔建立

（寛永年中高野山大塔御建立記録写） 中橋元昭 文政二年五月写 半 一冊 一〇三六

* 寛永年中大塔御再建ニ付御女儀方諸侯方公儀江金銀御納之古書写 中橋弘道（弘化二年春） 半 一冊 二八九

○

阿刀姓氏古書引証 中橋氏 半 一冊 一〇七五

（元昭先祖追福号勘記）（文政八年カ） 一通 八五〇

日記・覺書

日次記

| | | | | | |
|------|----------|--------|---|----|----|
| 日次聞書 | 上綱中橋英元 | 寬保四甲子年 | 半 | 一冊 | 一 |
| 日次 | 英元 | 延享二乙丑年 | 半 | 一冊 | 二 |
| 日次 | 中橋英元 | 延享三丙寅年 | 半 | 一冊 | 三 |
| 日次 | 中橋英元 | 延享四丁卯年 | 半 | 一冊 | 四 |
| 日次聞書 | 上綱中橋英元 | 延享五戊辰年 | 半 | 一冊 | 五 |
| 己巳日次 | 中橋英元 | 寬延二年 | 半 | 一冊 | 六 |
| 日次 | 上綱中橋英元 | 寬延三庚午年 | 半 | 一冊 | 七 |
| 日次 | 中橋英元 | 寬延四辛未年 | 半 | 一冊 | 八 |
| 壬申日次 | 中橋英元 | 宝曆二年 | 半 | 一冊 | 九 |
| 癸酉日次 | 慈尊院村中橋英元 | 宝曆三年 | 半 | 一冊 | 一〇 |
| 甲戌日次 | 中橋英元 | 宝曆四年 | 半 | 一冊 | 一一 |
| 乙亥日次 | 中橋英元 | 宝曆五年 | 半 | 一冊 | 一二 |
| 丙子日次 | 中橋英元 | 宝曆六年 | 半 | 一冊 | 一三 |
| 丁丑日次 | 中橋英元 | 宝曆七年 | 半 | 一冊 | 一四 |
| 戊寅日次 | 中橋英元 | 宝曆八年 | 半 | 一冊 | 一五 |
| 己卯日次 | 中橋英元 | 宝曆九年 | 半 | 一冊 | 一六 |

| | | | | | |
|------|---------|-------|---|----|----|
| 庚辰日次 | 中橋英元 | 宝曆一〇年 | 半 | 一冊 | 一七 |
| 辛巳日次 | 中橋英元 | 宝曆一一年 | 半 | 一冊 | 一八 |
| 壬午日次 | 中橋英元 | 宝曆一二年 | 半 | 一冊 | 一九 |
| 癸未日次 | 中橋英元 | 宝曆一三年 | 半 | 一冊 | 二〇 |
| 甲申日次 | 中橋英元 | 宝曆一四年 | 半 | 一冊 | 二一 |
| 乙酉日次 | 中橋英元 | 明和二年 | 半 | 一冊 | 二二 |
| 丙戌日次 | 上綱中橋英元 | 明和三年 | 半 | 一冊 | 二三 |
| 丁亥日次 | 上綱中橋英元 | 明和四年 | 半 | 一冊 | 二四 |
| 戊子日次 | 上綱中橋英元 | 明和五年 | 半 | 一冊 | 二五 |
| 己丑日次 | 中橋英元 | 明和六年 | 半 | 一冊 | 二六 |
| 庚寅日次 | 中橋英元 | 明和七年 | 半 | 一冊 | 二七 |
| 辛卯日次 | 中橋英元 | 明和八年 | 半 | 一冊 | 二八 |
| 壬辰日次 | 上綱中橋英元 | 明和九年 | 半 | 一冊 | 二九 |
| 癸巳日次 | 上綱中橋英元 | 安永二年 | 半 | 一冊 | 三〇 |
| 甲午日次 | 政所預中橋英元 | 安永三年 | 半 | 一冊 | 三一 |
| 乙未日次 | 中橋英元 | 安永四年 | 半 | 一冊 | 三二 |
| 丙申日次 | 中橋英元 | 安永五年 | 半 | 一冊 | 三三 |
| 丁酉日次 | 中橋英元 | 安永六年 | 半 | 一冊 | 三四 |
| 戊戌日次 | 中橋英元 | 安永七年 | 半 | 一冊 | 三五 |
| 己亥日次 | 上綱中橋英元 | 安永八年 | 半 | 一冊 | 三六 |

| | | | | | |
|----------------|---------|--------------|---|----|----|
| 庚子日次 | 上綱中橋英元 | 安永九年 | 半 | 一冊 | 三七 |
| 辛丑日次 | 上綱中橋英元 | 安永一〇年 | 半 | 一冊 | 三八 |
| 壬寅日次 | 上綱一井英元 | 天明二年 | 半 | 一冊 | 三九 |
| 癸卯日次 | 上綱一井英元 | 天明三年 | 半 | 一冊 | 四〇 |
| 日次聞書 | 中橋英元 | 天明四甲辰年 | 半 | 一冊 | 四一 |
| 日次聞書 | 中橋英元 | 天明五乙巳年 | 半 | 一冊 | 四二 |
| 日次聞書 | 中橋英元 | 天明六丙午年 | 半 | 一冊 | 四三 |
| 丁未日并聞書 | 中橋嘉兵衛元昭 | 天明七年 | 半 | 一冊 | 四四 |
| 戊申日次 | 中橋元昭 | 天明八年 | 半 | 一冊 | 四五 |
| 己酉日次 | 中橋元昭 | 天明九年 | 半 | 一冊 | 四六 |
| (日並記斷簡) (寛政二年) | | | | | |
| 壬戌日次 | 上綱元昭 | 享和二年 | 半 | 一冊 | 四七 |
| 癸亥日次 | 中橋元昭 | 享和三年 | 半 | 一冊 | 四八 |
| 享和四甲子曆日次記 | 中橋上綱元昭 | | 半 | 一冊 | 四九 |
| 乙丑日次記 | 上綱元昭 | 文化二年 | 半 | 一冊 | 五〇 |
| 丙寅日並記 | 上綱元昭 | 文化三年 | 半 | 一冊 | 五一 |
| 丁卯日並記 | 上綱元昭 | 文化四年 | 半 | 一冊 | 五二 |
| 戊辰日並記 | 上綱元昭 | 文化五年 | 半 | 一冊 | 五三 |
| 己巳日並記 | 中橋元昭 | 文化六年 | 半 | 一冊 | 五四 |
| 庚午日次記 | 中橋元昭 | 文化七年 | 半 | 一冊 | 五五 |
| 辛未日並記 | 中橋元昭 | 文化八年 | 半 | 一冊 | 五六 |
| 壬申日並記 | 中橋元昭 | 文化九年 | 半 | 一冊 | 五七 |
| 癸酉日次 | 中橋元昭 | 文化一〇年 | 半 | 一冊 | 五八 |
| 甲戌日次記 | 中橋元昭 | 文化一一年 | 半 | 一冊 | 五九 |
| 乙亥日次記 | 中橋元昭 | 文化一二年 | 半 | 一冊 | 六〇 |
| 丙子日次記 | 中橋元昭 | 文化一三年 | 半 | 一冊 | 六一 |
| 丁丑日次記 | 中橋弘道 | 文化一四年 | 半 | 一冊 | 六二 |
| 戊寅日記 | 中橋弘道 | 文化一五年 | 半 | 一冊 | 六三 |
| 己卯日記 | 中橋弘道 | 文政二年 | 半 | 一冊 | 六四 |
| 庚辰日記 | 中橋弘道 | 文政三年 | 半 | 一冊 | 六五 |
| 辛巳日記 | 中橋弘道 | 文政四年 | 半 | 一冊 | 六六 |
| 壬午日記 | 中橋弘道 | 文政五年 | 半 | 一冊 | 六七 |
| 癸未年日並記 | 中橋弘道 | 文政六年 | 半 | 一冊 | 六八 |
| 甲申年日並記 | 中橋弘道 | 文政七年 | 半 | 一冊 | 六九 |
| 日並記 | 中橋弘道 | 文政八乙酉年 | 半 | 一冊 | 七〇 |
| 日記 | 中橋弘道 | 文政九丙戌正月八日二五日 | 半 | 一冊 | 七一 |
| 日次記 | 中橋弘道 | 文政九年八月二五日以降 | 半 | 一冊 | 七二 |
| 日並記 | 中橋弘道 | 文政一〇丁亥年 | 半 | 一冊 | 七三 |
| 日並記 | 中橋弘道 | 文政一一戊子年 | 半 | 一冊 | 七四 |
| 日並記 | 中橋弘道 | 文政一二己丑年 | 半 | 一冊 | 七五 |

| | | | | | | | | | | | | |
|-----------|-----------|------------|------|----|------|------------|------------------------|--------------------|-----------------|----|-----|-----|
| 文政十三庚寅日並記 | 中橋弘道 | 半 | 一冊 | 五 | 壬子日記 | 在江戸阿刀弘道 | 嘉永五年 | 半 | 一冊 | 四 | | |
| 辛卯日記 | 中橋弘道 | 文政一四(天保二年) | 半 | 一冊 | 五 | 癸丑日記 | 在江戸阿刀弘道 | 嘉永六年 | 半 | 一冊 | 五 | |
| 壬辰日記 | 中橋弘道 | 天保三年 | 半 | 一冊 | 七 | 甲寅日記 | 阿刀主(弘道) | 嘉永七年(安政元) | 半 | 一冊 | 六 | |
| 癸巳日記 | 中橋弘道 | 天保四年 | 半 | 一冊 | 七 | (弘道日誌) | 安政三年正月より同四年六月七日迄 | 半 | 一冊 | 七 | | |
| 日次記 | 中橋弘道 | 天保五甲午年 | 半 | 一冊 | 九 | (表紙欠、錯簡アリ) | | | | | | |
| 乙未日並記 | 中橋弘道 | 天保六年 | 横長半 | 一冊 | 二九 | 丁巳日次記(鉄座筋) | 在江戸中橋弘道 | 安政四年正月より閏五月一三日迄 | 半 | 一冊 | 六 | |
| 丙申日記 | 中橋弘道 | 天保七年 | 半 | 一冊 | 八 | 庚申日次記 | 在江戸弘道 | 安政七年(万延改元) | 半 | 一冊 | 九 | |
| 丁酉日簿 | 弘道 | 天保八年 | 半 | 一冊 | 八 | 正月より九月晦日迄 | | | | | | |
| 戊戌日並簿 | 中橋弘道 | 天保九年 | 半 | 一冊 | 三 | (弘道日誌) | 万延元年庚申年一〇月朔日より同二年正月四日迄 | 半 | 一冊 | 六七 | | |
| 己亥日記 | 中橋弘道 | 天保一〇年 | 半 | 一冊 | 三 | (弘道日誌) | 万延二年辛酉年(文久改元) | 弘道事尚甫 | 半 | 一冊 | 一〇〇 | |
| 辛丑日簿 | 中橋弘道 | 天保一二 | 半 | 一冊 | 四 | (壬戌日次記) | 弘道事尚甫 | 文久二年 | 半 | 一冊 | 一〇一 | |
| 癸卯日簿 | 中橋弘道 | 天保一四年 | 半 | 一冊 | 五 | 日記 | 弘道事尚甫 | 文久三年 | 半 | 一冊 | 一〇二 | |
| 甲辰日次記 | 中橋弘道 | 天保一五年 | 半 | 一冊 | 六 | 甲子日次記 | 弘道事尚甫 | 文久四年(元治改元) | 半 | 一冊 | 一〇三 | |
| 乙巳日次記 | 中橋弘道 | 天保一六(弘化二年) | 半 | 一冊 | 七 | 四月二日迄 | | | | | | |
| 丙午日次記 | 中橋弘道・元扶 | 弘化三年 | 半 | 一冊 | 八 | 丙午日次記 | 中橋元扶 | 弘化三年二月より四年八月 | 半 | 一冊 | 一〇四 | |
| 丁未日並記 | 中橋弘道・元扶 | 弘化四年 | 半 | 一冊 | 九 | 弘化五戊申年日記 | 中橋元扶 | (嘉永改元、正月より四月二十四日迄) | 半 | 一冊 | 一〇五 | |
| 戊申日次扣 | (中橋弘道) | 弘化五年 | 半 | 一冊 | 九 | 日記 | 中橋元扶 | 嘉永元年四月二十五日より八月一日迄 | 半 | 一冊 | 一〇五 | |
| 己酉日記 | 版行署曆老枚添 | 弘道 | 嘉永二年 | 半 | 一冊 | 九 | 日記 | 中橋元扶 | 嘉永元年八月一日より二月七日迄 | 半 | 一冊 | 一〇五 |
| 庚戌記 | 在江戸名佳橋弘道 | 嘉永三年 | 半 | 一冊 | 九 | 日記 | 中橋元扶 | 嘉永二年己酉年 | 半 | 一冊 | 一〇六 | |
| 辛亥日次簿 | 在江戸阿刀(弘道) | 嘉永四年 | 半 | 一冊 | 九 | | | | | | | |

| | | | |
|--------------------------------|---|----|-----|
| 日記 中橋元扶改元貞 安政三丙辰年五月五日 | 半 | 一冊 | 二〇七 |
| 日記 慈ノ政所別当中橋上綱(元貞) 安政四丙辰正月 | 半 | 一冊 | 二〇八 |
| 日割記 式 慈尊院政所別当中橋上綱(元貞) 安政四年八月三三 | 半 | 一冊 | 二〇八 |
| 日割記 慈政所別当中橋上綱(元貞) 安政五戊午年 | 半 | 一冊 | 二〇九 |
| 日割記 中橋上綱(元貞) 安政六己未年 | 半 | 一冊 | 二一〇 |
| 日割記 政所別当中橋上綱(元貞) 安政七庚申年(万延元) | 半 | 一冊 | 二一一 |
| 日並記 政所別当中橋上綱(元貞) 万延二辛酉年 | 半 | 一冊 | 二一二 |
| 諸用日並記 政所別当中橋上綱(元貞) 文久二壬戌年三月五日 | 半 | 一冊 | 二一三 |
| 日紀 中橋内(元貞妻八重カ) 慶応三丁卯年七月一日 | 半 | 一冊 | 二四一 |
| 日紀 中橋内(同前) 慶応三年一月一日 | 半 | 一冊 | 二四二 |
| 日紀 中橋内(同前) 慶応四年七月一日 | 半 | 一冊 | 二四五 |
| 日並記 中橋氏 明治二年二月朔日 | 半 | 一冊 | 二六一 |
| 日記 中橋氏 明治二年五月二八日 | 半 | 一冊 | 二六二 |
| 日記帳 中橋氏 明治三年正月九日 | 半 | 一冊 | 二七一 |
| 日紀 中橋氏 明治三年一月朔日 | 半 | 一冊 | 二七三 |
| 寛保四ヨリ天明五マテ四十一年英元日次(繰出し) | 半 | 一冊 | 二八 |

中橋家文書目録 中橋家 日記・覚書 家職・身分

| | | | |
|---|-----|----|-----|
| * 日次拔書(勝利寺開帳・辻芝居興行一件) (延享三寛政四年) | 半 | 一冊 | 二〇五 |
| * 蔵書目録(井並記目録) | 横長半 | 一冊 | 六八五 |
| 申 伝 書 | | | |
| 元昭英元ヨリキ、書扣 | 横長半 | 一冊 | 六七五 |
| 元昭存念書附(我等一生之写・大借形付家事治り方相談) 勘之丈(伴弘道)宛 文化二四年秋 | | 一通 | 八四七 |
| 道 中 記 | | | |
| 元珎四国道中記 断簡 | | 一丁 | 二六八 |
| 家職・身分 | | | |
| 御影供盛物 | | | |
| 三月御影堂御精進供図 慈尊院常香 寛永一四年三月二日 | | 一枚 | 四四七 |
| 三月正御影供盛物私日記 慈尊院常香 明暦四年三月 | 横長大 | 一冊 | 四四八 |
| (高野山御影供秘伝書) 延享元甲子三月廿一日 盛物御膳組之図欠 慈尊院政所預り一井上綱中橋嘉兵衛元昭 寛政元年三月二日 | | 一通 | 四四九 |
| 正御影供盛物寛 | | 一通 | 四五〇 |
| 妙雲院書状(御影供恒例登山之要請) 常香勘之丞 宛 三月八日付 | | 一通 | 四五一 |

慈尊院村中橋勘之丞願書扣〔正御影供御飯并御盛
物蓋指之烏帽子裝束御仕直シ之儀〕 年預代宛 天
明三年八月 一通 二三五

中橋勘之丞伺書〔御大例之節復旧例風折烏帽子狩
衣着用之儀〕 下書 年預代宛 丑年〔天保一二〕 一通 六七四

年 礼

高野山御年預江例年年頭登山并巡勤止記〔寛
政六文化八年〕 美 一冊 一〇五三

御 児 勤

進物目錄〔岩次郎儀青巖寺御児勤ニ付登山之節〕
〔但同年来年得度ニ付格別〕〔天保一四年一二月二四
日〕 一通 一五五三

地 士 身 分

今度高野山領武具御改ニ付書上一札扣 高野領慈
尊院村地土中橋勘之丞 紀伊大納言内高橋与四郎・
桑山新右衛門宛 元禄五年八月二日 一通 六六九

夫役不勒之儀御尋ニ付口上書下書 紀州伊都郡高
野領慈尊院寺氏別当上綱中橋加兵衛 年預代・江戸
寺社奉行宛 元文五年八月二〇日・二二日 二通 六七〇

安永五申十月紀伊様在中江御觸・御儉約御書
付写并安永七年正月仲間申合覚 城四郎兵衛写 半 一冊 一〇四三

○

〔中橋家来太郎次郎半役勤ニ付申達覚〕 多聞院
納所台年 中橋勘之丞宛 正徳二年六月 一通 二五三

寅卯兩年分柴切銀請取手形 庄屋権右衛門 太郎
次郎宛 正徳二年六月一九日 一通 二五三

戸 籍

宗旨別上ケ

宗旨御改書上〔中橋勘之丞宗旨別上草案〕 宗旨
奉行宛 天明三年 半 一冊 六七二

宗旨御改書上ケ扣ヘ写シ 中橋嘉兵衛元昭 宗旨
奉行梵心院宛 文化七年八月 半 一冊 六七三

宗旨御改書上 慈尊院上綱中橋勘之丞 宗旨奉行
田福院宛 天保五年八月 美 一冊 六八七

宗旨御改書上 慈尊院上綱中橋勘之丞 宗旨奉行
竜花院宛 天保一二年八月 美 一冊 六八八

宗旨御改書上 慈尊院中橋勘之丞元扶 宗旨奉行
宛 嘉永元年八月 美半 一冊 六八九

宗旨御改書上 留控 慈尊院上綱中橋勘之丞 安
政三年八月 美 一冊 六七三

宗旨御改書上 慈尊院上綱中橋勘之丞 宗旨奉行
田満院宛 安政六年八月 美 一冊 六九〇

宗旨御改書上 慈尊院上綱中橋勘之丞〔元貞〕
宗旨奉行蓮知院宛 万延元年八月 美 一冊 六九一

宗旨御改書上ノ扣 慈尊院上綱中橋勘之丞元貞
宗旨奉行不空院宛 文久元年八月 美 一冊 六九二

宗旨御改書上ノ扣 慈尊院上綱中橋勘之丞 宗旨
奉行明眼院宛 文久二年八月 美 一冊 六九三

宗旨御改書上ノ扣ヘ 慈尊院上綱中橋勘之丞 宗
旨奉行総陽院宛 文久三年八月 美 一冊 六九四

| | | |
|---|-------------------|------------|
| 宗旨御改書上 奉行宝珠院宛 慶応三年八月 | 慈尊院上綱中橋弥太郎元常 美 | 一冊 九九五 |
| 宗旨御改書上ひかへ 慈尊院上綱中橋弥太郎元常 奉行南昌院宛 慶応四年八月 | 美 | 一冊 九九六 |
| 宗旨御改書上 慈尊院上綱中橋弥太郎元常 奉行南昌院宛 明治二年八月 | 美 | 一冊 九九七 |
| 宗旨御改書上 慈尊院上綱中橋弥太郎元常 奉行榮泉院宛 明治三年九月 | 美 | 一冊 九九八 |
| 篤助復籍(↓鉄座・件) | | |
| 弟篤助人別被差戻ニ付請取一札 案紙(弘道) 大坂北安治川三丁目役人中并同町富田屋与左衛門宛 文政一〇年二月 | | 二通 三四四 |
| 柴田屋篤助金子借用証文 岡氏宛 弘化二年一〇月三日 | | 一通 三三六 |
| 神文誓書(伊勢屋茂兵衛老母并子供江戸帰住ニ付送届之上帰国之旨) 芝二本榎寛真寺門前芝田屋事中橋嘉平二弟篤助 弘道兄宛 午七月一〇日(弘化三年) | | 一通 一四三三 |
| 芝田屋・伊勢屋一類不通差入一札(篤助離縁ニ付) 神田佐久間町三丁目いせや茂兵衛・同鉄五郎・同人老母つく・式本榎上行寺門前証人文蔵 中橋嘉平次宛 嘉永元年五月一日 | | 一通 一四三二 |
| 送 籍 | | |
| 父祐甫人別送り一札 紀州伊都郡高野山領慈尊院村大師母公政所別当阿刀元扶、同所地頭北室院代官奥印(宛書欠損) 嘉永三年九月 | | 一通 九三〇 |
| 猶子滝藏人別送り一札扣 紀州伊都郡高野山学侶方領内慈尊院村中橋勘之丞 江戸芝式本榎町役人中宛 安政四年正月 | | 一通 四〇二 |

| | | |
|---|---------|-----------|
| 奉 公 人 | | |
| 奉公証文(ふじの五年季) ふじの親由治郎・受人安兵衛 中橋氏宛 天保四年三月 | | 一通 二五〇 |
| 神戸村原田屋常之助人別送り一札 摂州八部郡神戸村年寄五兵衛 紀州高野山学侶領内伊都郡目代中橋勘之丞宛 天保七年五月 | | 一通 三四五 |
| 誓詞奉公状(引負後再奉公ニ付) 奉公本人吉兵衛・証人森嶋勘兵衛・親類松本村三連印 中橋勘之丞宛 天保七年一〇月 | | 一通 二五二 |
| 奉公人請状(摂州菟原郡熊内村八兵衛父子) 奉公人八兵衛・同伴元治郎・執役人亀九郎・大坂江戸堀五丁目竹内屋市郎兵衛連印 中橋勘之丞宛 天保九年五月 | | 一通 八六七 |
| 八兵衛差上一札(野山出店金引負ニ付濟方誓約) 本人八兵衛・証人悻元二郎 中橋勘之丞宛 天保十一年四月二八日 | | 一通 八六八 |
| 宗旨請状(入郷村武兵衛娘そめ) 入郷村円通寺・同村庄屋六郎右衛門 慈尊院村中橋勘之丞宛 西八月二八日 | | 一通 四〇七 |
| 宅 地 | | |
| 宅地十分一図(御免許地中橋家居屋鋪絵図) 但五歩一間 | 45 × 41 | 一鋪 六七八 |
| 宅地十分一図(御免許地中橋家居屋鋪絵図) (普請訂正貼紙アリ) | 45 × 41 | 一鋪 六七九 |
| 宅地絵図面 | 74 × 58 | 一鋪 六八〇 |

*中橋家御免除屋鋪地附立書付并同見取絵図

中橋家宅地絵図

39 × 29
71 × 55
一通 六七
一鋪 一三六

持 地

所持地改

田地密記 英元 (延享元—寛延四年)

美
一冊 六五

中橋勘之丞所持之屋敷地山林之覚

一通 四六

勘之丞屋敷田畑絵図

59 × 44
五鋪 一三九

藪畝積之覚 一一月一日付

一通 二五六

(北室院・金剛頂院入反別米高田数書立)
中橋勘之丞

中
一通 三五七

元禄三千年慈尊院勘之丞畑田仕候付留書之写

美
一冊 七六

年貢算用

年貢算用目録覚 中橋加兵衛 元文二年十一月二三日

一通 三五二

年貢算用目録之覚 元文三年二月一日四日

一通 三五二

寛保壬戌庭帳 慈尊院邑上綱中橋勘之丞 寛保二年

横長半
一冊 七七

米大豆納算用帳 慈尊院村中橋勘之丞 延享元年一月

横美半
一冊 三五三

下 作

市原新田入作覚帳 慈尊院上綱中橋勘之丞 延享二年二月 半

一冊 七九

地上并下作人覚 上綱中橋英元 宝曆四年一〇月 半

一冊 七五

米大麦 地上納覚帳 上綱中橋英元 宝曆七年一〇月 半

一冊 七四

田畑數証文

学文路村平野作太夫田畑譲り証文 同村証人次郎右衛門・大野村庄屋武右衛門・同村肝煎伝重郎加判・小林七兵衛奥印 慈尊院村中橋嘉兵衛宛 享保八年正月

一通 二六九

定平藪地壳渡証文 中橋嘉兵衛宛 明和二年五月

一通 二七〇

*中橋勘之丞字風呂奥藪地譲り証文(札銀式両式朱受取) 年寄藤右衛門・庄屋又重郎加判 阿遮梨宛 文政七年二月

一通 六七

伊勢講中支配田地譲り証文 譲り主伊勢講親惣重郎他六名連印、証人庄屋・年寄加判、金剛頂院代官裏印 中橋勘之丞宛 文政八年二月

一通 二七二

忠兵衛田地譲り証文 世話人安兵衛・証人年寄藤右衛門・同庄屋又重郎加判 北室院納所裏印 中橋勘之丞宛 文政一一年二月

一通 二七三

北室院所領免除地永附与証文并祠堂金六拾五兩請取証文 写共 北室院本長 中橋嘉平治宛 弘化三年正月二日

五通 四四三

常右衛門請証一札(北室院中橋家え常右衛門屋敷地永代譲受之節) 添留書共 村惣代藤治郎加判 年寄忠兵衛・庄屋重治郎奥印 中橋勘之丞宛 弘化三年八月

一通 四四四

中橋弥太郎山林譲り証文（礼銀一〇貫目受取）
親類惣代田村又左衛門・請人角屋利平・世話人中橋
伊兵衛加判 勝利寺宛 明治三年二月

一通 二六〇

○

墓所屋敷地譲り証文写 譲り主惠純・証人庄屋弥
太郎・同年寄五平次・孫右衛門 平六宛 元文五年
十一月

一通 九六

伴七家敷譲り証文 一家惣代伝右衛門・証人庄屋
又重郎・同年寄角右衛門加判、北室院代官裏印 平
兵衛宛 文化一三年四月

一通 三七

仁兵衛田地譲り証文 世話人定重郎・証人年寄藤
右衛門・庄屋又重郎加判、北室院代官裏印 善吉宛
文政二年四月

一通 二七四一

仁兵衛田地譲り証文 世話人定重郎・証人年寄兵
五郎・庄屋宮内加判、金剛頂院代官裏印 善吉宛
文政二年四月

一通 二七四二

平兵衛屋敷地譲り証文 年寄兵五郎・扱人中橋勘
之丞・証人庄屋宮内加判 善吉宛 天保二年六月

一通 二七五

頼母子講

弥勒講（中橋氏取立）

弥勒講請定 廻・扣共 講親中橋勘之丞 明和四
年二月

二冊 一〇七

（積講帳） 講本人中橋嘉兵衛・請人理徳院・同了
智 寛政四年六月—同九年

一冊 五〇

弥勒講請定 講親中橋勘之丞・請人北室院・正智
院 文政七年一月

一冊 一〇九

大借ニ付弥勒講取立ニ預り候節前後之様子書留
勘之丞弘道式拾八才 文政七年二月
弥勒講積金之内金五両預り証文 入郷村守安禎
助 中橋勘之丞宛 天保八年二月

半

一冊 五七

一通 七八

守安弁天講

守安相統辨天講請定 講親守安禎助・親請人中橋
勘之丞・玉置七右衛門・辻田伝兵衛・世話人薬屋茂
助・山家屋源藏 （天保三—弘化二年）

美

一冊 七九

弁天講積銀預リニ付田地書入引請証文 吉原村預
り主久右衛門・同村質主証人喜市・同村引請人忠次
郎連印、庄屋善兵衛奥印 入郷村弁天講惣代七右衛
門宛 天保五年三月

一通 七九

弁天講銀借用ニ付本銀返シ証文并添手形 野村壳
主栄田惣代嘉八郎・同村五人組・肝煎・庄屋連印、
辻田伝兵衛奥印 入郷村弁天講惣代七右衛門宛 天
保五年一〇月

三通 八〇

弁天講銀預リニ付本銀返証文并引請手形 付、右
田地下作手形・本銀返証文延引之義嘉兵衛口上 案
紙共 野村本人嘉兵衛・貸主金毘羅世話人嘉八郎・
五人組・肝煎・庄屋連印、辻田伝兵衛奥印 弁天講
惣代中橋勘之丞宛 天保六年一〇月・十一月二十五日

五通 八一

吉原村武兵衛本銀返し証文（弁天講積銀預リニ付）
吉原村銀子預り主儀兵衛・同村引請人藤右衛門・
庄屋善兵衛・肝煎右近加判 入郷村弁天講惣代中橋
勘之丞宛 天保七年一〇月

一通 八四

神野村藤兵衛加入弁天講掛銀滞濟方ニ付請合手
形 神野村藤兵衛事藤藏・同村忠兵衛・入郷村武兵
衛連印、神野村庄屋柳藏奥印 中橋勘之丞宛 亥二
月（天保一〇年カ）

一通 八六

小田村古右衛門本銀返シ証文并下作添手形（弁天講積銀請取三付） 同村五人組權兵衛・肝煎平三郎・同角兵衛・庄屋吉三郎加判 入鄉村弁天講惣代中橋勘之丞宛 天保一二年三月

二通 八〇五

寅三月分守安弁天講集帳 中橋勘之丞 （天保一三年カ）

横長美 一冊 八〇三

寅年三月分弁天講懸料残銀請取覚

一通 八〇三

守安辨天講滯銀株（墨付なし）

横長美 一冊 八〇七

寿 栄 講

茂重郎本銀返り証文写（入鄉村寿永講銀預り二付） 寿永講惣代岡永治・七右衛門宛 天保一三年一月

一通 八二

護摩堂苗道本銀返り証文（入鄉村寿栄講積銀預り二付） 受人指物屋藤次郎・質物引請人中橋勘之丞・同葉屋茂助加判 岡永治・玉置七右衛門宛 天保一五年一月一日

一通 八三

護摩堂苗道様寿永講頼母子掛銀滞り書出し

一通 八三

その他

（慶安四卯元・承応元辰元源右衛門分并延宝五巳元源五郎分元利算用書） 中橋勘之丞 源五郎宛 天和四年二月

横長半 飯一冊 八三

大師講請定扣 寛政四年二月―同二年二月

美 一冊 五九

融通講通 親請堀江平右衛門・出水屋藤兵衛 三田屋作兵衛宛 （天保三―同一年）

横長美 一冊 七七

調達講懸金請取通 三浦勘定元 中橋勘之丞宛 天保五年二月―同八年二月

横長半 飯一冊 八〇八

掛銀請取通 相統講世話人下村孫次郎・大和屋安右衛門 中橋勘之丞宛 天保七年四月―弘化元年五月

横長半 一冊 八四

天保一三寅年改水神講通 親受惣代市郎兵衛 中橋勘之丞宛

横長美 飯一冊 八〇九

某御答口上書写（三輪三平△相掛候慈光院頼母子出入二付）

一通 八六

巳ノ春一 郎右衛門△持参之書付（講半口分取銀算用覚）

一通 八〇

七拾人積立講平均目録

半 一冊 一〇〇

観音講金受取書 中橋勘之丞代角屋利兵衛 理徳院宛 丑五月二四日

一通 五二

（講銀算用覚）

横長半 飯一冊 一五五

取 替 金

惣神主家江取替銀子算用帳 中橋勘之丞 文政五年一月

横長半 一冊 二四九

推出村作人惣右衛門金子借用証文（新田開所跡繕普請料） 同村庄屋重兵衛加判 中橋勘之丞宛 文政九年一〇月

一通 二九二

守安禎助金子借用証文 入鄉村肝煎兵五郎加判 中橋勘之丞宛 天保二年二月

一通 八四

守安禎助一札（大和屋清吉借用金為替勘定延引二付） 中橋勘之丞宛 戊二月晦日

一通 八五

諸方へ金子立用書類

四通 二六三

| | | |
|---|------|------|
| 近藤両樵銀子借用一札(弥勒講実分一株差入) 証人長田屋利助加判 中橋勘之丞宛 天保八年二月 | 一通 | 二六三一 |
| 近藤両樵金子預り覚(普明院筋・松浦伊左衛門筋式口) 取次利助加判 勘之丞宛 酉二月九日 (天保八年カ) | 一通 | 二六三二 |
| 松浦伊左衛門金子請取覚 中橋勘之丞宛 酉二月二十四日(天保八年カ) | 一通 | 二六三三 |
| 拝借金 | | |
| 高野山 | | |
| 慈尊院村中橋勘之丞願口上覚(去ル安永二巳極月拝借銀支分御用捨之儀) 扣 年預代宛 天明二年一月 | 一通 | 八八 |
| 中橋嘉兵衛願書扣(親勘之丞拝借残銀年賦上納之儀) 年預代宛 寛政二年一〇月 | 一通 | 八九 |
| 御年預坊より銀六貫目拝借仕候始末之記 (元昭) 文化元年三月 | 一冊 | 八〇 |
| 中橋勘之丞拝借金証文 請人天徳院・北室院加判 御当金懸り親王院・明王院宛 文政一〇年一二月 | 一通 | 八二 |
| 金銀受取帳 播磨屋清七郎・綿屋善兵衛・中橋勘之丞 金銀御掛り成福院・釈迦門院役人宛 天保三年閏一月一 同四年四月 | 一通 | 七〇 |
| 南院納所金子請取覚(先年用立金之内返金分) 中橋勘之丞宛 丙午九月一七日(弘化三年カ) | 一通 | 八〇 |
| * 田村孫兵衛寄進金預り覚(御影堂宝蔵御普請用金之内) 中橋嘉平治 成福院宛 弘化三年一二月 | 一通 | 九七 |
| 在江戸中橋嘉平治金百五拾両拝借願書(家宝之太刀引当) 両在番所役僧宛 戊八月一五日(嘉永三年) | | |
| 在江戸中橋嘉平治拝借金願書扣(菊作太刀受戻金百六拾両日限廿日限) 定光院・高室院御側衆中宛 巳五月二二日(安政四年) | 一通 | 一四〇 |
| 銀子拝借証文(銀四貫五百目、明辰年〆五年賦無支分) 後欠 | 一通 | 二六九 |
| 弘道申上覚(御年預表拝借金・田村分借財弁済方二付願書并私所持之品御尋二付) 下書 | 一通 | 八五 |
| 銀子拝借証文 後欠 | 一通 | 二九 |
| 紀州家 | | |
| 銀札引替所積立講仕法帳 天保八年正月 | 一冊 | 二〇七 |
| 中橋勘之丞金子借用引質証文(若山御用材方返納金差支二付) 証人阿闍梨加判 新田厚治・同慶治郎宛 天保一一年一二月 | 一通 | 二九五 |
| 中橋勘之丞願口上覚扣(播磨屋清七御用材仕入拝借銀被謀取候) 件大坂土州御屋敷懸合之儀 下書 共 御勝手方役所宛 卯一二月(天保一四年カ) | 一通 | 七六 |
| * 花坂村製石灰御城下積下シ御免二付御前借銀拝借証文并御貸方出入泉屋多吉引請質物書入口上書写 拝借人高野山字侶領花坂村米屋善右衛門・同領慈尊院村三田屋作兵衛 御貸方役所宛 未七月(弘化四年) | 一紙一通 | 七四 |
| 若山御勝手方御用狀上封紙 寺領慈尊院村中橋勘之丞宛 六月一五日付 | 一封 | 二五三 |

銀札方役所用狀上封紙 慈尊院村中橋勘之丞宛
正月晦日付 一封 一五〇五

若山柳川平輔書狀上封紙 寺領慈尊院中橋勘之丞宛
八月五日付 一封 一五〇七

柳川景輔書狀上封紙 中橋勘之丞宛 一封 一五二六

柳川京輔書狀上封紙 慈尊院村中橋勘之丞宛 一封 一五三二

紀伊大納言様御役順 中橋勘之丞記 横半半 一冊 七九六

借 財 (↓關所一件)

負債調

*元昭存念書附(我等一生之写・大借形付家事治り方相談) 勘之丈(倅弘道) 宛 文化一四年秋 一通 八〇七

要用書付(借賤筋算用覚) (天保一一―同一四年) 横半半 一冊 一五三十一

*田村亦兵衛〆預り銀算用覚 (天保一四年カ) 一通 一五三十五

中橋嘉平治内々歎願口上書(中橋家格外高借二至り候誤柄) 弘化三年八月 半 一冊 八四八

文化八年弘道家督〆去ル弘化四年暮迄業鉢_{二付}元仕入方用途金・借金利足出シ亦ハ損難等_{二付}出金大略覚 (中橋嘉平治弘道) 嘉永二年四月二五日年預坊へ差上、嘉永三年九月二三日江戸在番所へ願書差出候御差添へ山表へ達し置

(金銀穀類諸口借り方書出し覚) 横長半 一冊 八五七

(諸口借賤書拔并当年取米差引算用) 横長半 一冊 八五六

借入証文

中橋勘之丞質地証文 証人庄屋又重郎加判 古手
屋半兵衛宛 首欠 文政三年二月 一通 八六六

中飯降村岡村平兵衛返り手形(中橋勘之丞本銀返シ午年分証文差入二付) 慈尊院村中橋勘之丞宛
文政八年九月 一通 八六七

中橋勘之丞金子借用証文 請人理徳院加判 金剛
三昧院納所宛 文政一一年六月 一通 八六八

*中橋勘之丞金子借用引質証文(若山御用材方返納金差支二付) 証人阿闍梨加判 新田厚治・同慶治郎宛 天保一一年一一月 一通 二九五

中橋勘之丞金子預り証文 請人勝利寺加判 阿弥
陀寺良田坊遺弟中宛 天保一三年一一月 一通 八六九

中橋嘉平治金子預り証文 安福寺宛 嘉永二年閏
四月 一通 八七〇

中橋嘉平治差入仮証文(恩借金滞二付山藪之内讓渡) 重治郎宛 嘉永二年六月 一通 八七一

中橋嘉平治・同勘之丞金子借用証文(江戸出府用金) 坂上左京宛 安政三年八月二四日 一通 八七二

中橋勘之丞金子借用証文 丹下重左衛門宛 安政
三年九月 一通 八七三

中橋勘之丞金子借用証文 阿遮梨宛 安政六年七
月 一通 八七四

中橋勘之丞金子借用証文 証人醬油屋佐吉加判
湊屋友勝宛 万延元年一一月 一通 八七五

中橋勘之丞金子借用証文 請人同伊兵衛加判 湊
屋清右衛門宛 文久三年七月 一通 八七六

| | |
|---|--------|
| 中橋勘之丞金子預り仮証文 藥師院・理徳院宛 元治元年二月 | 一通 八七 |
| 中橋嘉兵衛金子預り証文 請人勝利寺加判 甚右衛門宛 辰八月二十九日 | 一通 八六 |
| 賢藏預け金受取覚 阿刀内佐兵衛宛 四月二十八日付 | 一通 八五 |
| ○ | |
| 長五郎銀子借用手形 証人中橋勘之丞加判 蔵元藤助宛 天保二年三月 | 一通 三五 |
| 慈尊院村新蔵金子借用手形 入郷村受人喜与八加判 入郷村磯兵衛宛 天保四年二月二十五日 | 一通 三九四 |
| 惣吉畑地本銀返し証文 一家惣代源吉・証人年寄源兵衛・庄屋伊助加判 惣十郎宛 天保七年二月 | 一通 二八三 |
| 三谷新三郎金子預り証文 証人中橋嘉平次加判松屋吉五郎宛 申三月七日付 | 一通 八四 |
| 關所一件 | |
| 在江戸弘道書狀下書〔中橋家逼塞大改革ニ付留主宅勘之丞心得方〕 九月二一日〔嘉永三年カ〕 | 二通 九八 |
| 年預坊覚御証文写〔中橋勘之丞領内差構關所ニ付同人跡式譲り下之儀〕 田村又太郎後見田村丹宮宛 嘉永三年一月 | 一通 六七 |
| 中橋家御免除屋鋪地附立書付并同見取絵図 39×29 | 一通 六七 |
| 中橋諸道具之内大切之品持帰候扣 立合田村丹宮・田中勘右衛門・保井謙之助・東光院連印 嘉永三年十一月一九日 横長美 | 一冊 六八三 |
| 寿福院書狀〔難渋之様子承候ニ付金式兩進上之旨〕阿刀氏〔在江戸〕宛 一二月二八日〔嘉永三年〕 | 一通 八四 |
| 和州北厚治方中橋元扶書狀 付、諸道具書物等始末之次第覚書 在江戸尊父弘道宛 正月一四日〔嘉永四年〕 | 二通 六四 |
| 阿刀祐甫弘道書狀案〔中橋家野山退身之子細報知〕東寺執行宛 二月七日〔嘉永四年カ〕 | 一通 八二 |
| 東寺執行永慶書狀〔中橋家高野山退身之旨報知ニ係ル返書、正月五日付年始狀同封〕写共 阿刀祐甫〔江戸通り油町河岸元浜町家主源蔵方〕宛 二月二六日〔嘉永四年〕 | 三通 一四六 |
| * 王子金輪寺書狀〔婦參願一条〕 阿刀祐甫宛 九月二三日・同二八日〔嘉永四年〕 | 二通 一三〇 |
| 中橋嘉平治事阿刀祐甫願上書扣〔婦參御免許之上別當職掌相統之儀〕 付先祖來由之事実御願旁略而奉書上覚 亥九月二五日〔嘉永四年〕 | 三綴 九〇三 |
| * 文化八年弘道家督る去ル弘化四年暮迄業鉢ニ付元仕入方用途金・借金利足出シ亦ハ損難等ニ付出金大略覚〔中橋弘道〕〔江戸在番所へ願書差出添付書類〕 横長半 飯二冊 七三〇 | |
| 阿刀祐甫書狀扣〔婦參願ニ付御執成之儀愁訴〕宝性院御門主御側衆中宛 一〇月七日〔嘉永四年〕 | 一通 九〇三 |
| 在江戸阿刀祐甫書狀下書〔倅勘之丞不行狀云々〕北厚次宛 正月二八日〔嘉永六年カ〕 | 一通 八八〇 |
| 在江戸阿刀祐甫書狀扣〔龜代加療專一之事・故郷歎願筋其他〕 元貞宛 三月八日〔嘉永七年〕 | 一通 八八三 |
| 阿刀祐甫弘道書狀下書〔中橋家婦參復故願周旋方依願一条〕 断簡共 東寺執行家宛 寅八月〔嘉永七年〕 | 四通 八七八 |

阿刀祐甫弘道書狀下書〔中橋家婦參願二付東寺執行家人登山中止宿方并御引廻之儀依頼〕理徳院宛
八月晦日（嘉永七年カ）

一通 九〇四

東寺執行永慶書狀〔中橋家再興歎願筋北厚治と示談之件〕阿刀祐甫（江戸通油町河岸源藏方）宛
一〇月五日（嘉永七年）

一通 一四六六

（東寺執行弘道父子婦參願草稿） 高野山学侶集議衆中宛 嘉永七年十一月

美 三冊 二〇六〇

慈尊院政所別当上綱家再興呈願書 東寺執行（永慶） 高野山学侶御集議衆中宛 嘉永七年

一綴 九〇五

（田村孫兵衛儀中橋方へ寄縁并家地ニ差置候訳柄書覚）〔慈尊院政所別当上綱家再興願書別附〕（東寺執行）

一通 九〇六

東寺執行書狀〔慈尊院政所別当家再興願添狀〕高野山学侶集議衆中宛 十一月（嘉永七年カ）

一通 九〇七

別株書〔田村孫兵衛儀中橋方へ寄縁并家地ニ差置候訳柄〕 執行永慶

美 一冊 一〇五七

当家故復之願旨、東寺執行方々学侶御集議中江御願申上呉候書面写し留控へ 附り同伴三付親類中々歎願書并二丹生家々願書等 阿刀 安政二年春

美 一冊 一〇五六

帰復御免

基復書〔中橋家再興二係ル東寺執行願上書・親類惣代森田源助・北厚治歎願書・慈尊院村役人惣代歎願書・丹生惣神主歎願書・年預表々帰住御免之申渡・請書等写〕 安政二年正月―同三年四月

横美半 一冊 九〇〇

年預坊書下ケ〔中橋家親子帰住赦免之申渡〕 慈尊院村中橋嘉平次・同苗勘之丞宛 安政三年四月

一通 九三三

安政三丙辰年四月六日故復蒙御免、同月八日由緒之旧地へ目出度初人復、右二付御年預表始末御書附之写し且差上書等留控へ 中橋弘道・元貞

美 一冊 九一二

付、撰州伝法村田村孫兵衛移住人別送り一件書類写（天保一一年二月―同二二年七月）

美 一冊 九三三

中橋・田村家屋鋪地改年預表江差上絵図扣 中橋嘉平治弘道・同苗勘之丞元貞・田村又左衛門勝善・後見同苗丹宮自勝 安政三年四月二日

32 × 46 一枚 九四一

中橋家附御免許屋鋪地絵図 下書共 中橋嘉平治弘道・同苗勘之丞元貞・田村又左衛門勝善・後見同苗丹宮自勝連印、年預坊裏印 安政三年四月二日

39 × 42 二枚 九四二

免許地塔之尾山絵図

25 × 35 一枚 九四三

免許地墓所并添敷數絵図

30 × 19 一枚 九四四

阿遮梨御請証冊案〔中橋氏故復之節〕 本人阿遮梨・証人作藏・親類惣代并勝利寺連印 政所別当中橋上綱元貞宛 安政三年

半 一冊 六五八

中橋勘之丞・同嘉平次請書一札（先年々之借用金証文不殘御戻被下二付） 田村又左衛門・田村丹宮宛 安政三年八月

一通 三九七

規矩録〔御年預坊・御寺家方御預り之祠堂銀支分請取方并中橋家拝借金返納筋〕 中橋氏 安政三年夏

半 一冊 四三八

安政三辰八月十六日田村々書出し〔年賦殘金其他諸口弁金高覚〕

一通 九二五

在江戸弘道書狀扣〔護摩堂筋百目北室院への事、弥勒講五十六女之事、九度山百目案内料為取替にても有之哉之事、嶋川原寄洲元來之事、弁天池の壇内へ用水取入之事、右五口之訳尋求二付返書〕 元貞宛 五月一六日（安政四年）

一通 八九五

家産整理

家財処分

金銀借財方扣 中橋家世話人 明和元年一月 横長半 一冊 八四九

中橋弥太郎山林譲り証文（札銀十貫目請取） 親 一通 二八〇

*類惣代田村又左衛門・請人角屋利平・世話人中橋伊兵衛加利 勝利寺宛 明治三年二月

（藏書・書画并什宝改目錄） 世話人小松茂十郎・角屋利兵衛 明治四年二月 横長半 一冊 六八八

道具払物勘定 世話人中 辰三月二八日 横長半 一冊 六六七

中橋家救済

相統講請定 講親中橋弥太郎・講請田村又左衛門・奥田茂一郎・世話人中橋伊兵衛・小松茂重郎・角屋利兵衛 慶応三年十一月 美 一冊 二二三

総宰廳救状（中橋弥太郎幼年にて内証方難洪歎訴二付二十才迄三人扶持宛行之儀） 中橋弥太郎宛 明治二年六月 一通 六八二

（慈尊院政所別当職家督相統之儀歎願書案）（中橋弥太郎力）（明治一九年頃力） 一通 六八一

親類・縁家

東寺執行家

東寺執行阿刀氏元祖書 一通 九三三

京都東寺執行弘法大師御由記（刷物）真言宗惣本山京東寺執行役者・京大坂伏見阿波日供講中・阿波国徳島海老屋町世話方天満屋嘉右衛門・同国津田浦同貞八 文化四年五月 半 一冊 九〇〇

弘法大師畧由來（刷物）東寺納経所執行信心講中施板 一枚 九七〇

天延二年二月勅誼拓本（羅生門変化退治） 東寺執行朱印（天保年中） 34×48 一枚 二二二

東寺執行永慶書狀（六月廿六日付中橋嘉平次・寺伽藍再建富興行之事尋合之返書） 該嘉平次書狀同封 中橋嘉平次（江戸三絃堀宗対馬守屋敷内村倉次郎方）宛 七月七日（嘉永元年） 二通 二四八

東寺執行永慶書狀（中橋家高野山退身之報知二係ル返書、正月五日付年始狀同封） 阿刀祐甫宛 二月二六日（嘉永四年） 写共 三通 二四六

東寺執行永慶書狀（同人縁談依頼其他）阿刀祐甫（江戸通油町河岸家主源藏方）宛 六月二五日（嘉永六年） 一通 二四五

（東寺執行家内・親類縁者書拔） 二通 二四三

東寺執行永慶年始狀 同家子女縁談依頼二付釣書他同封 阿刀祐甫（江戸通り油町河岸家主源藏方）宛 正月五日（嘉永七年） 三通 二四七

東寺執行家書狀（出水見舞） 大坂上博旁町肥後屋武助宛 一一月一三日（嘉永七年カ） 一通 四七九

東寺執行永慶書狀 阿刀祐甫（大坂上博旁町肥後屋武助方）宛 一一月一七日（嘉永七年カ） 一通 二四八

東寺執行永慶書狀（小堀勝太郎代官所百姓惣代藤右衛門内願筋一条） 阿刀祐甫（江戸牛込御門外若宮八幡下一色恒之進屋敷内）宛 四月三日・四月二二日（嘉永七年カ） 三通 二四〇

東寺執行永慶書狀〔村惣代藤右衛門内願筋一条〕
阿刀祐甫（江戸牛込御門外若宮八幡下一色恒之進屋敷内）宛 卯五月二六日（嘉永七年カ） 一通 一四九

東寺執行永慶書狀〔中橋家再興歎願筋北厚治と示談之件〕 阿刀祐甫（江戸通油町河岸源藏方）宛 一〇月五日（嘉永七年） 一通 一四六

東寺執行權律師永慶年始狀 阿刀勘之丞宛 正月五日 一通 九三

偵心院（東寺執行永慶母）書狀〔五月廿九日永慶死去之報知〕 阿刀祐甫（江戸牛込御門外若宮八幡下一色九左衛門内）宛 七月二二日（安政二年） 一通 一四七

東寺執行政所年始賀狀 阿刀祐甫宛 正月 一通 一四三

阿刀氏書狀 中橋氏宛 五月二六日付 折紙 一通 一四三

東寺執行家役人書狀上封紙 阿刀祐甫（江戸通油町河岸家主源藏方）宛 四月三日付 一封 一四三

松平勘解由書狀 東寺執行宛 正月一五日付 一通 九三

奥平勘七郎書狀 東寺修行少將・養信宛 七月二三日 一通 九三

○家職出入

〔享保以後公私故障之荒増・年預其外寺僧相手取非例仮職取払出入返答書并再証書写〕 東寺執行三十八世權律師永慶（嘉永五）安政元年 一綴 一四〇

東寺執行永慶口上書写〔年預宝菩提院差出候慶長十七年寺法御條目写御札之儀〕（京東町奉行所）岡部備後守宛 寅五月二二日（嘉永七年カ） 一通 一四三

東寺執行永慶書狀〔東寺年預其他相手取非例仮職取払出入一件・當時執行家親類縁者書取・甲寅四月六日京都出火絵図・同上京火災雜具損亡考記其他同封〕 阿刀祐甫（江戸通油町河岸家主源藏方）宛 嘉永七年五月二七日 六通 一四七
二枚

東寺執行永慶書狀〔寺僧出入・中橋婦參願一条〕 阿刀祐甫（江戸通油町河岸家主源藏方）宛 嘉永七年閏七月二四日 一通 一四七

東寺執行永慶書狀〔奉行所未御呼出無之、御返翰延引故歟云々〕 阿刀祐甫（江戸通油町河岸家主源藏方）宛 八月晦日（嘉永七年） 一通 一四二

東寺執行永慶書狀〔東寺相手方寺僧御朱印改二出府云々〕 阿刀祐甫（江戸通油町河岸家主源藏方）宛 九月一三日（嘉永七年） 一通 一四四

〔東寺執行永慶年預其外之者共相手取非例出入和濟被仰渡請書写〕 奉行所宛 安政元年二月一八日 一通 一四六

東寺執行家書狀〔野山へ歎願筋調印之件并執行家故障一件御裁許之廉々〕 阿刀祐甫（江戸牛込御門外若宮八幡前一色九左衛門屋敷内）宛 正月二八日（安政二年カ） 一通 一四八

寺務御門主思召達書之写〔寺僧・執行職出入和濟之勧告〕 大溪宮内他二名 安政二年二月 一通 一四六

東寺執行広丸歎願口署覚草案〔寺僧方相手取公訴二付輪王寺宮様御声掛被下度旨〕 嵯（大覺寺カ）宛（安政二年カ） 一通 一四五

高野山学侶集議中書狀写〔東寺執行江戸表出訴一件添願御聽許被下度旨〕 渡辺大監・湯浅帶刀（上野御殿枢機之役方之）宛 九月一〇日（安政二年カ） 一通 一四八

| | |
|--|---------|
| 東寺執行代神宮寺書狀 付、高野学侶集議中 上野御殿枢機之役方書狀写同封 阿刀祐甫 (江戸牛込御門外若宮八幡下一色悦之進屋敷内) 宛 十一月九日 (安政二年カ) | 二通 一四六九 |
| 東寺執行家と寺僧年預坊と出入故障之廉々大概 認上候覚(神宮寺持参) 卯十一月一八日 (安政二 年) | 二通 一四六三 |
| 東寺執行広磨・高見庄三郎・大坂講元阿波屋政 輔・伴友之進連署書狀(歎願筋二付神宮寺出府之 件) 阿刀祐甫宛 十一月二九日 (安政二年) | 一通 一四八八 |
| 東寺執行広丸・中路庄三郎・伴友之進書狀(江 戸表歎願筋輪門様へ御頼込云々) 神宮寺(江戸芝二 本榎備中屋幸助方) 宛 十二月二日 (安政二年カ) | 二通 一四八九 |
| (寺務所之御取暖二付執行方申分書留) | 一通 一四六七 |
| 東寺執行行政所竹内兵部書狀(永慶実子現丸儀心願 筋出府二付御世話依頼) 阿刀祐甫(江戸牛込御門 外若宮八幡前一色九左衛門方) 宛 二月四日付 | 一通 一四七〇 |
| 阿刀内匠頭現弘書狀(心願筋出府二付面謁申入) 阿刀祐甫宛 二月四日付 | 一通 一四七一 |
| 阿刀広丸書狀(神宮寺持出之書記類并印形之儀二 付宮津屋敷へ御尋合之依頼) 阿刀祐甫(在江戸) 宛 正月二八日付 | 一通 九三三 |
| ○ | |
| 東寺宛慶長十四年御判物・同十五年権現様寺領 御黒印写 | 一通 一四六四 |
| 近藤家(粉河) | |
| * 近藤よりの嫁入記事(弘道婚礼)(文化二年三 月一四日―一八日) | 一冊 六九八 |

| | |
|---|---------|
| 近藤元冲内願筋口上(家女きく懷妊之件) (文 政八年カ) | 一通 二三八 |
| 奉公人請狀(まつ) 粉川村奉公人家元彦兵衛・同 村請人長左衛門・近藤元冲宛 文政九年二月 | 一通 二四九 |
| 八塚常三郎金子請取覚(野山筋預ケ金当酉年分利 金) 近藤元冲宛 酉二月二六日(天保八年カ) | 一通 二六三四 |
| 新田家(和州御山村) | |
| 北厚次書狀(本家新田氏養子人撰之依頼) 中橋宛 十一月七日付 | 一通 九六六 |
| * 在江戸阿刀祐甫書狀下書(悴勘之丞不行狀云々) 北厚次(勘之丞寄隅先) 宛 正月二八日(嘉永六 年カ) | 一通 八八〇 |
| 宇和郡野原村猪八郎差入証文写(返銀不調二付 醬油店引渡之儀) 証人同郡御山村康太郎加印 御 山村幾太郎宛 安政二年正月 | 一通 七六三 |
| * 中橋勘之丞猶子滝藏(実ハ北慶次郎悴) 人別送り 一札扣(叔父篤助改松井庄兵衛方養子相統之為) 江 紀州伊都郡高野山学侶領内慈尊院村中橋勘之丞 江 戸芝式本榎町役人中宛 安政四年正月 | 一通 四〇三 |
| 北幾太郎書狀(天忠組一件報知) 他其氏書狀共 中橋氏宛 八月二〇日付 | 二通 三三八 |
| 田村家(↓中橋家關所一件・漏復) | |
| (田村孫兵衛一家慈尊院村江引越一件書類写) | 一通 二五七 |
| (1) 田村孫兵衛一家五人人別送り一札写 築山茂 左衛門代官所摂州西成郡伝法村庄屋亦兵衛・年寄 利八郎 紀州伊都郡慈尊院村中橋勘之丞宛 天保 一年一二月 | 一通 二五七 |

| | |
|--|-----------|
| (2) 田村孫兵衛一家二係ル寺請狀写 伝法村宝泉寺 紀州伊都郡慈尊院村阿弥陀寺宛 天保一一年一二月 | 半 一冊 九〇 |
| (3) 田村又太郎金千両借用一札 田村亦兵衛・清右衛門・庄兵衛宛 天保一二年八月 | 一通 二七九 |
| (4) 田村家分家一札写 (紀州表移住之田村家を永々本家と可心得旨) 田村又兵衛・いの代判清右衛門・三二郎代判庄兵衛他一名 (孫兵衛宛カ) | 半 一冊 九九 |
| (5) 中橋勘之丞別啓口述書下書 (田村孫兵衛一家寺請狀文言齟齬ニ付認直シ之儀申入) 伝法村役人中宛 天保一一年一二月 | 一通 一四三 |
| (施主田村孫兵衛筋永祠堂銀御証文一件写 付、中橋弘道永祠堂銀御証文写 天保八年一月・同一二年一月・同一二年一月・同一二年一月 半 一冊 一〇五) | 一通 九三 |
| 田村孫兵衛永祠堂銀預り手形写 年預坊・南院・寂靜院 中橋勘之丞聞次宛 天保一三年一二月 | 一通 九六 |
| 若山坂田助治郎書狀 (田村孫兵衛寺社筋出金滯願一条今暫延引之旨) 慈尊院中橋勘之丞宛 一〇月九日 (天保一四年) | 一通 一五三 |
| 田村又右衛門返狀 (和歌山表出願ニ付高野山添翰願・伝法村人別送云々) 中橋老宛 八月一八日付 | 一通 一三〇 |
| 田村亦兵衛預り銀算用覚 (要用書付挿入文書) (天保一四年カ) | 一通 一五五 |
| 田村孫兵衛寄進金預り覚 (御影堂宝藏御普請用金之内) 中橋嘉平治 成福院宛 弘化三年一二月 | 一通 九七 |
| 御影堂宝藏用金請取書 成福院内鈴木林造 三田屋作兵衛宛 未七月一二日 | 一通 二五七 |
| (天保十四卯年立用金之内野山之証札千両分受取覚) 田村又兵衛 中橋勘之丞宛 弘化四年七月 | 一通 一三〇 |
| 田村筋内訳 (孫兵衛金子野山御宝庫へ御預り之経緯) (弘道) | 半 一冊 九〇 |
| 庄次郎借地証文 (屋敷地) 写 田村又太郎宛 嘉永二年閏四月 | 一通 二七九 |
| 高野寺領慈尊院村田村民弥 (丹宮) 身分町奉行所御尋ニ付答書他写 高野学侶在番隨心院・清淨心院 子六月 (嘉永五年カ) | 半 一冊 九九 |
| 今宮植田元次郎書狀 (田村家一条之事) 主人 (弘道) 宛 三月二六日 (安政三年カ) | 一通 一四三 |
| 田村又兵衛金子借用一札 証人阿刀祐甫・請人理徳院加判 本誓院宛 安政三年三月 | 一通 九三 |
| 田村亦兵衛金子借用証文 証人阿刀祐甫加判 理徳院宛 安政三年四月 | 一通 九三 |
| (故田村孫兵衛御山表江預ケ金之内半分御下戻之儀願口上覚) 伝法又兵衛美兄吹田村西村卯右衛門 中橋嘉平治宛 安政三年六月 | 一通 九六 |
| (伝法村田村屋又兵衛中橋勘之丞・田村丹宮江掛ル人別引戻出入引合書届下書) 安政三年六月 | 一通 一五三 |
| 中橋嘉平治訳書覚 (高野年預表え預ケ金之内半分入手懸合之儀) 下書 田村亦兵衛宛 (安政三年) | 一通 九六 |
| 伝法三軒金借受方并返済方之写 | 横長半 一冊 九六 |
| 植田元次郎書狀 (伝法人別一条) 主人 (元貞カ) 宛 一一月一八日付 | 一通 九七 |
| 植田元次郎書狀 (伝法村田村家不相続出入一条) 在江戸主人 (弘道) 宛 正月一八日 (安政六年カ) | 一通 一四〇 |
| 植田屋弥介金子借用証文 田村孫兵衛宛 文久元年一二月 | 一通 九五 |

大坂⁶田村屋藤三郎書狀上封紙 慈尊院駅中橋
勘之丞宛 六月二七日発信

一封 一五二

○ (権右衛門と中橋家縁筋^二付尋答書) 権右衛門
親類伝次郎・定十郎 森下孫次郎(南名古曾村)宛
戊三月(天保九年)

一通 二五四五

吉 凶

婚 礼

近藤よりの嫁入記事(弘道婚礼)(文化一二二年三
月一四日—一八日)

半

一冊 六九八

棟上ヶ祝義

家普請石居柱立棟上祝義帳 中橋嘉兵衛元昭 寛
政四年七月

半

一冊 七〇一

葬儀・法要

(眞光院元昭葬儀焼香順) (文政七年一〇月)

一通 一五三七

元祖九百五十年忌追善経営献立記 中橋氏 文
政一〇年三月七日・八日

半

一冊 六九八

諸入用払方控帳(葬儀) 中橋台所方 未二月一
五日

横長半

一冊 八六三

湯浅藤左衛門書狀(眞光院三十五日追善供養不参
之件) 中橋氏宛 三月五日付

一通 七〇〇

宣明書狀 中橋上綱宛 五月三〇日付

一通 九七一

* (元昭先祖追福号勘記) 弘道カ(文政八年カ)

一通 八五〇

○ 法名書(尚甫居士)(弘道剃髮之節) 阿闍梨宥全
文久元年二月

一通 一五三三

家 計

菊一文字太刀修補代金書出し 瀬左衛門 作太
夫・勘之丞宛 八月八日付

一通 九八三

(御腰物大小研修理代勘定書) 白かね屋八郎右
衛門 木ノ下伊右衛門取次宛 午四月

一通 八六三

松原良左衛門書狀(御払之大小・衣類代金^二付問
合) 中橋勘之丞宛 八月二二日(安永七年カ)

一通 八七九

(諸方へ配札其他遺物覚)

横長半

飯一冊 九六五

芸 能

武 術

鞍馬流棒術免狀(目錄) 岡本市郎右衛門・長谷
部又兵衛・吉川幾左衛門・新居与左衛門・日記勘四
郎連署 作之丞宛 慶安四年二月

一卷 九五七

剣術秘伝書 河野意休・松枝軒兼田岸隨・松枝軒
兼田入山・兼田甚十郎・大谷采女連署 中橋嘉兵衛
宛 天明四年八月

一卷 九六八

円満流剣術秘伝書 金沢弥三郎 森田禅助宛 文
化四年五月

一通 九五九

独劔自伝流秘伝書 花房織部 中橋常三郎宛 文 一卷 九六〇

政三年 自得一芝一偏之法并ニ東軍流知新流劔術書 森 半 一冊 一二三六

謡 曲

太鼓頭付 羽ころも 半 一冊 四八一

太鼓頭付 おしほ・山うは・杜若 半 一冊 四八二

太鞍部(狂乱・手習ひ兒・さつきよ) 明治二年五 横半半 一冊 四八八

ト 占

宅 相

地理宅相吉凶判断書 江戸西御丸山下御門通り南 半 一冊 九五

鍋町老丁目御免御祈禱考所永運堂皆川藏人 天保四年五月 一冊 九五二

運 氣 考

宅相并家内卜考 松浦筑後撰 天保一二年閏正月 一通 九五二

家内四人運氣考書 (天保一二年) 横長半 一冊 九五三

八 卦 書

中橋勘之丞宛 卯正月 一通 九五四

そ の 他

田うへ吉日 元禄一一年 一通 九五五

藏書・写本

藏書目録

*藏書書画并什宝改目録 世話人小松茂十郎・角屋 利兵衛 明治四年二月 横長半 一冊 六八八

書物番附扣 一通 六八九

古本取調帳 中橋家 明治四年二月 横長半 一冊 六八六

(藏書目録并日並記目録) 横長半 一冊 六八五

和漢書

飛行三鈔記類集 弘化三年九月中橋元扶写 半 一冊 一四〇

金剛峯寺雜文 弘化三年九月中橋元扶写 半 一冊 一二三

孝經大義注疏(評註孝經) 美 板一冊 一二八

三賢一致書 大龍編 慶安二年刊 美 板一冊 六九三

大学或問 作州大村莊助識 半 一冊 一二〇

神君御遺狀御藏入百ヶ條写 半 一冊 一〇七二

神語太平録 (写本) 半 一冊 六九四

參河後風土記 宝曆四一五年英元抄写 半 一冊 一二五

百性教訓書 宝曆八年冬中橋英元写 美 一冊 一〇五一

故実心おぼえ(書札札) 半 一冊 九五〇

温知政要 享保一七年三月中橋文炳写 半 一冊 一二六

大成年代広記（刷物） 大坂心斎橋通唐物町南へ入河内屋太助板 49×36 一枚 六九二

田宮伝記 卷亭 卷拾 写本 半 五冊 六九六

*九族服忌一覧

（八卦書） 写本 41×32 一通 三五四

八卦八卷鈔 有智 写本 半 一冊 二二七

曲舞集 半 一冊 二二九

○

戸田采女正氏定書状〔赤穂城明渡之儀〕 浅野内匠家老中・番頭中・用人中・目付中・惣家中宛（刷物） 巳四月五日（元禄一四年） 一通 三五五

大馬下落書之写 一通 九七〇

讃岐国善通寺署記（刷物） 半 一冊 九八四

大師由来書下書〔さすり療治其他大師御利益之事〕 京都上河原中筋俵屋町三文字屋清兵衛 美 一冊 一〇五五

曆

晝夜 便要 萬宝二面鑒（両面刷） 書肆京御幸町通御池下

ル菱屋孫兵衛・江戸日本橋三丁目前川六左衛門・大坂心斎橋唐物町河内屋太助・同御堂前筋瓦町小刀屋 81×29 一枚 六九二

六兵衛（文化五年カ）

解註曆

*嘉永三庚戌略曆（嘉永二年弘道日記挿入） 江戸 半半 板一冊 九五六
曆開板所鱗形屋小兵衛 16×47 一枚 九二

○伊勢曆

嘉永二己酉曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九一

嘉永三庚戌曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九二

嘉永四辛亥曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九三

嘉永五壬子曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九四

嘉永六癸丑曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九五

嘉永七甲寅曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九六

嘉永八乙卯曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九七

安政三丙辰曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九八

安政四丁巳曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九九

安政五戊午曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九〇

安政六己未曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九一

安政七庚申曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九二

（万延二辛酉曆） 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九三

文久二壬戌曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九四

文久三癸亥曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九五

文久四甲子曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九六

元治二乙丑曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九七

慶応二丙寅曆 伊勢内宮佐藤伊織 折本 一冊 三五九八

| | | | | | | |
|----------------------------|-----------------------|----|-----------|---|----------|--------|
| 慶応三丁卯曆 | 伊勢内宮佐藤伊織 | 折本 | 一冊 三五九・一九 | (3) 京都御所部分図 (清涼殿) | 35 × 25 | 一枚 |
| 慶応四戊辰曆 | 伊勢内宮佐藤伊織 | 折本 | 一冊 三五九・二〇 | (4) 京都御所部分図 (御常御殿) | 29 × 35 | 一枚 |
| 慶応四戊辰曆 | 伊勢度会郡山田宮崎左近 | 折本 | 一冊 三五九・一二 | 蝦夷本嶋地図 (天保・弘化頃) | 81 × 116 | 一枚 三四〇 |
| 明治二己巳曆 | 伊勢内宮弘曆者佐藤伊織 | 折本 | 一冊 三五九・一三 | 地球万国山海輿地全図説 水戸赤水長玄珠述・臨谷田謙校閲 天保一五年一〇月再刻 | 96 × 36 | 一鋪 六九〇 |
| 明治二己巳曆 | 伊勢度会郡山田弘曆者宮崎左近 | 折本 | 一冊 三五九・一三 | 分間御江戸絵図 江戸馬喰町二丁目南角地本屋永寿堂西村屋与八元板・日本橋通三丁目吉文字屋治郎兵衛・芝神明前山田三四郎板 文政新鐫 | 67 × 45 | 一鋪 六九五 |
| 明治三庚午曆 | 伊勢度会郡山田石丸左近 | 折本 | 一冊 三五九・一四 | * 江戸案内図 (掌中図) 平安岡田春燈斎縮図并銅刻 | 9 × 15 | 一枚 三四三 |
| (明治三庚午曆) | 伊勢度会郡山田石丸左近 | 折本 | 一冊 三五九・一五 | (山城国久世郡槇嶋村絵図) | 28 × 41 | 一枚 三四二 |
| 午王宝印紙 | | | 五〇枚 一三六〇 | * 越後国三嶋郡新田絵図面 | 95 × 66 | 一鋪 四九七 |
| 熊野那智滝午王宝印紙 | | | | * 霞ヶ浦北浦新開目論見絵図 | 89 × 69 | 一鋪 四九六 |
| 詠草・漢詩 | | | | 書 状 (↓鉄座一件) | | |
| 贈答和歌 中橋文炳 天明二年 | | 半 | 一冊 一〇七 | 池内郁消息 | | 一通 一二三 |
| 奉納粉河寺和歌 明和五年一月中橋英元写 | | 半 | 一卷 一二三 | 井畑吉十郎書状 (当村銀八加印願之件) 中橋勘之丞宛 五月三日付 | | 一通 一二三 |
| 金剛三昧院短冊之写 | | 半 | 一冊 一二三 | 井畑次郎兵衛書状 (大坂本家より証文登シニ付受判依頼) 中橋氏宛 五月一日付 | | 一通 一二四 |
| (詠草・漢詩其他雜記) | | 半 | 仮一冊 一二六 | 坂上猪太郎書状 中橋勘之丞宛 一二月一日付 | | 一通 一二五 |
| 繪 図 | | | | 中橋元次郎書状 (兵庫より) 藤三郎 (大坂) 宛 正月二五日付 | | 一通 一二九 |
| 大坂陣之図 (内一鋪ハ「卯年天王寺表合戦諸備之図」) | 5581121 × × × 6899108 | | 三鋪 一三九 | | | |
| 京都御所絵図 禁裏御用京都大工森丈祐筆 安政五年三月 | 袋入 | | 九六八 | | | |
| (1) 京都御所全図 | 140 × 76 | | 一鋪 | | | |
| (2) 京都御所部分図 (紫宸殿) | 45 × 25 | | 一枚 | | | |

布彦書狀(清水) 中橋氏宛 一〇月朔日付 一通 一三七三

山田屋孫兵衛書狀 中橋嘉兵衛宛 一通 九六四

○諸家來狀上封紙

大坂肥後屋藤兵衛書狀上封紙 高野山中橋嘉平治宛 四月一三日發信 一封 一五二三

從今宮植田弥助書狀上封紙 紀州慈尊院村政所中橋勘之丞宛 六月四日發信 一封 一五三三

植田弥助書狀上封紙 慈尊院中橋弥太郎宛 一月五日發信 一封 一五四

森田禪助・堀内吉五郎連署書狀上封紙 中橋勘之丞宛 一封 一五六

高野山理德院書狀上封紙 慈尊院村中橋勘之丞宛 一封 一五〇

高野山修理奉行用狀上封紙 慈尊院村中橋勘之丞宛 三封 一五〇八

高野山随心院納所書狀上封紙 慈尊院村中橋嘉兵衛宛 一封 一五九

大坂中橋伊兵衛書狀上封紙 紀州慈尊院村中橋勘之丞宛 四月二三日發信 一封 一五四

高野山修禪院賢覺書狀上封紙 慈尊院中橋嘉兵衛宛 一封 一五四

古手や留七書狀上封紙 慈尊院中橋勘之丞宛 一封 一五〇八

高野野原丈右衛門書狀上封紙 一封 一五〇

大坂野原丈右衛門書狀上封紙 紀州慈尊院中橋勘之丞宛 二月二七日・六月二六日發信 二封 一五五

高野山御用 (天野社物神主家 山林仕出)

御巡見使案内

寛文七未卯月御国廻り之時諸色覚書扣 半 一冊 一四

(御巡見之節御案内手鑑) 慈尊院中橋氏 享保元年一月一七日書写 一冊 一五二

(御巡見之節御多分より書上之村高・公事屋軒数写) (享保元年カ) 一通 一四三

(享保元年丙申一二月御巡見之節村々にて御尋之趣覚書) 慈尊院中橋氏 一通 一四三

九族服忌一覽 (享保御巡見書類中ニ挿入シアル由) 一通 一三五

(慈尊院村書上扣) 慈尊院村庄屋八右衛門・弥太郎 年預代宛 延享三年三月一日 一通 二三八

御巡見様之時高野より御案内へ御渡シ被成候書付 延享三年三月一日請取 横美半 一冊 一五〇

(御巡見様御通案内勘録帳) 慈尊院中橋加兵衛・平田八右衛門 延享三年三月一六日・同一七日 横長美 飯一冊 二五四

御巡見御案内入用帳勘録上ル扣 慈尊院中橋勘之丞 年預代宛 宝曆一〇年二月二〇日 横半半 一冊 一五二

六月廿四日御觸狀之留書 慈尊院政所上綱中橋嘉兵衛元昭写 横半半 一冊 一五

天明八戊申六月御巡見御通り筋惣案内下見仕候時諸事覚付 慈尊院上綱中橋嘉兵衛 横半半 一冊 一五三

| | | | |
|--|-----|------|-----|
| 天明八戊申六月二七日より七月二日迄御巡見遠聞諸事心得 (杉原村) 山本角左衛門 | 横半半 | 一冊 | 一五五 |
| 御巡見ニ付寺領惣案内記 慈尊院上綱中橋嘉兵衛元昭 天明八年七月 | 横半半 | 二冊 | 一五五 |
| 惣案内入用之覚 中橋嘉兵衛 年預代宛 七月二日 (天明八年カ) | 横半半 | 一冊 | 一五七 |
| (巡見使廻国ニ付江戸御勘定奉行大庄屋共心得方差図書写) 郷六郡両熊野代官中宛 (天保九年) | 一綴 | 一七四 | |
| 御巡見衆御越ニ付心覚控 (丁之町組大庄屋手扣) 中橋勘之丞写 閏四月一八日 (天保九年) | 横半半 | 一冊 | 一六七 |
| 御巡見衆御通行道筋并橋本粉川御泊リニ付諸事相勤申候役配人馬等之寄帳 中橋勘之丞写 天保九年四月 | 半 | 一冊 | 一六八 |
| 御巡見衆御通行道筋并橋本粉川御泊之節諸事相勤候留書 天保九年四月 | 半 | 一冊 | 一六四 |
| (御巡見衆大和国新庄村五条村迄御通行之節諸事相勤候控書) 中橋勘之丞写 (天保九年) | 横長半 | 飯一冊 | 一六九 |
| (御巡見様道筋御休泊之覚) 閏四月一〇日一五月一八日迄 (天保九年) | 横長半 | 一冊 | 一七〇 |
| 御巡見様大和国御通行人馬手配り控書 五条村常楽屋久兵衛方ニテ善太郎 (天保九年) | 横長半 | 一冊 | 一七二 |
| 遠聞役田中勘右衛門書状 (御巡見様高野御登山日程ニ付報知) 大坂紙六方ニテ年預代宛 閏四月一三日 (天保九年) | 一通 | 一七六 | |
| 上組大庄屋申送書 (御巡見衆橋本御泊り日程ニ付) 写 四組大庄屋中宛 閏四月一五日 (天保九年) | 一通 | 一八〇 | |
| 金剛三昧院・竜光院連署書状 (田中勘右衛門病氣ニテ遠聞役用勤兼ニ付差紙) 中橋勘之丞宛 閏四月一八日 (天保九年) | 一通 | 一七一 | |
| 鈴木兵右衛門書状 (御巡見御用一件) 中橋勘之丞宛 閏月一五日・同一八日付 (天保九年) | 五通 | 一七六 | |
| 大和国新庄村五条村迄御先觸写 市岡内記内足立平馬・三宅三郎内嶋田忠左衛門・山本七郎左衛門内片岡三十郎 休泊所・本陣中宛 閏四月一九日付 (天保九年) | 横長半 | 一冊 | 一七三 |
| 金剛三昧院・竜光院連署返書状 中橋勘之丞宛 閏四月二〇日・同一二日・同一四日付 | 五通 | 一七二六 | |
| (御巡見筋ニ付諸事聞合書) 中橋氏 閏四月二二日 (天保九年) | 横長半 | 一冊 | 一六三 |
| 御巡見ニ付聞合扣 中橋勘之丞 (天保九年) | 半 | 一冊 | 一六五 |
| 三度目御巡見筋御届ケ書 中橋勘之丞 閏四月二六日夕迄 (天保九年) | 横長半 | 一冊 | 一七三 |
| 閏月廿七日朝織田大和殿領柳本御巡見筋三度目御届書上 (中橋勘之丞扣) (天保九年) | 美半 | 一冊 | 一六三 |
| 中橋勘之丞書状 (御巡見遠聞御用ニ付諸方聞合報知) 金剛三昧院・竜光院宛 閏四月二〇日一五月六日付 (天保九年) | 六通 | 一七七 | |
| 竜光院書状 (御巡見筋遠聞往來費用過金請取之件) 同院納所受取書共 中橋勘之丞宛 戊五月六日 (天保九年) | 二通 | 一七七八 | |
| 御巡見使御登山惣案内手扣 遠聞出役とも 中橋弘道 天保九年夏 | 横半半 | 一冊 | 一六八 |
| 從橋本麻生津迄案内記 是は惣案内出役懷中用年預御坊ニ認め御渡シ可有之記帳也 中橋弘道留置 天保九年 | 横美半 | 一冊 | 一五九 |

御巡見様御列書（御登山・御下向・山内）（天保九年） 三枚 一六〇

両替相場書上 掛屋三田屋作兵衛 戊五月二日 一通 二五八

天保九戌年夏御巡見筋御用出役人用書上扣 横長美 飯一冊 一六二

郷六郡両熊野御代官心得 （天保九年） 半 飯一冊 一六六

（寺領村々公事屋覚書） 一通 一四四

御通り筋村々高書 一通 一四二

天野ヨリ高野・不動坂御通り筋順路書 一通 一四一

（御巡見山内行列并御案内順路書） 一通 一四七

（御巡見之節学侶方御先弘・御案内名札） 二枚 一四八

御巡見之節御通行人馬賃書付之写 一通 一四九

案内記 一冊 一七五

国 絵 図

慈尊院村絵図（正保国絵図部分図） 写共 裏書 3027 X 3731 二枚 二七三

伊都郡慈尊院村四方豎横町間之覚 庄屋権右衛門・権之丞 国絵図御奉行修禪院宛 元禄一一年六月七日 一通 二七四

伊都郡慈尊院村図 下絵 国絵図奉行修禪院 元禄一一年六月 一枚 二七五

（御国絵図ニ付紀州・河州国境村々境目証文写） 四通 一紙 二七六

（1）紀伊国伊都郡山田村・吉原村役人々本多隠岐守内宛
（2）河州錦部郡加賀田村役人々平野次郎右衛門・山田村・吉原村役人々宛
（3）河州錦部郡滝畑村役人々平野次郎右衛門・山田村・吉原村・佐賀谷村・竹尾村役人々宛
（4）紀州伊都郡山田村・吉原村・九重村・佐賀谷村・竹尾村役人々北条左京内河州滝畑村役人宛 元禄一二年一〇月一二月

（御国絵図之儀紀州・和州兩國境目証文連印ニ付口上書写） 伊都郡大庄屋松本弥三郎・有田郡大庄屋前嶋喜太夫・伊都郡東家村大庄屋脇太兵衛 高野宛 元禄一三年一〇月 三通 一紙 二七七

大和国^カ紀伊国^ノ江之越道国境御吟味ニ付書上連印証文写 和州吉野郡大日川村外九カ村庄屋・年寄并紀伊国伊都郡高野領東富貴村外七カ村庄屋・肝煎・同国有田郡紀州領上湯川村庄屋・肝煎 （宛書なし） 元禄一三年一二月 一通 二七八

（御国絵図御改ニ付紀伊国^カ大和国^ノ江之越道国境書上ニ札写） 紀伊国伊都郡高野領東富貴村外七カ村・紀伊国伊都郡紀州領上湯川村庄屋肝煎・大和国吉野郡大日川村外九カ村庄屋年寄連名 元禄一三年一二月 一通 一八二

相談覚（国絵図御用ニ付和州方・紀州方認様之件） 辰一二月一八日（元禄一三年カ） 一通 一八三

（慈尊院村境絵図） 24 X 33 一枚 二七九

（伊都上那賀絵図） 五組村名付 下絵共 36 X 49 二枚 二八〇

風 土 記

慈尊院・天野明神略記（紀州和歌山御役所^カ伊都郡中組大庄屋森田久右衛門之川南寺領由緒名所旧跡調子書差出し可申旨ニ付頼来候御書付差出ス下書） 美 二冊 一八三

| | | | |
|---|---------|-------|------|
| 当国風土記全編 <small>二付</small> 高野山從御改書上ヶ <small>（慈尊院諸伽藍之記）</small> 慈尊院政所別当上綱中橋元昭撰 正智院・一乘院宛 文化七年五月 | 半 | 一冊 | 一八四 |
| 天野宮由來書并物神主景圖書 扣 中橋嘉兵衛 寂靜院宛 文化一〇年九月一二日 | 半 | 一冊 | 一八一 |
| 天野宮由緒書并物神主系圖 草稿 | 美 | 一冊 | 一八一 |
| （風土記御調 <small>二付</small> 中橋支配之地規格綠高等相改書出 <small>し控</small> ）政所慈尊院別当上綱中橋勘之丞弘道風土記御掛り慈光院・心南院・聖善院・高善院宛 天保五年八月 | 美大 | 一冊 | 一〇三 |
| 慈光院返書狀 <small>（風土記筋二付）</small> 中橋勘之丞宛 八月晦日 <small>（天保五年カ）</small> | | 一通 | 一八六 |
| 風土記撰 <small>二付</small> 御年預坊へ差出し候慈尊院両壇之書記控 中橋勘之丞弘道 風土記掛慈光院・聖善院・心南院・高善院宛 天保五年九月六日 | 美 | 一冊 | 一八五 |
| 紀国風土記撰上 <small>（慈尊院譜）</small> 高野山学侶方ヨリ 紀州国君へ書上 天保七一九年 | 美 | 一冊 | 一〇五八 |
| 天徳院覺淨返書狀 <small>（大門・中門建立之年号問合之件）</small> 中橋勘之丞宛 八月二日付 | | 一通 | 一八七 |
| 慈尊院村中橋氏江尋ル株々 | 半 | 一冊 | 一〇八 |
| 名所図絵 | | | |
| 丹生宮御鎮坐由緒並社地伽藍名所記 天野絵図 添 <small>（天保七年カ）</small> | 美 80×63 | 一冊 一鋪 | 一八九 |
| 觸下寺院巡察 | | | |
| 觸下寺院巡察御用一件書類 <small>（袋書、河州和州当国觸下順在記）</small> 真言宗古義派觸頭高野山学侶方御年預坊役人中橋勘之丞 文政一二年・天保二年 | | | 二四二 |

| | | |
|---|---------|----|
| (1) 紀州伊都郡賀名草海士有田日高牟婁七郡之内高野山学侶方觸下真言古義寺院記 中橋勘之丞 文政一二年五月 | 横長半 | 一冊 |
| (2) 和州寺院方相廻り候砌応対有之候所々并 <small>二</small> 南都役手内窺外 <small>二</small> 先々觸書受取之事等控 中橋勘之丞 文政一三年六月八日ヨリ二三日迄 | 半 | 一冊 |
| (3) 大和国古義寺院記 | 横長半 飯一冊 | |
| (4) 庚寅夏御用順在記 <small>（大和）</small> 名佳橋主 文政一三年六月 | 横半半 | 一冊 |
| (5) 河州御用順寺帳 中橋勘之丞 文政一三年八月二五日一九月二日 | 横半半 | 一冊 |
| (6) 河州一國古義真言高野山学侶方御觸下寺院之覺 | 横長美大 | 一冊 |
| (7) 紀伊国伊都郡真言古義寺院記 | 横長半 | 一冊 |
| (8) 紀伊国伊都郡真言古義寺院住持調 | 横長半 | 一冊 |
| (9) 官省符中組之内真言古義寺院住持調 | 横長美 | 一綴 |
| (10) 河内国巡国寺院書拔 | 横長半 | 一綴 |
| (11) 和州山辺郡内山永久寺御觸巡達方 <small>二付</small> 中橋氏掛合之趣書留 | 横半半 | 一冊 |
| (12) 小田村極樂寺外五力村寺住職筋取調之儀守安氏報知 中橋宛 | | 一通 |
| (13) 公儀御觸書無遲滞順達可仕儀大和国寺々一札案紙 高野山学侶方年預坊役人宛 文政一三年六月 | | 一通 |

(14)高野山学侶集議中廻章写〔近年觸下寺院之儀觸巡達之仕方不屈有之三付〕河州貞言古儀一派中宛 天保二年八月

(15)六月八日と廿二日迄南都出張入用勘録 中橋勘之丞

紀州觸下寺院留扣へ 中橋氏

池田村円竜院へ遣し候書付扣〔觸頭と觸下寺院之勤賤等二相拘り候儀無之旨〕 中橋勘之丞 池田村円竜寺村役人中宛 辰二月六日〔天保三年カ〕

〔公儀御觸書廻達之節觸下寺院二無之旨〕下紙之儀心得違之段申入書下書 中橋 円竜院無住役人代五右衛門宛 二月六日付

御内使御迎

御内使筋留記 中橋上綱 天保二二年四月

御内使先例控記 中橋弥太郎 慶応三年正月

慶応三卯五月十四日御内使留記 中橋弥太郎代〔弥太郎幼少二付角屋利兵衛代筆〕 慶応三年五月九日

御通行

酒井雅楽頭様御使者御通被成二付人工入用之寛慈尊院村勘之丞・甚之丞 延宝五年九月二九日

〔諸家様御通行・普請等之節被下物・村夫等之留書〕 断簡 〔天明末―寛政初年〕

中橋嘉兵衛口上〔大殿様御使者御下向之途次当村御着之節応接之模様御届下書〕 無量寿院・一乗院・淨菩提院役僧宛 一〇月一九日付

〔染王院様御宿二付三軒屋鷹のや源右衛門申口伺書〕

染王院口換〔面談申入〕 豆腐屋二て中橋勘之丞宛 五月一日付

町石再興

町石再興覚 明和八年三月―安永二年一月

御石塔運送

紀伊大殿様方御内証御石塔慈尊院浜と高野山南院様迄登セ方積覚 文化三年五月

石塔壱組送り状 岩出屋惣五郎〔和歌山問屋〕慈尊院村中橋嘉兵衛宛 寅五月二四日〔文化三年カ〕

悉地院・高室院連署書状〔勸学会中紀伊家御宝塔建立地堅メ普請停止之旨〕 中橋勘之丞宛 八月七日付

中組大庄屋三十郎代積助札書状〔勸学会中紀伊家御宝塔地堅メ普請之儀掛合依頼二付〕 勘之丞宛 八月一九日付

紀伊大殿様方御内証様御石塔繕二付慈尊院と南院様迄登セ方積覚 文化七年三月二八日

長州大主大膳大夫様御石塔差図弁才積并和歌山と高瀬船賃山登セ方諸入用方一色積書 石工大坂西横堀かい屋町角岡田屋五兵衛 文化七年正月二七日

仙台様御石塔登方帳 中橋氏 文政三年二月

仙台様御石塔若山と墓所迄運送諸雜用帳 中橋勘之丞 文政三年四月

| | | | | | |
|---|-----------------|-----------------------|------|----|-----|
| 仙台様御石塔運送帳 | 中橋勘之丞 | 文政一一年四月 | 横長美大 | 一冊 | 三六 |
| (仙台様御石塔運送方引請一件留) | | 文政一二年十一月—同一年四月 | 横長半 | 一冊 | 三八一 |
| 大坂石工樋口屋利助金子請取書(仙台様御石塔筋) 樋口屋利助代平兵衛 | 中橋氏宛 | 四月二二日(文政一三年カ) | | 一通 | 三八二 |
| 山揚實定荷之格合(仙台様御石塔運送雜用帳) 断簡 | | | 横長美大 | 二丁 | 三九 |
| 燈籠石送り状 紀府寄合橋西詰北岡崎屋次兵衛 | 高野山一乗院行、中橋勘之丞上ケ | 子四月二二日(文政一一年) | | 二通 | 二六四 |
| 石材送り状(仙台様御石塔筋) 紀州和歌山岡屋文兵衛 | 中橋勘之丞宛 | 子四月二二日—同五月二七日(文政一一年カ) | | 八通 | 二六三 |
| 石燈籠取替銀請取覚 岡崎屋次兵衛代嘉兵衛 | 中橋勘之丞宛 | 子五月三日(文政一一年) | | 一通 | 二六五 |
| 御石塔細工并船賃書出し 東家石工伝二郎 | 中橋氏宛 | 戊子一月一四日 | | 一通 | 三七 |
| 青巖寺・勸学院釣鐘 | | | | | |
| 青巖寺釣鐘鑄直シ御用記 | 中橋上綱元昭 | (文化二年閏八月—同一年一月) | 半 | 一冊 | 三八 |
| 青巖寺釣鐘筋算用帳 | | 文化二年九月 | 横長美大 | 一冊 | 三〇九 |
| 勸学院釣鐘登セ方浜賃等二付御修理下奉行とかけ合有之御年預表へ書上之下書 | 中橋嘉兵衛 | 年預代(二乗院)宛 八月五日付 | 半 | 一冊 | 三〇 |
| 勸学院釣鐘始末書上ケ口上覚下書(学侶方御修理下奉行得仁房被差出候書附不得其意儀二付)(中橋嘉兵衛) | | | | | |
| 学侶方御修理方役所達書写(勸学院釣鐘山登シ之儀九度山村要蔵え申付旨) | 中橋氏宛 | | | 一通 | 三三 |
| 奥屋又兵衛書附(御修理方釣鐘送り状之件) | 中橋勘之丞宛 | 八月一六日付 | | 一通 | 三三 |
| 中橋嘉兵衛返書状扣(御修理方奉行得仁房書付返上之手続不念之儀御詫) | 年預代宛 | 十一月二日付 | | 一通 | 三四 |
| 西塔再建 | | | | | |
| 西塔再建積書(家根惣銅瓦仕立) | 壹 | | 半 | 一冊 | 二六〇 |
| 西塔御用木川船賃并登セ方小入用諸色算用帳 | | 文化一四年七月 | 半 | 一冊 | 二六一 |
| 西塔御用木川船賃登セ方諸色算用目録上帳之控 | | 文化一四年七月八日 | 半 | 一冊 | 二六五 |
| 高野山西御宝塔御かな物積り帳 御鑄物司蜂屋薩摩掾源正勝 | 正善院宛 | 文化一四年九月 | 美 | 一冊 | 二六九 |
| (多宝塔建立積り直段付覚) 大坂南堀江橋通り | | 六丁目丸屋治右衛門・同喜知郎 丑九月 | 半 | 一冊 | 三〇 |
| 高野山西塔石形御用書附覚帳 | 和泉屋弥八 | 文化一五年正月 | 半 | 一冊 | 二六七 |
| 西塔御用留記 | 中橋元昭 | (文化一五年正月一四日—文政三年六月五日) | 半 | 一冊 | 二六六 |
| 金物諸入用・石方諸入用扣 | | | 半 | 一冊 | 二六八 |
| 西塔屋祢坪数并銅瓦積り帳控 | (江戸在番所宛) | 文政元年一〇月 | 美 | 一冊 | 二六九 |

西塔屋柵坪数 銅瓦積り帳下書 文政元寅一〇月
江戸在番所申来ルニ付絵図十分一二通拵、此帳面
差添送ル者也

職人江戸銅渡シ方并ニ揚瓦くず銅日々算用帳
西塔方役人 文政二年三月

銅瓦延板ニ付仕法立 中橋元昭 文政二年五月

石工和泉屋長八注文(西塔御用石材細工見積書)
御奉行衆中宛 文政二年八月

高野山西塔再建御用積書(石材) 大坂西横堀権
右衛門町伊豫屋市兵衛 西塔御普請方役人中宛 文
政三年五月

石形割合直段書 文政四年四月

卯七月銅瓦筋払方取出し

(瓦寸法注文書)

銅瓦ニ付惣入用覚

中橋嘉兵衛書狀扣(銅瓦筋ニ付京都平野屋庄兵衛・
京都出張金物屋勘四郎・大坂近江屋小助・鍵屋林兵
衛・志方屋六兵衛宛) 三月二二日付

西塔再建用槻木材木注文 西塔再建掛り役人

西塔再建用槻木材木増注文 西塔再建掛り役人

足場用諸入用・釘鍔諸入用方扣

(西塔御用石形舟賃并諸入用算用帳)

金 堂

高野山壇上金堂鐘樓堂用石注文一件 文政二二
年

(1)親王院書狀(若山石屋入札取計之儀依頼) 中
橋勘之丞宛 三月朔日(文政二二年)

(2)壇上鐘樓石垣仕様書(入札雛形) 文政二二年

(3)壇上鐘樓石垣仕様見積書 和泉屋伊兵衛 中橋
勘之丞宛 丑三月(文政二二年)

(4)親王院役人書狀(築石入札開札之旨并石材川舟
賃之儀尋合) 中橋勘之丞宛 三月二二日付

金堂積書 附指図共 中橋写

金堂用御影石積り書

(金堂御入用物見積書)

高野山金堂槻材木荒木寸間帳 今木屋安兵衛・
中村屋七兵衛 中橋勘之丞宛 弘化二年四月五日

紀州運賃引合七書扣へ 中橋勘之丞 弘化二年四
月

金堂再建材木小家人札仕様帳 弘化五年二月

大師影堂御普請并金堂再営御用材積登ニ付御極印
拝借願書扣 高野山学侶方目代中橋勘之丞 巳三
月

(普請用材渡シ手形) 金堂役所 中橋嘉兵衛宛
三月二四日付

(下し粉荷物仕舞之分員数之覚) 金堂役所 中
橋嘉兵衛宛 三月一九日付

江戸在番屋敷

松皮江戸廻船運賃請取覚 菱垣廻船問屋富田屋三
郎左衛門 中橋勘之丞宛 文政八年七月二二日

| | | | |
|--|----------|-----|------|
| (江戸屋敷中門并塀共用材見積書) 下書 | 半 | 飯一冊 | 二〇九八 |
| 御作事方役人岡善藏内願書(江戸在番屋敷普請出来二付諸入用被下方之儀) 午一二月 | | 一通 | 三〇三 |
| 北ノ方在番所図面(江戸式本模町) | 100 × 55 | 一鋪 | 三〇三 |
| 在番所家祢之図 | | 一枚 | 三〇四 |
| 作事仕様絵図面(江戸在番所普請指図カ) | 53 × 73 | 一鋪 | 三〇五 |
| (江戸屋敷御普請用材積下し雑用帳) | 横長美 | 一冊 | 五六三 |
| ○ | | | |
| 御瓦師大和屋庄右衛門一札(高野山御領分御用瓦御出入用達被仰付ニ付) 中橋勘之丞宛 天保一一年正月 | | 一通 | 二七五 |
| 大塔再建 | | | |
| 從天保十四卯十一月同至辰年大塔再建願上一件扣 中橋氏 | 半 | 一冊 | 二九〇 |
| 天保十五甲辰年初夏ヨリ壇上伽藍再建御用筋ニ付若府出勤一件留記 弘道 | 横長美 | 一冊 | 二三 |
| 高野山大塔木寄帳 天保一五年三月 | 横長美 | 一冊 | 二九一 |
| (伽藍焼失ニ付大坂表勧化手統一件留) (弘化元年カ) | 半 | 一冊 | 二九七 |
| (大塔再建勧化仕法書) | 横長美 | 飯一冊 | 二九八 |
| 金剛峯寺壇上諸堂建立事 | 半 | 一冊 | 二五九 |
| 御用留 中橋 弘化二年 | 半 | 一冊 | 三〇〇 |
| 盆後御用留 中橋弘道 弘化二年 | 半 | 一冊 | 三三 |

| | | | |
|--|---|-----|-----|
| 寛永年中大塔再建ニ付御女儀方諸侯方公儀江金銀御納之古書写 中橋弘道 (弘化二年春) | 半 | 一冊 | 二六九 |
| 寺領問屋・船頭共口上書覚(高野山伽藍再建御用諸品運賃書上) 宇治屋猪兵衛・松島屋清八・岡屋文兵衛・岡崎屋治兵衛 中橋勘之丞宛 巳四月一八日(弘化二年カ) | | 一通 | 二九三 |
| 高野山学侶方目代中橋勘之丞口上書下書(伽藍再建中町奉行所直願筋御聞濟被下度) 町奉行所宛 巳八月(弘化二年カ) | | 一通 | 二九三 |
| 寺領問屋差入一札 岡崎屋治兵衛・岡屋文兵衛 野山御再建御掛役人中宛 弘化二年八月 | | 一通 | 二九四 |
| 大塔御再営御願筋ニ付御内御用蒙リ江戸出府諸入用向前後勘録書上扣 中橋嘉平治 (弘化三年春々七月迄) | 半 | 一冊 | 二九五 |
| 江戸状別啓之写(高野再建出願筋懸合一条) | | 一通 | 三〇〇 |
| 野山惣代南院内願書附写(祖師影堂再建筋) | | 一綴 | 三〇一 |
| 願書受取書(嘉平治衛帰国延期願之件) 在番所両役僧 三月二日(嘉永三年) | | 一通 | 八三 |
| ○ | | | |
| (大伽藍再建御手伝発起御用場別条目) 田中貢 安政六年一〇月 | 半 | 飯一冊 | 二九九 |
| (御室御所家来田中貢発起御当山伽藍再建之儀再願ニ付内密事情申上書写) 何某 申九月 | 半 | 一冊 | 二六六 |
| ○ | | | |
| 年預代書状(伽藍火附人鶴吉・林蔵吟味一件) 中橋勘之丞宛 八月一五日(弘化二年カ) | | 飯一冊 | 三〇〇 |

名迫一件 (↓山林仕出)

吉野郡小川木津川村孫兵衛杉松立木壳渡証文
井同人右山預り一札写 証人家惣代・同村組頭・
庄屋・世話人加判 紀州伊都郡富貴村名迫次郎右衛
門・守安三重郎宛 寛政一〇年一〇月

一紙二通 一九三

吉野郡木津川村全兵衛杉松山立木壳渡証文写
同村証人一家・組頭・年寄・庄屋・口入兩人加判
名迫次郎右衛門宛 寛政一〇年一二月

一通 一九四

木津川村全兵衛杉松山一代限り壳渡証文写・同
村一家・証人・年寄・庄屋加判 名迫次郎右衛門宛
文化一四年一二月

一通 一九五

戌之年天野川・加名生・宗川・川上・富貴村領
五郷山林木直段積帳 持主名迫次郎右衛門・山守
平五郎・政次郎・恒右衛門

半 一冊 一九六

名迫方一件書上口上書 (在坂金談之件) 中橋勘
之丞 正智院宛 正月晦日 (文政一〇年カ)

一通 一九九

中橋勘之丞金子借用証文 (名迫次郎右衛門借賤之
内大坂大和屋金兵衛え返済金急要用ニ付) 消印済
北室院納所宛 文政一〇年一二月三三

一通 二〇二

兩度上京諸人用算用帳扣へ

横長半 一冊 二〇五

若山山田三齊并岡崎吉左衛門返答書写 (名迫主
計為藥荷物滯出入一件) 亥三月・同四月 (文政一
〇年カ)

半 一冊 二〇三

(上田權之助預り金銀并壳渡田地山林証文留)
(文政一〇年七月一〇月)

假一冊 一九七

(当亥正月の七月八日迄名迫一件諸入用勘録書
扣) (文政一一年カ)

半 一冊 一九六

和州五条代官と高野山學侶年預代掛合書留 (寺
領富貴村名迫次郎右衛門所持林御札ニ付) 文政一
二年五月

半 假一冊 二〇一

吉野郡木津川村地内山林地床差戻一札写 紀州
富貴村名迫後見藤七・同村親類証人・蔵・名迫いづ
吉野郡木津川村全兵衛・孫兵衛宛 天保九年二月

一通 一九八

慈尊院村中橋勘之丞學侶方山林伐木仕出之儀出
願ニ付進達之写

一通 二〇五

名迫次郎右衛門方借銀高帳
借用方覚 名迫筋

横長半 一冊 二〇四

北室院返書狀 (名迫一件) 中橋勘之丞宛 九月
二六日付

半 一冊 二〇三

御救合米御手当取扱

碩学衆金子拝借手形 (当年領内作毛不熟ニ付撫育
米為手当金六百五拾兩) 一乘院・南院・蓮花三昧
院・成福院・釈迦文院・遍明院・多聞院 金銀方御
掛中宛 天保七年一〇月

一通 二〇三

御救米諸算用帳 北厚次 中橋店宛 天保八年五
月

横長半 一冊 二〇四

御年預表の御領内山手村々窮民御救金之内私宅
ニおゐて取扱之米銀出納算用書上 式冊之内
年預代受取書共 中橋勘之丞弘道 天保七年一二月
八日の同八年五月二〇日

横長美大 一冊 二〇五

御年預表の領内山手村々窮民御救合之内中橋宅
後段之取扱分并三出店三田屋方前後取扱等之極
清算仕立勘録 附屬書付共 中橋勘之丞弘道 天
保八年一二月

横長美大 一冊 二〇六

中橋勘之丞諸村御救米拝借証文 請人普門院加
判 金銀御掛り遍明院・成福院宛 天保八年一二月

一通 二〇六

| | | | |
|---|------|-----|-----|
| 富貴・筒香・御山村ニ而救合米払筋并慈尊院江 積ミ取米高出入勘定帳 | 横長美大 | 一冊 | 二四七 |
| 金子目録〔領内窮民御救方御用ニ付天保七・八年相 勤候謝儀として御年預表を弘道へ被下〕 | | 一通 | 二四八 |
| 被下御書付并御目録〔此度御用便骨折失墜も有之 ニ付〕 中橋勘之丞宛 一二月一四日付 | | 二通 | 三二天 |
| ○ | | | |
| 領内非常手充二百十ヶ日之中撫育大略積リ | 横長半 | 一冊 | 二四九 |
| 〔飢饉救民困米仕法書〕 中橋 | 半 | 一冊 | 二五〇 |
| 〔高野山兵糧米調登ニ付橋本詰代官所引合一条年 預表江御届筋留書 九月一五日付〕 | | 一通 | 二五一 |
| 他領出入掛合 | | | |
| 〔寺領洪田村 村出入扱日々手扣〕 (英元) 宝暦六 年三月一同四月 横半半 | | 飯一冊 | 二四〇 |
| 中橋勘之丞書状并口上覚扣〔寺領洪田村・国領嶋 村出入扱之経過報知〕 正智院宛 卯月八日〔宝暦 六年〕 | 半 | 一冊 | 二四六 |
| 寺領洪田村 出入扱候覚書 中橋勘之丞英元 宝暦 六年三月一同六月 半 | | 一冊 | 二四一 |
| 他領掛ヶ合応対留記 中橋元昭 文化八―同一〇 年 半 | | 一冊 | 二四四 |
| 絵図入封物一通受取書〔修理領井口村・国領神田 村論所見分絵図〕 仁井田〔和歌山勘定吟味役〕 一一月一四日〔天保一〇年〕 | | 一通 | 二四六 |
| 貴志河筋井口・神戸論所和歌山駈ヶ合一件留 中橋勘之丞 天保一一年春 半 | | 一冊 | 三七四 |
| 修禪院書状 中橋勘之丞宛 一二月八日付 | | 一通 | 三三一 |
| 差 紙 | | | |
| 年預代要用状〔入江村岡方え之差紙届之儀〕 鈴声 院 中橋嘉兵衛宛 六月二日付 | | 一通 | 二六二 |
| 年預代差紙 中橋勘之丞宛 正月二五日付 | | 一通 | 二六四 |
| 被下目録 | | | |
| 被下金目録 | | 一通 | 三五 |
| その他 | | | |
| 飛脚便引請覚〔高野山年預代行御用状・手形入老 通〕 大坂南久太郎町紙屋六兵衛 中橋勘之丞宛 戌二月朔日〔天保九年〕 | | 一通 | 二五七 |
| 〔御霊供米代入札〕 嶋屋久米七 天徳院宛 寅七月 | | 一通 | 四五三 |
| 壹朱銀改御用被仰付三口上書 平野屋彦兵衛 年預代宛 寅一〇月 | | 一通 | 二三七 |
| 四月九日より六月九日迄惣人夫算用記 正智院 納所宛 半 | | 一冊 | 二八三 |
| 在番所宝性院御門主返書状〔田村庄兵衛下シ為替 金不着ニ付十日切之旨〕 中橋氏宛 三日〔嘉永 三年三月〕 | | 一通 | 八八二 |
| 馬場村天竜院筋油屋善右衛門へ聞書留 中橋弘 道〔一乗院宛カ〕 | | 一通 | 二五五 |
| からかさ借用頼状 五功寂靜院納所 中橋勘之丞 宛 | | 一通 | 二五〇 |

天野社惣神主家

由緒

*天野宮由来書并惣神主景図書(扣) 中橋嘉兵衛
寂靜院宛 文化一〇年九月一二日

*天野宮由緒書并惣神主系図 草稿

*丹生宮御鎮坐由緒並社地伽藍名所記 天野絵図
添

惣神主家後見

惣神主富丸湯浅垣内氏江御預之始末并掛りの者
吟味筋之留め記・依御頼留主中取暖方日記 卷
慈尊院政所上綱中橋嘉兵衛 文化二年八月三日始ル

惣神主筋記録 其二(寅正月二五日一麻呂婦宅之
願筋下書・伊右衛門江当職被仰付候砌元昭る年預表
へ差上候下書) 中橋嘉兵衛 文化二年閏八月二三日始ル

惣神主諸道具目録帳 留主居直之進・常八・増弥
改・帳付地藏寺 文化二年閏八月二四日

御神事社家へ下行覚 惣神主役人 文化二年一〇月

天野御社領算用帳 文化二年

一麻呂并菊屋栄助吟味一札記 (文化二年)

丹生一麻呂儀慈尊院へ預ケ之旨湯浅垣内七郎右
衛門願出一件留記 文化三年正月

丹生家治丸家督之砌被仰渡ケ条・諸書物之目録
并家事取メリ方申渡シ記 慈尊院上綱中橋元昭
文化五年一〇月一七日始

差引棚おろし中勘帳 他一冊 文化六年一二月

中橋嘉兵衛願書下書(惣神主丹生家外護御免之儀)
年預代宛 丑一二月二五日(文化六年)

文化八未正月十七日年預代る三ヶ条古記録相改
書付差出し候様被仰付候二付同廿五日右御返答
書并三出訴之品書上ケ扣 中橋嘉兵衛

古沢大明神遷宮修行之爰ニ付丹生相見と神宮寺
論訴始末之覚記 惣神主家名跡預り中橋嘉兵衛
文化九年

嘉治磨惣神主職相統之留 中橋嘉兵衛元昭 文化
一〇年一月四日一九月七日

中橋嘉兵衛口上書(天野惣神主拝借金之儀) 年預
代宛 文化一〇年一二月五日

字八王子浦山惣神主所持山ニ而同村勝右衛門大
木之松木伐倒候ニ付御年預表江出訴仕り御吟味始
末之留記 丹生嘉治磨代中橋嘉兵衛記置 文化一
一年一〇月

(惣神主持山之大本天野村勝右衛門伐倒候一件
御吟味願書下書) 惣神主名跡預り中橋嘉兵衛
年預代宛 文化一一年一〇月二五日

惣神主当暮入用金拝借証文 惣神主名跡預り中橋
嘉兵衛 年預代宛 文化一二年一二月

惣神主家用事筋留記 中橋元昭 文化一二年

天野惣神主方要用金拝借証文 惣神主代中橋嘉
兵衛 金銀御掛り両院宛 文化一二年一二月

(社家仕置ニ付申渡御請一札) 祝子方惣代丹生相見・社家惣代森山甚兵衛・高松新右衛門・宮仕惣代上之坊養見・小坂坊仙觀 惣神主宛 文化一三年四月 一通 三三

高野山壇上御社下遷宮ニ付年預坊江出願筋并後室貞心院旧里江歸ルニ付留主式取極リ方書上控 中橋嘉兵衛記置 文政二年七月二五日 半 一冊 三三

丹生嘉治磨婚禮儀式万事留 中橋嘉兵衛元昭 文政四年四月二一日 美 一冊 三四

当季算用書上 惣神主役人 文政四年二月 半 一冊 三六

已年当季算用帳 惣神主役人 已二二月 半 一冊 三七

(当季算用帳) 數馬・伝一 已二二月二四日 半 一冊 三七

(米方代金指引覚) 數馬・伝一 已二二月二四日 半 一通 三八

(惣神主家借賤并諸弘方算用書上) 惣神主役人伝次・數馬 文政五年六月他 三冊 三九

惣神主家難洪ニ付拝借金願書扣 惣神主役人伝二・數馬・中橋勘之丞 年預代宛 文政五年六月 二通 三〇

惣神主後室貞心院婦參願之儀窺口上扣 惣神主役人伝二・數馬・中橋勘之丞 文政五年六月五日 一通 三二

惣神主後室貞心院婦參願ニ付口上書下書 一通 三三

*惣神主家江取替銀子算用帳 中橋勘之丞 文政五年一二月 横長半 一冊 二九

拙家娘お熊(惣神主嘉治磨妻)死去ニ付持参之品返進請書 杉田一郎左衛門内津村徳右衛門 丹生家後室・同役人中宛 天保八年四月二二日 一通 二四

神田皆濟帳・社家江下行帳 丹生惣神主代官 天保一〇年二二月二二日 半 一冊 三五

貞心院口上書 中橋嘉兵衛宛 九月二五日付 一通 三〇

惣神主旧記目錄 立合丹生相見・後見中橋勘之丞 年預代宛 安政四年三月二九日 半 一冊 三三

三谷竈殿御社勸進帳 天野惣神主丹生種磨宣明 安政五年九月 美 一冊 三三

惣神主家御救願書 惣神主丹生種磨・中橋勘之丞・中谷源八郎 年預代宛 午一〇月 一通 三四

嶋田直之助口上書付 一通 三五

○

久留里藩黒田家中連署書狀(例年之寄附米代金進上之旨) 新井五郎右衛門・大森恵助・杉原右門・村松寛馬 丹生嘉治磨宛 正月二五日付 一通 三九

黒田家中連署書狀(寒中見舞之返礼) 大森恵助・杉原右門・土屋百度兵衛・村松寛馬 丹生嘉治磨宛 正月二八日付 一通 三九

黒田家中連署書狀(年始返礼) 大森恵助・杉原右門・土屋百度兵衛・村松寛馬 丹生嘉治磨宛 正月二八日付 一通 三九

黒田家中連署書狀(年始之返礼) 一柳六郎兵衛・土屋百度兵衛・村松寛馬 寺田源左衛門・川口良助 丹生嘉治磨宛 正月二八日付 一通 三九

黒田家中連署書狀(年始之返礼) 大森恵助・杉原右門・土屋百度兵衛・村松寛馬 丹生嘉治磨宛 一通 三九

黒田家中連署書狀(例年之通豊前守寄附米代金進上之旨) 一柳六郎兵衛・土屋百度兵衛・村松寛馬・寺田源左衛門・川口良助 丹生嘉治磨宛 正月 一通 三九

黒田家中連署書狀（例年之通豊前守寄附米代金進上之旨） 杉原右門・土屋百度兵衛・村松覺馬 松井族 丹生嘉治磨宛 二月一六日付

一通 二三九七

黒田家中連署書狀（例年之丹生明神寄附米代金進上之旨） 村松覺馬 寺田源左衛門・川口良助・森四郎兵衛・戸川平次兵衛 丹生嘉治磨宛 四月二六日付

一通 二三九八

黒田家中連署書狀（此度豊前守代參之者差立之旨） 土屋百度兵衛・村松覺馬 丹生嘉治磨宛 一〇月一四日付

一通 三三九九

中山備中守家中連署書狀（備中守忌中二付例年之御初穂金神納不被致旨） 青木七大夫・大森源左衛門・岩沢伴藏 丹生嘉治磨宛 二月一三日付

一通 三三八

惣神主家中谷源八郎書翰 八月朔日付

一通 二四〇

（惣神主家神田村納米式分口之儀旧例通り被仰付度願書下書）

一通 二二六

丹生惣神主書狀（種柏無心申入） 慈尊院村中橋勘之丞宛 亥五月二四日付

一通 二五三

天野惣神主家書翰 中橋氏宛

七通 二四三

従天野惣神主役人書狀上封紙 正智院様にて中橋嘉兵衛宛

一封 二五五

落合五嶋兵衛書狀上封紙 丹生嘉治磨宛

二封 二五七

齊田善吾・加治忠右衛門連署書狀上封紙 丹生嘉治磨宛

一封 二五八

齊田善吾・小貫源助連署書狀上封紙

一封 二五九

丹生 講

龜印丹生講帳 丹生講親丹生惣神主・同親請人中橋勘之丞・宇野源治兵衛・葉屋茂重郎・油屋孫兵衛（天保六・弘化二年）

美大

一冊 二〇七二

龜印丹生講帳 丹生講親丹生惣神主・親請人中橋勘之丞・宇野源次兵衛・葉屋茂重郎・油屋孫兵衛（天保六・同一二年）

美大

一冊 二〇七一

安樂川神田村幸之右衛門田地本銀返証文 同請人津田勘右衛門・小路村庄屋清藏加判 丹生講元代慈尊院村中橋勘之丞宛 天保七年九月

一通 二三八

九度山村遍照寺畑地本銀返シ証文 引請人専藏・庄屋兵藏加判 丹生講親中橋勘之丞宛 天保八年九月

一通 二三八

御修理領神田村庄屋津田勘右衛門田地本銀返証文 請人同村嘉兵衛・同田地主觀音寺加判 慈尊院村中橋勘之丞宛 天保九年九月

一通 二三八

神田村幸之右衛門質物差入証文 請人同村嘉兵衛・庄屋岡彦右衛門加判 当村後見津田勘右衛門宛 天保九年九月

一通 二三七

幸之右衛門講銀引当質地差添証文 神田村庄屋兼引受津田勘右衛門・同村請人木綿屋嘉兵衛 中橋勘之丞宛 天保一〇年七月

一通 二三七

あら川神田村嘉兵衛田地本銀返証文 同村請人徳左衛門・同引請安右衛門・同村庄屋津田勘右衛門加判 丹生講親元代中橋勘之丞宛 天保一〇年九月九日

一通 二三八

神田村嘉兵衛丹生講掛銀借用証文 請人同村徳左衛門・安右衛門加判 中橋勘之丞宛 天保一四年五月

一通 二八五

丹生惣神主願書下書(神田村勘右衛門・幸右衛門
丹生講銀滯二付) 中橋加判 淨眼院・三学院宛
子十一月

一通 二三七

中橋勘之丞書上(神田村津田勘右衛門書置中取替
銀一条二付) 子十一月

一通 八四一

商業

油 絞

栢油送り状 中屋勘二郎 遍照光院納所宛 申一
二月二十六日

一通 三六七

(売掛帳)

横半半

一冊 三六八

○
伽羅油之方(製法)

酒 造

酒造筋御觸 (文政八―天保一二年)

半

一冊 七五六

寺領慈尊院村中橋勘之丞願口上書扣(同人造酒
江戸差送り二付冥加銀伺) 御仕入方役所宛 辰正
月(天保三年カ)

一通 七四三

造酒仕込用米預り証文 寺領慈尊院村本人中橋勘
之丞・請人粉川親類近藤元仲 上野村松浦伊左衛門
宛 天保三年一二月

一通 七三三

天保六乙未年夏仕込酒算用

一通 七三三

推出村善右衛門末儀八造酒株讓渡証文 同村庄
屋紋四郎加判 中橋勘之丞店三田屋作兵衛宛 天保
六年一〇月

一通 七三三

地方奉行淨眼院・三学院申渡書写(貴志井ノ口
村元源吾酒造株二付) 貴志井ノ口村圭平宛 天保
一二年一〇月

一通 七四四

慈尊院村篤助願書(富貴村名迫龜之進名義酒造株
五年季借受出造之儀願書) 付、酒造株借受約定取
為替証文 下書共 中橋勘之丞奥印 年預代宛 天
保一二年一〇月・同一年八月

七通 七五五

富貴村名迫家宛酒造株冥加金受取覚 森山甚太
夫 中橋勘之丞宛 天保一三年一二月一八日

一通 七六六

大坂三郷町觸写(諸商売株札并間屋仲間組合停止)
寅三月(天保一三年)

半

一冊 八六九

酒造株金之内請取覚 名迫右近 中橋勘之丞宛

一通 七七七

酒造株五年季讓受願書并同五年季讓受約定証文
・一札共 下書 慈尊院村酒造人三田屋作兵衛店元
中橋嘉平治、一類惣代田村孫兵衛代判惣五郎加判
安樂川庄市場村酒造人恒右衛門・株主同庄上野村岡
彦右衛門宛 弘化三年一月・同二月

三通 七六八

江戸道中諸入用帳 三田屋作兵衛 弘化三年一
月―同四年七月

横長半

一冊 七五〇

丙午年十一月要旨覚書(酒造株吟味二付江戸寺社
奉行所江御召出之節) 作兵衛 (弘化三年)

半

一冊 七五一

三田屋作兵衛報知状(信州大地震二付松代眞田信
濃守様他御公儀江御届書写) 中橋御仁君宛 四月
一三日・同一六日(弘化三年)

二通 八五五

荷物運送手形 玉屋十太郎 小池十右衛門宛 弘
化四年六月二八日

一通 七五四

江戸行酒造株一件要記 (作兵衛) (弘化四年)

半

一冊 七五三

造酒他所積二付岩手御番所江差出書雛形 寺領慈
尊院村中橋勘之丞 弘化四年六月

四通 七五四

| | | |
|--|----|-----|
| (酒他所積相廻シ候節御役所向進物其他取計方問合簡条) | 一通 | 七五三 |
| 兵五郎差入一札(中橋家貸銀并造酒方完掛滞銀取集方引請) 同村引受人雄次郎加判 中橋勘之丞宛 嘉永二年閏四月一七日 | 一通 | 七五九 |
| 手続書下書(諸株再興之御大坂廻船年寄古復之儀願書写) 寅八月(嘉永七年カ) | 一冊 | 八七〇 |
| 三沢屋久右衛門差入一札(造酒場并道具類共五年季借受二付) 請人妙寺村親類織屋為七加判 中橋勘之丞宛 安政三年八月 | 一通 | 七五〇 |
| 中橋尚甫書狀扣(此度故復御免ニ付造酒他国廻シ切手株御返戻被下度旨) 田村丹宮宛 一〇月一九日(安政三年カ) | 一通 | 七五五 |
| 酒積入送り狀 紀州妙寺下村孫太郎 江戸南新堀鹿嶋清兵衛宛 亥一二月 | 一通 | 七五六 |
| 中橋勘之丞酒江戸積送り狀 (刷物) | 一通 | 七五七 |
| 江戸下り酒屋觸廻狀(飛脚便) 酒屋衆中宛 辰一二月一六日 | 一通 | 七五八 |
| (中橋家手酒江戸積廻し一条心得書) | 一通 | 七五九 |
| 江戸下り酒問屋惣代大行事宛酒荷物惣高贈り狀(刷物) 紀州高野領酒造家惣代中橋勘之丞 | 一通 | 七五三 |
| 紙屋六兵衛書出し 中橋勘之丞宛 辰極月前 | 一通 | 七五五 |
| 米受取之通 断簡 慶応二年一〇月 | 一通 | 七五七 |
| かよひ出控 三田屋店 亥春改 | 一冊 | 七五八 |
| 高野寺領遠方村文兵衛作徳米積船通り手形(三田屋作兵衛店着) 遠方村八郎右衛門 米改役人中宛 午正月二五日 | 一通 | 二六二 |

| | | |
|--|----|-----|
| 積登シ米通り手形(慈尊院三田屋作兵衛着) 高野寺領遠方村文兵衛 御役人衆中宛 午九月二二日 | 一通 | 二六二 |
| 丹生郷村清古揚々慈尊院村勘之丞着米贈り狀 和州御山村民右衛門 橋本町役人中宛 巳十一月二日 | 一通 | 二六六 |
| 慈尊院村三田屋作兵衛方江壳払米通り手形 遠方村庄屋八郎右衛門 米改御役人中宛 巳十二月九日 | 一通 | 七五九 |
| 文助(遠方村カ) 米贈り狀 慈尊院村三田屋作兵衛宛 極月一八日付 | 一通 | 七六〇 |
| もめん屋嘉兵衛書狀(米買付注文之返書) 慈尊院三田屋作兵衛宛 九月二三日付 | 一通 | 七六一 |
| 万之通(墨付なし) 三田屋作兵衛 蓮台院万瑞庵宛 午盆後 | 一枚 | 一五二 |
| 酒勘定通(墨付なし) 三田屋作兵衛 下村孫四郎宛 午仲春 | 一枚 | 一五三 |
| 坂地堂嶋之趣承り合 | 一通 | 八七二 |
| (阿波行箱老ツ便船積込頼狀) 北室院坂上猪太郎 三田屋店宛 | 一通 | 二六二 |
| 高野紙 高野紙一件 中橋氏 天保七年冬 | 一冊 | 七六四 |
| 紙漉仕入滞銀出願ニ及納所之始末并三請書願書之写 細川郷両村推出村分 中橋寛 天保一〇年 | 一冊 | 七六五 |
| 柳瀬村惣吉・亀蔵・元右衛門金子借用証文(千椿代前金) 葉屋茂重郎加判 三田屋作兵衛宛 天保一一年一二月一九日 | 一通 | 二九六 |

| | | |
|--|---------|---|
| 七ヶ村産紙規定書扣 慈尊院村取扱所 七ヶ村小間屋・同庄屋中連印 天保二年一月 | 一冊 七六六 | 美 |
| 銀五貫六百目預り証文(要用書付挿入文書) 中橋政太郎・中橋勘之丞 平野屋宗三郎宛 天保一三年九月 | 一通 二五十二 | |
| 寅九月十一日迄利銀請取覚(要用書付挿入文書) 平野屋惣三郎 中橋勘之丞宛 卯二月一〇日(天保十四年) | 一通 二五十三 | |
| (取替銀元利・高野紙代銀差引覚) (同前) 平野屋宗三郎 中橋宛 卯二月一〇日 | 一通 二五十四 | |
| 為取替一札(高野領産紙荷物受払銀算用皆済之示談二付) 京町堀一丁目毛間屋喜兵衛・証人川崎屋延助 中橋勘之丞宛 天保一四年二月一〇日 | 一通 七六八 | |
| 訳書覚(高野紙大坂表売捌大損亡云々) 断簡 (慈尊院村扱所カ) | 一通 七六七 | |
| 楮前売証文 栗十村嘉太夫・受人葉屋茂十郎 田屋作兵衛宛 子十一月一八日 | 一通 七六九 | |
| 仕法講規定書(為紙郷村々百姓助成) 紙郷地頭 中 弘化四年六月五日 | 一冊 一〇五四 | 美 |
| 紀州木綿 | | |
| 大坂表ニ而御国産毛綿売捌方願書 別紙亥七月大坂南本町三丁目石川屋喜兵衛願口上書添 御勝手方役所宛 亥八月 (天保一〇年カ) | 二通 七八六 | |
| 大坂丹波屋作兵衛荷請紀州木綿売捌約定請負書 和泉屋吉兵衛 石川屋喜兵衛・中橋勘之丞宛 天保一〇年九月 | 一通 二五八 | |
| 御国表毛綿類於大坂表買捌ニ付組合約定一札 大坂南本町三丁目石川屋喜兵衛 中橋勘之丞宛 天保一〇年八月 | 一通 二五九 | |
| 石川屋喜兵衛發起紀州産木綿荷売捌方引請ニ付念書 (大坂安土町卷丁目) 丹波屋作兵衛 中橋勘之丞宛 亥十一月 | | |
| 森田源助拝借金証文下書(紀州御産物木綿価銀引負ニ付) 親類惣代政之進加判・親類証人阿刀勘之丞 奥印 高野山定光院納所宛 (安政七年カ) | 一通 七八八 | |
| 伊都郡丁之町村地土森田源助引負金弁納ニ付受取仮証文 公事方 安政七年二月二六日 | 一通 七八九 | |
| 丁ノ町村森田源助願口上覚(御仕入方木綿代銀引負之内堺木綿屋武兵衛分方済方ニ付) 扣 妙寺村親類惣代政之進加判 公事方役所宛 三月二二日付 | 一通 七九〇 | |
| 仕法書(篠綿・木綿類・牛皮・牛骨売捌方) | 一冊 七九五 | 半 |
| 御国毛綿捌方願書下書 断簡 | 一通 一五五四 | |
| ○ | | |
| 唐反物五軒問屋被仰渡御請証文写 唐反物五軒問屋洪賀屋忠右衛門・日野屋源次郎・田辺屋治右衛門・加賀屋四郎兵衛・小橋屋伊右衛門 天保九年四月五日 | 一通 二五七 | |
| 御 蔵 塩 | | |
| 和歌山御蔵塩御払下ニ付買請覚 指引書ニ通添 中橋勘之丞 銀札方役所宛 戌九月 | 一通 七九一 | |
| 塩代銀預り約定証文案紙 中橋添手形共 摂州神戸俵屋嘉右衛門・同網屋又右衛門 中橋勘之丞方右銀子納所田村又左衛門宛 天保一〇年二月 | 二通 九六 | |

石 灰

寺領花坂村善右衛門製作之正石灰若山御城下二面売捌之儀(二付願口上下書 寺領花坂村善右衛門・雜賀町石灰問屋源兵衛・福町石灰問屋文右衛門 御番所宛 未六月(弘化四年)

一通 七九三

花坂村善右衛門差入一札(石灰焼試中元入銀并若山願入用銀借用二付) 伴喜代藏・親類惣代金兵衛・安左衛門加判 中橋勘之丞宛 弘化四年七月

一通 七九三

花坂村製石灰御城下積下シ御免(二付御前借銀拝借証文并御貸方御出入泉屋多吉引請質物書入口上書与 拜借人高野山学侶領花坂村米屋善右衛門・同領慈尊院村三田屋作兵衛 御貸方役所宛 未七月(弘化四年)

一紙二通 七五四

その他

巳ノ通 ぜに加 中橋勘之丞宛 (巳四月三日一七月六日)

横長半

一冊 八六五

大和屋清吉金銀子請取寛 (宛書欠損) 正月一六日付

一通 一五三〇

薬屋庄右衛門金子請取寛 中橋嘉兵衛宛 酉七月一四日付

一通 八六四

文化十酉年諸取引帳

横長美

一冊 一〇九

八月十七日夜江戸品川ニおゐて大津屋亀九郎船難事分散勘定扣 文政六年二月

半

一冊 七六三

○ (諸商符牒一覽) 刷物

23 × 31

一枚 一四三

(金銀錢相場早見表) 刷物

21 × 27

一枚 一四五

米相場早見 菊板

23 × 31

一枚 一四四

山林仕出 (高野山御用 名迫一件)

金銀受取帳 播磨屋清七郎・綿屋善兵衛・中橋勘之丞 金銀御掛り成福院・釈迦門院役人宛 (天保三年閏十一月同四年四月)

横長美

一冊 七〇

伊利谷山仕出し材木規定帳 紀州高野山領本人中橋勘之丞・証人播磨屋清七郎 木屋太兵衛・尾張屋清三郎・米屋三右衛門宛 天保九年九月

美

一冊 七一

土州桧材木扣帳 中橋氏・赤松氏 亥二月改(天保一〇年カ)

横長半

一冊 七二

播磨屋清七郎・柳屋保兵衛・柳屋勢助・石川屋重兵衛・富士屋榮助連印金子借用証文 石川屋喜兵衛宛 天保一〇年二月

一通 七五

取為替一札(土州産材木中橋勘之丞様江壳渡之儀御取持被下二付) 久保屋庄作・柳屋清助 石川屋重兵衛宛 天保一〇年二月一三日

一通 七四

中橋勘之丞願書(土州安芸郡田ノ浦湊米屋慶藏仕出之桧角材御買上之儀) 役所宛 子三月(天保一一年カ) 下書

二通 七三

中橋勘之丞金子借用引質証文(若山御用材方返納金差支二付) 証人阿闍梨加判 新田厚治・同慶治郎宛 天保一一年一月

一通 二五五

中橋勘之丞願口上覚扣(播磨屋清七御用材仕入拝借銀被謀取候一件大坂土州御屋敷御懸合之儀) 下書 共 御勝手方役所宛 卯十一月(天保一四年カ)

二通 七六

高野山学侶方目代中橋勘之丞願口上書扣(紀州様御用材入谷山仕出御用二付山掛り人夫粮米之儀於和州御領分調達之件) 五条代官所宛 酉二月

一通 七七

| | | | | |
|--|------------|---|---|---------|
| 石川屋重兵衛金子借用覚書証文(御用材楓筋并毛綿願筋二付) 中橋勘之丞・石川屋喜兵衛宛 亥八月一日 | 一通 七七八 | 留書(參州富田群藏殿を受取候古書類写) 松井氏(嘉永二年カ) | 半 | 一冊 二四〇五 |
| 金子請取覚(石川屋重兵衛筋) 扣 中橋 石川屋喜兵衛宛 八月一日付 | 一通 七七八 | *父祐甫人別送り一札 紀州伊都郡高野山鎮慈尊院村大師母公政所別当阿刀元扶、同書地頭北室院代官奥印 (宛書欠損) 嘉永三年九月 | 半 | 一通 九三〇 |
| 中橋勘之丞願書下書(高野領・和州領之内カ仕出し檢御用材湊皆着延引之儀) 役所宛 子三月 | 一通 七六〇 | 私弟篤助事昌兵衛と改名、松井株養子相統之内訳書 中橋嘉兵治 | 半 | 一冊 三八一 |
| 西御領御修理山松木仕出御用入札下書 入札人天野村庄藏・請人中橋嘉兵衛 三月二日付 | 一通 七六一 | 篤助松井家株式相統ニ付約定為取替書并人別・寺送り手形写 弘化三年三月(実ハ嘉永五年カ) | 半 | 一冊 三八二 |
| 正智院書狀(四百金調金并廻材木未着之件) 中橋氏宛 七月二七日付 | 一通 七六三 | 永証札之事(鉄座出願ニ付誓約) 芝式本榎町内同苗弟篤助事松井庄兵衛是愛 舍兄中橋嘉平治・実家当主中橋勘之丞宛 嘉永五年四月一四日 | 半 | 一通 三八三 |
| 大坂南堀江五丁目播磨屋清七郎書狀上封紙 紀州慈尊院村中橋勘之丞宛 六月一日發信 | 一封 二五三 | *中橋勘之丞猶子滝藏人別送り一札扣 紀州伊都郡高野山字侶領内慈尊院村中橋勘之丞 江戸芝式本榎町役人中宛 安政四年正月 | 半 | 一通 四〇三 |
| 大坂播磨屋清七郎書狀上封紙 紀州若山本町三丁目藤屋源兵衛方中橋勘之丞宛 一〇月二六日發信 | 一封 二五七 | 池田文三郎請書(參州山中郷松井庄兵衛名跡相統ニ付) 養父松井昌兵衛宛 安政四年一月一七日 | 半 | 一通 二四〇 |
| 大坂カ(播磨屋)清七郎書狀上封紙 高野山麓慈尊院ニ而中橋氏兄貴宛 一二月一〇日發信 | 一封 二五三 | 弟昌兵衛養子筋留置(松井昌兵衛と跡目相統人池田文三郎為取替証文写) 中橋嘉平治写 (安政四年一月一七日) | 半 | 一通 二四二 |
| 御火災ニ付諸侯様上納金高(西丸御手伝御普請金カ) 四月一日写(天保九年カ) | 一通 八七四 | 中橋嘉平次内事添書上(鉄座出願初發カ十二ヶ年昌兵衛兄弟辛苦之次第) 扣・下書 申七月(万延元年) | 半 | 三通 二四三 |
| 鉄座一件(↓中橋家 日記記) | | 故松井昌兵衛養子文三郎カ鉄座歎願ニ付申上(中橋嘉平次) 申年(万延元年) | 半 | 一通 二四三 |
| 松井家相統 | | (出願人松井文三郎身元引請ニ付約定為取替一札) 写共 入江作兵衛 松井文三郎・養父故昌兵衛・実舎兄惣後見中橋嘉平治宛 万延元年九月 | 半 | 一通 二四四 |
| 松井由緒書 下書 | 七冊 一三七九 | | | |
| 松井家系図之覚 | 半 飯一冊 一三八〇 | | | |

類願人出入

高橋吉兵衛筋ニ付富田群蔵と取り遣り一件(富田群蔵儀阿刀祐甫との約定を違ひ高橋吉兵衛と新約定取替し候一件)(阿刀祐甫)(安政二年八月一同三年正月) 半 仮一冊 一三六五

(東照宮様鉄座御免之御墨印写三州松井(富田)貞助江附与之経緯記書)写共 先年八三郎事当時大庭茂太夫 柴田能登守内平嶋恒右衛門・柴田多宮宛 安政三年一月六日・同四年三月一八日 一通 一四〇八

芝武本榎町篤助事昌兵衛願口上(松屋町高橋吉兵衛儀松井家由緒申立出訴ニ付鉄座御墨印写預ケ一札)下書 (三州額田郡本宿村富田群蔵宛カ) 已三月(安政四年カ) 一通 一四〇七

(鉄座御免許御書附写封印之仮預り一札) 三州額田郡本宿村富田群蔵 松井昌兵衛宛 安政四年四月二二日 一通 一四〇九

柴田能登守殿重役中三州富田群蔵江察当被申遣候ニ付群蔵子細記書差出御答申出候書面写(安政四年カ) 半 二冊 一三六四

別事記書上(鉄座一条類願筋ニ付柴田能登守様御用役中江届出)(阿刀祐甫カ) 半 一冊 一三六一

(高橋吉兵衛ハ富田群蔵江掛ル対談違変出入一件往復書状等写扣)(安政四年カ) 半 仮一冊 一三六七

鉄座願人隨身証拠書 小林藤之助代官所武州荏原郡馬込村名主源蔵祖父源右衛門・神谷縫之助知行所同州同郡碑文谷村年寄久右衛門 中橋嘉平次宛 万延元年八月 一通 一四三三

(高橋吉兵衛鉄座再興出願手続ニ付内訳書) 中橋嘉平次 申九月(万延元年カ) 半 仮一冊 一三六六

出願筋留書

鉄座一条 松井俊見(中橋嘉平次) 嘉永六年二月一安政二年一二月 美 一冊 一三九九

(鉄座願筋ニ付留書)

鉄座就一途天明七未八月松平出羽守様御老中水野出羽守様江御指出被為遊候御書付写并林八江戸表江罷越し御奉行様江指上候書付扣 松井氏寛政元年三月写 半 一冊 一三七四

鉄座仕法御改ニ付御觸書写) 天保五年九月(天明五年ノ誤リカ) 半 一冊 一三七五

鉄筋調査

鉄類産国之次第・追年高価罷成候始末并鉄類御取締御会所御取建御主法等之大概申上 本銀町壹丁目平次郎地借栄次郎 嘉永元年九月 半 一冊 一三七七

(鉄山并元問屋共旧弊之儀申上) 本銀町壹丁目平次郎地借栄次郎 申九月(嘉永元年カ) 半 一冊 一三七八

近來鉄直段書(自天明四辰年 子一〇月一六日(嘉永五年) 半 一冊 一三九三

(古金買捌問屋名面并材質別買受先調書) 寅七月(安政元年カ) 一通 一三九四

(諸国鉄山箇所并銅産国調)

釘鉄銅問屋名前附(江戸) 半 一通 一三九五

山元の略書 (安政二年四月) 半 一冊 一三九七

内訳書(大坂表江諸国ハ入津鉄其他鉄筋諸取調書) 卯五月(安政二年カ) 半 一冊 一四〇〇

大坂鐵問屋仲間之存意 卯正月（安政二年カ） 一通 三九二

鐵座出願 六冊 二〇六

（鐵座主法巨細書）下書共（嘉永二年カ） 一冊 二四〇

（鐵座主法書）午十一月（安政五年カ） 二冊 二四三

中橋嘉平次願口上（松井家鐵座再興筋）扣・下書 安政五年一月 二通 二四二

中橋嘉平次願口上（松井家鐵座再興之出願二付御添翰願）年預代宛 安政六年九月 六通 二四四

中橋嘉平次願口上書覚（松井家鐵座再興筋）扣・下書 寺社奉行宛 未年（安政六年カ） 一通 二四六

松井文三郎願書扣（養父昌兵衛遺願之鐵座願御勘定所江御引合之儀）町奉行所宛（安政七年カ） 三冊 二四三

御国益鐵座再興願 草稿 三十間堀七丁目家主文三郎 申六月（万延元年） 三通 二四四

御国益鐵座再興願 添願書共 案紙・扣 願人三十間堀七丁目家主文三郎・右文三郎同居伯父嘉兵衛・差添人五人組卯兵衛 南奉行所宛 万延元年六月 一通 二五九

鐵座再興筋再願書草稿 斷簡（万延頃カ） 三通 二四五

三十間堀七丁目家主文三郎歎願書（鐵座再興出願之儀支配名主取次吳不申二付差越願）南奉行所宛 申六月（万延元年） 一通 二四五

規定書（鐵座一条出願二付身請人宛約定）本人松井文三郎・右文三郎養父故人昌兵衛美舍兄惣後見中橋嘉平治 入江作兵衛宛 万延元年九月 六冊 二四三

松井家由緒之鐵座御再興御取立願二付始末書 中橋扣へ 万延元年九月—同二年 横長美

（御国益鐵座再興願一条野山表江添翰願二付一件書類差添心得方申送書扣）在江戸嘉平次 勘之丞（元貞）宛 文久元年三月二二日 繼一通 三六〇

中橋嘉平次願書（鐵座再興之儀寺社奉行江出願二付御本山御添翰願）御在番清淨心院・大乘院役僧宛 文久元年三月 一通 二四七

中橋嘉平次願口上覚（御本山御添翰願中登坂屈）下書 清淨心院・大乘院役僧宛 四月（文久元年） 一通 二四八

中橋嘉平治願口上扣（登坂路用金拝借之儀）西四月（文久元年） 一通 二四九

中橋嘉平次書伏下書（御本山御添翰願督促一条）（中橋元貞宛カ） 一通 二四七

大坂表下組内約

和泉屋佐七御請一札（鐵座内願筋二付大坂表御用談請負約定書）松井昌兵衛後見阿刀祐甫宛 安政二年正月 一通 二八八

松原町酢屋金三郎御請一札（鐵座内願筋二付大坂表下組之儀引請）松井昌兵衛後見阿刀祐甫宛 安政二年二月 一通 二八九

和泉屋佐七・肥後屋武助連印請書（鐵座内願出府中御入用金下シ方請合）松井昌兵衛後見阿刀祐甫宛 安政二年二月一九日 一通 二九〇

肥後屋武助御請一札（鐵座内願筋二付大坂表下組之儀請負約定書）斷簡 一通 二九八

大坂信濃町油屋清次郎持地屋敷絵図 安政二年 一鋪 九六七

為替手形（受取人肥後屋丈右衛門）他下書一通 阿刀祐甫取組 和泉屋佐七宛 卯七月一七日付 二通 八四九

(鉄座願濟之節大坂表ニ而御用途筋引請之談組御座候町人書立)

三通 三九六

植田元次郎書狀(文三郎鉄座出願ニ付於大坂表先年下夕組内約之先々え引合一条) 主人(在府弘道)宛 七月二二日(万延元年カ)

一通 一四三五

植田元二郎事弥介書狀(鉄座出願ニ付大坂内約之先々引合一条) 主人(在府弘道)宛 九月一五日(万延元年カ)

一通 一四三三

鉄座願成就恩謝金先約証札 付同伴ニ係ル中橋嘉平次念書一通 願人文三郎養父昌兵衛実兄後見中橋嘉平次・証人寛水翁 宛書なし(坂本氏カ) 万延元年一〇月・文久元年五月七日

三通 一四六六

広浜利喜之進書狀(大坂富家掛合ニ付大坂町奉行公用方高木保平引合之件) 中橋嘉平次宛 戊三月九日(文久二年)

一通 一四六六

松井文三郎書狀(鉄筋ニ付大坂銀主引合之件) 阿刀祐甫宛 三月一二日(文久二年)

一通 一四四〇

松井文三郎書狀(御老中様御代リニて鉄願筋障リ之事、寛水翁貸附一件他) 阿刀尚甫宛 五月二八日(文久二年)

一通 一四四〇

八尾屋仁三郎御請一札(来三月八日立出府約定書) 証人阿波屋与吉郎加利 阿刀氏宛 二月二二日付

一通 九〇九

(中橋嘉平治引見之儀添狀) 山中・北辻 安井九兵衛宛 六月二〇日付

一通 一四五〇

出願筋往復書狀

辰二月已来往復草稿集(在江戸松井昌兵衛弘道宛書狀写) (安政三年カ)

半 仮一冊 一四九

(八月廿八日出立江戸行道中之次第并八月廿五日夜東海道筋大風之次第) (弘道) 九月一五日(安政三年)

一通 一四四七

在江戸弘道書狀扣(今般今宮急出府之訳柄・江戸ニて大病之事、節季仕舞方差図等) 元貞宛 一月一八日(安政三年カ)

一通 八九四

在江戸弘道書狀扣(留主中諸事心得之事・製薬筋心願ニ付魚断之事等) 元貞宛 九月二六日(安政四年)

一通 八九二

植田元治郎書狀(和州お房様御死去云々) 主人(弘道)宛 一〇月一八日(安政五年)

一通 一四六六

植田元次郎書狀 主人(在江戸弘道)宛 二月五日(安政六年カ)

一通 一四六六

植田元次郎書狀 主人(在江戸弘道)宛 三月一二日(万延元年カ)

一通 一四三三

植田元次郎書狀(一卜先婦坂之儀進言) (在江戸弘道宛) 三月二六日(万延元年)

一通 一四六六

弘道書狀(大坂止宿先之連絡) 勘之丞宛 六月三日(文久元年)

一通 八六五

松井文三郎書狀(鉄座類願筋之模様他) 中橋嘉平次宛 九月二二日(文久元年)

一通 一四四三

植田元次郎書狀(鉄座筋御本山御添翰願一条他) 主人(在江戸弘道)宛 九月二二日(文久元年カ)

一通 一四四三

喜久書狀(極々難渋之様子申送) 阿刀旦那様(弘道)宛

一通 九〇〇

江戸喜久書狀(下シ金無之一色様初日野方百金借筋ニ付大難渋之旨) 中橋旦那様(弘道)宛 (文久二年正月)

一通 八九六

| | | | |
|---|---------|---|--------|
| 松井文三郎書狀 中橋尚甫宛 戊正月二十九日(文久二年) | 一通 二三〇 | (1)江戸牛込三河屋金次郎口上手扣写 長寿院納所宛 未七月(安政六年) | 一通 |
| 某(寛水翁カ)書狀(仙台表桜田彦右衛門上坂一条)宛書なし 戊二月四日(文久二年) | 一通 二三二 | (2)養寿院差添願書(江戸檀家三河屋金次郎出願筋二付)大徳院役所宛 安政六年七月 | 一通 |
| きく書狀(下シ金督促) 中橋旦那様(弘道)宛 一月十六日(文久二年) | 一通 八九九 | (3)中橋嘉平次取組為替手形写(金拾両、受取人三河屋金次郎) 慈尊院中橋勘之丞宛 未四月六日 | 一通 |
| 在江戸弘道書狀(極窮迫二付急仕送金依頼)元貞宛 四月八日付 | 一通 八八七 | (4)大徳院役人添狀(三河屋金次郎歎願筋養寿院添願二付) | 一通 |
| 弘道書狀扣(松井一条二付江戸安着并近況報知)元貞宛 九月一六日付 | 一通 八八九 | (5)養寿院書狀 寂靜院宛 七月一五日付 | 一通 |
| 在江戸弘道書狀扣(帰国延引之旨)(肥後屋武助・武兵衛年始狀紙背)元貞宛 六月六日付 | 一通 八九〇 | (6)定光院納所坂本秀之丞書狀(聖方宿坊養寿院願出之件) 慈尊院村中橋勘之丞宛 七月一九日付 | 一通 |
| 中橋尚甫(弘道)書狀扣・追信共(赤松殿・一色様筋百金延引之儀) 日野屋吉兵衛宛 一月二一五日・同一二四日付 | 二通 八九七 | 在江戸弘道書狀扣(三河屋金次郎并猪兵衛筋振り為替手形二付金策依頼)元貞宛 六月五日(万延元年カ) | 一通 八八六 |
| 大坂宮成伝藏書狀(身上極窮二付御助成之儀愁訴)両主人宛 七月晦日付 | 一通 二四五 | 在江戸弘道書狀扣(三河屋金次郎筋為替不渡り云々)元次郎(植田氏)宛 一〇月五日付 | 一通 八八六 |
| 阿刀祐甫書狀扣(途中東寺立寄江戸三月三日安着、但し元浜丁宅類焼二付寄宿先報知) 勘之丞宛 三月六日 | 一通 八九二 | 金子借用添証文写 本所亀戸新田抱屋敷所持主吉兵衛、右借用人親類三十間堀七丁目家主文三郎・同証人碑文谷村久左衛門 おもん宛 文久元年四月 | 一通 三九六 |
| 植田元次郎書狀(一色家江元貞カ扶助米代金差送之儀不調云々) 主人(在府弘道)宛 六月一七日付 | 一通 一四三七 | 在江戸中橋嘉平次他借金借用(出坂路用金)ニ付差添一札写 おもん宛日野屋吉兵衛家質添証文写共 高野山慈尊院別当職中橋勘之丞父借主中橋嘉平次・同人弟昌兵衛跡養子江戸三十間堀家主証人文三郎・馬込村河原源右衛門病氣二付後見碑文谷村添証人久左衛門 亀戸新田吉兵衛(日野屋)宛 文久元年四月 | 一通 八三三 |
| きく書狀 | 一通 一三八 | | |
| 弘道在府中他借金 | | | |
| ○三河屋金次郎一件 | | | |
| (江戸)三河屋金次郎出坂之途次在府弘道江之取替金返弁之儀宿坊養寿院へ願出一件書類) | 八四三 | | |

差入置一札（鉄座筋二付出版諸雜用金為融通沽券借用二付） 中橋嘉平次・願一条同慮故昌兵衛養子三十間堀七丁目家主引請人文三郎・証人竹川町入江作兵衛 日野屋吉兵衛宛 文久元年四月

一通 一四六

三十間堀七丁目家主文三郎金百兩借用証文并差添一札下書（鉄座願筋二付登坂路用金） 文久元年四月

一紙二通 一五〇九

松井文三郎書狀（本所日野屋吉兵衛屋敷地利金工面之件他） 中橋嘉平次宛 西一〇月一六日（文久元年）

一通 一四三

中橋嘉平次書狀下書（江戸借賤返弁延引之儀） 日野屋吉兵衛宛 一二月一日（文久元年カ）

一通 八四三

日野屋吉兵衛書狀（一色様え之済金督促） 嘉平次事尚甫宛 七月二八日（文久二年カ）

一通 一三二七

江戸本所四ツ目御材木藏前日野屋吉兵衛書狀上封紙（本六日限早便） 大坂今宮植田弥助着、中橋嘉平次事當時尚保宛 七月二八日発信

一封 一五〇六

日野屋吉兵衛添書狀（一色家宛返銀督促一条） 中橋尚保宛 七月二八日付

一通 八四四

（日野屋吉兵衛所持ニ相成候節譲リ渡屋敷証文其他誤書）（本所御材木御藏前龜戸新田）

一通 一三六六

○

（三拾間堀彦太郎地借り嘉兵衛入牢中煩ニ付御救願書写） 三十間堀六丁目彦太郎地借嘉兵衛妻かね・木挽町四丁目啓次郎地借親類駒治郎・本八丁堀四丁目彦次郎地借親類平兵衛 万延二年一月

一通 九六九

菊作太刀質入一件

舟橋家細川家江由緒略記（嘉永三年七月）

一通 八六一

在江戸中橋嘉平治金百五拾兩拝借願書（家宝菊太刀引当） 兩在番所役僧中宛 戌八月一五日（嘉永三年）

一通 八三三

在府中橋嘉平治拝借金願書扣（菊作太刀受戻金百六拾兩日限廿日限） 定光院・高室院御側衆中宛 巳五月二二日（安政四年）

一通 一四〇一

中橋嘉兵衛口上書下書（菊一文字太刀上納願御執成之儀） 門首宛 未二月一七日

一通 八五四

（菊御紋太刀上納願之儀御取扱願書） 紀州伊都郡高野山学侶方領内慈尊院弘法大師政所由緒別当中橋嘉平次、在府中高野山学侶慈眼院奥印 鑑蓮社別当宛 安政六年六月二九日

一通 八五五

阿刀祐甫書狀扣（菊太刀にて江戸諸借口決着之義決意） 一色九左衛門御用役中宛 一二月一八日（文久元年カ）

一通 九〇一

弘道書狀扣（為替金督促・菊作太刀筋并鉄筋上表二付御山表添翰願之儀） 中橋勘之丞宛 八月二五日付

一通 八八六

中橋嘉平次書狀扣（菊一文字太刀壳捌方行違ニ付返銀延引一条） 中田屋留次郎宛 一二月一五日付

一通 八五九

桜地門院道銳返書狀（菊一文字太刀質受戻金拝借願之件） 阿刀祐甫宛 六月七日付

一通 八六〇

法名書（尚甫居士）（家宝之太刀請戻不能ニ付弘道剃髮之砌） 阿闍梨有全 文久元年二月

一通 一五三三

滞府中聞書その他

口演（床ひらき催ニ付招請） 会主越勝・世話連中（竹印木村六左衛門）（嘉永元年一〇月一二日カ）

一通 一三九

（公方様御他界前後聞書） 在江戸弘道 嘉永六年六月一同七月

半

一冊 一二九

孝明天皇綸旨写〔異国船渡来二付信濃国諏訪社へ御祈禱之件〕 権右中辦藤長順奉 進上右大將 嘉永六年十一月二三日

一通 九六

堀田備中守御渡達書写〔豆州下田表在留之垂墨利加官使江戸登城之旨〕 大目付・御目付宛 已八月一四日〔安政四年〕

一通 一五六

万延二改正諸国御固場所附〔刷物〕

22 × 32

一枚 一三四

分間御江戸絵図 江戸馬喰町二丁目南角地本屋永寿堂西村屋与八元板、日本橋通三丁目吉文字屋治郎兵衛・芝神明前山田屋三四郎板 文政新鐫

67 × 45

一鋪 六九五

江戸案内図〔掌中図〕 平安岡田春燈斎縮図并銅刻

9 × 15

一枚 一三四

願書其外委細扣へ〔大坂南瓦屋町炭屋分五郎家督分ヶ出入駕籠訴一件〕〔嘉永二年五月―同四年九月〕

半

一冊 八七三

炭屋分五郎儀江戸并大坂南瓦屋町御構御赦免願書写 浅草寺地住与兵衛・浅草新鳥越町伊兵衛 東叡山御役院役僧中宛 安政五年八月、中之郷仮住分五郎〔宛書なし〕 安政六年二月

半

二冊 八七三

諸請負

古貸附取立請負

鍋嶋紀伊守要用銀預り証文 池田甚五郎・半田十郎左衛門 助松屋三郎太郎宛 宝永八年三月二八日

一通 二八七

板倉下野守要用銀預り証文 小野儀太夫他五名連印 助松屋仁兵衛宛 享保一五年二月

一通 二八八

板倉下野守要用銀請取二付請負証文 山本村庄屋吉右衛門・九郎兵衛 助松屋仁兵衛宛 享保一五年一二月

一通 二八九

田村庄兵衛為替金之内受取覚 中橋嘉平治 曲測様御用人鈴木順平・山村九右衛門宛 嘉永五年一月晦日

一通 九三

米津様御証文写〔肥後屋丈右衛門・戸川方之助内白石勝助宛 四口合金四千五百拾兩分〕〔嘉永元年七月―同四年八月〕

半

一冊 九四

〔米津様大坂御定番在府中之御用途金御下戻之儀願口上書下書〕 大坂松尾丈右衛門代縁家中橋嘉平次・丈右衛門別家代藤兵衛 米津様御勝手方御用役衆中宛 已五月〔安政六年カ〕

一通 九四二

新靱町吹田屋六三郎依頼書〔同人先年杵築大坂御屋敷御用并金返戻出願二付同江戸御屋敷併願之儀〕附、杵築様御証文写 在江戸元次郎・善次郎宛 安政四年閏五月一日

半
横長半

二冊 九四四

杵築江戸御屋敷留守居申渡写〔吹田屋六三郎出願之儀大坂蔵屋敷之可願出旨〕 松平市正内奥津三右衛門〔宛書なし〕 已六月朔日〔安政四年〕

一通 九四五

〔吹田屋六兵衛宛杵築松平家借用金御証文写引合書〕〔安政四年カ〕

半

一冊 九四六

大坂新靱町吹田屋六三郎差入念書〔杵築様願濟之節御下ヶ金半割之約諾〕 元治郎添書繼 主人〔弘道〕宛・植田元治郎宛 已八月十二日〔安政四年〕

繼一通 九四七

大坂新靱町吹田屋六三郎念書覚写〔杵築松平様願濟之節御下金半方配分之儀〕 手代幸七・同佐平連印 中橋嘉平治様御手附植田元次郎宛 安政四年八月

一通 九四八

岩松殿御屋形御貸附金取立所申渡書〔御貸附之趣意并貸渡凡例〕 未年

一通 九四三

| | | | |
|---|------------|-----|------|
| 岩松殿御屋形御貸附金取立所定書 | 未年 | 一通 | 九七四 |
| 上州新田岩松様御屋形御貸附金拝借証文雛形 | 一綴(二通) | 九七五 | |
| 南部屋庄七請取書覚(備中太田氏手代五郎吉様・大坂平野屋儀兵衛様御掛り筋殘金) | 立合平三郎加印 | 一通 | 九七八 |
| 中橋氏宛 | 嘉永二年九月 | 五通 | 一四五四 |
| (藤方彦一郎代官所備中国実村太田辰五郎御褒美一件其他内報書類) | 石原氏 中橋嘉平次宛 | | |
| 諸家仕法目論見書写 | | 一冊 | 九六三 |
| (御春屋御製所御菓子御用砂糖一円引請出願一件之写) | 文化一二年三月 | 一冊 | 九六三 |
| 三結鯨組仕出方前細工拵方定式惣銀積り之事并三召使中賃銀定り之事 | 天保三年八月 | 一冊 | 一四九四 |
| 霞ヶ浦北浦新開目論見絵図 | | 一鋪 | 一四九六 |
| 越後国三嶋郡新田絵図面 | | 一鋪 | 一四九七 |
| 海上之覚書(御廻米船海難之節心得) | 刷物 | 一冊 | 九七三 |
| 鵜殿浦大野吉次郎船路日和覚書 | 首欠 | 一冊 | 一四九五 |
| 日和口伝書 | 享和二年八月 | 一冊 | 八七七 |
| 覚(廻船御条目写)(慶安五年八月一四日・万治二年正月二日・寛文七年二月一八日) | 閏七月二七日扣 | 一冊 | 九七九 |
| 起業致富之秘訣 | 刷物 | 一枚 | 一三七七 |

国益献策

(天保十三寅年御免許白川殿前学師寛尾張介貸附金仕法訳書) 断簡共 一通 一四八

世上融通御貸附之趣意書 付、牛込早稲田国学者隠士寛水翁口上覚 一冊 一三七三

寛水翁書状(仙台様御仕法一条他) 同人印鑑一葉添 阿刀祐甫宛 一二月九日(文久元年) 一通 一四四

寛水翁書状(清水越開路願一条并国益御貸附所願其他) 阿刀祐甫宛 戊二月四日(文久二年) 一通 一四五

慈尊院村

地頭所

申渡書

(地頭所申渡規定書) 断簡 北室院・金剛頂院代官連印、金剛頂院徳測・北室院本長奥書 慈尊院村中宛 天保一〇年正月 一通 三三一

北室院

北室院政具書状(慈尊院村百姓所望二関スル件) 知足院宛 極月二六日付 一通 三三九

石垣普請諸人用算用帳 享和二年一〇月五日 半 一冊 三三八

| | | | | | |
|---|---------|-----|--|--|--|
| 石垣普請入用勘録帳 享和二年一〇月 | 一冊 九七七 | | | | |
| 北室院御納所弁内書狀〔明神山一件〕 中橋嘉兵衛宛 二月二一日付 | 一通 三九一 | | | | |
| 〔明神山昔々之二件書上覚〕 中橋嘉兵衛 北室院御納所宛 卯二月 | 一通 三九二 | | | | |
| 弁内返書狀〔宮山筋一件〕 中橋嘉兵衛宛 二月二〇日付 | 一通 三四〇 | | | | |
| 北室院大坂壇家名前帳 | 一冊 三三〇 | 横長半 | | | |
| ○ | | | | | |
| 四ヶ年分之利銀算用書 北室院知事 妙円法尼宛 安永九年三月二一日 | 一通 一三〇〇 | | | | |
| 法 制 | | | | | |
| 法 度 | | | | | |
| 科料錢百貫文皆済狀 木食内二位 慈尊院村宛 天正一七年二月一五日 | 一通 一二九 | | | | |
| 定法度之事 年預坊 慈尊院村宛 寛永三年一月一一日 | 一通 一二〇 | | | | |
| 村 法 | | | | | |
| 村中申合書〔博奕過料錢〕 | 一通 三三六 | | | | |
| 慈尊院村博奕吟味之節勝利寺不調印二付鏡口上 | | | | | |
| *書扣 慈尊院村庄屋団七・同帳面預り中橋勘之丞 年預代宛 宝曆四年正月二五日 | 一通 三八九 | | | | |
| 捉書 慈尊院村両下中惣連印 中橋奥書印形 万延元年一〇月 | 一冊 三七七 | 半 | | | |
| 帳面預り | | | | | |
| 御公儀廻狀留記 当番庄屋帳預り中橋嘉兵衛 寛政二年 | 一冊 三三三 | 半 | | | |
| 御公儀廻文留記 寛政四年 | 一冊 三三三 | 半 | | | |
| 慈尊院村定例役人年中行爰新役為心得大都留記 北室院下帳箱付庄屋帳面暫預り候時中橋英元 寛政四年 | 一冊 一〇五二 | 半 | | | |
| 平兵衛屋敷田質入請書〔慈光院・西室院様へ済金筋請印頼上二付〕 親類惣代重治郎加判 北下年寄彦兵衛・金下庄屋宮内・北下庄屋預り中橋勘之丞宛 天保二年二月一〇日 | 一通 三三四 | | | | |
| 書 上 | | | | | |
| *〔慈尊院村書上扣〕 慈尊院村庄屋八右衛門・弥太郎 年預代宛 延享三年三月一一日 | 一通 二三六 | | | | |
| 慈尊院村請書扣〔御領内米所持之者御吟味二付書上〕 慈尊院村惣代慶兵衛・金剛頂院様年寄保次郎・庄屋左京・北室院様年寄伊兵衛・庄屋徳右衛門 御取調子役人中宛 万延二年二月 | 一冊 三九三 | 半 | | | |
| 貢 租 | | | | | |
| 年 貢 | | | | | |
| 〔慈尊院村田畑土免之儀并新池・川除御普請等二付願書扣〕 年預代宛 元禄二年閏正月一二日 | 一通 三七七 | | | | |

| | | | | | | |
|---|------|-------|--|-----|----|------|
| 古田畑土免請願書 慈尊院村中 年預代宛 元禄七年正月二五日 | 一通 | 三八八・二 | 慈尊院村之名寄帳 天正二〇年正月 (金剛頂院下名寄) 慈尊院村 元和六年十一月二一日 | 美 | 一冊 | 二三 |
| (巳)酉年迄慈尊院村土免狀写) 慈尊院庄屋弥太郎宛 寛延四年 | 一通 | 一〇九三 | 慈尊院村荒帳 金剛頂院・北室院 寛永八年七月一九日 | 半 | 一冊 | 三四三 |
| 北御藏入方御年貢勘定帳 北庄屋帳預り中中橋勘之丞 文政一三年 | 半 | 一冊 | 北室院下名寄帳 寛永九年一月写 | 半 | 一冊 | 三四三 |
| 卯年未進人判取帳 辰六月 | 横長美大 | 一冊 | 北室院下嶋名寄帳 延宝七年二月一一日 | 美 | 一冊 | 二五 |
| ○ | | 三五八 | (慈尊院村米高改帳) 丹生院・明眼院 貞享四年九月 | 半 | 一冊 | 一〇九一 |
| 御年預表御領村々土免下り免之事三付内存書上ケ控 享保元丙申の文政元戊寅迄曆数合百三ヶ年之間 中橋嘉兵衛 文政元年一〇月 | 半 | 一冊 | 慈尊院邑塔之尾池古田高帳 中橋嘉兵衛元昭 寛政一一年一二月 | 美 | 一冊 | 三四七 |
| 夫 役 | | 三五五 | 慈尊院村池水掛古田新田惣高帳 中橋氏 享和二年八月二八日 | 美 | 一冊 | 三六八 |
| 江戸夫料銀請取 年預代 慈尊院村宛 子一二月 | 一通 | 三五九 | 嶋畑床替・池床替・御神楽山大豆高名寄帳 慈尊院村向中 文政一三年 | 美 | 二冊 | 九六六 |
| 南院書狀(金剛頂院藏下牧野勘兵衛夫役免除二付村内差縛一条) 慈尊院中橋上綱宛 一〇月一〇日 (天保一四年) | 一通 | 一五九 | 金剛頂院藏下田畑惣高帳 慈尊院村 金剛頂院藏下年寄保次郎・庄屋左京・北室院藏下年寄佐右衛門・庄屋幸祐・田村丹宮・中橋勘之丞調印 安政六年三月 | 半 | 一冊 | 三四九 |
| 横成算用 中橋加兵衛 きも入市兵衛宛 午一二月二八日 | 一通 | 七六 | 北室院藏下田畑惣高帳 慈尊院邑(調印同前) 安政六年三月 | 半 | 一冊 | 三五〇 |
| 土地 | | | 新開・起返 | | | |
| 検地・名寄・荒帳 | | | 嶋新畑開地見積算 慈尊院村 延宝六年八月二一日 | 半 | 二冊 | 三六三 |
| 紀州伊都くわんしやうふ内慈尊院御検地帳 宗介・喜左衛門 天正一九年八月八日 首欠 | 半 | 二冊合綴 | 享保十九甲寅年七月嶋分地積帳双嶋見付改帳写 慈尊院邑役預中橋勘之丞 宝曆三年九月写 | 横美半 | 一冊 | 三六四 |
| 紀州伊都郡官省布ノ内慈尊院御検地帳 写 宗介・喜左衛門尉 天正一九年一〇月八日 二帖ノ内 | 半 | 一冊 | | | | |

| | | | | | |
|--|---------------------|--------|---|----------|--------|
| 慈尊院村西嶋畑婦シ覚 扣 西嶋年寄孫右衛門・同伝四郎・庄屋団七・庄屋帳面預り中橋勘之丞請印奉行所宛 宝曆二年二月 | 半 | 一冊 三六三 | 川原島地図(地押絵図カ) | 27 × 136 | 一鋪 一三五 |
| 村夫工下遣之覚(北室院・金剛頂院入切起普請二付) 地方普門院 西四月 | 一通 三六一 | | 島畑之内五ヶ年限荒地開発願ニ付村中差入約定書 慈尊院村五人組頭・惣代・同年寄連印、庄屋兩名奥印 中橋氏宛 弘化三年冬 | 一通 三七九 | |
| 下嶋開御手伝銀受人数帳 天明二年 | 横長美大 一冊 三六六 | | 島畑永四ツ成所図面 中橋氏 | 27 × 182 | 一鋪 三七九 |
| 川原嶋畑五ヶ年限荒地開発願書 下書共 慈尊院村五人組親・惣代四人・年寄連・庄屋各兩人奥印、中橋嘉平治添書 両地方奉行宛 弘化三年二月 | 一二通 三八〇 | | 慈尊院村藪山改記 北室院納所 延享四年三月 | 半 | 一冊 三四五 |
| 慈尊院村下島荒畑天保八年酉上納五ヶ年限筋書抜(弘化三年カ) | 一通 三〇二 | | 慈尊院村藪山改帳 北室院納所 寛延三年二月 | 半 | 一冊 三四六 |
| 地方奉行免許状(大川筋寄洲地面并五ヶ年限之場所畑返り普請之儀) 年預坊奥印 中橋勘之丞宛 弘化三年二月 | 一通 三八一 | | 北室院御藏下中請書(御持山并藪等地床請願済ニ付) 慈尊院村御藏下惣代平兵衛他四名 年寄役彦兵衛、庄屋預り中橋勘之丞 北室院代官宛 天保二年四月 | 一通 三四八 | |
| 中橋嘉平治願口上覚(慈尊院村川原下西嶋荒畑田成開発之儀) 庄屋・年寄・村惣代奥印 地方両奉行宛 願済裏所アリ 弘化四年正月 | 一通 三八二 | | 新池御普請并古畑田成願書扣 慈尊院村田人中年預代宛(元禄七年正月二五日願書四通一紙の内) | 一通 三八一三 | |
| (慈尊院村御多分様藪之儀村請願書案) 庄屋権之丞・同権右衛門 年預代宛 元禄一六年十一月二二日 | 一通 三四四 | | (池水引之儀田人中相談定書) 勝利寺初六二名連印、中橋勘之丞・村役人五名奥印 宝曆二年二月 | 一通 二八九 | |
| (御多分様藪新開見積絵図) | 31 × 47 一枚 一四九九 | | (慈尊院村此度御普請被為成下候古池立箱高サ之儀ニ付口上書扣) 庄屋団七・帳面預り中橋勘之丞 年預代宛 宝曆四年正月 | 一通 三六五 | |
| (宝城院所持藪地念仏講中引請開発目論見絵図) | 24 × 128 一枚 一五〇〇 | | 宝曆四戌正月廿五日於御衆評被為仰付候覚書(古池御普請立箱高サニ付) | 一通 三六五 | |
| 大川原西下島場所略図(五ヶ年限荒大豆高并荒地場所堤ノ図書上) 北下庄屋重二郎・金下庄屋由兵衛・中橋嘉平治 弘化三年十一月・十二月 | 二枚 三七六 | | | | |
| 嶋絵図 | 44 × 30 一枚 一五〇 | | | | |
| (少入上ほと田畑藪絵図) | 46 × 31 一枚 一五〇 | | | | |

| | |
|---|-----------|
| 雨引山羽蟻道下手ニ而堀切之仮杭間敷之寛写 正智院・康徳院・竜生院 丑五月 | 一通 三六〇 |
| 雨引山羽蟻道下手ニ而堀切之仮杭間敷之寛写 正智院・康徳院・竜生院 丑五月(宝曆七年) | 一通 二九二 |
| (慈尊院村大池樋取替普請人夫積書) | 一通 三六四 |
| 八王子谷新池床諸算用帳 当番伊右衛門 寛政一二年 | 一冊 三六七 |
| 自村他村かい夫諸入用并人夫飯米下使飯米諸算用帳 中橋嘉兵衛元昭 文化元年三月九日 | 一冊 三七 |
| 慈尊院村古池諸入用上目録 慈尊院村役人 地方奉行安楽院・宝光院宛 文化四年三月二〇日 | 一冊 三六九 |
| (島畑荒所開田ニ付大川筋ノ用水取入一件懸合之留書) (中橋氏)(天保二一弘化四年カ) | 半 假一冊 三七五 |
| 慈尊院下モノ大刎尻より養水取入溝路入用積リ方覚 | 一冊 三七八 |
| (荒畑開発養水取入普請見積絵図) | 三鋪 三六三 |
| 留堰之仕様書 六月二三日付 | 一通 三六五 |
| (新堤井手掛り田地絵図) | 二鋪 一三三 |
| 入郷境田地井手水口図(忠七田新水口御定ニ付) 寛延四年七月二七日 | 二鋪 一三〇 |
| (新規井手絵図) | 二枚 一三三 |

山崎村境目出入

| | |
|---|--------|
| 当時山崎境目之論ニ付而申上条々写 慈尊院村百姓中・勘之丞他二人連名 高野山学侶衆中宛 万勝院全秀・安楽院有重・北室院盛旻・照光院栄嶋・花厳院全海・江戸証人知足院光譽裏判 元和五年一月二日 | 一通 二八三 |
| 慈尊院山崎村境目定書 写共 行人衆・学侶衆中 慈尊院村宛 元和五年一月三日 | 一通 二八三 |
| 慈尊院山崎両村境目相論裁許状 写共 宝性院有盛・無量寿院長海・明王院檢校法印快盛連署 慈尊院村宛 元和五年一月四日 | 二通 二八四 |
| 慈尊院領江山崎村ノ打こし地之覚(山崎村ノ帳ノ写) 元和七年 | 一冊 二八五 |
| 山崎村四方定書写 檢校法印成宗 (治承四年九月) | 二通 二八一 |
| 慈尊院村中口上書(於開作場所山崎村之者ふしき成儀仕候旨注進) 年預代宛 享保一五年八月 | 二通 二八六 |
| (山崎村弥三郎と慈尊院村利兵衛井手論内済取遣一札扣) 慈尊院村地主利兵衛・庄屋・年寄連名 山崎村弥三郎宛 享保一八年四月 | 一通 二八七 |
| (山崎境目朱引絵図) | 一枚 二九八 |
| 慈尊院村山崎村境目用水論絵図(但し山崎村百姓ノ上リ候図面) 写共 万勝院・北室院・文珠院裏書花押 | 二鋪 一三八 |
| 山崎村新規堀切一条口上覚 扣 団七・中橋勘之丞 宝曆四年十一月 | 一通 二九〇 |

山崎村慈尊院村境目入田畑御尋ニ付申上覚 扣
赤松院・康徳院・報恩院・竜生院宛 宝暦五年一
〇月二二日 一通 二九一

金剛頂院入慈尊院田畠覚 宝暦五年二月 半 一冊 二八三

山崎大境目筋書付〔正智院様案紙并両村役人立合
相改書付〕 宝暦七年二月一―同八年二月 一通 二九三

山と慈と応答私記 英元 宝暦四年四月二一日―
同五年一〇月一七日 9 × 25 一冊 二五五

慈尊院村・山崎村大境目出入応待覚 宝暦四―
同八年 半 一冊 二五四

慈尊院村山崎村際目論濟伏ニ付添申渡書写 学
侶方正智院・西南院・行人方赤松院・竜生院 慈尊
院村宛 宝暦八年三月 一通 二九四

〔堀切・大杉谷・三昧之所御見分之節御答申上
覚〕 亥八月四日〔宝暦五年〕 一通 二九五

慈山境吟私 英元 (宝暦五年一〇月―同七年五
月) 9 × 24 一冊 二五六

山崎村ヨリ慈尊院へ境目内入地帳〔元和六年一
一月地押帳を書拔〕 (宝暦) 半 一冊 二五三

山崎村者江尋口〔双方大杉谷と申処相違ニ付〕 一通 二九六

山崎村利右衛門申口写 一通 二九七

〔山の境目あさ名并間数覚〕 一通 二九八

〔新規井手掘之儀山崎村故障申立ニ付願書下書〕
慈尊院村田人惣代藤十郎・浅七・同村庄屋長右衛
門・甚五兵衛 年預代宛 寛政九年閏七月 三通 二九九

〔新規堀抜之水路元形之通埋立之儀被申渡飯請
書〕 慈尊院村惣代嘉十郎・庄屋甚五兵衛・太右衛
門 年預代宛 巳八月一―日 一通 二〇〇

〔慈尊院村山崎村境目用水築立一件為取替証文
案紙他〕 文政四年 四通 二〇一

〔山崎村舟谷池堰上取込ニ付為取替証文扣 山
崎村舟谷池田人惣代源兵衛・伝藏・慈尊院村西嶋池
田人惣代平兵衛・定五郎連印・菅野弥三左衛門・中
橋勘之丞奥印 天保三年三月一〇日 一通 二〇二

地押覚 半 一冊 〇九二

大際目大杉谷・岩尾谷絵図 34 × 24 一枚 二三四

正藏院・花成院・自性院連署書状〔慈尊院へ申
付候山崎際目之杭拔之儀督促〕 五明院宛 一〇月
二五日付 一通 三三六

川除普請

〔大水ニ而馬場崎浦を五郎右衛門浦迄岸脇くれ
候ニ付御繕願書〕 慈尊院村五兵衛・清兵衛・五
郎右衛門・惣五郎 年預代宛 (元禄七年正月廿五
日願書四通一紙の内) 一通 三八一四

大川端杭打普請入用書出し扣 慈尊院中橋勘之
丞 地方奉行随心院宛 寛延二年二月 一通 二八八

川除御普請諸入用書上扣 団七・中橋勘之丞 年
預代宛 宝暦六年二月五日 二通 三〇六

從享和三亥五月至文化元甲子年六月七日慈尊院
村大川端御普請勘録帳 慈尊院村庄屋甚五兵衛・
中橋嘉兵衛 地方奉行宛 文化元年六月 半 一冊 三七〇

從享和三亥五月至文化元甲子年六月七日慈尊院
村大川原御普請算用帳 慈尊院村庄屋太右衛門・
同甚五兵衛 地方奉行聖無動院宛 文化元年六月 半 一冊 三七三

慈尊院村大川原宮橋刎普請目録 橫長美 一冊 三七七

(口場浦上ノ刎普請積り扣) 橫長美 一冊 一四七

大川原渡シ場上浜手普請積り之扣 橫長美大飯一冊 四元

(入郷村境々山崎際目迄大川端通り土手堤松植
込普請絵図) 天保七年二月 85×41 二鋪 一三三

文政十式年丑七月十八日大川大水之節之絵図 136×57 二鋪 三九

座講・村祈禱

座 講

当指之仕來り覚書 宝永二年九月一二日 一通 七〇二

享保十三申正月廿一日座講畑さひめの間 一通 七〇四

享保十五庚戌十二月大晦日座講中間畑年貢算用
覚 (欠損アリ) 一通 七〇五

慈尊院村長左衛門口上書 (座入被差障候ニ付御吟
味願) 北室院納所宛 元文二年二月 一通 七〇六

元文二丁巳年座講出入少々有之候聞書 元文二
年二月二日中橋勘之丞聞書 一通 七〇七

座講銀預り手形 預り主庄兵衛・喜右衛門 座講
衆中宛 宝曆二年二月二七日 一通 七一一

座講銀勘定書 座講中 天明四年二月一一日 一通 一三〇一

慈尊院村座講定書 (旧記書拔) 天明六年正月一
日 一通 七二三

座講再栄(宮)之砌留書 (中橋嘉兵衛) 天明六年
正月二二日 一通 七三三

慈尊院村座講并村祈禱并名付由來之事書留 中
橋嘉兵衛 天明八年正月一〇日 一通 七四

座講銀預り証文 預り主井上新四郎・請人玉置門
七 慈尊院村座講衆中宛 寛政二年二月二日 一通 七五

座講銀預り証文 預り主西畑喜右衛門・請人玉置
十右衛門 慈尊院村座講衆中宛 寛政二年二月一
日 一通 七六

玉置嘉右衛門所持山寄附狀 座講中宛 寛政一
〇年二月 一通 七七

旧規扣 (慈尊院村座講・村祈禱・名改之事) 中橋
勘之丞 天保二年正月 一通 七九

座送り一札 (垂井村佐兵衛弟左京) 紀州伊都郡
垂井村山本佐兵衛・同村座講惣代隅内半右衛門 同
国高野寺領慈尊院村座講衆中宛 嘉永四年二月 一通 七〇

安次郎座講金借用証文 請人角屋作造加判 座講
衆中宛 安政四年正月 一通 七三

添書一札 (津田嘉蔵座送二付講元宛) 三谷村本人
藤兵衛・同村講中惣代忠吉 慈尊院村中橋勘之丞宛
文久二年一月 一通 七三

村 祈 禱

享保五子ヨリ宝曆拾四甲申マテ四拾五歳之間村
祈禱諸色入用并名付当人足洗等改出米記録 慈
尊院上綱中橋氏書物 橫長美大 一冊 一四一

村祈禱并人別帳 年行持庄兵衛・喜兵衛・磯兵衛・長次郎 宝曆二年正月一日 横長美大 一冊 七〇九

村祈禱并人別帳 年行持伝助・清五郎・磯右衛門・定五郎 宝曆四年正月一日 横長美大 一冊 七二〇

明和式乙酉ヨリ天明九己酉マテ二拾五年之間正月廿一日村祈禱并名付当人足洗衛門成等改出米記録 慈尊院上綱中橋氏書物 横長美大 一冊 二四三

寛政式庚戌年より正月廿一日村祈禱并名付当人足洗衛門成等改出米諸入用方記録 慈尊院上綱中橋氏書物 横長美大 一冊 二四四

文代二乙丑二始ル正月廿一日村祈禱并名付当人足洗衛門成改出米入用等記録 中橋氏書物 横長美大 一冊 二四五

村祈禱名付当人足洗衛門成改出米入用等記 (文政二—安政五年、但嘉永四—安政四欠) 中橋勘之丞弘道代 横長美大 一冊 二四六

飯炊明神

いんかしこ根明神御供畑定書 慈尊院村庄屋・年寄中宛 延宝二年二月一日 一通 六六

惶根尊御社上葺帳 座講庄中 享保七年正月一六 横長半 一冊 七〇三

飯炊宮造宮鎮蒔并遷宮日時書 中橋英元撰 宝曆九年 一通 四八四

飯炊大明神上葺入用并勸化帳 寛政七年正月一日 美 一冊 六八

飯炊大明神上下遷宮記録 中橋元昭 文化七年正月四日 美 一冊 四八五

飯炊大明神遷宮勸化帳 世話人坂上左京・丹下幸助・大庭惣五郎・大工幸二郎 嘉永元年七月 半 一冊 二〇八

○

光明眞言講人数帳 文化四年正月二〇日 半 一冊 二〇二

村 民

磯貝氏一件

大坂御堂前敵討之事 (貞享四年卯六月三日大坂南久太郎町六丁目にて磯貝兵右衛門同藤助伯父之雙嶋川太兵衛を討果、其後紀州慈尊院村中橋勘之丞方へ罷越養生仕居申迄の物語) 貞享四年 半 一冊 九六

大坂北久太郎町会所より磯貝兵右衛門書状 岡本雲益 (慈尊院村住医師) 宛 六月六日 (貞享四年) 首欠 一通 九五

大坂町奉行与力連署書状 (雲益子息磯貝兵右衛門・同甥藤助手負ニ付引取之儀申入) 小田切喜兵衛与力工藤小左衛門・藤堂伊豫守与力山本長右衛門 岡本雲益宛 六月八日 (貞享四年) 一通 二六五

磯貝兵右衛門・同藤助申上候覺 (敵討後慈尊院村父雲益方ニ罷在候始末) 他一通 七月 (貞享四年) 二通 九四〇

岡本雲八返翰扣 (貞享四年六月大坂本願寺前にて敵討之磯貝兵右衛門・同苗藤助之親族子孫之消息問合之件) 磯貝藤兵衛 (江戸八丁堀組屋敷内) 宛 文化四年一〇月二五日 半 一冊 二六三

(磯貝兵右衛門・同苗藤助慈尊院村雲益方江囲置候一件留書写) 首欠 半 一冊 二六三

署釣書 (江戸町奉行与力磯貝藤兵衛と差越候磯貝氏系譜写) 文化四年一〇月二五日 半 一冊 二六四

磯貝藤兵衛書狀（磯貝兵右衛門家系照会一条）
岡本雲八宛 三月朔日（文化五年カ） 一通 二六六

出 入

千助身持請合一札 中橋勘之丞宛 宝曆二年八月 一通 八六六

字嶋口金剛頂院入亦重郎所持畑北之方空地村方
ト論ニ及内済取扱仕候始終之趣書 中橋勘之丞
文政九年正月 半 一冊 三七三

字嶋口論所内済為取替書付 村方惣代重右衛門・
同磯五郎・又重郎・年寄藤右衛門・同宮内・庄屋新
五兵衛・取扱証人中橋勘之丞連印 村方宛 文政九
年正月二二日 一通 三七三

念仏講中米屋左右衛門事おほへ書之帳 嘉永四
年九月 半 一冊 八七

宇野のり光書狀（井ノ上氏と和熟之儀御立入被下
札狀） 中橋主人宛 七月二八日付 一通 二七二

跡目相統

金剛頂院御藏下善吉株跡式相統ニ付御請一札
善吉跡株相続人左内事安右衛門・妻とき 中橋勘之
丞宛 天保九年七月 一通 二四二

送 籍

宗旨請狀（慈尊院村平吉女房よしニ係ル） 皮張村
涼光寺・同村庄屋多右衛門 慈尊院村役人中宛 宝
曆二年八月 一通 三九三

宗旨手形（平吉ニ係ル） 市原村地藏寺 慈尊院村
役人中宛 宝曆三年九月 一通 三九四

宗旨請狀（弥七ニ係ル） 調月村大日寺・同村源三
郎 慈尊院村阿弥陀寺・役人中宛 宝曆四年正月 一通 三九五

宗旨請狀（甚八養子入ニ付） 那賀郡小畑村觀音寺
慈尊院・同役人中宛 宝曆五年正月 一通 三九六

宗旨一札（上三毛村甚之丞ニ係ル） 那賀郡上三毛
村地藏寺 亥正月（宝曆五） 一通 三九七一

上三毛村作之丞倅甚之丞村送り狀 上三毛村庄
屋又兵衛・肝煎新太郎・弥吉 慈尊院村役人中宛
宝曆五年十一月 一通 三九七二

宗旨請狀（名前記載洩） 高野山学侶方定光院役者
慈尊院村役人中宛 宝曆五年正月 一通 三九八

大野村又七妹さつ村送り狀 大野村庄屋藤太夫・
肝煎弥八 慈尊院村庄屋・肝煎中宛 宝曆五年八月 一通 三九九一

寺請狀（さつニ係ル） 大野村密寺大日寺 慈尊院
村阿弥陀寺宛 宝曆五年八月 一通 三九九二

宗旨請狀（学文路村玉屋与次右衛門女子つまニ係ル）
学文路西光寺 慈尊院村阿弥陀寺・役人衆中宛
宝曆五年八月 一通 四〇〇一

禿村与治右衛門女子つま村送り狀 禿村庄屋清
左衛門 慈尊院村役人中宛 亥九月（宝曆五年） 一通 四〇〇二

宗旨寺請狀（賢堂村小左衛門子息權兵衛養子入）賢
堂村定福寺・庄屋弥右衛門 慈尊院村阿彌陀寺・役
人中宛 宝曆七年九月 一通 四〇一

芋生村伝右衛門弟勇次郎宗門送り手形 紀州伊
都郡芋生村東光寺 同国寺領慈尊院村阿弥陀寺宛
安政五年正月 一通 四〇三

村加入人熊藏ニ付親類請一札 村加入人熊藏・親
類請茂十郎・源次 中橋氏宛 安政七年正月 一通 四〇四

宗旨送り一札（大窪村池田平助倅平四郎） 播州
明石郡大窪村光觸寺 紀州伊都郡慈尊院村阿弥陀寺
宛 慶応元年九月 一通 四〇五

宗門送手形（市原村平吉） 市原村庄屋善左衛門・同村地藏寺 慈尊院村庄屋勘之丞宛 酉正月

一通 四〇六

○往来手形

往来一札（熊内村弥兵衛并治三郎両人心願二付大社順拜） 摂州兎原郡熊内村法西寺 所々関所役人中宛 天保九年九月

一通 二四七

* 寺往来一札雛形（濃州加納宿欣淨寺往来一札写） 阿遮梨本内写 弘化五年三月

一通 四〇八

渡 船 場

無 錢 渡

向十カ年無錢渡祠堂銀仕法書写（伊都郡東家・橋本・寺脇・清水四カ村支配之横渡式カ所） 学侶方役人最勝院・行人方役人幸福院・聖方行人淨眞院・東家組大庄屋脇熊太郎 享保五年正月

半

仮一冊 四〇九

慈尊院村中橋勘之丞願書控（慈尊院村無錢渡万人講勸化二付大坂表寺中御通達之儀） 年預代宛 宝曆十一年十一月

二通 四一四

年預坊廻文之写（慈尊院村横渡舟無錢渡之儀立願人僧律幢巡行二付） 未三月二五日（安永四年カ）

一通 四五一

惣分方御廻文之写（慈尊院船場無錢渡立願人僧律幢巡行二付） 未四月（安永四年カ）

一通 四一五

（慈尊院村順札往来船無錢渡之儀明申年迄ケ年始度旨願書） 慈尊院村願主律幢・庄屋新五兵衛・与市郎連印 年預代宛 安永四年二月

二通 四一六

（無錢渡シ願濟二付年預坊被仰渡写并無錢渡船頭請証・無錢渡仕法書上） 下書 慈尊院村庄屋新五兵衛・与市郎・年寄孫右衛門・金右衛門・藤左衛門・中橋勘之丞 年預代宛 安永五年十二月

半

一冊 四一七

慈尊院村永代無錢渡祠堂証文 寺務青巖寺并宝性院他二院連署・年預坊 慈尊院村地頭北室院・同金剛頂院・願主宿坊持明院右三ヶ院開次・願主武州本庄宿威徳院一代百光律幢房宛 安永六年八月

一通 四一八

律幢願書下書（無錢渡シ祠堂金御支分御下ケ方二付）（安永六年カ）

一通 四一〇

慈尊院無錢渡諸事掟書（村役人江申渡条々・役人カ船頭江可申渡条々・船頭カ村方役人江差入候請合書案文之事・無錢渡年中入用大旨定・安永七戌二月村中総請連印写） 年預坊 慈尊院村中宛 安永六年八月

一卷 四一九

無船渡永祠堂当年分支分銀之内御下ケ願書書扣 慈尊院村願主律幢 年預代宛 安永六年二月

一通 四二〇

（永祠堂銀世話役切替二付年預表江内願筋窺書下書）（律幢カ）

一通 四二五

慈尊院村永代無錢渡船供養御札口上覚扣 慈尊院村中橋勘之丞・願主律幢 年預代宛 安永七年三月七日

一通 四二三

無錢渡り方余銀記録 船懸り役人当番・中橋氏享和元一明治元年

半

一冊 四二二

無錢渡り方余銀記録 船懸役人 明治二一同四年

美

一冊 四二三

無錢渡勘録書（當時村方役人手前算用御尋二付書上） 慈尊院村役人彦兵衛・宮内・中橋勘之丞 年番持明院宛 天保二年三月

半

一冊 四二四

無錢渡小家積り書写 慈尊院村役人庄屋幸助・左京・中橋勘之丞奥印 北室院納処宛 安政三年二月

一通 四二五

横渡シ場出入

(名倉村新規船渡守仁右衛門・伴七乱妨一件掛合留) 村役人記 元文四年二月二十四日―同五年正月 半 一冊 四〇一

日次記〔名倉村新横渡船差障一件〕 元文五年正月 半 一冊 四〇二

元文五年重要記〔慈尊院村横渡シ舟場之儀和歌山表掛合之書留〕 元文五年正月―同三月 半 一冊 四〇三

元文六辛酉年日並記〔名倉村渡舟之者巡礼旅人乗候儀差止之儀掛合留〕 半 一冊 四〇四

慈尊院村横渡一件之記録 寛保元年四月七日写 半 一冊 四〇五

船 人

(横渡シ船勤方請合証文) 二郎四郎・新太郎 役人中宛 宝曆元年二月二十六日 一通 四二

横渡シ船証文 渡シ船主新太郎・七三郎・請人質主定右衛門跡・彦兵衛連印 役人中宛 宝曆三年二月二十五日 一通 四二一

横渡シ船上銀月割目録 新太郎・七三郎 役人中宛 西二月二十五日 一通 四二二

横渡シ船勤方請合証文 新太郎・七三郎 役人中宛 宝曆三年二月二十六日 一通 四二三

船修復・新造

慈尊院村無錢船渡シ舟造リ替_{ニ付}御年番持明院様_ノ船之儀委敷書上_ケ候様御申渡_{ニテ}差上候控 中橋嘉兵衛・村役人新五兵衛・又重郎 当番持明院宛 文政二年七月二一日 半 一冊 四三

無船渡新艘造り立目録 文政八年九月 半 一冊 四三

若山御下向御用船_{ニ付}御請書 慈尊院村船持長五郎・定吉 中橋勘之丞宛・文政一〇年三月 美 一冊 三九〇

高野山御用船之儀_{ニ付}中橋氏へ差入置御請書 慈尊院村船人長五郎・同定吉 中橋勘之丞宛 文政一〇年三月 半 一冊 一〇七〇

(無錢渡船破損繕入用覚) 申八月一九日付 一通 四六

新艘注文 一通 四七

北国杉・新宮杉板直段書 弥左衛門 慈尊院村定吉宛 申九月朔日付 一通 四六

船大工六左衛門書状〔横渡シ船出来之旨〕 慈尊院村役人中宛 九月二一日 一通 一三三

高野山無錢方年番持明院書状〔無錢渡新艘造り願聞濟之旨〕 慈尊院村役人中宛 七月二十六日(天保一四年) 一通 一五一

付録 紀伊国那賀郡粉河村伊藤家文書

| | |
|---|------------------|
| 御尋之猫しらべ帳 粉河組 粉河村他一七カ村庄 屋連印 伊藤八郎宛 安永八年四月 写共 | 二冊 二五三 |
| 森大膳書狀(過日饗応之礼と駿河屋饅頭駈違い一件) 八郎・八助宛 九月一日付 | 一通 二五四 |
| 某氏消息 極月三日付 | 一通 二三七 |
| 和歌山湊本町三、吉野材木検査所川村総山書狀 粉河町伊藤氏宛 十一月二日付 | 一通 二三五 |
| 米国ミシガン州アナバー北国街児玉亮太郎書簡 伊藤普宛 明治二八年二月一日 | 一通 二三三 |
| 十善会根本道場苾芻雲照書狀 和歌山県紀州粉 河伊藤普宛 二月朔日(明治三四年) | 一通 二三三 |
| 十善戒自受法 苾芻雲照授与 東京牛込区市ケ谷 秀英舎工場印刷 | 一枚 一三四 |
| 伊藤宣将書狀 付、土佐横矢重朝撰「明智光秀論」 同封 八馬大人宛 五月二四日付 | 一通 一三六 一枚 一三五 |
| 貫道書(七言絶句) (祝伊藤宣将先生之栄転) | 一枚 一三五 |
| 金原明善書 九十老 | 一枚 一四八 |
| ○ | |
| 三社詠宣 | 一通 一五三 |

| | |
|--|---------|
| 観音大士像・摩訶般若波羅密心經 附、観音大 士像二題スル般若心経縁由・釈尊画像縁由 東 叡山浄名院光輪画・浅草花徳院慶中書 大正四年八 月 | 板三枚 一三六 |
| 権大僧正本雅書(福祿寿) 七十四翁 | 一枚 一五〇 |
| 蘭村雪嶺画(恵比寿画像) | 一枚 一三六 |
| 天台沙門光輪画(布袋画像) | 一枚 一三四 |
| 僧光輪画(花二題) | 二枚 一三五 |
| 僧間雲光輪画(打出小槌) 癸卯元旦 | 一枚 一三六 |
| 晴禾画(福祿寿) | 一枚 一三七 |
| ○ | |
| 伴蒿溪作鎌倉和田盃之記 | 一通 一四九 |
| 夕霧太夫文 吉田屋蔵板 | 一通 一三五 |
| ○ | |
| 菫押花(包紙二俳句一首) | 一包 一五八 |

紀伊国 伊都郡 慈尊院中橋家文書目録 解題

一 文書の伝来

本文書は和歌山県伊都郡九度山町慈尊院中橋家の原蔵にかかり、故宇野修平氏（当時東京女子大学教授）のご紹介を得て、昭和四三年三月中橋家の縁家和歌山県那賀郡粉河町伊藤醇彦氏から当館に寄託され、同四五年二月改めて同氏から譲渡され、当館の所蔵に帰したものである。

二 高野山政所と慈尊院の開創

高野山の西北方の山麓、紀ノ川の南岸にあつて、俗に女人高野として知られる慈尊院（現・和歌山県伊都郡九度山町慈尊院）は『紀伊続風土記』によれば「当伽藍は高野山下百八十町戊亥の方に当れり、則大師預しめ母公の奉為に弥勒菩薩を製作ありて伽藍を草創し、山号を万年山と名け、弥勒安置の壇を慈氏寺と称し、明神勧請の壇を神通寺と号し玉ふ、是を両壇と云、慈尊院は総名なり、或は大師高野開闢の時、此地に避寒棲息し給ふ所にて又は下院と云とそ」と説明されている。また寛文年間に刊行された名所記「高野山通念集」⁽¹⁾の「慈尊院」の項には「むかし家田村と申せし所也、御手印の縁起の図には高野山政所と記さる、又は下院とも云、往古は山上の諸事を専此所にて支配せしにより政所といひしとかや、旧記まちまちにして考るにいとまなし」（傍点、引用者）とある。

往古、高野政所と称されたという慈尊院の開基の年次は詳かでないが、弘仁七年（八一六）空海が嵯峨天皇から高野山の地の下賜を勅許され、

山上に伽藍の建設を開始した際、山麓の家田（掩田・菴田とも）の地に冬期の厳寒を避けて住まれ、伽藍建設に要する資財の調達・集積・管理の基地とされたために政所とも下院とも呼ばれ、後年その堂宇の一の持仏堂が慈尊院と呼ばれるようになったと思われる。すなわち「高野山通念集」に云うところの「御手印御縁起」は一一世紀初めの頃の成立と推測されているが、同図には「金剛峯寺政所」として大小八字の堂舎が描かれている。⁽²⁾

ところで、人跡稀な高野山における草創期の伽藍建設事業は立地条件の制約もあり、着手当初から苦難の連続であったとされ、高野山下賜の年から一〇年を経た天長三年（八二六）正月一日、政所で仁王会が修されたのも、山上の工事が遅々として進捗しなかった証左であるという。⁽³⁾ 承和二年（八三五）二月金剛峯寺は定額寺となったが、同年三月二日伽藍未完のうちに大師は入定。大師入定後の高野山の経営は東寺長者実恵の援助のもとに後僧正眞然が継承したが、当時寺領と称するものは全くなく、翌三年五月紀伊国司が金剛峯寺俗別当を兼ね、以後経営面は国司の管理を受けることになったというから、⁽⁴⁾ 政所の存在は有名無実のように思われる。貞観一八年（八七六）に至り、伊都・那賀・牟婁・名草の四郡に散在する三八町歩が不輸租田として認められ、最初の莊園が成立したというから、ようやく高野山経営の経済的基盤が得られたことになるが、大師の後継者眞然の入寂後、年分度者の定員や「三十策子」の帰属をめぐっての東寺と高野山の紛争は、延喜一六年（九一六）の眞然直系の座主無空の高野離山にまで発展し、眞然の努力によって伽藍の一応の完成をみた高野山は荒廃状態となり、法燈断絶の危機にさらされたという。

その間、延喜一二年（九一二）東寺長者観賢は金剛峯寺座主を兼摂し、その後高野山は戦国の動乱期まで東寺の末寺として、その支配を受けることになった。京都に在った観賢は座主不在の高野山の実質上の管理者として正別当を設け、眞然と観賢共通の弟子峰禪をこれに任じた。金剛峯寺執行職の始まりとされる。これより二年前の延喜一〇年には東寺で御影供が始められ、同二年には宿願の「弘法大師」の諡号の獲得など、宇多・醍醐両帝の代になって、高野弥勒浄土説や弘法大師の入定信仰が定着流布しつつあって、徐々に高野山は隆盛期に入っていたとされる。もっともその後も天曆六年（九五二）・正暦五年（九九四）の両度の落雷によって伽藍諸堂の焼失などの災厄を受け、再度の荒廃期を迎えているが、高野山中興の祖と呼ばれる祈親上人（定譽）の入山を契機とし、一一世紀に入って本格的な復興運動が展開された。そしてこの高

野山の隆盛に拍車を加えたのが、治安三年（一〇二三）藤原道長の高野参詣であつたとされる。この時道長は高野山に政所河南の地を寄進しているが、「扶桑略記」治安三年（一〇二二・同二四日）の条に、道長が登山の往復に山麓の政所に立寄つたことが記されている。和多秀乘氏は、この道長の高野山参詣が摂関や院の高野詣の先鞭をつけ、地方的な高野山を一挙に天下の霊場の地位に高めたと評価されるが、政所もその表参道の登山口にあつて貴紳の休息・宿所として、以後の「参詣記」に屢々登場することになる。

ついで永承三年（一〇四八）藤原頼通が高野参詣の際、政所河北の地を寄進したが、翌四年五月、高野山は貞観一八年以来の四郡に散在する莊園と、政所前田並びに荒野との交換を願出て同年一二月聴許され、政所河南・河北を併せた官省符莊が成立した。以後の政所は官省符莊の中心に位置し、河南・河北を併せ管することになったという。

なお「宇治関白藤原頼道高野参詣記」にみえる政所は「以別当房為御在所、其南廊為諸大夫坐・其東為贊殿、以便宜僧房雜舍為上達部、殿上人・僧綱以下宿所、始自御所鋪設裝束、政所・御廨・御隨身所・小舎人所・諸大夫宿所・国宰所儲也」とある。⁽⁵⁾時の権力者頼道の参詣には多勢の随従者を伴つており、宿所の設営には国司が当り、関白の御在所に別当房が当てられ、その南廊を諸大夫の座とし、その東を贊殿とする。便宜を以て僧房・雜舍を上達部・殿上人・僧綱以下の宿所としたものである。

因みに、この藤原道長・頼通父子の高野参詣に先だつ一一世紀初頭頃の成立とされる「御手印縁起」には金剛峯寺政所として大小八字の堂舎が描かれていたことを前に觸れたが、これとはほぼ同時期の寛弘元年（一〇〇四）九月二五日太政官符所引の同年七月二八日付金剛峯寺奏状⁽⁶⁾には「寺家人跡遙隔雲霧難晴、日景鎮寒納物易損、仍本願大師、山麓伊都郡家多村建政所舍庫藏等、納置眞言法文・衣鉢資具并仏聖供・修理料等雜物、三綱・小綱職掌係丁等、申下官符免除臨時雜役、偏勤仕寺役」とあり、弘法大師が高野山上の地理・氣象上の悪条件を考慮して、山麓の家多村に政所を設け、経文・仏具・修理料等の雜具を收納する舍庫を建てたと、政所の始源について述べ、当時政所には三綱・小綱職掌係丁等が置かれており、臨時雜役を免除されていたことが判る。

ついで寛治二年（一〇八八）白河上皇の高野参詣は朝廷の参詣の嚆矢とされるが、以後の院や貴族の高野参詣の盛行は、寺領莊園の寄進・堂舎建立の援助を伴うものであつたから、平安中期までは微々たるものであつた高野山寺領は俄かに庞大なものになつたという（第1表参照）

第1表 鎌倉時代高野山所領表

| 所 | 領 (町數・石數は寄進當時のものを示す) | 歸屬 | 歸屬年代 | 寄進者 |
|--------------------------------------|-------------------------|------------|--------------|-----|
| 六箇七郷 (紀伊國伊都郡内、天野・花坂・志賀・四村・教良寺・山崎) | 天野社 | 正曆五年(九九四) | 東三條院 | |
| 官省符莊(紀伊國伊都郡) | 金剛峯寺 | 永承四年(一〇四九) | (相博) | |
| 能見莊(安藝國、百八石) | 金剛峯寺 | 寛治五年(一〇九一) | 白河院 | |
| 名手莊(紀伊國那賀郡) | 大塔 | 嘉承元年(一一〇六) | 白河院 | |
| 賀部莊(安藝國、百八石) | 金剛峯寺 | 大治二年(一二二七) | 白河院 | |
| 阿麻莊(同) | 西塔 | 長承元年(一一三二) | (鳥羽院) | |
| 濱沖莊(紀伊國海部郡) | 金剛心院 | 久安四年(一一四八) | 藤原忠實 | |
| 荒河莊(同 那賀郡、四十八町) | 六角經藏 | 平治元年(一一五六) | 美福門院 | |
| 南部莊(同 日高郡) | 蓮華乘院 | 承安五年(一一七五) | 五辻宮頌子内親王 | |
| 太田莊(備後國、六百十三町) | 大塔 | 文治二年(一一八六) | 後白河院 | |
| 穴咋莊(阿波國) | 蓮華乘院 | 建保四年(一二一六) | 宣陽門院 | |
| 麻生津莊(紀伊國那賀郡) | 金剛峯寺 | 承久元年(一二一九) | 後鳥羽院 | |
| 神野眞國莊(同上) | 奧院 | 承久三年(一二二一) | 後高倉院 | |
| 粥田莊(筑前國、三百五十町) | 金剛三昧院 | 貞應三年(一二二四) | 平政子 | |
| 近木莊(和泉國) | 天野社 | 正應五年(一二九二) | 鎌倉幕府 後深草院 | |
| 阿呂河莊(紀伊國有田郡) | 金剛峯寺 | 嘉元二年(一三〇四) | | |

江頭恒治『高野山領莊園の研究』より

から、政所の構成や機能も自ら変化していったものと思われる。

以上、慈尊院の草創としての「高野政所」についてみてきたが、如上の史料では高野山登山口の宿所と寺庫としての役割以外は詳かでない。

「慈尊院」の史料上の初見は狭い管見の範囲では天治元年(一一二四)鳥羽上皇の「高野御幸記」の次の一節である。⁽⁷⁾

御所坤角構簷有一小堂、号日慈尊院、院中有一僧、夏菴漸積、白眉颯然、尋其子細、答之、此寺有弥勒像、昔惠理僧都手擁斧所造也、久修法華三昧、期以竜華之暎、上皇聞食此事、窃以渡御、礼仏之後即還御(一〇月二五日の条)

上皇御在所の西南の一角にある一小堂が慈尊院であり、白眉の住僧の名は記されていないが、恵理僧都製作の弥勒像を窃かに鳥羽上皇が拝礼されて還御されたというものである。

『紀伊統風土記』にもみられるように、慈尊院の本尊弥勒菩薩像は、古くから弘法大師の御作と伝えられ、永く秘仏とされてきたが、昭和三七年文化庁技官の調査によって、裳先裏面に「寛平四年壬子五月十九日造仏事已了」の墨書銘が確認され、翌年国宝に指定された。山本智教氏によれば、製作者恵理僧都は正しくは会理であり、寛平四年（八九二）は会理三八才の時に当るとされており、お堂の建立もその頃と推測されている。もっともその弥勒堂が弘法大師母公の御廟と同一視されるのは、ずっと後世のことと付言されているが、その時期については觸れられない。

下って承安元年（一一七一）慈尊院を含む政所は東寺長者が派遣した目代慶幸俊巖らの濫行によって焼失した。このことを伝える承安四年二月の「高野山住僧等愁状案」⁽¹⁰⁾には焼失した堂舎を「始自慈尊院大師御持堂御格子昔大師御常住房、今累代上皇御所、渡廊 食堂 僧房 護摩堂 三昧僧房 東廊小舎人所 又倉蒼大師御在世之御宝藏也 両納蒼 温屋北門八足 南門棟門 脇門平門等数字舎殿、一時成灰燼畢」と記されており、慈尊院は当時大師御持堂と認識されていたことが判る。

なお「同愁状案」によると、この慶幸らの「濫行不善」の所業は「東寺灌頂布施闕如」を理由とするものであって、単に政所の焼亡に止まらず、「目代の非例」は「山上下不論有罪无罪、令追捕之間、蒙罪令流浪之輩五百余人、破却之房舎民屋八十余宇、没官田地所領五十余町、凡老少交山野、縋素企逃脱之類、不可稱計」とあり、また「於政所近隣之舎宅者、代々御幸之時、諸卿臣之御宿所也、然始自慈尊院、至于近辺之小屋、云焼失、云破却、悉以私地畢」と述べており、貴紳参詣の宿所としての政所の周辺には、かなりの聚落が形成されていたことが窺われる。

ところで、慈尊院の再建は聖跡の破滅を悲んだ高野山検校禅信の私力によって四年後に成功したというが、政所の再建については詳かでない。田中文英氏によれば、⁽¹¹⁾ 一一世紀中葉以後の高野山は莊園の集積・諸伽藍の建立・山僧の増加などによって膨張する寺務を管理統轄し、在地における農民層の成長とその闘争の激化に対決しつつ、莊園支配を実現するために管理支配機構の拡充・整備が必然的に要請され、政所機構も一一

世紀末を境として山上と山下とに機構分離をとげ、山下政所は山上政所の統制下に属する実務機関として位置づけられ、山下政所を構成する三網を含めての所司は、上層農民に一定の特権を付与して権力編成が行われたという。詳細に検討したわけではないが、高野山文書にみえる以後の「政所」の語は官省符荘の異称として用いられることが多かったように思われる。そして憶測の域を出ないが、この頃から慈尊院は政所の外存在になっていったように思われる。

なお鎌倉末から南北朝初期の元徳・元弘年間（一三二九—一三三三）の「高野山衆徒供料支配帳」⁽¹²⁾によると、山下分として上御供田五口・正別当御分二口・小別当分二口のほか、十人所司が各二口宛、惣執行六口・田所六口・河南執行七口・河北執行三口とあり、うち惣執行・田所は所司を兼務している。また慈尊院三昧六人（日生房・行然房・禅忍房・妙性房・善法房・慶光房）各二口、神通寺供僧（眼光房・長達房・善勝房）各一口、慈尊院修理行事一口の供料が付されている。

慈尊院の鎮守、若しくは官省符荘の氏神としての神通寺の創祀の時期については明らかでないが、一四世紀の前半には『紀伊統風土記』に云うところの慈氏寺・神通寺の両壇を以って慈尊院の総称とする祖型が出来ていたことが窺われる。そして注目されることは、ほぼ同時期の延元二年（一三三七）の「官省符荘在家支配帳」⁽¹³⁾中に、僅か一カ所ではあるが竜仙坊入寺免一字として「結縁寺」なる地名が見出されることである。

前にもみた通り、弘法大師の創建にかかると伝えられる高野政所は家田（掩田）の地とされ、近世における慈尊院村の古名と通念されている。そして掩田の地名は高野山文書に正治元年（一一九九）六月二日付「僧実源田地房舍替券」・嘉禎四年（一二三八）十一月二九日付「僧覚敏畠地売券」に「在高野政所菴田島」とみえ、文永六年（一二六九）二月八日付「阿闍梨尊恵御影堂陀羅尼田寄進状」には「高野政所河南字菴田石坪」など、官省符荘河南の地菴田島の地名は一五世紀の後半まで売券や寄進状に散見されるが、官省符荘に含まれる村名には見出されず、応永元年（一三九四）十一月「政所河南方田数目録」⁽¹⁴⁾には、「久度山村分」中に「同村庵田嶋」とみえ、続いて「結縁寺村分、田二町三反半歩
荒三反三百卅歩、畠三町二反大五十歩 荒六十歩、在家十一宇 下地一町一反六十歩此外田四十歩アリ、新畠一町六反三百十歩此外畠荒在抜群」と記載されている。この結縁寺村が、のち西島分と合して慈尊院村となるとの確たる証明はないが、中橋家の家譜（史料番号一五四〇）中

に嘗て慈尊院を「結縁寺ト号」とあるから、ほぼ誤りないと思われる。このことは何時の時点かは特定できないが、慈尊院は久度山村の菴田の地からの移転のことがあったと推測されるのである。

承安元年回祿の四年後に慈尊院は禪信法橋によって再建されたところがあるが、その後も「高野山檢校帳」⁽¹⁵⁾によると、第百五十六代檢校法印弘算の時、寛正五年（一四六四）沙門円海の勸進によって「四月廿一日ヨリ七月十二日マテ慈尊院造営之」とあり、⁽¹⁶⁾次いで第百八十四代檢校法印堯栄の時「慈尊院弥勒堂上エ引」とある。これは「高野春状」天文九年（一五四〇）の条に「夏四月九日洪水氾濫。慈尊院伽藍境内過半成河欠。故曳移堂塔鐘樓於上築地」（中略）秋九月廿三日^{午刻}所曳移之伽藍大成矣^{今之堂塔也但塔者半造}とあり、つづいて同書には翌天文一〇年三月二五日「慈尊院伽藍落慶、執行大曼荼羅供。慶導師檢校大和尚。職衆五十口」の記事に照応する。天文九年の紀ノ川の氾濫によって堂塔の過半が河に没してしまったため、高所に引上げられ、天文一〇年に伽藍は落慶、以後慈尊院は近世を通じ、現在に至るまで同地にあると伝えられている。

なお、慈尊院の本尊弥勒菩薩座像が昭和三八年国宝に指定されたことは前に記したが、同像を安置する弥勒堂は宝形造、檜皮葺で平安末期の建築様式を残し、内部構造は鎌倉期、外部は室町期の修理と推定され、昭和四〇年国の重要文化財に指定されている。⁽¹⁷⁾

ところで、一二世紀の七〇年代に弘法大師の御持堂と認識されていた慈尊院が菴田の地から移って、一四世紀の中頃には結縁寺なる地名を生じさせる聚落を形成したことが推測され、或いはこの頃から慈尊院を大師母公の廟所とする信仰が生じていたものかとも思われるが、推測の域を出ない。

三 慈尊院の縁起と中橋家の出自

以上、慈尊院の開創の経緯には不明なところが多々あるが、近世において慈尊院政所別当上綱家を称した中橋家の縁上にもとづく『紀伊統風土記』には、その縁起を次のように説く。

承和元年母公大師を慕ひ来り玉ふ事ありとも云、同二年二月五日娑婆の縁盡給ふ時、聖齡八十三とそ、山史に大師奉為慈母氏加持其屍成全

身舍利藏廟窟期慈氏下生と記、或肉身転せすして今に嚴然たりと云 此時大師兼て製作し給ふ弥勒尊も亦廟窟に納め奉るとそ廟窟は古来より余人の見るにあらはざる所なれば恐れありて云ひ盡しかたし 是より母公を即ち弥勒菩薩と尊敬し奉る（中略）大師の本地を亦弥勒菩薩と習ひ高野山は弥勒の浄土都率の内院を標し、此伽藍は其外院を示すとそ、又高野山は法界曼荼羅にして十方浄土を撰在す、此伽藍は其外院なれば此所に於てまつ男女道俗を結縁し有縁の浄土に往詣せしむる方便の土なれば結縁寺とも号す

慈尊院を大師自らの加持による聖母の廟所と説く縁起に沿って、中橋家の家伝はその元祖を大師の外戚阿刀氏とする。すなわち弘法大師の母公阿古屋姫の生家の異母弟阿刀大足大輔弘信は、実は大師の父佐伯大夫田公の弟（大師の叔父）で「壮年阿刀家ニ鞠養セラレテ親シク其系脉ヲ継」とあり、東寺執行家の初代とされる。中橋家の始祖はその次男阿刀元忠で大師の従弟に当たるとされる（後掲、中橋家系図一参照）。高野開闢の頃讃州より来って大師に常従し、西院谷に草庵を結んだが、承和元年大師を慕って来り給うも女人結界の地たりし故を以て登山を止められた大師の母公を、元忠が政所掩田の地に迎え、大師の孝志に代って母公を衛護すると共に、永く政所の別当に任じられ、且つ山頂の政務を作したという。もっとも母公は翌二年二月五日に八三才で入滅、つづいて同年三月二日大師入定後は剃髪して常香と称し、母公慈尊の聖廟に奉仕すること四四年、元慶二年（八七八）九三才にて卒したという。

二代元継は稚髪の後寂光と称し、延喜二十一年一〇月東寺長者観賢が帝の宣旨を奉じて、大師号・檜皮色の御衣を捧ぐるの時、高野五世峰禪大徳と共に廟窟に陪従したという。

四代永誉は一ノ井上綱と称す。長和五年（一〇〇三）二月祈親上人（定誉）特に来って当家に投宿、上人を山上に先導し、共に野山の復旧に盡力したという。西院谷今来が岡辺りに今に上綱屋敷というは、永誉が山上居住の跡なりとする。

五代貞昌は長暦三年（一〇三九）三月剃髪して元誉と号すとある。その剃髪は大師母公の霊夢によると伝えるものか⁽¹⁸⁾「長暦三己卯歳春三月蒙母公之霊夢、直見祈親明算之上上人語其所由、二上人共謹従霊夢、三月念一日献盛膳於影堂、是即永々祖師影堂例歳献供之濫觴也」と記し、江戸期に中橋家が家役とした毎年三月二日の高野山御影供の盛膳献供の由来の根元としている（もっとも家伝では五代元誉の時とするが、「続風土記」には四代永誉の時とする）。

六代光直の寛治二年（一〇八八）二月白河法皇の高野詣幸の時、政所へ御宿、当家へ上綱阿闍梨の永宣旨を賜うとある。

承安三年（一一七三）三月に没したとする九代光誓は「此代為白衣徒者、師母之ニ廟エ近仕スルハ不潔之恐不少、遂使 其季子出家 小庵」堀垣内建立令 居住 常充奉供拝念之代任」とあるのは、江戸期に慈尊院垣外にあつて阿闍梨を寺号とする小庵の起立を示唆するものか。

一〇代昌元の項には承安元年の慈尊院回祿のことに觸れ、「政所之倉庫諸堂焼失、祖師以来什宝之内五七品漸ク取出ス、是レ目代慶幸失火セシト云、故ニ其後目代之任闕職サセ畢ヌ云々」とあり、承安四年春の慈尊院の再興を録す。なお同人の没年は一本に建久五年（一一九四）二月二日、他の一本には建仁二年（一二〇二）九月二日と異同がある。

一一代康昌の代には建永元年（一二〇六）後鳥羽院の政所幸御を記す。

一三代光康の時、慈尊院から奥ノ院迄の参詣道の木製の町卒都婆が朽損したため、覺教（教）上人の発願によつて文永二年から十余年を費し、建治三年（一二七七）に至つて石製の町卒都婆が完成した事績を記す。

一四代弘光の時、正和二年（一一三三）後宇多院が政所へ詣幸。深夜弥勒御廟を開扉、御念誦あつて還御のことを記す。

二二代弘常は禪髪して理運と号す。文明六年（一四七四）信州の尼僧妙音が来つて、近い将来洪水によつて伽藍の侵流することを予言し、須く靈地を撰して移転することを勧めたので、理運は妙音尼と力を合わせて直ちに母公の廟及び諸堂を引曳し建立したと伝える。すなわち中橋家の家伝では天文九年の洪水より六十数年以前に堂舎の大半は移転済みであつたとしている。

二三代弘信は畠山家士遊佐氏の女を妻とし、禪髪後は信照入道と号したとある。同人の代天文九年四月「洪水汎濫慈氏寺伽藍地過半流失ス」とあり、前代の記事との関連は不詳であるが、「是時塀外コレアル四所之莊官等諸処エ離散ス、前条妙音尼ハ久ク信照ノ塀墻ノ裏阿弥陀堂ニ住シ、一日去テ不知其所之、土人呼テ謂母公之化身」と記している。弘法大師の親族阿刀・佐伯両氏の苗裔とされ、官省符莊の四所莊官であつた高坊・田所・岡・亀岡家は従前慈尊院の塀外に住居していたが、天文九年の洪水によつて他郷へ移つたこと、また洪水を予言して以来住みついていた妙音尼が或る日に忽然と姿を消してしまい、土地の人々は母公の化身と噂したと伝えている。また翌天文一〇年の慈尊院堂舎の落慶に關しては「天文十年堂舎落成供養而後毎經念有一年修理母公廟及ヒ拝堂小社、学侶之大衆降於野峯以設法会伸供養也、是日開扉ハ唯野峯執行代ト

中橋上綱二限ル」と記し、江戸期に恒例とされた二一年ごとの慈尊院上尊普請と高野山学侶による曼荼羅供養が、この時から始まったことを告げている。また同人の代、年次未詳であるが、和州領主と高野山との宇智郡の合戦に出陣して筒井勢と交戦し、三好新蔵を討取り、黒間郷を領すとある。また畠山両家の合戦に義就方に属して河州若江軍の時、神保平八を討ったほか勲功多しという。

二三代元常は天正九年（一五八一）織田信長の高野攻めの際、倅弘高と共に出陣。九度山の森と雨壺山・寺坂の峰等に砦を構えて防戦、翌一〇年二月織田の家將岡田長門守の率いる一万余騎が金光院の持場西尾山の砦を急襲し、金光院は討死、味方は大敗するも、元常父子の活躍で織田勢を敗走せしめ、その他数々の勲功によって、旧代よりの家禄四八〇石に加え、山林一カ所・新知百石を加増されたという。元常は文禄元年（一五九二）三月七〇才で没したとあるから、逆算すると大永二年（一五二三）生れとなる。

二四代弘高は天正一〇年春一五才で初陣。岡田長門守の先手物頭岡田丹右衛門を組討にして一時に美名を顕すと。この時東口の惣大将花王院より備前則光の刀を賜う。また高野山の下知に違背した安良川平野五大院左京の討手の将として発向し、即時に魁たる者どもを生捕り退治。この功によって一山より褒賞として下坂の槍（一本には弓鉄炮）并馬草料大豆二〇石を下賜すると。文禄四年七月関白秀次公青巖寺において御生害の時、弘高守禦の勤功あるにより米五〇石を賜る。関ヶ原役後、信州城主眞田昌幸・幸村父子浪人して近郷へ来住し、弘高と懇交あり。幸村は大坂入城に際し、備前延房（一本には筑前左文字）の刀を弘高に付与すると。故に好情を忘れず、弘高も大坂に参陣籠城するという。数度の合戦に勲功多し。但し落城の期より帰住。旧来数百の家禄爰に没して十分の一となりぬとある。家譜にはつづけて、弘高の武功を聞き伝えて諸侯から召出の使者があつたが、就中皆川山城守から数度の使札にて江戸表へ召出の上、旗本に吹捧せんとの懇望もだし難く、江戸表へ下り、当分は山城守より四百石（一本には七百石）を賜わり奉仕するも、寛永年中御上洛の時、弘高も山城守に陪従して上京したところ、国許より親類の者が出京して、大師以来の血脉相続する人無き故に、強く帰住を勧めたのに応じて暇を乞い受け、この時皆川家重代の菊一文字則宗（一本に後鳥羽帝菊御作之御太刀）を賜り帰国、家宝とす。然りし後、紀伊大納言様御帳に留られ、御城において御目見の上、御詞を賜わる。また野峯阿逸多院を以って数度召出の御意を拝戴すと、中橋家の高野山復帰を説明している。

以上が家譜が伝える近世初頭までの中橋家である（後掲「中橋家系図一」参照）。前に指摘したように、慈尊院が弘法大師母公の廟所とする

信仰が定着するのは可成り後年のことであるから、この中橋家の家伝は荒唐無稽の感を否めない。事実、公刊されている高野山文書に拠る限り、政所別当中橋氏の存在を証明する史料は見出されない。

江戸期において中橋家が弘法大師開創以来の高野政所別当家を自称する拠りどころとなつたこの由緒書が、何時の頃作成されたかは興味のあるところであるが詳かでない。ただ享保四年九月野山前寺務檢校懷英自跋の「高野春秋編年輯録」には、如上の中橋家の家伝を採録しており、また文化―天保期の中橋家の録上を採用した「紀伊続風土記」によつて、上記の家伝が世上に流布定着したと思われる。すなわち重複の煩を承知の上で、「続風土記」の慈尊院村の項に所載の「旧家中橋勘之丞」の記事を紹介してみると、次の通りである。

弘法大師の母家阿刀氏の後なり、其の家伝にいふ、其祖を元忠といふ、從五位下阿刀大足弘信の二男にて、弘仁七年弘法大師高野山を開きし時、大師に従ひて西院谷に住す、承和元年大師の母公讃州より当村に來りしに依りて、元忠を以て政所別当職とし、当村に住せしむ、子孫官省符莊を支配す、元忠剃髮して常香と称す、年九十三にして死す、代々別当職を襲きて今に至りて二十九代血脈相統連綿として絶えず、且代々長寿にて二十九代の間六十七才にて没せるを短命とす、嘉兵衛・勘之丞を一代替りに通名とす、元忠より四代目を永譽といふ、始めて中橋と称し、高坊・田所・亀岡三家と同じく高野管内を支配す、二十三代を元常といふ、此時秩四百八十石を領す、織田氏高野攻の時、其子弘高年十五、共に防戦して功あり、其賞として加秩して五百八十石を領す、文禄元年豊公高野山管内を定らるゝの後、高野山より三十石を弘高に分附す、慶長十九年弘高大坂城に籠り、遂に江戸に通る、家殆断絶せんとす、後 台命ありて野山より弘高を呼び歸へし、旧職に復すといふ、家に永譽の時、高野山持經上人より上奏の文あり、左に録す

一條院御宇寛弘元甲辰七月二十八日上奏状云、寺家人跡遙隔雲霧難晴日景鎮へ二寒納物易損、仍本願大師山麓伊都郡掩多村建政所舎庫寺納資具并仏餉人供修理料雜物、而三綱職掌之賜官符、不_レ入国使停止他妨々々 仍官符依_レ請下_二賜之

都維那高坊

三綱 執 行田所

上座 龜岡

政所預 中橋上綱永譽

因みに本居文庫旧蔵の「紀伊国古文書」(当館所蔵)は紀州藩の藩命による『統風土記』編纂に当って、本居大平らが紀伊国内の旧家の古文書採訪を行なった際の書写本であるが、そのうち「伊都郡文書部」に収められた中橋家文書は、右の持経上人の上奏文と称する一通のみである。しかも該文書は前に紹介した寛弘元年九月二五日付の太政官符案からの剽窃に、高坊・田所・亀岡の庄官家を三綱として、中橋家をその上座の政所預上綱とする偽文書の疑いは濃厚である。⁽¹⁹⁾該文書の採訪筆写に当った内蔵なる人物も疑念を抱いたとみえ、書写本の欄外に朱筆で「内蔵云、此文書ハ全文歟、可考」また「可省」との書入れがあり、『統風土記』の「古文書之部」への採録はみられない。要するに『統風土記』編纂当局者の古文書の採訪に当って、化政期の中橋家には疑問符つきの古文書が一通あっただけで、家伝を裏付ける史料は皆無であつたことが窺われる。なお『統風土記』には、阿刀氏の中橋姓の始称は四代永譽の時とあるが、中橋家の家譜には一本(史料番号一五四一)に九代光譽と記し、他の一本(史料番号一五四〇)には三代元常の時として異同があるが、史料の上で中橋家の存在が確認できる初見は、後者の元常の代である。すなわち天文九年の洪水以後散居したと伝えられる四荘官のうち、名倉村に居住した亀岡家所蔵の古文書で、天正七年(一五七九)二月一日付、高坊常敏から名倉村衆中へ宛てた同家相伝の知行山林「矢落山」の売券状にみえる口入人九名の中に「ジソイン浄光」の名前が見出される。⁽²⁰⁾『高野口町史』には、この口入人らを各村の役人(庄屋)と説明している。そしてこのことは、中橋家文書の天正二〇年正月「慈尊院村之名寄帳」(史料番号一二三)に村内で最高の石高(一二三石二斗八合)を保有する浄香の存在によって、ほぼ裏付けられる。結縁寺の地名が慈尊院を冠する村名となった時点も明らかでないが、該名寄帳は同地で前年の天正一九年に実施された太閤検地にもとずいて作帳されたと推測されるものの、同時期の検地帳登載百姓の性格は明らかではない。

ところで、中橋家と類似した家系を称する四荘官家が何時頃から官省符荘の荘官として土着したかについては明証はないが、前にみた元徳・元弘間「高野山衆徒供料支配帳」に、山下政所の十人所司の中に荘官を兼ねた田所氏の名が見出される。同史料にみえる惣執行・河南執行・河北執行の家名は不明であるが、年次未詳の「年預仵快覚書」⁽²²⁾に「惣執行上座御房 高取(坊カ)殿 岡殿 河南執行上座御房 河北執行上座御房 田所執行上座御房」とみえるから、鎌倉末期には官省符荘の高坊・田所・亀岡・岡家の所謂「四荘官家」は定着していたとみられる。そして応永六年(一三九九)六月八日「西塔供養庄官引馬支配帳」⁽²³⁾に、「政所 惣執行 鞍馬一疋、田所 鞍馬一疋、河南執行 裸馬一疋、河北執行 裸馬一疋、所司六人

裸馬一疋」とみえ、当時の荘官が武力を備えた地侍的存在であつたことが窺われる。事実、彼らは地縁的武士団としての政所一族を結成し、領家を異にする近隣の隅田一族と協力関係にあり、南北朝期には概ね南朝に属し、室町期には紀伊国守護畠山氏の被官となつていた模様である。⁽²⁴⁾ また織田信長の高野攻めに際しても、隅田一族と共に高野方に属し干戈を交えたと伝えられる。ただし中橋家がこの政所一族に加わつていたという形跡は認められない。⁽²⁵⁾

信長の高野攻めは本能寺の変によつて中絶したが、天正一三年三月、秀吉は根来攻略に引続き高野山に迫つたが、当時住山していた客僧木食応其の働きによつて高野山は兵火の難を免れたものの、中世莊園領主としての高野山は終焉を迎えた。⁽²⁶⁾ 高野山の屈服を受け入れた秀吉は三千石を寄進したが、その後検地の結果、高野山領が実質五万石にも及んでいることを知つて激怒し、寺領を全部没収したが、応其の奔走によつて都合二万千石を回復したという。

天正二〇年八月四日付「豊臣秀吉高野山寺領朱印状」によれば、この二万千石の寺領は伊都・那賀両郡の紀ノ川以南の地で、ほぼ「御手印縁起四至内」の地に相当するという。

この天正二〇年は前にも觸れた通り、中橋家三代元常の時に当り、同年の「慈尊院村之名寄帳」に浄香の名で登場する。当時の慈尊院村は本郷分（旧結縁寺村カ）のほか、西嶋分と越石分とみられる山崎分から成り、名請人の総数は六五軒、田方（米高）の合計は五九石六斗六升六合、畠方（大豆高）の合計は一一石四升二合、田畠石高総計は一七〇石一斗八合である。⁽²⁷⁾ うち屋敷地を保有するものは三六軒で、全体の五四%（四石以上は全員が屋敷持）である。村高の七・八%の石高一三石二九八を保有する（二位の与六は九石三六〇）中橋家の屋敷地は五筆分で計四畝五歩であり、他の名請人の屋敷地の大半が一畝乃至一畝未満であるのに比して、その大きさが極わだつており、村内での有力農民であつたことだけは窺われる。（後掲第4表参照）。とはいえ、同人の代、織田勢との攻防に功あつて、新知百石を加えて家禄五八〇名、天正の頃三〇石と家伝にあるのは、高野山寺領の減知と関連づけてのことと思われるが、これを裏付ける史料は見出せない。

ところで、天正二〇年現在、慈尊院村の有力農民として存在したとみられる中橋家の大坂参陣の眞偽については明らかでないが、「高野春状」の元和元年夏四月上旬の条に「寺領地士等入大坂城中。又急遭招故也」とあり、寺領から大坂方へ出陣の人々として、智莊巖院応政・五大

院刑部・高坊常敏・亀岡帥田所庄左衛門・喜多源助・山本角左衛門・平野八郎右衛門ら、莊官家・地士の中に混って中橋勘之丞長成の名が挙げられている。そして同書には「就中応政・刑部二人者、属木村長門守討死矣。其余令退散焉」とある。もつとも中橋家の家伝を鵜のみにした「高野春秋」の記事の採用は傍証を必要とするが、「高野山文書」の中に次のような史料が見出される。⁽²⁸⁾

慶長十九年十一月十八日於年預光寿院衆評

(一条略)

一智莊巖院并奉公ニ被出庄官衆跡闕所仕、同知行をも年預江納、^(支配)多分物ニ可仕候事

一智院并同宿二人、出交衆供領者、余人に昇進さすへき事

一長谷慈尊院両村、智院下并庄官衆下之納方請取之穿鑿、并闕所等之儀、^{成蓮院 宝音院}此兩人を頼可下候事、付納八年預可仕事

(一条略)

一今度住吉へ御見廻之時、行事代可参由、可申付候、以上

善集院(花押) 無量光院 龍光院

宝性院(花押) 無量寿院(花押) 如意輪寺(花押)

遍明院 正智院(花押) 高室院

金剛三昧院 多聞院(花押) 西南院(花押)

北室院(花押)

学侶寺院の筆頭格とされる智莊巖院并庄官衆闕所の理由は明示されていないが、「高野春秋」慶長一九年二月六日の条に「為学侶惣代使節」金剛頂院^{榮範 教乗坊} 献上御武運長栄之札卷数於住吉及牧方両御陣屋 帰来」とあり、上引の最後の条の住吉へ御見廻云々とは、このことを指すと思われるから、家康の関東軍へ帰順の意を表明し、武運長栄之札卷数の献上を予定している高野山において、恐らく智莊巖院の大坂方への参陣は処罰の対象となったことが窺われる。但し「高野春秋」は智莊巖院応政らの大坂参陣を夏の陣としているが、これで見ると前年の冬の陣のこと

と思われる。そして当時慈尊院村は智莊嚴院の院領村であつたとみられる。とすれば、地頭の指揮下、地侍的存在であつた中橋家の大坂参陣の可能性は認められるものの、大坂落城の夏の陣ではなく、冬の陣であつたのではあるまいか。なお中橋家の家譜は、これを二四代弘高とし、「高野春秋」は二十五代長成のこととしている。

以上みてきた通り、近世初頭までの中橋家の家伝は、多くの旧家の例に洩れず、紛飾の疑いが多く、中橋姓始称の時期に関する異同なども、後年の作為が窺えるし、代々の当主の長寿のことや、配偶者の家筋なども真偽のほどは確かめられない⁽²⁹⁾。けれども江戸後期中橋家は、この家伝を金科玉条の如く信奉していたと思われる、かつ村内外や領主である高野山に対しても、その意識のもとでの行動が顕著であるので、やや詳しく紹介してみた。

なお、現存の中橋家文書中、最古の史料は天正一七年二月一日付、木食内二位より慈尊院村へ宛てた科料錢百貫文の皆済状(史料番号一六九)である。先にみた天正二〇年の名寄帳の存在と併せ考えると、当時の中橋家は慈尊院村の村役人であつたことは確実とみられるが、慈尊院との関係は不明である。

四 江戸期の慈尊院村

ところで、太閤検地の結果、天正二〇年秀吉から二万千石の朱印地を下付された高野山は著しい所領規模の縮小をみたものの、慈尊院村にとつては前代から引つづいての領主という稀少例であつた。慶長六年高野寺領は家康によつて安堵され、そのまま幕末に及んでいるが、行人方と学侶方と別個に給付された朱印状の内訳は第2表の通りであり、慈尊院村は七五〇〇石の衆徒(学侶)領に属した。

慶長一〇年「高野山衆徒寺領目録」によれば、村高一六〇石、その後の村高の変遷を示すと第3表の通りである。

前にも觸れた通り、慶長一九年当時、智莊嚴院の藏下分であつたと思われる慈尊院村が地頭の闕所によつて、どのような変化があつたかは明らかではない。ただ中橋家文書の元和六年の「金剛頂院名寄帳」(史料番号二二四)と、寛永九年「北室院下名寄帳」(同三四三)は年次に一二

第2表 高野山寺領配分高

| | | |
|-----------|--------|---------|
| 伊都郡之内 | 東照宮御供領 | 100石 |
| 那賀郡之内 | 奥院領 | 2,000石 |
| 〃 | 修理領 | 1,000石 |
| 伊都郡之内 | 興山寺領* | 580石 |
| 〃 | 六人衆監 | 420石 |
| 伊都・那賀両郡之内 | 行人方 | 7,500石 |
| 都 合 | | 11,600石 |
| 伊都・那賀両郡之内 | 衆徒中 | 7,500石 |
| 伊都郡之内 | 青巖寺領** | 2,000石 |
| 都 合 | | 9,500石 |
| 都合二口計 | | 21,100石 |

注 * 先判雖為文珠院今改寺号
** 内1,000石は碩学領
(国立史料館編『寛文朱印留下』p.189～190より)

第3表 慈尊院村高の変遷

| 年 次 | 石 高 | 典 拠 |
|-------------|-----------------------|----------------------|
| 慶長10年(1605) | 160 ^石 .000 | 高野山衆徒中寺領目録(又続宝簡集六十八) |
| 享保1年(1716) | 174.399 | 中橋家文書〔143〕 |
| | (178.005とも) | 〃 〔156〕 |
| 天保度(1830年代) | 211.44555 | 天保郷帳・続風土記 |
| 幕 末 | 236.33285 | 木村礎校訂「旧高旧領取調帳」 |

第4表 慈尊院村持高構成

| | 天正20 (1592) | 元和6 (1620) A | 寛永9 (1632) B | A + B |
|------|----------------|--------------------|--------------------|-------|
| 13石台 | 1 | 0 | 0 | 0 |
| 9 〃 | 1 | 1 | 0 | 1 |
| 8 〃 | 0 | 1 | 1 | 2 |
| 7 〃 | 4 | 1 | 0 | 1 |
| 6 〃 | 1 | 1 | 0 | 1 |
| 5 〃 | 2 | 0 | 0 | 0 |
| 4 〃 | 3 | 2 | 4 | 6 |
| 3 〃 | 7 | 2 | 4 | 6 |
| 2 〃 | 15 | 5 | 7 | 12 |
| 1 〃 | 10 | 6 | 11 | 20 |
| 1石以下 | 23 | 29 | 18 | 47 |
| 計 | 67 | 51 | 45 | 96 |

注. Aは金剛頂院下(但し、山崎入百姓5名、北室院下重複百姓3名分を除く)
Bは北室院下(但し、入作9名と金剛頂院下重複百姓を除く)

年の開きはあるが、前者の石高の集計は八六石〇六一、後者が八六石七二九で、両者を合計すると一七二石七斗九升の数値が得られるから、慈尊院村は元和以降はほぼ折半された形で金剛頂院と北室院の蔵下分となっていたと思われる。⁽³⁰⁾ 地頭両院の下、各庄屋一、年寄一、村惣代一名が村役人を構成し、その任命は村方人札願出の上、地頭聴許の形をとっていた模様である。なお中橋家文書中には村方文書を殆ど欠くため、慈尊院村内部の事情を窺うことは難しいが、断片的に知り得たところは、享保元年現在、村高一七四石三九九の内訳は米方六七石三三七、大豆方一〇七石〇七二で、公事屋二九軒、水役二二軒（「巡見使御案内摘記」一五一）、また『紀伊続風土記』には家数一一七軒、人数三四二人とあり、神通寺七社明神のほか小祠六社として稲荷社・子守明神社・三十番神社・弁戔天社・愛宕金毘羅社・飯炊明神社、寺院は慈尊院のほか阿弥陀寺・勝利寺が存する。

江戸期の慈尊院村は中世に比べて高野参詣道としての機能は衰えたとされるが、それでも町石道の起点村として参詣者の吸引につとめたのであろうことは無銭渡しの波止場の維持が村レベルで行なわれていることによって窺われるし、女人高野としての慈尊院の存在、そして官省符莊二一村の総氏神としての神通寺七社明神の毎年九月晦日の祭礼には、近郷から多数の人々が参集して可成りの賑わいをみせた模様であり、一種の門前町のたたずまいが推察されるのである。

五 江戸期の中橋家

中橋家は二四代弘高の代から勘之丞・嘉兵衛を一代おきに通り名としている。因みに江戸期の中橋家は慈尊院村のうち、北室院蔵下に属し、寛永九年の「北室院下名寄帳」には勘之丞（弘高六三才）三石七八八、賀兵衛（長成四〇才）四石七五〇（両人の合計は八石五三八）とみえ、天正二〇年に一三石余を保有し、村内で突出した存在から後退している（第四表参照）。

二五代嘉兵衛長成は元禄四年（一六九一）七月朔日、九三才で没したとあるから文禄二年生れとなる。家譜には元和二年二〇才（計算上は二四才）の時、強盗数人を生捕り、野峰より褒美を賜るとある。そして「例歳三月祖師影堂工盛膳之献供ハ旧代ヨリ当家調進之、但シ当御朱印之

後、元和年中ヨリ惣預之坊調之任ト定リ、当家ハ是ヲ点檢シ奉供スル規格トナル」また「慈尊院伽藍兩壇修理之定法、氏子国領割符人足掛等、長成代規定相立ナリ」とあつて、一四世紀ごろから三昧六人・承仕一人が置かれていた慈尊院の経営を中橋家が担当するようになったのは、同人の代とみてほぼ間違いないと思われる。すなわち家伝で五代貞昌の時に始まったとされる御影供盛物の献供のことは、元和年中より惣預の管掌となり、中橋家はこれを点検するのを家職とするようになったというものであり、また天文九年以来の二一年目ごとの弥勒堂・神通寺兩壇の上葺入用の負担の規格も同人の代に定まったとするものである。

もつとも中橋家が慈尊院別当となつて、弥勒廟の上葺曼荼羅供養が執行された最初は恐らく慶安三年のことであつたと思われる。何となれば「高野山文書」には、天文二〇年（一五四一）の慈尊院落慶から二〇年を経た永祿四年（一五六一）の「慈尊院弥勒堂供養曼荼羅供請定」⁽³²⁾が見出されるにも拘わらず、中橋家文書の「御廟上葺供養年代控」（史料番号一〇二七・同四六九）には、慶安三年以前に関しては、永正一四年（一五一七）三月・天文九年（一五四〇）九月二三日・元和七年（一六二二）九月晦日としており、「高野山文書」にみえる永祿四年の上葺供養が洩れており、また慶安三年に記された「元和七 years 上葺一件覚書」（史料番号四六三）は、同年が慶安三年を遡ること二〇年であることから、全くの虚構とは断言できないが、「高野春秋」元和七年の条には「五月、慈尊院弥勒堂上葺供養」とあるのみで、同書が慈尊院弥勒堂上葺供養のことを伝える際に必ず記載される導師の名が見られない。⁽³³⁾

ともあれ、現存する中橋家文書のうち、慈尊院別当家として家職に関する書類が見出されるのは、二五代長成の代からである。

二六代充祇は享保一〇年正月二日、八〇才で没すとあるから、逆算すると正保三年（一六四六）生まれとなる。同人に関しては二七代元珎の書留⁽³⁴⁾によると「祖父長成ニ有二男、嫡子ハ家督ニ相立、次男ハ惣望により平野氏⁽³⁵⁾へ嗣子ニ入家サセテ後、嫡子早世ス、於是平野氏ト約諾シテ嗣子ニ入家之事は不変、彼氏ニて出産之嫡男当家エ引取ル、是レ乃チ廿六代充祇ナリ、其弟重左衛門ト云テ平野家を継ク、三男堀江平右衛門、四男親王院一世天翁ナリ、五女ハ桃谷善兵衛妻タリ、実ニ累代血脉相統之中、充祇他家ヨリ来リシ系脉トノミ顕レテハ紛雜スル故、爰ニ其嫡脉タル事ヲ遺記ストナリ」とあつて、「紀伊統風土記」に記すところの「二十九代血脉相統連綿として絶えず」と誇示した中橋家の家系にあつて、二六代充祇が縁家からの養子であつたことの弁明乃至は血統の正当性への主張であつたとみられる。⁽³⁶⁾

また充祇の代、堀垣内小庵を慈氏寺の堀外へ曳移して再建とあり、家伝で九代光誉の時、末子を出家させて小庵に常住奉供させたとする阿闍梨（寺号）のことと思われる。すなわち「続風土記」には、この阿闍梨について次のように記している。

阿闍梨境内西の堀外にあり

母公慈尊大師を慕ひ来り給ふ頃中橋元祖大師の孝志に代り此地に侍衛し終りを弔ひ奉りしより以来、世々廟前の奉仕伽藍の奠供等怠たらしりしが、第九世光誉在俗の身潔からざることを恐れ、其季子をして出家せしめ、小庵を堀垣内に結び光誉代任として奉供慇懃ならしむ、建永二年 後鳥羽上皇御幸の日阿闍梨の宣旨ありてより永く寺号となる。貞享元年今の地に坊舎を曳移せり、爾しより今も開基代任の旧蹤を踏んてかならず中橋家の子たる契約ありて住僧となり、伽藍什具等其数を書して中橋家に納る古格ありとぞ、長日朝慈尊靈廟等の奉供奉念春初元三の修正会牛玉加持皆阿闍梨の任なり修正牛玉加持御法案に中橋氏必す出座あり 又三長月中冬廿一日御影供には勝利寺・護摩所留守僧出仕あり、導師阿闍梨の任なり、高野学侶より供料許多を賜う

所謂俗別当的な立場の中橋家に代わって慈尊院の仏事等に奉仕するための僧侶として阿闍梨への入院に際して、中橋家の猶子となる取極めが貞享元年とするものか否かは明らかではないが、後年の文化元年阿闍梨観宮「当寺要用雜記」（史料番号六二九）中に、慈尊院諸堂の散銭勘定について、天和四年（貞享改元）に中橋家と阿闍梨の間で、その取分と使途についての取極めを行なったことが記されており、中橋別当家と阿闍梨との契約関係がこの時成立したものと推測される。³⁷⁾

なお、充祇に関しては家譜に、元禄五年高野行人御政刑の事有之節、上使本多紀伊守殿の御用を相勤め、同年十一月紀州様より御書附を以って御褒美頂戴。年次の記載はないが、橋本団之丞という御尋の侍を生捕り、紀州表へ引渡し御褒美頂戴。南竜院様御代弘高御目見の例格により長成・充祇とも御城に於いて数度の御目見・年頭御札相勤むとある。

なお、中橋家文書中には同人の代に次のような「書上一札」³⁸⁾（史料番号六六九）がある。

差上申一札之事

今度為 上使仰高野領山上山下共二号鉄炮鐘其外武具馬具等御改被遊候、私儀代々地士二而当所二致居住、弓式張・鉄炮壱挺・鐘式本・具

足沓・鞍沓口・鍔沓足、古来々所持仕候、右之品々何方々も預り物ニ而無之段、紛無御座候、若向後相違之儀於有之は何分之曲事ニも可被仰付候、仍証文如件

高野領慈尊院村地士

元禄五年申八月二日

中橋勘之丞

紀伊大納言様御内

高橋与四郎殿

桑山新右衛門殿

中世的遺制が顯著であつた紀州において、元和五年浅野氏転封のあとをうけて入国した紀伊徳川氏が、土豪の懐柔策として採つたとされる地士制度は知られているが、高野寺領下における地士身分の設定が何時、誰によつて行なわれたかは明らかではない。ただ近世初頭の中橋家が兵農未分離な群小土豪の一員として存在したことは窺われる。そしてこの地士身分は夫役免除の特権を伴うものであつた。すなわち二七代⁽³⁹⁾元珍が元文五年八月に江戸寺社奉行所からの調査に対して提出した口上書扣（史料番号六七〇）には

今度御尋ニ付申上候口上書

一私儀弘法大師御由緒之ものニ而御座候ニ付慈尊院大師御母^(公カ)□之別当職仕罷在候、依之高野山々御知行式石五斗頂戴仕候故、帶刀夫役從往古御免之地士ニ而御座候、以上

紀州伊都郡高野領慈尊院村

慈氏別当 名印

元文五申歳八月廿日

御年領代様

これによると慈尊院別当職として、高野山から知行二石五斗を受けていることが、中橋家の地士身分の裏付けというようにみえる。
 因みに「続風土記」慈尊院の雑料(料カ)の項には「高二石五斗、七社及び慈尊月次御供料等学侶方よりは是を附す、此内別当中橋阿闍梨護摩所勝利寺神職等分配あり」とみえ、その配分の内訳を示すと第5表の通りである。⁽⁴⁰⁾

第5表 慈尊院寺社料配分明細

| | |
|----------|--------------------|
| 石 | |
| 2.500 | 中橋氏 |
| 3.000 | 阿闍梨料 |
| 2.000 | 慈尊院境内掃除料① |
| 2.000 | 御供所料 ② |
| 2.000 | 護摩堂 ③ |
| (11.500) | 慈尊院分小計) |
| 2.000 | 一之宮神主、四之宮兼坂上左内 |
| 1.000 | 二之宮神主、三之宮・八幡宮兼吹本宮内 |
| 0.666 | 天照・春日両宮神主 |
| 0.333 | 十二王寺百式十番神之神主 |
| 1.500 | 御供所役常右衛門④ |
| 0.250 | 巫女丹後分 |
| 0.250 | 〃 和泉分 |
| (6.000) | 神通寺七社明神分小計) |
| 3.000 | 勝利寺 |
| 20.500 | 総計 |

注①掃除役1人定置遣之

②正・五・九・十一御精進供料并正月松かざり等之料、別に1人定置遣之

③他に下行米1石8斗御年預御支配方より被下、毎月山上山下安全御祈禱護摩相勤、正・五・九・十一拝堂御法樂ニ出勤

④長日、明神壇内掃除料、正月かざり用之料

(「天保五年八月風土記御調子ニ付差出控」〔1003〕より)

結局、中橋家の慈尊院別当としての職掌は神通寺を含めた慈尊院の総元締といったところであろうか。天保五年の風土記調査の際の書上には次のように説明されている。

古代ハ減シ候

一高式石五斗

慈尊院別当中橋勘之丞

御年預表被下置、家地山林藪林墓所等永代貢物御免除、山里之諸役御免許、代々政所別当ニ而相続いたし来り、境内堂社長日用務指揮

之、御廟・拝殿・加梨帝母社・大日塔散錢支配之仕候、其外檀内諸祠堂之銀子出納之事、或両檀諸普請出訴之儀又ハ献燈香花洒掃之儀ニ至ル迄、依先規進退之仕来リ候事

なお、免許屋敷地は三三四坪一合、貢物免除の山林敷地四ヶ所、墓所地面二八坪となっている。⁽⁴¹⁾

二七代元珍は「宝永年中安良川奥李之介莊内ト山論有之、取扱平治之、延享三内寅歳公朝御巡見使アリ、山領惣案内御用勤」とあつて、慈尊院別当としての家職のほか、寺領と他領との山論の際、高野山の衆議中の委任を受け、時には学侶方目代の肩書を以つて紀州藩の当路との交渉に当るなど調停方を勤め、また公儀巡見使案内役の惣轄等、同人の代から所謂野山庁用御用の比重が増している。

二八代英元は、宝暦年中北室院下庄屋の出奔によつて、庄屋の「帳面預り」となった時期があつたとみられるが、家譜にはそのことに觸れず、「明和年中西山喜右衛門推手村ト山論、丹生郷九度山立會取扱御用勤、宝暦六年洪田島村山論取扱御用勤、慈尊院山崎両境目論平治之」とあつて、寺領内で有数の名家として存在していたことを窺わせる。

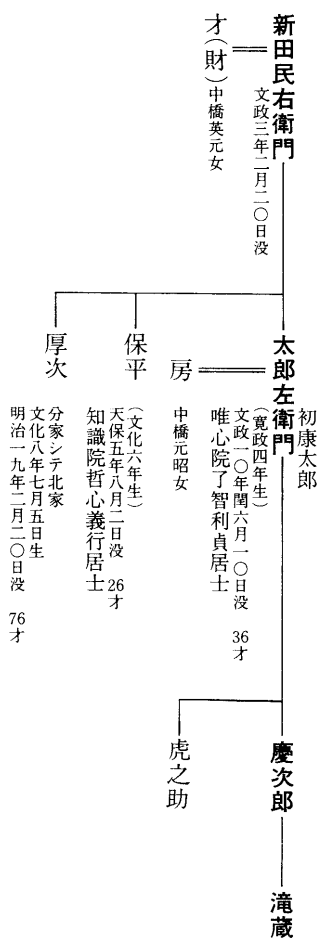
もつとも同人の代から中橋家の窮乏は始つていたとみられ、次代の二九代元昭の安永年中、本家長家等を失火によつて焼亡したことが、家計逼迫に拍車をかけた模様である。

我等親英元様ハ正直信心ニして慈悲深く、無此上も人ニ有之候得とも、如何成因縁ニや不幸重り病人不絶、子共上々々失ひ我等ハ八男二候而家名を受申候、十一人の子共我等と民右衛門妻（和州宇智郡御山村新田氏、引用者注）と斗ニ成候程の不幸続有之候間、家督を失ひ被申候、其上我等十七才の時長家々出火、本家座敷不残焼失、蔵一軒残り雜具類皆焼失し及申候、此時英元様六十三才、是々大キニ力を落し被申候上、愛子虎吉無程死去、弥病氣ニ相成、我等廿二才之時死去被致候、其時借財拾貳メ目余り、家も無之、蔵住居ニ有之候、然ニ母様姉智芳尼と同心して働き候ニ付、三十才迄ニ今の家を立、借財高三メ目斗ニ仕候、夫ニ依て其元母お筆をむかへ申候、男女子四人持、民右衛門妻ニ妹遣し候迄ニて十六七年之間ニ又々借財拾壹メ目斗ニ相成申候云々

とは、英元の子、二九代元昭が隠居後の文化一四年秋、嫡子弘道に宛て、自らの苦難の一生を振り返つて、累積した借財の整理法について提言書を認めた一節である（「元昭存念書付」史料番号八四七）。同書は続けて、借財減少のために精勵刻苦の果、文化七年八月病死した妻につい

て「折節お筆血ノ道不順ニして不快之身乍有之、昼夜糸綿仕事ニ情出し、昼之内田草取農事ニのみ相働き、尤不快之身ニ而水田へ入候事留候而も一途ニいたし、下女も不抱はたらき、其後終ニ病死仕候、此事お筆一類中母様え之不足、我等への恨ミ言いふ斗なく十方ニ迷ひ候処、民右衛門の助ケニ依て其暮仕舞申候、借財凡十式メ目斗と存候事」と記している。

因みに元昭の妹才の嫁ぎ先、和州御山村の新田家には、次代の弘道の代にも妹房が嫁いでおり、その後の中橋家の苦境にも屢々新田家の援助を受けているので、略系図を示しておこう。⁽⁴²⁾



このように家計不如意の中で妻の過労死を招いている元昭の代にも、天明八年巡見使惣案内御用勤め、文化三年には中橋家と並んで古い家系を誇る天野社丹生惣神主家当主の廢嫡問題が起り、相続人幼若の故を以って学侶老分中の御頼みにより惣神主家の後見となっている。また同年正月年預表から山上下荷物支配を命じられ、年預坊役人格となっており、翌四年「日並記」の正月五日の条には、日並帳・出入万覚帳・散錢筋受取通と共に、新たに「高野荷物筋問屋帳」の帳綴ちのことが見出される。

累積した借財への苦慮に明け暮れた元昭の晩年は、末子篤助の不行跡（後掲、中橋家系図（二）参照）のこともあって自暴自棄の言動が多く、同人の隠居は野山表からの御咎（追込役儀取上）を察知しての退隠であったように見受けられる。元昭から後事を託され、文化八年一五才で家督を相続した弘道は引き続き天保九年まで惣神主家の後見を勤めている。前に引用した「元昭存念書付」に提示された借財の整理法に従えば、中橋家の

田畑の大半は借財の返済で失われ「然ハ高式石五斗知行ト園田七八斗取、山下敷斗ニ相成」る筈であった。その故もあつてか、或いは弘道自身の資質によるものか、家運挽回を宿願としたと思われる弘道は、家職の外にあるサイドビジネスに没頭し、またその弘道の才幹を見込んでか、学侶たちの信頼厚く、諸侯の山上御石塔登せの宰領を初め、江戸在番所普請・金堂鐘樓建立のための石材の調達等々、野山庁御用の下命も頻繁で、それら交渉のため、弘道は大坂・京都・和歌山・江戸等へと東奔西走の日常となっている。時間的制約もあつて精読したわけではないが、試みに「日次記」によつて弘道の動静を追つてみると

文政三年七月 年預方々金八百兩拝借、一五年賦願済

文政四・二・一〇 借財片付方ニ付叔母新田才より四〇兩の助力を受け、西島田地不残新田家へ譲渡す

文政五・正・四 守安氏へ菊一文字太刀の売却を依頼（不調）

文政五・閏正・一九油屋計画、同年五月朔日より油絞り始る（栢油）

文政七・一二・七 借財につき田畑売却う

文政八・正・二 今般困窮ニ付門取札いたす

文政八・二・二八 江戸在番屋敷屋根普請用檜皮江戸廻し御用

文政一〇・二・五 当家元祖阿刀元忠九百五十年遠忌追善供養

文政一〇・九・五 酒造始る

文政一一・正・二六江戸在番所より入用瓦注文

文政一一・三・八 仙台様御石塔運送請負

文政一一・六・一二酒蔵普請

文政一一・七・四 若山元博旁町有田屋久蔵方酒造道具一式購入、銀二ノ三百目

文政一一・一二・二一当家酒造につき野山へ出店（三田屋作兵衛名儀）、当村仁兵衛を一カ年金五兩にて雇入

文政二・三・四 修理大奉行より金堂鐘樓堂建立ニ付石工かけ合を依頼さる

文政二・四・二四江戸大火ニ付在番所普請用材急調手配を依頼さる

文政二・八・七 酒造用金百両、金銀御掛りより拝借、当十二月限り

文政二・九・二〇野山出店（酒取次店）開店

文政二・一・一八 年預御用相勤候御挨拶金三千疋御下渡し

文政二・三・三・二二中橋家、北室院下の「帳面預り」となる⁽⁴³⁾

文政二・三・五・二九年預坊より和州國中觸下寺院調査を命じられ、路用金七兩請取（六月八日より二三日迄寺八七カ院、一五日間）

天保二・七・二五 河内国觸下寺院札御用、八月二一日出立、九月五日帰宅

天保三・四・一九 紀州国産砂糖等、学侶領分にて三田屋作兵衛へ問屋引受の儀、若山表へ出願聞済となる

天保三・五・三 大坂経由、江戸廻し酒初荷、四月二〇日江戸着岸

天保三・五・九 公私用務繁多ニ付北室院へ帳面預り退役願済

天保四・二・一 紀州御仕入方砂糖、三田屋作兵衛名前にて学侶方へ売却免許につき金二兩程買付け

天保四・三・二 普賢院長屋備後屋藤兵衛跡借受けの手筈調う、同五月備藤長屋・豆腐屋道具・店代呂物・諸道具不残四一両にて買得の約定

天保四・五・一〇 宝性院納所より町卒都婆損失有之分補ひ建立ニ付石仕立入用積を依頼さる

天保四・八・一三 野山店商い物（雜貨）引合、大坂南橋通大坂屋平左衛門に諸事實物方注文引受の約定調、とり敢えず半紙注文

天保四・九・五 母公御忌一千年忌法事、九月七日御廟拝殿参銭二〇ノ四三〇文、御上葺の例格に任せ、当家と阿闍梨と半分宛分け申候事

天保四・一・一・七 高野店豆腐、今日ノ釜初メ、九日大坂河市殿ノ豆腐引合あり、今晚ノ染らせ始

天保五・三・三 大坂綿善方へ逗留中、自宅より材木船難船之由飛脚便着

天保五・三・一四 大坂玉造橋南詰平野屋市兵衛方へ高野紙式束五帖物式人半持余、今日始て送ル

天保五・三・二一 大師一千年忌ニ付参詣人群集、当所宿屋中商人共一兩日之間御忌ニ付凡村内へ銀一〇ノ目斗取入候様被存候事

天保五・八・一九 普賢院より政所別当講中取組拵へ永代祠堂の勧誘世話いたし可申趣御申被下

天保五・九・一四 大坂西横堀樋口屋嘉右衛門方へ薩州様石塔ニ付山揚方示談

(天保六年日次記欠本)

天保七・二・二〇 千人講取立、施財祠堂ニ積立、永代相統の資料調候発起の願書、碩学中・御門主等へ相廻り内見ニ入、相伺候事

天保七・三・五 御衆評より千人講取立の許可下る

天保七・四・二三 亀九郎慈尊院契縁講願旨に入情いたし呉候筈約諾し、依之当地人別に差加え申すため、添田一郎次代官所摂州八部郡神戸

村宛に同人分の送籍を依頼、五月一七日中橋家人別に加人(但し同人は契縁講勸請のため大坂に在住)

天保七・六・一四 東寺に於て執行家当主と面会、尔後は相互ニ同家の旧縁ニ因ミ、別て懇意ニいたし申筈物語す

天保七・八・一五 若山より名所図絵再しらべ係加納兵部他一行出迎え

天保七・一〇・三 米価高直ニ付山分村郷御救米世話のこと、成福院発起、右取扱御用三田屋作兵衛店・中橋家方に申付らる

天保七・一〇・一〇 紀州銀札百貫目十カ年賦拝借之儀発願(入谷山林仕出元手金)

天保七・一〇・一八 大坂亀九郎へ山手産物引合筋、外に酒方糟方引合申含遣す

天保八・正・一五 銀札跡切拝借願書認

天保八・二・二三 紀州藩宛、入谷山林仕出し御用材願、許可さる

天保八・三・二七 天野惣神主嘉治丸自殺、四月三日総神主家後見の事、年預坊々被申渡

天保八・六・二七 山村御救合米徳分銀三ノ五百目程、そのうち式ノ目当家へ被下度旨願出

天保八・七・一九 救合米残石分、入谷山林夫飯米ニ付送り

天保八・一一・二六 野山より御救合米筋謝儀として一七〇両御下ケ、他所売益金二八両式歩

天保八・一二・四 酒の糟引合ニ付大坂伝法村田村又左衛門と面談

天保九・正・一三 伝法村田村又左衛門内願に若山表⁶御産物一業引受被仰付候ハ、冥加金永納いたし可申ニ付、此儀御執成頼度趣認置、三

月一八日紀州藩御勝手役所へ田村又左衛門願書提出

天保九・二・朔 巡見使御用

天保一四・五・一五 中橋家免許地内へ田村孫兵衛居宅添屋相建、借地約定為取替

天保一四・八・一二 田村孫兵衛出願筋落着

天保一四・閏九・二 高野山大火

天保一四・一一・朔 成福院より伽藍再建ニ付丹誠勤呉候様御内意有之、十一月三日竜光院江戸へ出立

天保一四・一一・一九 弘道の盡力により紀州藩寺社奉行所より田村孫兵衛宛、五千両差出に付百人扶持被下、此米一八〇石毎年伊都郡内にて

可相渡旨被申渡

如上の記事は天保一四年閏九月の高野山の大火⁽⁴⁴⁾によって、江戸の幕閣筋へ再建勸化の許可を得べく野山より内命を受け出府する迄の弘道の動静のほんの一端を示したに過ぎない。元昭から受継いだ多額の借財（四八貫目余）の消却を意図する余り、油絞りの業に手を染め、次いで酒造業⁽⁴⁵⁾への転換とその販売店としての三田屋作兵衛名義の野山出店の経営も、山上の寺院を主とする顧客で、売掛金の回収も滞り勝ちで、加えて米価の高騰期に当って暮の節季勘定には損金の多いことが歎声となって表われている。そして中橋家の破局は、高野山学侶方の中枢部が中橋家を一種の便利屋として種々の俗用を下命⁽⁴⁶⁾し、その御用を弘道が自家の利殖に転用しようと思慮し、多角経営にのめり込んだためと思われる。もともと天保七―八年の飢饉時に際して野山が中橋家に命じた寺領非米作地帯の山村への御救米は、野山からの下金を以って中橋家が近郷・他領から米を買集め、時価より一五匁程度安値で山郷の村民へ売払い、代金は山方産物（紙・薪等）を引当とし、その大坂方面への販売代金によって野山へ返納の仕組みであったが、天保八年一月には野山から御救米御用勤の謝儀として一七〇両（うち中橋取分は五〇両、他は店中への心附や諸経費、米の買付けに協力した御山村の新田家等へ配分）が下賜されており、御救いとは称しながら可成り商業ベースで行なわれたことが窺われ

ると同時に、中橋家の野山御用の引請が単純な反対給付の取得に止まらず、一種の請負事業に増幅・転化され、野山側もその傾向を助長する姿勢であったとするのは憶測が過ぎるであろうか。

すなわち、この御救合米御用に当って中橋家では天保七年一〇月紀州藩へ「寺領窮民救合米手当」として銀札百メ目の拝借を願出て寺領内に銀札引替所を設けているが、拝借証文の請人には学侶方碩学成福院・南院が当っており、また天保一四年寺領内紙郷産物漉紙一円取集所に中橋家が指定された時にも、その仕入資金として紀州藩へ金三千両の拝借願書を提出するに当り、野山の悉地院・西禅院の添簡を得るなど、中橋家の事業の背景には当時の学侶方にも内在したと思われる功利追求志向と合致したものがあったと思われる。

ところで、この中橋家による寺領高野紙の大坂における売捌きは、折から天保度の物価引下ヶ令の影響によるものか、大幅な紙直段の低落時に当り、可成りの損金を出した模様であるが、中橋家が最も大きな損失を蒙ったのは、文政―天保年間に携わった寺領富貴村名迫家の拝借金滞り分の回収策として、同人の持山入谷山林の仕出請負であったと思われる。大坂の材木問屋播磨屋・綿屋と組んで請負った名迫家の質山林は和州天野川郷にあり、極深山に生立つ本品は良材とみられたが、川下げの間に損亡が多く経費が高んだ上、天保五年二月都合一四五〇両を費やして仕出した木材を熊野新宮より江戸・大坂へ積廻しの途中、五艘のうち四艘までが破船或いは行衛不明となってしまったことである。

借財の惣額が八、九〇〇両余（うち野山年預坊からの拝借金は一三、二八〇両）となり、破滅状態となって隠居した弘道が嘉永二年四月「過去之操り言ながら文化八辛未年拙者義十五才の暮より家督を継ぎ、去ル弘化四未年五十一才二いたる迄三十七年之間業鉢二付元仕入之用途并借金利足払い或ハ損難等之出金大略覚」（史料番号七三〇）として年預坊へ差出した内容は第6表の通りである。⁽⁴⁷⁾

家職としての慈尊院別当に係る出金は一六七両に対して、油・酒造商売に関する投資が九二七両、また居宅の普請も行なっているが、弟篤助の身上に拘わる弁済金が三九〇両と、父元昭の代から引続いて同人の存在が中橋家にとって負担となっていたことが知られる。また村方の用水池築立助成や新開畑に係わる紀州領との争論の諸経費にもかなりの金額を費しており（もつとも島畑開起については野山から三〇〇両下附）、中橋家の村内に占める存在感も窺えるが、損難筋の項における山林仕出が致命的であり、また江戸廻しの酒三九〇樽が「替り酒そん三〇〇両」とあるのは、酒造技術の未熟の故か下り酒が変質してしまったことを意味すると思われる。

第 6 表 中橋家自文化 8 年元仕入・損難筋・利足払金内訳
至弘化 4 年

| 元 仕 入 銀 | | 村用水溜池助成山田小池築立等 | |
|------------------------|-------|--------------------------------|---------------|
| | | | 35 |
| 油商売ニ付普請道具等 | * 52 | 島畑開起并堤築立・大井路国領争論中諸用 | 393 |
| 造酒ニ付東ノ蔵建72坪 | 146 | (小計 | 428) |
| 造酒蔵洗ひ場 | 12 | 四口計 | 2,176 |
| 野山三田屋店拵へ | 35 | 内 | |
| 造酒道具一円 | 380 | 念仏藪田村へ譲ル | 30 |
| 酒他所廻し御免願ひ用 | 90 | 山田地 〃 | 40 |
| 大坂小売店出させ候付入用 | 27 | 奥ノ山林 〃 | 110 |
| 東土蔵ノ脇造酒蔵并部屋共37坪 | 35 | 中小路田地 〃 | 70 |
| 造酒西ノ蔵建96坪 | 80 | 島畑開起ニ付野山 5 被下 | 300 |
| 米搗臼家并道具一円 | 40 | 差引 | 1,626 |
| 水車一式 | 39 | | |
| 川浜揚場拵 | 13 | 損 難 筋 | |
| (小計、但し*油道具売払代22両引 | 927) | 油と酒商ニ付野山店敷かし | 270 |
| 表門建 | 16 | 山奥向村々 同断 | 60 |
| 長屋門庭門板塀等 | 10 | 村之内 同断 | 120 |
| 屋敷築直し石垣 | 14 | 大坂若山国領内同断 | 280 |
| 戊亥之古土蔵根継ぎ壁塗り直し | 16 | 390樽江戸廻し替り酒そん | 300 |
| 上奥座敷并湯殿等 | 38 | 野山の店にて盗難 | 35 |
| 田地買得代、但し 5 ヲ所 | 170 | 手代吉兵衛・八兵衛引負 | 130 |
| 弟篤助身上ニ付追々并し遣し候分 | 390 | 手代伊助大坂道盗難 | 45 |
| (小計 | 654) | 入谷山材木四艘海難 | 1,150 |
| 慈氏壇大日塔ニ付出金 | 15 | 檜御用材ニ付損銀 | 180 |
| 同東ノ口古家取除并地場直し | 13 | 入谷跡材木差引損 | 250 |
| 同築地之外廻り土手石垣仕立 | 19 | 寺領産紙ニ付御主意御改正 2 割下ヶ懸り損銀 | 470 |
| 同唐金手水盤ニ付屋形建水取台等入用 | 23 | 計 | (3,290) 3,260 |
| 阿闍梨燈籠講尻損補ひ | 25 | 利 足 払 イ 出 | |
| 阿弥陀堂建并堂内用之物 | ** 40 | 古借800両分、文化 8 ～文政10年迄利足 〳 | 150 |
| 河州部屋六三郎油料補ひ | 10 | 文政11年借金元2000両、天保 5 年迄 7 ヲ年利足 〳 | 1,330 |
| 元祖阿刀氏元忠九百五十回忌法要 | 20 | 天保 6 ～弘化 4 迄13 ヲ年借金元5800両利足 〳 | 5,768 |
| 同石塔 2 基小入用 | 7 | 三口計 | 8,248 |
| 御母公千年忌勤ニ付入用 | 15 | 右37年の間元仕入・損亡・利足銀総計 | 13,134 |
| (小計、但し**新田才・観晃寄進 20両引除 | 167) | | |

なお中橋家が、八方塞りとなった段階での借財の内訳を示すと第7表である。前出の第6表で元仕入金総額二、一七六兩のうち、二五〇兩は中橋家所持の田地山林の田村家への譲渡によって償われているのをみたが、借金総額八、九〇〇兩余のうち、年預坊からの拝借金三、二八〇兩のほか、大口なのは田村孫兵衛の二、七三八兩である。

六 田村家と中橋家の因縁

破局を迎えた中橋家にとって重要な役割を果たした田村家については、長文ながら中橋家との因縁を記した次の史料を紹介する⁽⁴⁸⁾

一 先達て御不審はれ難き田村某云々、其後貴報申上度候所、右ハ思召も恥入訳にて申上兼候へ共、乍延引左ニ
田村孫兵衛と申ハ摂州伝法村にて両三代酴醾製造家業、尤四十年已前より追々繁昌、一旦は七万金位之家督ニ在之候由、其頃分家之内へ養子と相成候亀九郎と申者、其後不縁いたし高野山登山、年頃信心者にて或る時拙家へも慕ひ来、暫差置候所、心行も宜、往々為ニも可相成者ゆへ一生相抱候約定ニ及、両三年相立用向にて大坂へ遣候砌、久し振にて右田村方へ見舞へ行候折

第7表 借財内訳（弘化4年現在）

| | | | |
|-----------------------|-------|----------------------|-------|
| 御年預坊拝借高 | 3,280 | 安次郎 | 27 |
| 南院 | 25 | 結衆祠堂 | 20 |
| 普門院(内納り筋有之) | 10 | 坂上左京(内納分も有之) | 105 |
| 普賢院 | 18 | 同人取次 | 30 |
| 般若院(是ハ頼母子実分差引ニ及候へハ相済) | 10 | 家禄重次郎 | 60 |
| 理徳院 | 20 | 護摩堂祠堂(是ハ北室院地面筋ニ訳合有之) | 31.5 |
| 金剛頂院 | 5 | 橋本蔵米筋(内渡し訳あり) | 70 |
| 宝性院門主 | 5 | 中飯降同断(") | 33 |
| 外院小口 | 13 | 伊勢や | 8 |
| 若山銀札方 | 165 | 江戸表太刀質入 | 280 |
| あら川忠一郎 | 210 | 田村亦兵衛 | 280 |
| 下村氏 | 300 | 大坂木津清 | 20 |
| 木下氏 | 100 | 大坂泉市(内訳筋あり) | 27 |
| 若山町家(是ハ種々入組差引筋有之) | 125 | 平野屋惣三郎 | 150 |
| 6軒 | | 雄二郎 | 10 |
| 長田観音寺 | 73 | 安十郎・伝右衛門(内訳筋あり) | 25 |
| 新田方筋 北厚次 | 100 | 頼母子かすかけ総 | 75 |
| 阿弥陀寺(此内訳差引候へハ全ク20両) | 65 | 別当附永祠堂(是ハ出金ニ不及筋也) | 230 |
| 安福寺(頼母子実分差引済) | 11 | 田村孫兵衛 | 2,738 |
| 古手や平兵衛(内かけ合筋有之事) | 20 | 凡小口見込 | 65 |
| | | 総 金高凡 | 8,900 |

柄、老人孫兵衛が紀府御勝手方へ内願筋被相頼、立帰り候上拙者へ頼出、是ハ幸ひ枢機聞及候て頼來候事故世話いたし遣候、其因縁にて老人孫兵衛高野參詣拙家尋來、それぞ追々入魂いたし居候事二候、然処文政子年頃、右田村儀兼て大坂三郷之質株持居候故、唐物問屋が唐物質取、此品二付御不審懸り、且紀州館大坂御貸附所へ加金さし出しかし渡候廉二差纏之儀出来、旁以何等之御札も無之倅当主又左衛門入牢被仰付、家財藏々両替預金迄も御封印相懸り、既二關所と申世話ゆへ、老父孫兵衛愁歎二暮、内々拙者へ取り縋り相頼候二付、高野山之手筋にて厚く世話いたし遣候所、右一件御札と相成、明白二筋立御免にて又左衛門出牢無滞難二相済候、但し又左衛門ハ一年跡相煩ひ病死故二老人孫兵衛儀閑静之地へ移住仕度発願にて頼出候事二候、是先祖は讃州丸亀藩中田村何某之二男弥九郎と申者始て伝法へ出住、其旧本家今二丸亀ニ在之田村雅男と申て貳百五十石取物頭二候、右二付雅男方へ懇々引合二及候所、則雅男を始同家中親類共三名を以拙家ハ申二不及、野山方へも願状差出并伝法一類も同様願出候故聞濟と相成、住所ハ拙家屋敷地之内かし遣候付、天保年中引越人別も拙家へ向送り來候、且拙家地面之住居之内ハ苗字帶刀免許と相成忽身柄相立候事二御座候、但し野山へハ縁類と申唱にて相整候事也、内実ハ往々拙家大借筋助成二も可相成候を野山老分中も被差含候事二候、尚また伝法村居住之内前段紀ノ御貸附所へ加金之分壹万二千兩位在之候へ共、彼ノ子年頃騒動之時も悉く踏倒されの根二相成、聊も御下ケ無之、山領へ移住之上にて右証文斗所持反故同様、或日時拙者へ何卒御配慮にて捨物をひろい候事二ハ相成間布哉、此金子ハ倅又左衛門丹誠いたし候金子にて御貸附所へ加金之事ハ又左衛門忌ミ嫌ひ候得共、親ぞ申勧メ出金させ此成行、倅存生二候へハ顔も合しかたき程の事故、可相成は筋を立追善二もいたし度由段々相歎き候間、其後野山之方へ相伺ひ種々考候上、紀府へ数回往返、両年程相懸り漸々行届、御札之上向後改之五千金之高二定急度御用途二相立候趣之御取扱と相成、依之太府方始奉行衆連印之重き御証札被下置、於御藏領二年々百人扶持ツ、田村へ被下と相成候、尚後年之為と存申込、奉行中も学侶衆評席へ右同様之取扱方之趣達書迄申受帰り候事

右孫兵衛感涙流し難有狩候事二候

前頭之通伝法村之難患或ハ紀府一条且身柄之世話振是等之訳、嗚呼ナル物語、赤面御顔二候へ共、内実申時ハ拙家一大事之場ニいたり候ハ、身ニカケテ拔群之助成いたし呉べき儀共存候（下略、傍点引用者）

摂州伝法村の酖酖商で可成りの資産家であった田村家を中橋家の免許屋敷地内に居住させるに至った経緯が語られ、弘道が田村家と懇意となつた天保一〇年代頃から自家の破局を予見していたことが窺える。弘道の日記によると、天保一四年一月一九日紀州藩の寺社奉行所へ弘道同伴で呼出された田村孫兵衛は、今迄不聞に付されていた御貸附所差加金のうち五千両を改めて預り金と認め、その利息の意味であろうか百人扶持（米一八〇石）を年々可相渡との御証文を下付されている。従つて残金八六七四両は差上切りとなつたわけであるが、この時田村孫兵衛は弘道の盡力に対して恩謝として先年中橋家が成福院・普門院の奥印で田村から借りた千両について、明年から無利息一〇年賦とすることを約束している。⁴⁹

七 中橋家の關所

このような中橋家の窮状については野山側も当初は同情的であつたと見え、「相統主法に付てハ御年預表且來応様・快般様・天徳院堪然様・普門院実如様就中御厚懇ニ御配慮被下、借金利足下ケ無支分等ニ取扱、尚亦近年之伽藍再建筋ニ付和歌山表の苦勤、江戸出府之勤勞等不少事故、当村之島畑開田井溝手当とて中橋え金三百両御下ケ之儀御評決ニて金子御下ケ渡相成⁵⁰」とあり、大借とは云いながら「乍然御年預表之利足さへ貞実ニ仕候へハ余ハ断延ニ可致⁵¹」と、若年の嫡子勘之丞（元扶、のち元貞）に若干の不安を感じつつも後事を託し、江戸に在つて鉄座出願の準備と金策に奔走していた弘道の許に国許の元扶の一二月二四日付書状が至着したのは嘉永三年正月六日である。該書状は再三延期を懇願していた年預坊への利足金七〇両が不調となり、弘道が頼みとした田村からの融通金もなく、一二月二三日年預表より役人が下向して閉門を申付けられたことを伝えるものであつた。同月二〇日弘道は江戸式本榎の高野山在番所に於て国許での閉門のことが伝えられ、早々帰国するよう野山表の意向が伝えられたが、帰国しても窮状打解のメドもないまゝ、帰国を肯じなかつた。

ところで国許の元扶に対する閉門の沙汰は年預表の拝借金⁵²の滞りが主因であるが、「勘之丞若氣之遊惰不止、野山より御嚴諭も被成下候へ共折々と踏違ひ候由⁵²」とあつて、遊蕩の所業も加わつて、弘道・元扶父子は遂に嘉永三年領内差構、關所の処断を受けている。

その際、中橋家の年預表からの拝借金二千両の加印人であった田村家へ対し、年預坊はその弁金を命ずると共に、中橋家から取上げた免許地面・家財諸道具・山林田畑等跡式残らず田村家へ譲り下げ、是迄中橋家の当主が勤めて来た御用筋並びに村内取扱向等、都て中橋同様に勤むべく、知行米二石五斗も旧格通り田村へ与えることを約束している。但し年預坊以外の中橋家の他借金の債務も田村家が引継ぐことになった模様で「其外共出入筋一切無滞皆済ニ相成候上ニ而若後年ニ至、同人親類共由緒申立歎願等之儀も難計、仮令其節いたり令許容候共、此度附立讓り下遣候筋ハ、其方調達金高貳千両と引替差戻候様可及取計候事⁽⁵³⁾」と保証文言が付されている。

また中橋家の闕所により中橋の家督を受継いだ田村家のほか、慈氏檀の事は長田観音寺預りとなり、家宝旧記類は封印の上、野山勸学院の宝庫入りの措置がとられた（阿闍梨の住持も出寺を余儀なくされた模様である）。

旧里を失った中橋父子のうち元扶は叔母の和州御山村の新田家の分家北厚次方に身を寄せたが、弘道は江戸に止まり一切経勸化を企図し、また鉄座出願のためその準備金の捻出に新たな借金を諸所から重ね、返済のための他借に追われる日々が江戸日記に散見される。

八 中橋家の赦免・故復

中橋家の山領追放から六年を経た安政二年、弘道の依頼を受けた東寺執行家から中橋家再興願書が高野山に対して提出された。⁽⁵⁴⁾再興出願の拠りどころとなったのは明年慈氏御廟上葺年に当り「其節ハ御山執行代之御方を前導シ入廟之儀式は彼ノ家にて嫡脉之当主極大切之任要、殊更廟中之儀ハ深秘口伝受も有之、且古代より御鍵錠共別当進退而世々連綿之旧条ニ候得共、只今成り之仮上葺之期辰ニ臨ミ若シ代勤開扉と相成候而は遍ニ御冥慮恐多、加之祖宗ニ対而恥辱之多罪相重り上綱父子共殆ント悔死之外無之（中略）右様秘宝之御靈窟他之手ニ而開扉と成行候ハ、自然と聖廟の威厳を剥し候儀甚以無勿昧、嘸御山ニおゐても御不快之御至と遥察仕候⁽⁵⁵⁾」というものである。

安政三年四月六日故復御免となり父子共々旧地に戻り、同月八日年預表において勘之丞への申渡ししの請書は次の通りである。

申渡

其方家之儀元祖以来千有余年不交異姓連綿致相統稀成名家ニ候処、実父弘道事不謂利勘ニ走り身分柄之弁も無之、商人躰之余事ニ携リ毎度損失不少、終ニ家祿不相応莫大之借財出来、融通一向ニ摸通り兼、一身不安全東西ニ奔走種々才覚千辛万苦之趣相聞候折柄、其方事ハ指而無貪着、剩ヘ放蕩之所業ニ耽リ、親昵之異見も不取用、其上年預表拝借金上納之覚悟無之候ニ付、定法通り過怠申付候ヘ共、更ニ上納濟方等不至而慎中我俤放埒之事共有之、不恐上を致し方重々不届ニ付難捨置、既ニ七ヶ年前親子共惣寺領内差構申渡、跡式令没収、千議千歳之旧家忽ニ及廢絶、後代迄汚名此事ニ候、是全親弘道始鄙劣之志ガ不計変事引起、慈氏尊前之冥慮を驚し先祖之功績を汚し、其上年預役庁ヘ不容易煩勞をかけ、数回来評貸し下金皆以懇縁田村又太郎後見丹宮ニ為課之、承諾之上免許地并山林田畑家屋敷ニ諸諸具ニいたる迄悉皆同人ヘ譲リ渡、尚亦上綱家役も申付、中絶之間聊無欠如今日ニいたる迄補助有之事ニ候、然ニ兼而親類共ガ歎願之旨も有之、尚亦此度又左衛門後見丹宮右引受借財不残上納弁済之上、其方始婦住御免之儀重々願出、不容易取扱神妙之至リ、依之格別之御慈計を以帰住差免、家屋敷免許地等別紙之通下ケ遣候条、向後万事相慎身柄之分限無忘却、慈尊御前衛護ハ勿論質素を基とし、家門永続を心懸、重而不嗜事業無之様堅可相守候、万一心得違之儀於在之は可及嚴重之沙汰者也

辰四月六日

年預代

勘之丞江

前段被仰渡候御嚴諾之御旨奉恐入御請印形奉差上之候

中橋勘之丞印

右被仰渡之御旨於同席承知仕候、依之印形奉差上候

中橋嘉平治印
田村又左衛門印
同苗 丹宮印
親類惣代
雅之進印

庄屋 左 京印

同 幸 助印

年寄 佐右衛門印

同 安次郎印

惣代 芳兵衛印

前書被仰聞同席ニおゐて承知仕依而奥印差上之候

北室院納所

金剛頂院納所

孫兵衛亡き跡の当時の田村家がどのような心境であったかは知る由もないが、年預表拝借金と田村から中橋への相對貸金三千両も無借とし、その上年預表から引当として下渡された中橋家の家屋敷山林田畑等を返上して、他の親類と共に弘道父子の復歸を願出したことが中橋家赦免の原動力になったことと思われる。年預表では中橋家へ対し「田村両人は其方家名中興之恩儀不淺事、永々無忘却相互ニ致扶助、曾而疎意不可有之」として、家祿二石五斗は改めて中橋家へ付与するものの、免許屋敷地内の一部敷地ほか、田村へ引渡す地面・藪地等を特定している。また田村に対しては田村家名別段に取立、苗字帯刀、諸夫役免除・宗旨証文双方直上（従前田村家は中橋家中に含まれていた）・年頭御礼席中橋次席たるべしとの許状を下付して、その労をねぎらっている。なお慈尊院弥勒壇上綱付諸収納物は年預表貸附金一一〇一兩の引当であるが、格別の慈愍を以って永年賦とし、年々金一〇兩宛の上納とされている。

九 鉄座出願一件とその後の中橋家

年預表の中橋家赦免の申渡しが弘道の嫡子元貞（勘之丞）宛に対して行なわれていることで知られるように、中橋家は關所以前の弘化三年か

ら三代元貞の代となっていた。そして七年間の辛酸の末、漸く旧里への復帰を果たした中橋家は關所中に名乗っていた阿刀姓から中橋姓に復している。

ところで隠居の身の弘道（当時嘉平次と改名）にとつて「不謂利勘ニ走り身分柄之弁も無之、商人牀之余事ニ携り」「重而不嗜事業」との年預表の論旨も効果はなかった。弥勒壇の散銭収入は年預表の拝借金、年賦返納に充てられ、田畑蕪の大半を失なつた中橋家の起死回生策としての鉄座経営が残された弘道最後の賭であり、結果的には中橋家の廢絶に連なつたと思われる。もつとも弘道の鉄座免許の出願運動は前にも若干触れた通り、關所以前から始まつていた。

ことの発端は天保一四年秋の高野山大火後、伽藍大塔の御公儀再建嘆願のために出府中の大衆惣代竜王院の内事用談勤方を碩老中から命じられ、弘化三年春出府した弘道が、滞府中に懇意となつた柴田淳平から持ちかけられた鉄座株取得の誘めである。すなわち同人の主人柴田能登守（三三〇〇石取の旗本）の知行所三河国額田郡山中本宿村に、神君の御落胤で永々鉄座免許の御黒印を付与された松井庄兵衛なる郷士の古い名跡があり、その子孫は衰弊して廢絶したが、当時在所の陣屋代官富田群蔵なるものがその名跡を預つていたので、弘道の弟篤助に相続させては如何というものであつた。当時篤助は江戸式本榎町の伊勢屋茂兵衛方の一類芝田屋篤助として在つたが（業種不明）、弘化二年正月二四日の類火で居宅を失い、伊勢屋茂兵衛後家一家を引連れて一時帰国するなど、相変わらず定まらぬ身の上であつた。その故もあつてか、弘道は富田群蔵と連絡をとり合つた上、嘉永元年冬帰国の途中藤川駅の宿所で富田群蔵と初めて面談し、松井家の古書類を披見の上、嘉永三年三月篤助の松井姓相続の約定書を取替わしている。

ところでその際の約定書が四年遡つて弘化三年三月とされたのは、該松井株につき類願人が存在したためであつた。そもそも三河時代の家康の御墨付なるものは、八代前の松井家当主が元禄一四年頃、追て家名再興を願上げるまで公儀へ御預り下さるよう願出、代りに写書を下付されたという。この御黒印写をめぐつて類願人高橋吉兵衛（江戸松屋町太郎兵衛地借）の申分によれば、松井庄兵衛の子孫は同人の親類武州多摩郡上平井村前名主松井新右衛門であり、東照神君の鉄座御免の御黒印写を大切に護持していたが、十数年前親類共のうち庄吉並びに当時飯塚勘解由家来大場茂太夫というのが松井家再興を内願して呉れるとのことで、右兩人へ御黒印を預けたところ、兩人共行衛不明となつた。その後数年

を経て漸く大場茂太夫の住居を尋ね出し、御黒印の返却を申入れたところ、当時柴田能登守家来柴田淳平の取計らいを以って三州本宿村の富田郡蔵へ金一七兩借用の引当に預けた旨の返答であつた。驚いた吉兵衛は早速富田群蔵へ御黒印の引渡しを掛合つたところ、富田群蔵から五〇兩を要求されたが、その金策に手間取っている間に、紀州出生の阿刀祐甫（弘道）なる人物が自分の実弟を松井家養子に仕立ててしまつたという。⁽⁵⁶⁾弘道が当初富田群蔵から聞かされた話では松井家の末裔は流浪の末、親類の群蔵へ後事を託して文政年中死去したことになつてゐたが、この高橋吉兵衛の云い分によると、鉄座出願を企んだ大場茂太夫が借金⁽⁵⁷⁾の抵当に富田群蔵の方に御黒印が渡したというものであり、真偽のほどは明らかでないが、弘道が富田群蔵から松井家の古書類を譲り受ける交渉の際にも、金五〇兩云々が言及された形跡がある。

弘道が弟篤助を松井庄兵衛に仕立てて、松井由緒の鉄座取立の出願準備を始めたのは嘉永元年頃と思われ、「鉄製の山元始大坂江戸両地又ハ諸家様産物等売買方ニ付鉄業筋の極意を穿鑿（中略）、帰国之上鉄山ニて懇意出頭之者へ呼使を差向、猶大坂之内鉄業筋鍛練老巧之者と手始申試、翌四年春^(嘉永二)段々と相懸り候事ニ御座候⁽⁵⁷⁾」と、鉄業に関する俄か勉強が始まり「酉年六月より鉄山熟練之者并ニ大坂其筋之者兩人引連出府仕、御当地之内鉄業筋ノ要旨内々申試、追々熟得仕候ニ付仕法書之儀は戌年夏中ニ漸く存念之大都仕拵⁽⁵⁸⁾へ」とあるから、国許での勘之承閉門が報知された嘉永三年の春は、弘道が江戸で鉄座出願準備の眞最中であつたのであり、本山からの帰国命令にも肯じなかつたわけである。

次いで同年一二月中橋家關所の沙汰があり、領内差構えの身となつた弘道は阿刀姓を名乗り、松井庄兵衛の後見として勘定所へ鉄座主法書を添えて内願に及んだのは嘉永四年である。翌五年奉行所より「御内慮御伺相済」との内示があつたというのは主法書の書類審査の通過を意味するのであろうか。同六年には鉄座御免許の御黒印の取調があつて、目出たく御本紙が紅葉山の御宝庫から発見され、弘道は感涙にむせている。ここに至つて「鉄座再興筋大坂表の方諸向懸合方行届在之哉」と御役筋からお尋ねを受けた弘道は出坂の上、其筋の商人共と談合し、鉄座免許の節は資金面や売捌方について協力の約束をとりつけ、安政二年再び出府、その旨を言上して裁可を待つたが、幕府からの沙汰は一向になく、弘道は連日のように御勘定上野芳之助方を訪れて首尾を探っている有様が「鉄座之一条」に記録されている。折から異国船渡来や地震等のため、幕閣筋は御用多端、加えて国許に於ける中橋家赦免の動きがあつて弘道は急拠帰国することとなつたため、鉄座出願は一頓挫を来したのである。安政三年旧里故復が一段落したあと、早くも同年秋には弘道は江戸に在つて、鉄座再度の出願書は安政五年十一月付の扣が残っている。その

間類願人との出入もあつたようであるが詳細は不明である。改めて松井家の由緒を申立、嘉永四年以来の勘定所における書類審査の結果、老中への内意伺も済んでいる経過を述べた内願書には、「右鉄座之儀は申上ル迄も無御座、大炮小銃筒玉は勿論、総而御武器類或ハ農具家作船造方釘鉄物大工及職人道具其外鍋釜鑄錢等にいたる迄悉く国家万用随一之品柄に御座候処、松井の家世々相衰、鉄座取統無之故を以取引甚猥りに成行、鉄類出產減少之上、諸向におゐて勝手俵散乱いたし、自然品物不潤沢直段而已相進、斯く等閑に相成候段畢竟松井家廢弛の多罪恐不少奉存候、仰き願くハ金銀御座方并銅座同様鉄座之儀も古源に復し御取立被為仰付候ハ、第一御国用充滿仕御取締も相立云々」と鉄座の効用を開陳している。

前回の出願中、御勘定上野芳之助に接触して好結果を期待した鉄座再願は、前年の幕閣人事の大幅な異動が影響してか、また幕末の国事多端の中で一向に進捗せず、その間、安政六年一二月出願の名目人松井庄兵衛（篤助）が死去、出自は不明であるが池田文三郎なる者を後継者として万延元年・文久元年再度に亘つての願書草稿が見出されるが、実際に提出されたものか否かは明らかでない。

ところで文三郎による鉄座出願に当り、弘道の差図によつて手代植田元次郎（大坂今宮在住）が先年鉄座下組みの内約のあつた大坂商家の面々へ再交渉に及んだところ、嘗て中橋への協力を約束した商家の大半は逼塞して行衛知れずとなり、また現存の商家も五、六年以前の約束を、その後何の音沙汰もなく「只今茲から棒の様ニ被申越候ても其運ひ手續も無之」と取合わず、また出願人の名前が變つてゐること、更に類願人の横行が頻りであつたことが、弘道への不信を倍加させていた。

阿刀様の御続きハ素々參州富田群藏御書之写御譲り受被成候より御発願ニ御取掛り被成候事ニハ無哉、其三州富田群藏親類松井庄兵衛往古々所持之品杯と申事ハ高橋一条ニて明白ニ相訳り候処ニてハ、全富田の親類松井等の訳柄ハ皆以拵事ニて、実ハ先庄兵衛平井村新左衛門方へ預ケ置候品を大場茂太夫取出し富田群藏方へ質物ニ差入候ものニてハ無之哉、夫故先達て高橋方々追々掛合、終ニ阿刀様ハ富田群藏へ御戻しニ相成、富田方より高橋吉兵衛方へ相渡り有之事ニてハ無之哉、左候へハ御願立之処正実之事ニてハ無之、又高橋方も正実之筋ニ無之、依て不遠畢竟山師同様の訳柄ニ奉存候、去寒之頃も全松井の血脉と申者清水幸之介方へ尋参り、同人ハ私方へ引合せ連参り、いろいろ書物等見せ居候得共、いつも尤らしく申参り候ても古き事故正実難相訳、又当地之人氣も以前と違ひ右様之事信用之ものも無之故、

断切取合不申位之事ニ御座候（下略、傍点引用者）

とは植田元次郎が江戸の弘道へ報告した大坂商人の応答であり、弘道が頼みとした大坂商人からの援助は絶望的であった。

なお、この大坂商人の伝聞によれば、この時点で弘道は富田群蔵へ松井家の古書類を返却云々とあつて、鉄座のことは断念を決意し始めていたのではないかと推察される。⁽⁶²⁾ 何となれば弘道の書留によると、この鉄座出願のため、数年間に費した経費は一、二〇〇両余にのぼり、嘉永五年金繰りのため中橋家の家宝菊作り太刀を金吹町中田屋留次郎に二六〇両で質入、安政四年までの間に九回切替え、利息金の合計は一五〇両とある。国許の元貞に対する送金の依頼も断られた弘道の江戸での生計が何によつていたかは明らかではないが、断片的な史料で大坂富商の大名屋敷に対する古貨附金の取立請負に類したことを行なつた形跡はある。⁽⁶³⁾ 文久元年四月 日野屋吉兵衛なる者の沽券を引当に金一〇〇両を借入れ、大坂行の路用金を捻出したのが弘道の最後のあがきであつた。大坂での交渉が不首尾に終つて帰国した弘道は再び江戸に赴くことはなかつた。

江戸での弘道の住居の地主であり、菊作り太刀の質入の斡旋者でもあつた旗本一色九左衛門へ宛てた文久元年二月五日付（一八日付に訂正）の弘道書状扣には、中田屋留次郎方の菊作太刀の売却によつて、中田屋はじめ日野屋など、弘道在府中の借財の整理を依頼している。⁽⁶⁴⁾ 失意の弘道の同月七日の日記には「思案一決、菊作其外江戸之大失、先祖へ申わけ刺髪法心勘之丞へ申聞」とあり、一日に薙髪、尚甫と号したとある。時に弘道六五才であつた。

その後の中橋家の去就は詳かでない。尚甫の日記の文久三年六月朔日の条に「尚甫右ノ手足口舌等不宜、九度山平角呼迎ひ葉養見立、肝ノ症云々」、同月三日「少シ快シ、歩行ハ不出来」と体の不調を訴え、同月一四日の条には「菊作刀ノ事可思切」の貼紙があり、当時の弘道の痛恨の心境が窺われる。その後弘道の日記は文久四年（元治改元）四月二日付で終つてゐるが没年は確認できない。因みに中橋家の「宗旨御改書上」扣は元治元年から慶応二年の三年分を欠き、慶応三年八月の「宗旨書上」には弘道・元貞父子の名は見えず、当主は弥太郎元常（一〇才）となつてゐる。なお後年の元常の願書下書中に「私シ共不幸、九才ニシテ父勘之丞病死、十四才ニテ母弥枝死去」とあるから三代元貞は慶応二年没（享年三七才）、同人妻弥重は明治四年（享年四一才）に没したことが知られる。⁽⁶⁵⁾

三代元常は九才の幼年で家督を継いだわけであるが、一二才の明治二年六月高野山総宰廳から次のような救済措置がとられている。⁽⁶⁶⁾

救 状

中橋弥太郎

其方家名は深重之系脉ニ而古今子孫連々相統候処、今度父勘之丞不幸而早逝、幼年之其方内証方難決之趣歎訴ニ付遂出格之評談、二十年満迄三人扶持当行之間、^(ママ) 磨神成長不可穢家名者也

明治式己巳六月

総宰廳

元常の二〇才成人まで、向う八カ年間三人扶持を宛行われることになっているが、明治四年正月高野山は上知令によって二万五千石を奉還し、その代り五、二五〇石を下賜され、高野山の財源は無きに等しくなったというから、この措置がその後継続されたか否かは不明である。

年次の記載はないが明治一九年頃と推定される元常の慈尊院政所別当職復帰を嘆訴した願書下書には「先年二至ル迄数ケ年間放蕩遊惰ニシテ氣俥ノ已致居候処、一昨年ヨリ又候野山御竣功ヲ蒙大塔再建御本局之雇ニ被仰、暫時奉勤中又々放蕩、御係ヨリ重々御督責、猶又成福院様・高室院様始各院様格別慈計を以再勤故、右ノ御恩儀トテモ不残事故、永ク無忘却様奉存候処、私シ不所存ヨリ山内ニ於テモ不相応ノ財借相嵩云々」とみえ、一時大塔再建本局に雇として奉職したが、不身持と借財のため罷免されたとみられるが、その後の消息は不明である。

なお、同願書下書中には「四、五年前ヨリ阿闍梨寺へ村内ヨリ勝利寺ヲ当住職任シ有ル趣」とみえ、明治一四、五年頃から慈尊院は勝利寺住職が兼務するところとなったと思われる。昭和二一年現在の「高野山真言宗寺院教会名簿」(当館保管、文部省宗務局引継書類のうち)によると、慈尊院・勝利寺とも主管者名は安念諦賢となつて居り、現在は安念清邦師が両寺を主管されている。

付録「伊藤家文書」について

中橋家文書中には、中橋家廢絶後、該文書を襲蔵された伊藤家の文書が若干混入していたので、本目録の最後に付載した。

紀伊国那賀郡粉河村(現、和歌山県那賀郡粉河町)伊藤家は『紀伊統風土記』卷之三十二、那賀郡粉河庄粉河村の旧家の項に

家伝にいふ、其祖を伊東助左衛門祐方といふ、伊東祐親一族の末葉といふ、摂州菟原郡鳴尾の浪人にて、大坂の役に大野修理亮治長に属し、鳴野口に戦死す、其子助左衛門尚方、慶長年中当村に來り住し、伊東を伊藤と改め、世々此地に住す

とみえ、曾我兄弟で知られる伊東家一族の末裔とされているが、江戸期の伊藤家については寡聞にして詳かにしていない。ただ中橋家文書に混入している伊藤家文書の過半は書画の類であるが、唯一の江戸期の村方史料、安永八年四月「御尋之猫しらべ帳」（史料番号一五四三）の表紙には「粉河組」とあり、粉河組一八カ村庄屋の連印で伊藤八郎宛に差出したものであるから、当時紀州藩領粉河組大庄屋であったことが判る。

なお、現ご当主伊藤醇彦氏の祖父に当られると思われる伊藤宣將（和歌山県立新宮中学校長）は、昭和一〇年代に中橋家文書を可成り丹念に目を通されたと覺しく、中橋家文書には同氏の書込みが少くない。

注

(1) 『近世文芸叢書』名所記、第二（国書刊行会本） 一二三頁。

(2) 『和歌山県史』古代史料一、一九三頁。

(3) 和多秀乗「高野山の歴史と信仰」（法蔵選書27 『高野山―その歴史と文化―』所収、なお、小稿の前半部分は和多氏の著述に拠るところが多い。

(4) 「金剛峯寺雜文」に「承和三年五月、勅宣置於金剛峯寺俗別当紀国司」とある（『和歌山県史』古代史料一、二五六頁）。

(5) 『和歌山県史』古代史料一、五五二頁。

(6) 同右、四七五頁。

(7) 同右、八九〇頁。なお「高野春秋編年輯録」には「天長三年正月一日、始行三大仁王会於慈尊院」とあるが、当時「慈尊院」の寺号が存したとは考え難く、編者が政所の異称として用いたと思われる。

(8) 同右、三二一頁。

(9) 山本智教「高野政所・慈尊院の歴史」（『密教文化』第一四〇号）。

(10) 東京大学史料編纂所『大日本古文書、家わけ第一、高野山文書之八』 一七九九。

(11) 田中文英「莊園制支配の形成と僧団組織」（大阪歴史学会編『中世社会の成立と展開』二八六―七頁）。なお「高野山文書之八」一八五三に年次未詳ながら「谷上政所供僧入寺山篋供注文」なる史料が見出される。

(12) 史料編纂所『高野山文書』（以下同）八、一九三三。

(13) 同右、七、一六三五。

(14) 同右、七、一六五一。

(15) 同右、七、一六六一。

(16) 「高野春秋」には円海の勸進による慈尊院の造営を明応三年（一四九四）秋七月一二日としている。

(17) 『角川日本地名大辞典』

(18) 『紀伊統風土記』によるとその靈夢とは「長曆三年己卯三月精膳母公慈尊の聖廟に献せしかは其夜永嘗靈夢を感じて謂く、我に精膳を供せん^(ママ)

よりは寧ろ我子に供せよと、此靈夢を以て明算師に語り、遂に同年三月廿一日盛膳を山上の御影堂に献備す云々」と説明されている。

(19) 中橋家文書中、阿闍梨觀宮代の文化元年「当寺要用雜記」(史料番号六二九)には「中橋系図の事」と題する項に該文書が写込まれ、「右享保三戊戌三月写遣焉、檢校大和尚懷英判」とあり、「高野春秋」の編者懷英が中橋家の家伝を追認する形で作成したとも受とられる。但し該文書には「ウラ書、考寛弘元辰年ヨリ持経上人初登山長和五丙辰マテハ十三年已後事也」とある旨が付記されており、何人の考証か判らないが、寛弘元年七月二八日の金剛峯寺奏狀が持経(祈親)上人によるとすると疑問がもたれたことを示すものと思われる。

(20) 『高野口町史』上巻、二六一―二頁。なおこの時の浄香(中橋)の上に冠せられたジソインは、同じく「ジソイン甚兵衛」なる名前が見出されるから、村名を意味すると思われる。

(21) 『紀伊続風土記』の「四所庄官」の項には「高坊氏 田所氏 岡氏 龜岡氏此四家は大師の親戚阿刀・佐伯両氏の苗裔にして(三家は佐伯田所は阿刀姓とそ)当山草創の後大師の徳を欣慕し讃州より来、慈氏寺境内の堺外に住居し、寺領の貢物諸庄の雜事を管領すとそ、後天文九年の洪水に其家地流失し他郷に移り、丹生郷(岡氏)中飯降(田所)名倉(龜岡)の三村に住し今に於ても神通寺の祭礼に駟馬三騎を出し、又高野山御影供舍利会御国忌 御代々の御法事にも束帯冠冕して前導の行事あり、各古く数十石の家祿ありと云へとも、大坂籠城に与する過ありて是を没却し、年々学侶方より現米許多を賜ふ、岡の一家は同心せされは旧地のこつく高二十四石五斗を領す云々」と記されている。

(22) 高野山文書四の三四二

(23) 同右、一の三七四

(24) 遙か後年ではあるが、明治三十二年三月、四庄官のうち、岡・高坊・龜岡三家連名の士族編入再願の一節に「抑モ私共先祖ハ弘法大師の一族即チ佐伯姓ニテ、其初ハ天孫胤ヲ忝ウシ、下リテハ讃岐国ニ居住致居候処弘仁年間来リテ高野山政所即チ当郡慈尊院ノ側ニ居住し、高野山ノ政務ヲ管領シ、兼テ武士ニ任シ候(往昔高野山ノ僧侶ハ世務ニ関セス専ラ仏事ヲ勤行セシニヨリ、領内ノ貢物、諸庄ノ民政等ハ四庄官ニ於テ管領致シ候、当時高野山ノ政廳ハ慈尊院ニ有之、因テ慈尊院ヲ後世、政所ト称シ、又四庄官ハ私共三家(岡・高坊・龜岡)ノ外、田所(阿刀姓―弘法大師母方ノ姓)ノ四家ヲ以テ代々之ニ任ジ候処、(明治以後田所家ハ絶家仕候)、南北朝時代ニハ近郷ナル生地、贊川等と共に一族ヲ率ヒテ吉野殿ニ馳セ参ジ、紀州官軍ト称シ、応分ノ忠節ヲ盡シ候、南北平和ノ後ハ紀州ノ守護畠山家ノ麾下ニ属シ、一族ヲ主領シ采配ヲ免許セラレテ一方ノ部將トナリ、或ハ盜賊ヲ誅戮シ、或ハ反徒ヲ討伐シ、屢々軍陣ニ臨ミ、武功ヲ樹テ、一国ノ治平ヲ期シ、又高野領ノ郷士ヲ統率シテ、高野ノ為ニ干戈ヲ執リ、乱妨を防ギ、領内ヲ守衛致シ候云々」とあって、明治三十二年県知事より士族編入ノ許可が下ったという(『高野口町誌』下巻、七七五―七頁)。

(25) 例えば、政所一族の筆頭格とされる高坊氏は寛正四年の畠山義就と政長の家督争いの際、政長方についたとされる(『角川日本地名大辞典』)が、中橋家の家伝では、二二代弘信は義就方に就いて河州若江の合戦に加わったとしている。

(26) 因みに莊園制衰退期の室町期にあって高野山は遠隔地莊園からの収入は減少したが、膝下の莊園は最盛期とされる鎌倉期の態勢を維持し、公称一七万石、実質的には優に二〇万石を超える大領主であったとされる（宮坂有勝編著『高野山史』八二頁）。

(27) 勸学院文書の天正一九年一〇月日付の高野山寺領注文には、慈尊院村高は「百六拾七石四斗二升」とされている（平凡社『和歌山県の地名』）。

(28) 高野山文書六、一三六四

(29) 中橋家では文化七年三月二日、紀州藩の当国風土記掛りの役人元居三
四右衛門らが寺領の地誌調査に出張してきたことが契機となつて、系図・過去帳の整理に熱中したと思われる。すなわち二九代元昭の文化一年の「甲戌日次記」正月九日・同一九日・同二〇日の条に「当家系図」

「先祖由緒書」の作成に従事したことが記され、同二五日の条には「風土記全部出来候へは慈尊院・天野分写シ御下ケ被下筈」とある。また同人の「先祖追福号勘記」（史料番号八五〇）には「今元昭之時ニ至リテ廿九代也、然ルニ元祖瑞雲院靈ヨリ歴代之靈号連綿有リトイエトモ中ニハ靈号全備不致モ有之、又十一代ヨリ十六代迄靈号無之、実名ヲ以靈名ニ用ヒ来リ、又終焉之年月寿不知、又元祖ヨリ二十三代之間妣母之号混テ無之、是又終焉之年月寿不知、其然ル所以ヲ知コトナシ、依之内外旧記ヲサガシ求ト雖モ未無所得、全ク火難ニ焼失スト臆度スル而已、子孫アルモノ無母之子アラシヤ、然ルニ数代母之靈号無之、且終焉之年月寿不相知コト不為痛感哉、不耐感慨哉、於此元昭憤然トシテ志ヲ起シ全備無之靈号及数代無之妣母之号此度奉追号度志シ切也、然ル処当時公私之務繁多之上、野山大塔造営ニ就勤仕無寸暇、志シニ不任、於此同姓従弟

浪花阿刀元道ニ譲リ其遂志之旨ヲ命託ス云々」とあって、大坂在住の従弟阿刀元道（加嶋屋篤平Ⅱ大坂入替兩替商加嶋屋作五郎家の別家）の協力を得て、先祖の法名の多くは元昭の晩年に追号したことが知られる。

元昭の没後、引つづき家譜の整備に執着したとみられる三〇代弘道は、弘化二年正月成稿の「阿刀姓正裔中橋家世系脉譜」の末尾に「二三代弘信書日、当家系譜之内元祖元忠ヨリ五代ニ至迄ハ貞昌之略遺言ヲ以十代昌元是ニ準拠ストノ略記アリ、其後十三代光康及十九代常光是之大概ヲ記ス、而亦廿二代弘信憑繩先代之遺言、補其系統爾リトアリ」と家譜の由来を記し、更に家譜成稿の苦心に關して、「但シ旧代阿刀姓之内、人足・子老・眞足之三世引証混雜ス、積年之愁無絶、既ニ執行家トモ校董シカトモ尚胎疑念、爰ニ野峯増長院錢善輝潭老碩ハ多年搜索シテ其混淆明白ナルコトヲ得タリ、於是天保十四年癸卯春正月謁見シテ素意ヲ述フ、老碩モ亦隨喜メ懇ニ披拔萃以悉ク解之、予疑貽忽晴歛喜ノ余濕襟間記ス、猶ヲ今茲弘化二乙巳正月八日再老碩ニ見エテ他日校訂撰抄之一冊具ニ披見シ全得明証訖ヌ、弘道謹識」と結んでいる。

(30) 高野山子院の各知行配分は元禄聖断といわれる幕府による大量の行人寺の処分（行人六二七名配流、行人寺九〇二軒廢寺）によつて、どのような変化があつたかは知り得ないが、名道家文書の天保三年写「高野山御知行配分記」によると、金剛頂院は宝性院門中、北室院は無量寿院門中に属し、知行高は各三五石となっている（『和歌山県史』近世史料三、所収）。

(31) 延元二年（一三三七）九月三日「官省符在家支配帳（高野山文書之七、一六三五）。なお、承仕に關しては慶長六年「青巖寺并檢校支配帳」（高

野山文書之六、一二三四の正月の項に「料足十疋慈尊院カモン所へ下ス、年玉也、返札等アリ」とみえる。

(32) 高野山文書之二、三二五

(33) 「高野春秋」の編者が中橋家の家伝を鵜呑みで採録していることは前に述べたが、同書の永正一四年の三月二五日の条には慈尊院堂殿落慶による大曼荼羅供養が大導師二階堂主によつて勤修されたことを伝えているが、割注として「古牒不記留此堂殿供養曼供之事。尋求別当中橋氏之家譜記入之。但二階堂某申之名無之。惜哉。考。慈尊曼供。先例執行代勤仕。今用二代役歟云々」とあり、その考証に苦心している。また同書の永祿四年の条には中橋家の記録に脱漏の永祿四年の慈尊院曼供の記事はみられない。

(34) 「阿刀姓正裔中橋家世系脉譜」中の付記。

(35) 「紀伊統風土記」巻之四十五、伊都郡相賀莊学文路村の「旧家平野作右衛門」の項によれば、「家伝にいふ、其祖は佐伯姓にて天長中空海の母阿刀氏に附属し讃州より当地に來り、那賀郡中野村に住す、末孫佐伯大千代大夫の男孫六大夫吉元といふ者、当郡錢坂の城主生地新左衛門吉澄に縁あるにより、天文中学文路村に移る。文祿四年関白秀次公高野登山の時当家に御休息あり、鎗一筋残し置かる、其鎗今家に伝ふ、二代目孫右衛門吉次学文路平野壇を領し、平野と号す。慶長十九年眞田左衛門に属し大坂に籠城す、明年平野合戦に持鎗を折る、幸村与ふる所の鎗なりとて家にあり、子孫代々当村に住し、莊の長たり、勤功数度ありて官より屢金を賜ひて褒賞す」とある。学文路村は近世以前は高野寺領官省符莊であつたとされているから、官省符莊には弘法大師の縁を唱える家

伝を持つ家が少くなつたことが窺われる。

(36) 充祇の代、宝永元年官省符莊一九カ村のうち一八カ村が中橋上綱家の能棧敷をめぐつて故障を申出、以後一五年に亘つて莊中氏子引取りの事態が起つている。充祇願書下書（史料番号四八六）の前半部分が故意か偶然か欠損しているため、出入の直接の原因は不明であるが、中橋家の家系に関する疑惑か、若しくは充祇が他家からの養子であつたことがその一因ではなかつたかとも思われるが、憶測の域を出ない。

(37) 文化元年阿闍梨觀宮代の「当寺要用雜記」中に「天和四甲子年二月廿三日阿闍梨より中橋へ拝殿付之宝物并莊嚴道具寺道具ともゆつり渡し候夏」と記され、また「古來が拝殿は阿遮梨進退致來候事明白也、ホリ氏之持と云ハ無事なり、阿遮梨の旧里と申斗也、御廟中橋進退可為事、拜殿阿遮梨進退可為之事八年預が書付御造宮之時下り申候」とある。

(38) この時の書上は、元禄五年高野山に於て学侶・行人の争いにより騒擾が起つた際、紀州藩領の地士・大庄屋が各々下人を従へて出張し鎮撫に當つた。同藩はこの時の経験に鑑み、翌元禄六年紀勢両国地士の武器の調査をしたという（伊東多三郎「近世封建制度成立過程の一形態」）（一）紀州藩の場合——『社会経済史学』一一卷九号）が、中橋家の書上は元禄五年である。

(39) 該口上書とは別に（前略）拙者家二夫役不仕様子者 弘法大師筋目侍家二而、其上大師御袋様弥勒菩薩別当仕、高野山が少之御知行被下置、依之昔が地士二而罷有候御事」と記した「口上書」があり、その裏端書に「此通御年預へ上り候へ共御直シ有之、御江戸へ上り候下書別紙二有之候」とあり、中橋家から書上の原文は年預表で訂正されたことが

判る。

(40) 勝利寺分が慈尊院寺社料の中に含まれている理由は不明であるが、勝利寺の山号は慈氏寺と同じ万年山である。

(41) 中橋家文書一〇〇三

(42) 新田家略系図は中橋家の「日次記」に拠る。なお民右衛門三男で分家した北厚治は『五条市史』下巻(六四九—五〇頁)に、諱は厚行、字は主礼、醉陶園と号した。生来好学の徒で、剣槍馬術などの武技に長じ、天保年間領主船越氏の代官となり、更に隣村丹原村の領主根来氏の代官を兼ねた。資性気節を貴び、その上理財の才があったから上下の信頼を集め、公費の支出重なる主家の経営難を救い、旱魃地震の災には東奔西走してその窮乏を救うこと再度にわたったという。また池溝をうがって水利の便を計画し、領主に申出て貯倉を建て凶作に備えるなど、富民の策を練り、在職二〇年、いわゆる地方役人としての重責を果たした。更に宿儒志士と広く交遊、谷三山・藤沢東畝・森田節斎・吉田松陰らと親しく、地方人材を愛して育英につとめた。また外敵迫るの報せをうけ、その田地山林を供出して軍資金に献ぜんとしたほか、天誅組の義挙に当っては野砲一門を提供したとある。明治の変革に際しては官を辞し、吉野川治水の策を奈良県令に差出、また郷校の開設を請うなど、その功績は大きく、没後一〇年の明治二八年、御山の共同墓地の墓前に長文の石碑が、三島毅の撰、巖谷修の書、土方久元の題額で建立、遺徳を不朽に伝えると記し、郷党の大先輩と評価している。(弘道天保一四年日記の閏九月朔日の条によれば、「新田厚治儀、領主船越駿河守殿領内代官役被仰付、家格ハ中小姓格被仰付」とあり、当館所蔵史料「船越家御用場

文書記録」(『史料館所蔵史料目録第二十一集』所収)には北厚治在任中の記録が含まれている。

(43) 中橋家の「帳面預り」就役は、当時の北室院下庄屋又十郎の新開田に關し、水下村民と用水論が起り村中不穩・不帰服となり、又十郎の庄屋退役となったため、北室院から跡役預りを頼まれたものである。弘道の日記には、繁用の身分甚迷惑とも、また「右庄屋役之事当家にて勤候事ハ家格ニも拘り余り不面白事ニ候へ共、本役ニ而ハ無之帳面預り之儀と申、北室院とハ格別因縁之儀ニ候間承知仕候」とある。

(44) 弘道日記の天保一四年閏九月二日の条によれば「昨夜八ツ時過御影堂宝藏前出火」とあり、御影堂・金堂・準圀堂・孔雀堂・会堂等々一四字不残焼亡と記している。

(45) 油絞りの開業資金は和州御山村の叔母より金五十兩、山内では正智院・北室院・修禪院らが發起して中橋家の救済のための弥勒講が取立てられ、その初会金百兩による。なお酒造業への転業は当時中橋家では惣領の男子をはじめ子女四人が早世したため、油絞り屋普請の節方位たりある旨の親相人の意見を容れたもの(『弘道願書』史料番号八四八)。

(46) 年次不明であるが「高野山衆僧法度写」には「衆僧たるもの、麓へ下、在家之交り、諸事商仕間敷事、同僧京大坂堺、其外何之所ニ而も売買之ため往還いたし、問屋着等仕間敷事、同衆僧、寺中ニ而も見苦敷家職之商仕間敷事云々」(『高野山文書』六、一二一九)とあり、野山学侶方の中橋家への諸俗用の下命は、このような規制を背景とするものであったと思われるが、一面中橋家の窮状救済の配慮も働いていたことは「日並記」文政一〇年九月六日の条に「登山成就院様へ着御目ニ懸ル、昨日

御式日寄門主様并二碩学衆集議中迄も御相談被成下候趣ハ中橋義大師因

縁旧家二候所、近代困窮ニ及、当主勘之丞情々相勤候得共、何分高借難

洪之由二候、然二一両年年預御用向相勤誠ニ内業も打捨、東西駈ケ歩行、

別て富貴筋ニ付重々心勞甚々奇特之至二候、旁以安良川極金之内三百金

年五朱之利足ニて拾ケ年割済返済之筈ニ貸遣し、造酒商売或ハ領内摩尼

庄ニ仕出し候槓繩杯之商方も為致、何卒借財も追々減少取立永續させ度

ト之御受御披露被下(下略)とあることによつて窺える。

(47) 嘆願書に添えて提出された該書附は、嘉永三年九月二三日江戸在番所

へも願書と共に提出されたことが付記されてある。

(48) 東寺執行家宛阿刀祐甫弘道書状(史料番号八七八)。野山より寺領差

構えの処分を受け、江戸に逼塞中の弘道が東寺執行家に対して關所解除

願を依頼した際、東寺執行家の疑問に答えた書簡。

(49) 弘道日記、天保一四年二月二日の条。

(50) 「阿刀姓正裔中橋家世系脉譜」の付記。

(51) 同右。

(52) 同右。

(53) 「中橋勘之丞關所二付同人跡式讀り下之儀年預坊覚証文」(史料番号

六七六)

(54) 東寺執行家と中橋家との間柄については「中橋家系図一」参照。「再

興願書」(史料番号九〇五)中に中橋家と東寺執行家との続柄について

「所謂上綱方之家元と申は当執行方ニ相限、実ニ無比親類之間柄ニ御座

候」とあるが、弘道の代に至るまで中橋家と東寺執行家との交流は殆ん

どなかった模様で、天保七年六月一四日の日記には弘道が東寺執行家を

訪れ、初対面の旨の記事がある。

(55) 「中橋家再興願書」(史料番号九〇五)

(56) 「鉄座之一条」安政二年六月二十五日の条(史料番号二三九九)

(57) 「私弟篤助事昌兵衛と改名、松井株養子相続之内訳書」(史料番号一三八一)

(58) 同右。

(59) 安政五年一月「鉄座内願書」(史料番号一四〇三)

(60) 篤助の養子としては別に安政四年正月、同人の甥喜多慶次郎悴滝藏を

養子相続のため江戸式本榎町役人宛の人別送りが残っているが(史料番

号四〇二)、文三郎とは別人である。

(61) 七月二六日付「植田元次郎書状」(史料番号一四三五)

(62) 帰国後の弘道宛九月二二日付(文久元)の松井文三郎書状(史料番号

一四四三)中に「右願之者(類願人のこと―引用者注)之事ニ付駿河台

始早稲田隠居大きに御心配有之候、其訳ハ御墨付之引替之写書、右吉兵

衛方江御渡し被成候節、貴殿立合ニて金子受取ニ貴殿御調印有之由ヲ先

方ニて申聞候間、夫故心配ニ相成候趣云々」とあつて、弘道が文三郎に

は内密で御墨付の授受に金子を受取つたとする噂の真偽を確かめており、

出願名目人の文三郎が全く弘道の傀儡であつたことを示している。

(63) 嘉永三年八月一五日付の在府中の弘道が江戸在番所へ宛てた菊作り太

刀の質請戻金拝借願書(史料番号八二二)中に、「一両年以前近国豪富

家ニ被相頼、内々江戸表へ出府一年半斗逗留仕、用向都合相弁候ニ付当

分三百金在之候を謝礼ニいたし呉云々と」みえ、上方の富商がかかえて

いた御屋敷方の不良債権の取立を弘道が代行して、その成功報酬を得て

いたことが窺われる。

(64) 弘道が提示した借財の整理案には、江戸の内妻きくへの配分金を配慮してくれるよう依頼している。なお菊作太刀は、はじめ弘道が大掛りな資金調達を目論んで江戸に携帯したと思われ、諸侯の中へ売込めば千金にも二千金にもなると強気であったが、折角の買手話が持込まれても質受金の都合がつかず、結局二六〇両のかたに手離さざるを得なくなったものである。

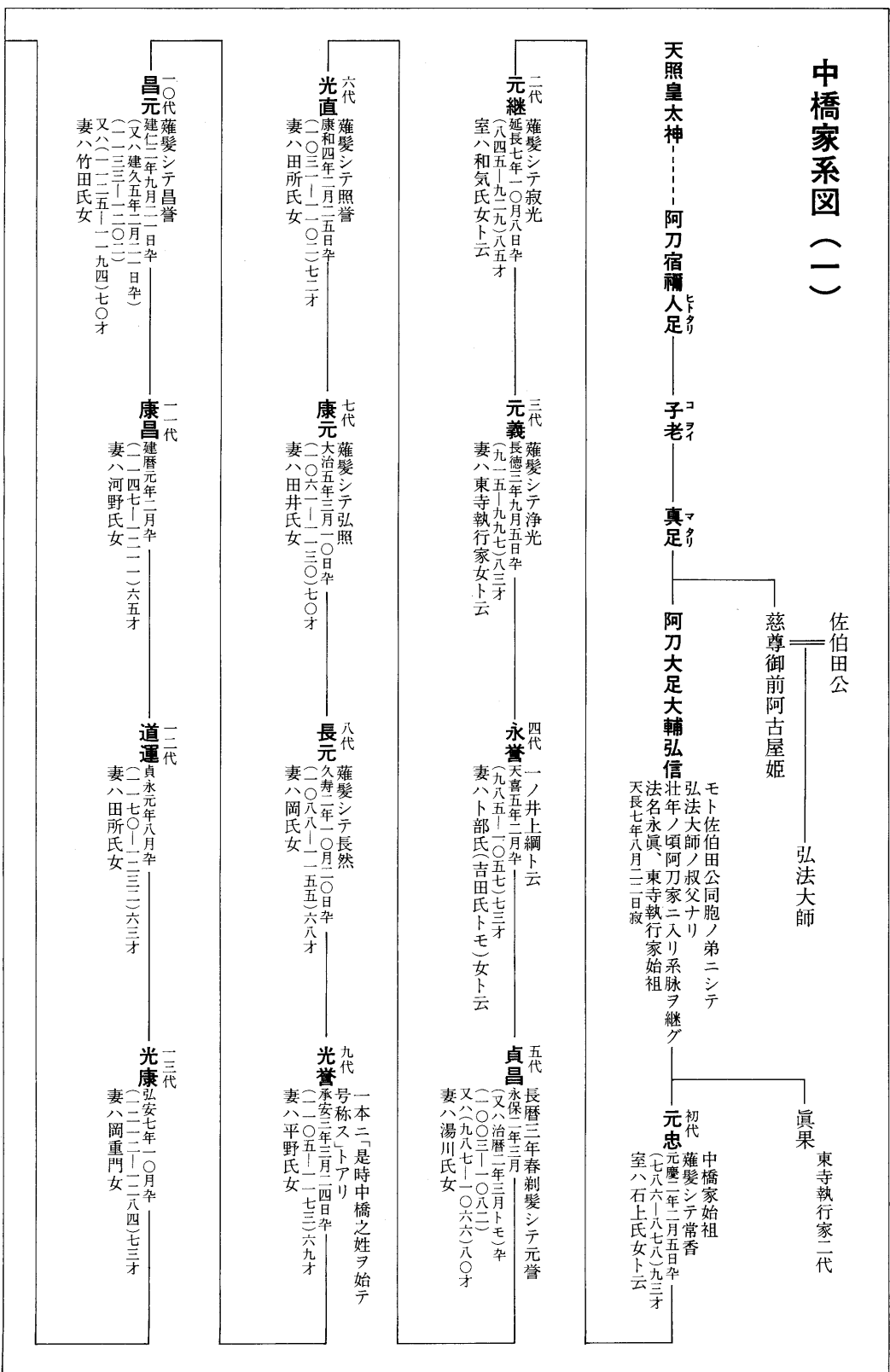
(65) 史料番号六八一

(66) 史料番号六八二

〔付記〕

本目録の作成は鶴岡実枝子が担当した。解題執筆に当っては、高野山大学の和多秀乗・山陰加春夫両先生から貴重なご教示を頂き、また種々ご厚配を賜わった。付記して深謝の意を表します。

中橋家系図(一)



一四代 薙髮シテ弘運
弘光 正和五年八月卒
(二五〇―三二六)六七才
妻ハ坂合部氏女

一五代
元秀 建武二年八月二十五日卒
(二七一―三三五)六五才
妻ハ杉原次俊女

一六代
弘吉 貞治五年八月十六日卒
(二九九―三六六)六八才
妻ハ楠家士丹下氏女

一七代 薙髮シテ親照
元吉 康暦二年八月八日卒
(三二―三八〇)七〇才
妻ハ野原重種女

一八代 薙髮シテ浄照
祐元 応永一〇年一〇月五日卒
(二三三―四〇三)七一才
妻ハ平野吉雄女(坂合部政雄女トモ)

一九代
常光 文安元年七月五日卒
(二六五―四四四)八〇才
妻ハ隅田能治女

二〇代
光忠 文明五年三月一〇日卒
(三九六―四七三)七八才
妻ハ杉原小治良女

二一代 薙髮シテ阿刀理運
弘常 文龜三年一〇月一日卒
(四二九―五〇三)七五才
妻ハ坂合部次房女

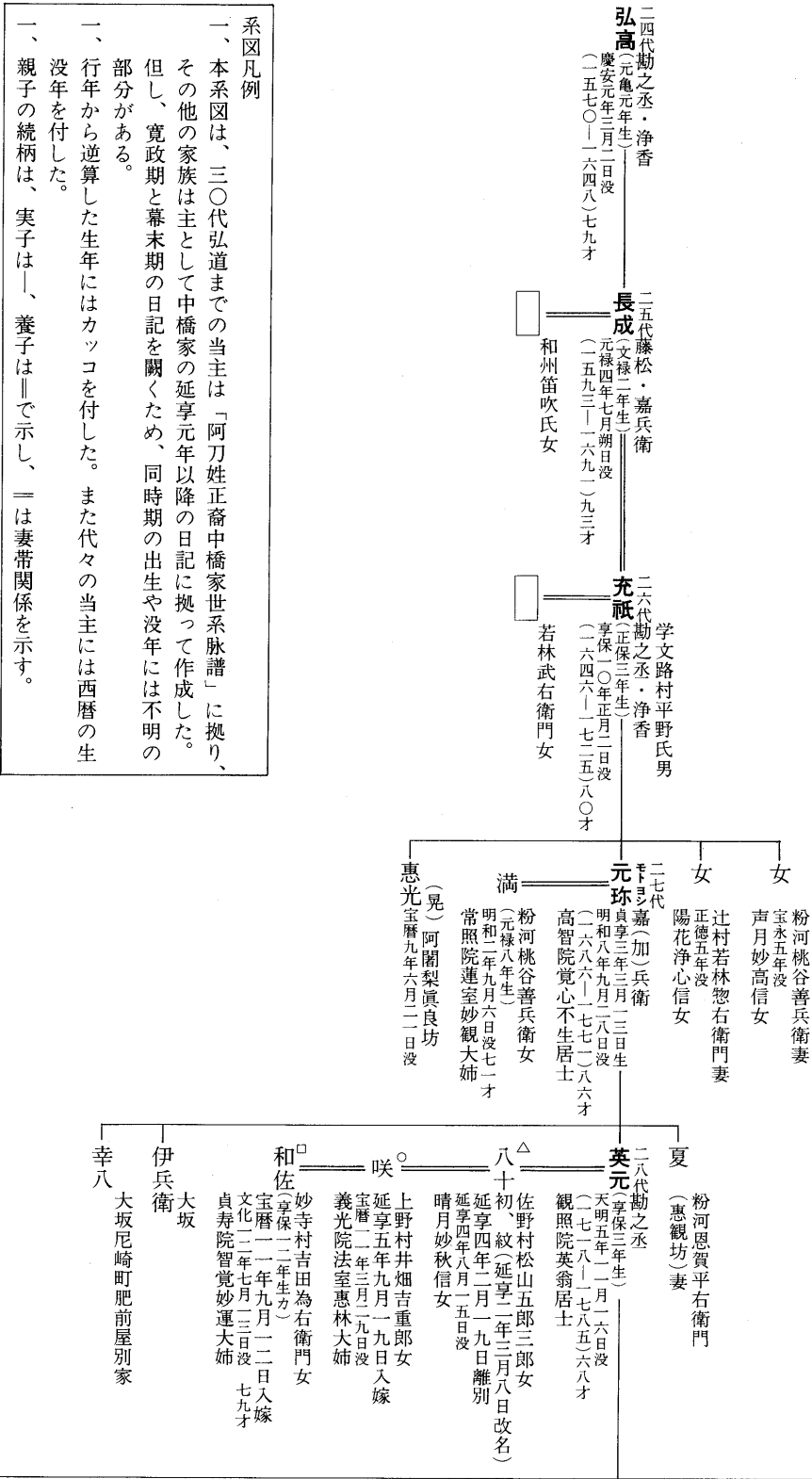
二二代 薙髮シテ阿刀信照入道
弘信 永祿二年二月五日卒
(四七二―五五九)八八才
妻ハ畠山家士遊佐氏女

一本ニ「此代中橋氏ト改」トアリ
三三代 浄香
元常 文祿元年三月二日卒
(但シ文祿改元ハ天正一〇年二月八日)
(五二三―五九二)七〇才
妻ハ隅田能武女

二四代 勘之丞、浄香
弘高 (元龜元年生)
慶安元年三月二日卒
(五七〇―六四八)七九才
妻ハ丹下基賢女

注、本系図は「阿刀姓正裔中橋家世系脉譜」(史料番号一五四〇・一五四一)に拠る。
なお、各当主の没年次と行年から逆算し、西暦の生没年をカッコ内に付記した。

中橋家系図(二)



系図凡例

- 一、本系図は、三〇代弘道までの当主は「阿刀姓正裔中橋家世系脉譜」に拠り、その他の家族は主として中橋家の延享元年以降の日記に拠って作成した。但し、寛政期と幕末期の日記を闕くため、同時期の出生や没年には不明の部分がある。
- 二、行年から逆算した生年にはカッコを付した。また代々の当主には西暦の生没年を付した。
- 一、親子の続柄は、実子は「」で示し、「」は妻帯関係を示す。

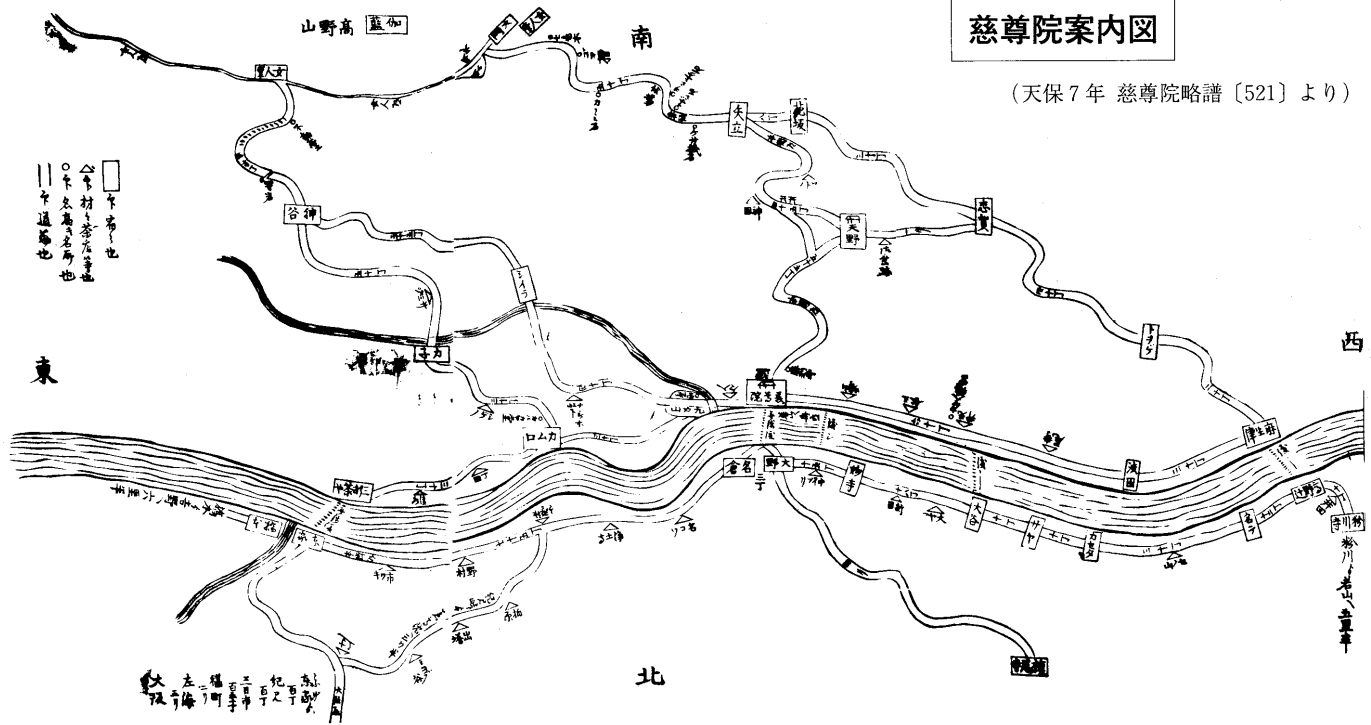
△品 (寛保元年生) 宝曆二年二月二日没 二三才
△秀松 延享二年二月二日没 三才
△茂松 寛延二年一月十五日没 一〇才
○長 宝曆元年二月二十五日生 宝曆八年四月十五日没 八才
○智芳尼 宝曆五年四月二六日生 初、加知・龜
○藤松 宝曆九年五月二八日生 宝曆二年九月一日没 五才
○秋香慈泉童子
○兵助 宝曆三年五月一四日生 明和六年二月一七日没 七才
○玉峯淨円童子
○元昭 明和元年閏二月一六日生 安永九年一月一日元服 文政七年一〇月一三日没 (二七六四一八二四六一才
○眞光院観元昭空禪定門
○市原村森田浅右衛門女 (安永元年生)
○筆 貞眞院栄室智鏡大姉 文化七年八月一〇日没 三九才
○賢覚坊 明和四年閏九月九日生 安永七年四月七日得度 天明九年閏六月二四日没
○伴五郎 明和七年二月朔日生 天明三年四月一日没 観智慈眼童子
○才(財) 和州宇智郡御山村 新田民右衛門妻 安永二年正月一四日生

い く
三〇代 鉄之助・勘之丞 寛政九年九月七日生 尚甫
弘道 文化一〇年正月一日元服 嘉永三年正月一日阿刀祐保卜改名 文久元年二月一日薨髪、尚甫
龜代 粉河近藤元冲女 (寛政一〇年生) 文化一一年三月一六日入嫁 嘉永七年閏七月二六日没 龜齡院澄室貞忍大姉
房 和州御山村新田康太郎妻 (寛政二二年生)
常(恒)三郎・篤藏・嘉兵衛 芝田屋・松井昌兵衛 享和元年一〇月一五日生 文化八年四月一三日大坂加嶋屋篤平養子 文政二年五月加嶋屋離縁 文政四年中嶋弥兵衛女ト結婚、離別 文政八年大坂西横堀富田屋与右衛門 賀養子、翌九年離縁 江戶芝二本榎伊勢屋茂兵衛一類 芝田屋株譲受 弘化三年江戶ヨリ帰郷、嘉兵衛ト改名 嘉永二年三州山中郷松井昌兵衛名跡ヲ嗣グ 安政六年二月二日没 五五才 常照居士
篤助 文化八年四月一三日大坂加嶋屋篤平養子 文政二年五月加嶋屋離縁 文政四年中嶋弥兵衛女ト結婚、離別 文政八年大坂西横堀富田屋与右衛門 賀養子、翌九年離縁 江戶芝二本榎伊勢屋茂兵衛一類 芝田屋株譲受 弘化三年江戶ヨリ帰郷、嘉兵衛ト改名 嘉永二年三州山中郷松井昌兵衛名跡ヲ嗣グ 安政六年二月二日没 五五才 常照居士

鉄蔵 文化一四年一〇月四日生 文政五年八月三日没 六才 法月静照童子
富野 文政三年二月三日生 文政四年一〇月二七日没 慈讃莫□童女
仁 初、源 文政五年九月二日生 天保五年九月二七日没 法含貞心童女
儀之助 文政八年七月二日生 文政九年一月一五日没 霜玉智光童子
滝 初、げん 文政一〇年一月二日生 弘化四年正月紀州那賀郡 上田井村宮脇健造へ嫁ス
(女) 早世
元貞 三代政太郎・勘之丞・元扶 文政二年三月晦日生 (慶応二年一〇月二八日没才)
元貞 河州錦部郡向野村 北辻弥惣市女 (天保二年生) 弘化四年一二月四日入嫁 (明治四年没才)
弥惠 岩次郎 天保六年生才) 天保一五年正月一日剃髪 得度、仁澄房
隆雄 天保六年生才) 天保一五年正月一日剃髪 得度、仁澄房
(女) 嘉永二年七月九日生 嘉永二年七月一日没 智夢童女
あ い 嘉永四年生
つね 安政二年生
元常 三代弥太郎 文政二年四月四日生 安政五年七月一四日生 貞次郎
元隆 万延元年七月一四日生 文久四年正月一五日生 音三郎

慈尊院案内図

(天保7年 慈尊院略譜〔521〕より)



史料館所蔵史料目録 第四十六集
紀伊国伊都郡慈尊院中橋家文書目録
昭和六十三年三月三十一日 印刷発行

東京都品川区豊町一丁目十六番十号
国文学研究資料館内
編集者 国立史料館
発行者

東京都中野区中央四丁目八番九号
印刷所 株式会社 三協 社

(本文用紙は中性紙を使用)